

工藤新一に転生したけど、薬を飲まされて女子高生になっちゃった

ストロングゼロ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ジンに薬を飲まされた瞬間の工藤新一に転生したけど、小学生にはならないで、スタイル抜群の女子高生になっちゃった。

毛利小五郎の助手として女子高生探偵ライフをスタートします。

目次

転生したけど、情報が多い	1
社長令嬢誘拐事件 前編	12
社長令嬢誘拐事件 後編	22
アイドル密室殺人事件 前編	31
アイドル密室殺人事件 後編	44
コーヒーショップ殺人事件	55
外交官殺人事件 事件編	69
外交官殺人事件 疑惑編	83
外交官殺人事件 解決編	93
黒の組織から来た女	103
大学教授殺人事件	115
アリスVS怪盗キッド 前編	128
アリスVS怪盗キッド 後編	140
浪花の連続殺人事件 前編	155
浪花の連続殺人事件 後編	172
黒の組織との再会 前編	187
黒の組織との再会 後編	202
帝丹高校学園祭殺人事件	217
バトルゲームの罠	234
園子のアブない夏物語	251
謎めいた乗客	271
シカゴから来た男	290
遺産相続殺人事件 前編	307
遺産相続殺人事件 後編	324

容疑者・毛利小五郎	前編	344
容疑者・毛利小五郎	後編	359
黒の組織との接触	交渉編	370
黒の組織との接触	追跡編	380
黒の組織との接触	決死編	393
瞳の中の暗殺者	その1	402
瞳の中の暗殺者	その2	415

転生したけど、情報が多い

ある日、あたしは高校生探偵、工藤新一になっていた。

何でなのかさっぱり分からないけど、目が覚めたら、いきなり頭の中に『名探偵コナン』の工藤新一という人物の記憶が流れ込んできたんだ。猛烈な頭痛と共に――。

直前の記憶は幼なじみで同級生の毛利蘭と遊園地に遊びに行ったあの日の出来事……。

黒ずくめの男の取り引き現場を目撃して、取り引きを見るのに夢中になっていたら、ジンに背後から頭に強烈な不意打ちを受けたというあのシーンだ。

倒れたあたしはジンに毒薬を飲まされて――。そこで、あたしの魂とやらが彼の体に入ってしまったらしい。

て、ことはあたしまさか小学生になってる？ いやいや、男の子になるだけでもハードル高いのに……子供の体になるなんてキツイわよ……。

「おーい！ ちょっと来てくれ！ 誰か死んでいるぞ！」

「なにっ!？」

あつ……、警察の人たちが来てくれた……。えっと、この人たちがら逃げて阿笠博士を頼らなきゃいけないんだっけ……？

こんな状況受け入れられないわよ。さっきまで、女子高生やって、くつろいでたのだから……。でも夢じゃないっぽいのよね……。

「いや、まだ息はある！」

「救急車だ！ 救急車を呼べっ！」

「頭から出血が酷い……、可哀想に……」

そうなの……頭が痛い……。薬で小さくなっているはずだし……。面倒なことになってるのよ……。

「おい、しっかりしろ！」

「大丈夫か？」

警官がいつぱいいるわ。小学生がこんなところで倒れてたら割と

事件だもんね……。

「立てるか？ お嬢さん？」

お、お嬢さん……!? あれ？ あたしは女の子のままなの？

やだ、胸が前よりも大きくなってる……!? お腹も引き締まってるし……。子供ですらない？

女の子から男の子になったと思ってたのに逆にスタイル良くなっているってどういうこと？

「えっ？ 何これ？ あ、あたし、どうしちゃったの？」

えっと、声も女の子の声ね。新一の母親の有希子ってこんな感じだったような気がするわ……。うろ覚えだけど……。

「どうしたんだい？ お嬢さん、怖い思いをしたと思うけど、我々が来たからにはもう安心だよ」

「えー、こちらB地点、負傷している女性を発見しました。年齢は16〜18歳くらい。おそらく高校生だと思われれます」

と、とにかく冷静になりました。あたしに流れ込んできた記憶から推測して自分は工藤新一という人間に転生した。

薬を飲まされた——その瞬間に……。で、本来は体が縮んで子供になるところがあたしのせいなのか知らないけど、女の子の体に変化してしまったということかしら……？

あはっ、それにしても工藤新一の体だから推理とかめっちゃ早いわね。

て、バカなことを考えてないで、どうしましょう。黒の組織って得体的のしれない連中だし……。警察に話したところで色々とツッコまれるとどうしていいのか分からなくなるのは目に見えてるわ。この世界の警察ってどうも信用できないし……。

まずは新一の家に……。いや、家には両親は居ないのよね。ならばやっぱり漫画と同様に阿笠博士に助けを求めなきゃかしら……。

とにかくここから離れないと……。どうやって離れば——そ、そうだわ。

「す、すみませ〜ん。ちよつと服の中に虫が入っちゃったみたいでえ。服を捲りたいので、あちらを向いてくれませんかあ♡」

私は我ながら古い手だと思ったけど、胸を強調しながら色仕掛けで逃げようと思った。

ど、どうかしら？ すんごい恥ずかしいんだけど……。

「えっ？ あ、ああ。わかった」

「今だ！」

「えっ？ あっ！ おい、君い！ 待ちたまえ！」

あたしは間抜けな警官から走って逃げ出した。そして、記憶にある工藤新一の家に向かって急ぐ。

とにかく、阿笠博士なら助けてもらえるはず——そう信じ込んで走ったんだ。

「雨でベチョベチョだよ。夢なら覚めて欲しいんだけどな。博士に会う前に着替えておこうかしら？ 風邪を引きたくないし。下着とかあるかな？ お母さんのとか……」

そんなとき、大きな爆発音と共に黒い煙が隣の家から上がる。阿笠博士の家からだ。

「ゴホッ……ゴホッ、ゲホッ！」

「阿笠博士！」

「有希子くん!? いや、それにしても若いような……」

阿笠博士は地面に座りこんでいて、あたしの声に反応した。どうやら、あたしを新一の母親だと勘違いしてみたようだ。

どーしよ。とりあえず、新一だと主張してみる？

「オレだよオレ！ 新一だよ!!」

「ああ、新一の親戚の子か。道理で有希子くんにそっくりなわけじゃ。新一の家は隣じゃよ」

「ち、違うつて。オレが新一なの！ なんなら博士の秘密をいってみようか？ 阿笠博士^{あがさひろし}52歳、風変わりな発明家で自分じゃ天才と言っ

てるけど作ったものはガラクタばかり！ おまけにお尻のホクロから毛が1本出ている！」

うーん。流石に記憶がそのままあるだけあって、新一の演技は完璧ね。我ながら上手よ。

これなら、博士も信じてくれるでしょ。

「そ、それは新一しか知らないはず……。あいつ、ワシの秘密を言いふらしておるんじゃない?!? こんな可愛らしいお嬢さんにまで……！」

あつ、そうかあ。そうだよな。それじゃ信じてくれないんだつたわけ？

あれ？ どうやって、新一だつて証明したのよ？ ええーつと、思い出さなきゃ……。い

「そうじゃなくてオレが新一なの！ 変な薬飲まされて女にされちまったんだよ！」

「薬で女に……?」

「ああ！」

「そんな薬があればワシがお目にかかりたいわ！ お嬢さん、悪ふざけはやめなさい！」

ふえーん。阿笠博士怒ってる。さつきまで女子高生だったあたしにはキツイよ。彼を説き伏せるのは――。

えつと、ええーつと。思い出して。。

「あつー！ 思い出したわ。博士……、さつきレストラン “コロンボ” から急いで帰ってきましたね！」

「ど、どうしてそれを……!?!」

「博士の服ですよ！ 前のほうには濡れたあとがあるけど後ろはそれがない……！ 雨の中を走ってきた証拠です！ それにズボンに泥がはねている！ この近辺で泥がはねる道路は工事中の “コロンボ” の前だけだ！ おまけに “コロンボ” 特製のミートソースがヒゲについてる！」

阿笠博士は、自分のヒゲをつまみ少し考えています。よしよし、良くやったぞあたし。

この類稀なる推理力こそ工藤新一だという何よりの証拠よね。

「……き、君は?!」

「チツチツチツ……、初歩的なことだよ阿笠くん!」

決まった〜! これは完璧に新一でしょ。流石に博士も信じるわね。

「し、新一!!——の親戚だけあって、推理力まであいつみたいじゃな! 有希子くん方の親戚かと思つとつたが、似るもんじゃわい。推理好きも」

あちやー、ダメだった〜。よく考えたら、コナン君はあれだ。見た目が子供のクセにとんでもない推理力だからインパクトがあったんだ。

あたしの見た目じゃ、ただの女子高生探偵だよ。いや、ただの女子高生探偵ってなんだ?

でも、力説するしか頼れる人を手に入れる方法はない。何とかしないと——。

「あーもう! だから違うって。本当に新一なの。オレは! どうしたら信じてくれんだよ」

「新一はそんな可愛らしい仕草などはせん! なんで、君はそんなに新一になりたがるのじゃ?」

うはっ! 動揺して女っぽい仕草をずっとしてたく。内股になって、上目遣いで博士を陥落させようとしていた〜。こんなこと新一はしないよ〜。

おじいちゃんに小遣いねだるときみたいな動きになっていたわね……。

「だって、そうしないと誰も味方になつてくれないんだもん! 助けてくれそうな人、博士くらいしか思いつかなかつたのよ!」

「——っ!? ようやく変な演技が無くなったわい。お嬢さん。訳ありなら話くらい聞いてやろう。その顔立ちから新一の親戚であることくらいは信じてやれるからの……」

あたしが感情を露わにすると、阿笠博士は真剣な顔つきになって、

話を聞いてくれると言ってくれた。やっぱり頼りになる人かも。

雨に濡れて体も冷えてきたから、シャワー浴びたいし着替えたい。ということ、彼と一緒に新一の家にお邪魔することとなった。一応はあたしの家だしね。



「それにしても、よかつたわく。有希子さんの服があつて。ブラもぴつたりだし、全然問題なし」

「う、うむ。こうして見ると髪は短いが有希子くと瓜二つじゃな。で、転生と言つておつたが……薬で女になったこと以上に信じられない」

阿笠博士はあたしをジツと見つめて不思議そうな声を出す。

あたしはここが漫画の世界という部分だけを伏せて概ねのことを正直に博士に説明した。

ま、確かに性転換は手術とかで可能かもしれないけど、転生は無理だもんね。

「て、言われてもね。あたしだって困つてるのよ。階段から転んだと思つたら“工藤新一”の記憶が頭に流れ込んできてさ。男の子になつちやつたと、思つたら女の子のままなんだもん。美人にはなれたけど」

新一の母親の有希子は大女優としてアイドル以上の人気があつたらしいけど、こりや間違いないや。

体をきれいにして髪の毛を整えるとビックリするくらいの美人だったもん。自分で自分に見惚れちゃつた。

「ふーむ。新一の記憶を持つとることに関しては間違いないみたいじゃのう。さすがに子供の頃のあいつのくだらない話を全部教えられたなんぞあり得んし……」

「あ〜っ！ だから、あんな質問したんだ。博士頭いい〜！ さすが天才発明家ね！」

博士から新一クイズを出されて、あたしは全問正解した。

博士と彼だけの思い出を些細なことまであたしが覚えてたものだから、ようやく彼はあたしの中に「工藤新一」の記憶があると信じてくれたみたいだ。

「新一はそんなふうにおだててはくれんからのう。お嬢さんは新一であつてそうではない。——転生という言葉は信じられんが、そうしか考えられんみたいじゃのう」

「信じてくれてありがとう。嬉しいわ」

柔軟にこの荒唐無稽な話を受け入れてくれた博士には感謝しかない。普通は頭のおかしい奴だと思われて終わりだし……。

みんなから慕われるわけだわ……。じゃないとキャンプの引率とか任せないもんね。小学生の親が……。

「ところでお嬢さん。名前は何と言うんじゃ？ その、新一になる前は」

「えっと、そうそう。あたしの名前は愛梨^{アリス}寿よ。アリスちゃんって呼んでね」

あたしはさつきまで呼ばれていた自分の名前を名乗る。前世の名前っていうのかな……。

かわいい名前で気に入ってはいるけど。

「アリスくんか。で、アリスくんはこれからどうする？ 元の体に戻るとて、男の体じゃし。今の方が……」

あれま。『アリスちゃん』と呼ばれなかった……。

元の体かー。新一の体に戻りたいかどうかってことよね？ あたしの魂にとつては、そりや今の体の方が都合がいいのは間違いない。でも——。

「うーん。よく分からないけどさ。元の新一の体に戻らなきゃいけない気がするよ。だって、この世界にはあたしの事を知っている人は居ないけど……新一の事を待つてる人はいるもんね。それに……もしかしたら、元に戻ったら新一の魂も帰ってくるかもしれないし」

そもそもあたしはこの世界に居ていい人間じゃない。

『工藤新一』の魂がどこに行ったのか知らないけど、体が元に戻れば案外魂も元通りになるかもしれない。

それならば、あたしは元に戻るように頑張るのが筋だと思う。

「非科学的じゃのう。じゃが、アリスくんが優しい子じゃということ
はわかった。薬の成分さえ分かればワシでも解毒剤は作れるかもし
れん。何とか成分表を見つけられれば……」

「うん。あの黒い服を着た連中を見つけてだして、作り方も手に入れて
みせるわ！」

あたしはあの黒の組織と新一と成り代わったついでに戦うことを
決めた。

正直、推理とかは経験ないけど、頭の中には色んな知識がある。そ
れを活かして何とかこの現状を打破するんだ。

「いいかアリスくん、君が新一だとわかったらヤツはまた命をねらい
にくる！ さっきの話は決して誰にも言ってはならんぞ！ この事
はワシと君だけの秘密じゃ！ もちろん蘭くんにもじゃ！」

すると、博士は急に険しい顔つきになってあたしにこのことは誰に
も秘密だと念を押した。

誰も信じてくれないだろうから黙ってるつもりだったけど、彼があ
たしの心配をしてくれているのは伝わる。

「う、うん。あたしは大丈夫だと思——」

「新一……！ いるの……!?!」

返事をしようとしたその時、新一の幼馴染の毛利蘭の声が聞こえ
た。

あー、そういえば遊園地で別れてから連絡入れてなかったもんね
……。

「あつ!? ら、ら、蘭ちゃんの声……」

「いかん！ 早く隠れろ！」

「ふえっ!? 隠れるって言ったって……」

博士に隠れるようにと言われたが、そんな場所はなくテンパってし
まったあたしはそのままフリーズしてしまう。

あつ、蘭がこの部屋に来ちゃった……。

「帰ってるんなら電話くらい出なさい——あら、阿笠博士！ 新一は？」
「いやそのオ……、さっきまでいたんじゃないが……」

「あれ？ そちらの方は……」

蘭は博士に気付いてすぐにあたしに気付いた。な、なんだろう。新一の体になって記憶も共有しているからなのか——蘭が愛おしくてたまらない……。

だ、抱きしめたくなくなるような衝動に駆られるくらい。こ、これはどういうこと……。

「あつ!? えっと、そのう……あたしは……」

「し、新一……くんの……お母さん……? ううん。さすがに若すぎる。あなたは誰ですか? し、新一の家になんぞ?」

最初は新一の母と勘違いしたが、見た目の年齢的にそんなはずがないと思つた蘭は愕然とした表情で若い女が新一の家にいる理由を尋ねる。

ま、不味いんじゃないかしら……一歩間違えたら修羅場になるのでは……。

「この娘は藤峰愛梨^{アリス}くんじゃよ。新一の遠い親戚じゃ。聞いてなかったかのう?」

「新一の親戚? い、いえ聞いてませんけど……。道理で新一のお母さんとよく似てる……。でも、どうしてここに?」

蘭はあたしが新一の親戚であることはすぐに飲み込んだけど、ここにいる理由には納得していないみたいだった。

顔は全然怒ってないんだけど……正直怖い。

藤峰は有希子の旧姓か……。そっち側の親戚ってことの方が話が通じやすいもんね……。

「そ、それはじゃ……な。アリスくんは事故で両親と祖父母を亡くしてしまって天涯孤独になってしまったんじゃ。近い親戚をたらい回しにされてのう。新一の両親を頼って来たのじゃが……」

さらに博士はデタラメを並べる。まあ天涯孤独はそのとおりだから良いけども。

そのあとが良くないなあ。それじゃ蘭は——。

「えっ!? じゃあまさか新一と同棲するの!? そ、そんなこと……」

「博士……、話が面倒くさい方向に進んでるわ……。大丈夫よ。新一

と一緒に住むなんてしないから。蘭ちゃんの新一を盗ったりしないって」

博士があたしが新一と同棲するようなことを言うから蘭がもの凄くしょんぼりしてしまった。

だから、堪らなくなつてあたしはここには住まないと彼女に告げる。

「えっ？ えっ？ わ、私は別にそんな……。し、新一から何を聞いてるのか知りませんが……。その、ええーつと……」

「あはは、顔真つ赤じゃん。可愛いわね」

「これこれ、アリスくん。あまりからかうのは……」

蘭の反応があまりに素直で可愛らしいので、あたしは笑ってしまつた。

やつぱり初対面だけど、あたしは彼女のが好きだ。悲しませたくない。

「ごめん、ごめん。あたしは博士の家に住むわ。良いでしょ？ 博士とも親戚だし」

「えっ？ あっ？ まあ、そりゃあ構わんが……」

「ねっ？ これで安心した？」

「う、うん。なんだろう……。初めて会つたような気がしない……」

あたしは半ば強引に博士のところに居候させてもらうことにした。生活費は納めるつもりだけど……。新一の金から……。

蘭はそれを聞いて顔色を良くしてみたようだ。

「そうじゃ、蘭くん。アリスくんを毛利くんの助手にしてもらえないか頼んでやつてもらえんかの？」

「ちよつと博士……。いきなり何言つてんのよ……」

「毛利くんのところは探偵事務所じゃろ？ もしかしたら、組織の情報とか入るかもしれん……」

「な、なるほど。そういうえばそうね……」

博士の突然の提案に驚いたが、確かに漫画のコナンもそういう理由で毛利小五郎の世話になつた。

あたしは助手として、小五郎を名探偵に仕立て上げて事件を追えば

いいわけか。

「あ、アリスさんをお父さんの助手に？ どうして？」

「実はアリスくんはずっと探偵に憧れておったんじや。こんな不幸な境遇の子じやから、せめて憧れの探偵の近くに置いてやりたくてのう……」

「た、探偵に憧れ……？ だったら、新一に……」

「ダメよ。新一はあたしのライバルだもん。それに蘭ちゃんはあたしが新一に手とり足とり教えて貰った方がいいの？」

蘭は探偵なら新一で良いとか言うけど、あたしが新一だからそうはいかない。

あたしは何としてでも小五郎の助手にならねばならない……。

「手とり足とり……、だ、ダメです！ そ、そんな——いやらしいこと……！」

「な、何を想像してくれちゃったわけ？ ねえ、お願い。ちよつと事件とか調査に同行させて貰えるだけでいいから」

「そんなに探偵っていいものですか？ あの推理オタク以外にそんな人いるとは思わなかった……。私は構いませんが……」

あたしが頭を下げてお願いすると、蘭は折れてくれた。

いや、わかっていたけど超やさしい。だって普通は知らない子供を二つ返事で預かったりしないもん。

マジで大好きになったわ。この子のこと——。

「やった！ ありがとう蘭ちゃん！ あと、敬語はナシにしましょう。あたしたち同級生だし。アリスちゃんって呼んでくれたら嬉しいな」「か、かわいい……。な、何でこんなに可愛く思えるんだろう……」

あたしがギューツと蘭のことを抱きしめて感謝の言葉を述べると、なぜか蘭は顔を真っ赤にしていた。

ここから、あたしの女子高生探偵ライフが始まるのだった——。

社長令嬢誘拐事件 前編

「ごめんね。蘭ちゃん……、無茶言っちゃってさ」

「ううん。気にしないでいいよ。——でも、そのう……新一とは本当に何でもないの……？ だって、アリスちゃん、美人だし。探偵が好きって共通点もあるし……」

蘭はあたしのお願い自体は気にしていないみたいだけど、やっぱり新一との関係が気になって仕方ないようだ。その気持ちはすごくわかる。

「そうだよ。不安になるよね。好きな人の家に知らない女がいるんだもん」

「……………」

普通に気になる男の子の家に、同年代の女が居たら、それだけで嫌だから。彼女が不快な気持ちになるのは当然だ。

「今すぐに信じなくてもいいよ。それが普通だし」

「普通？」

「うん、普通だよ。そんなの。それにしても——そんなに好きなんだ？ 新一のこと」

「う、うん……ま、まあ……えつと……、気になるのは確かだけど……、それはそのう……」

新一のことが好きかどうか聞くと蘭は耳まで赤くして煙が吹き出しそうになった。やだ……、めっちゃめっちゃ可愛いんだけど……。

あたしは、これから信頼してもらおうように頑張ればいい。

「ちよつと羨ましいな。蘭ちゃんみたいに可愛い子にそんなに好かれるなんて」

「えっ？」

「なーんてね♡」

まったく、新一という男はけしからん。こんなに可愛い子がこんなに健気に想ってくれるなんて——。

あー、あたしも恋がしたい。なーんか、変だよ。さつきから蘭が気になって仕方ないんだ……。

「うわー。探偵事務所だ。格好いいわね」

「そ、そうかな？ アリスちゃんって、変わってるね……」
「そう？」

蘭に毛利探偵事務所まで案内されたあたしは、感想を漏らすと彼女に変な人扱いされちゃった。

でも、漫画でみた事務所が目の前にあるんだもん。そりゃあ興奮するよ。

「うん。ウチのこと格好いいなんて誰も言ったことがないよ。ついてきて、お父さんに紹介するから」

「本物の探偵さんに会えるなんて緊張するな〜」

「ふふっ、大袈裟なんだから」

あたしが毛利小五郎との対面にそこはかたなく緊張していると、蘭はニコリと微笑む。

その時だ。ドタドタと騒がしい音と共に階段から男性が駆け下りてきた。

「来たぞ来たぞ来たぞお〜っ!!」

「きゃっ！」

「半年ぶりの仕事だ！ 金持ちの娘が誘拐された！ 黒ずくめの男にな！ タクシーっ！」

駆け下りてきた男性は毛利小五郎その人。彼はお金持ちの娘さんが誘拐された件で仕事を貰ったらしく、急いでタクシーを捕まえて依頼人の元へ急行しようとしている。

ボーツとしてる場合じゃない。あたしも付いて行って小五郎を助けなきゃ……！

「蘭ちゃん、行こっ！」

「あ、アリスちゃん!？」

あたしは蘭の手を引いて走り、滑り込みセーフでタクシーの中に入った。

ふう、いきなり事件ね。さすがはコナンの世界……。犯罪率がおか

しい……。

「フツフツフツ……、事件がオレを呼んでいる……。この名探偵毛利小五郎をな！——あん!? なんでおまえが乗ってんだ!? あと、その子は友達か?」

タクシーが走り出してから少しして、小五郎はようやくあたしたちが乗っていることに気付いたみたい。えつと……、ちよつと鈍いような気がするわ……。

「アリスちゃんがお父さんの仕事をみたくて言うから」

「どうも……。蘭ちゃんの友達の藤峰愛梨寿です!」

「おれの仕事を見たいだどくくっ!? なんで、お前の友達が……」

小五郎は至極当たり前の反応をしてるわね。女子高生が何言ってるのって感じたろうし……。

「新一の親戚の子で、お父さんの助手になりたいって言うから連れてきたの」

「小娘の助手なんていらん! 仕事の邪魔するな! すぐ降りろ!」

「無理に決まってるでしょ! 高速道路なんだからっ!」

「じゃあ、降りれる場所に着いたらすぐに帰れ!」

小五郎と蘭はあたしの事で言い争いをする。やっぱり得体のしれない小娘を簡単に助手にしてくれるわけないよね。

でも、あたしには特技がある。それは——。

「あ、あのう。すみません。あ、あたし名探偵に憧れてて、特にオジサマのようにダンディな探偵の助手になることが夢なんです。やっぱり生で見ると違いますね……。何とかオーラがあります!」

「だーはっはっはっ! わかるか!? この名探偵のオーラが! よく見りや顔も可愛いじゃねーか。昔の有希ちゃんみてーだな。仕方ねえ、見学だけだぞ!」

「やーん。感激です。格好いい名探偵が見れるなんてえ〜」

「わーはっはっはっ! 助手でも何にでも自由にしていいぞ! 気に入った!」

あたしの特技はオジサンのご機嫌取りだ。昔から愛嬌があるとよく言われていた。

しかも今はこの見た目だし、可愛い女の子に煽てられて嬉しくない男の人はいないと思う。

小五郎は上機嫌になつて、あたしが助手として同行することを許してくれた。

「あ、アリスちゃん……お父さんの扱いが上手すぎ……」

そんな光景を蘭は呆れながら見ている。同級生にくすぐられて乗せられてる父親を見るのは複雑みたいね……。

助手になる了承を無事に取ったあたしは、無事に依頼人の邸宅に到着した。

「誘拐されたのはわたしの一人娘——谷晶子、10歳です。犯人は執事の麻生が目撃しています」

依頼人のオジサンが笑顔の女の子と大きな犬と一緒に映った写真を小五郎に渡しながら、娘が拐われたことを話している。わあ、可愛い女の子……。

「かわいい娘さんですね」

「え、ああ。まあ……。だ、誰ですか？ この子は」

「いや、この子は私の助手でして、今日はまあ、見学みたいなことをさせてます。静かに見学しなさい」

「は……い」

あたしが写真の女の子に反応すると、依頼人の谷が怪訝な顔をしたので、小五郎が助手だと紹介する。

なんか、公式に認められた感じがして嬉しい。

「では麻生さん、その犯人の様子を詳しく話してください！」

「あれは、学校から帰られたお嬢様が庭で遊んでおられた時でした——突然庭の隅から黒づくめの男があらわれて……」この家の主人に伝える！ 娘を返してほしかったら1か月間会社を封鎖しろとな！ もちろんサツに通報すれば娘の命はない！———「———そう言い残すと犯人は松の木を登つて外に……」

ふむふむ。お嬢様が庭から誘拐ねえ。全然覚えてないんだけど、こ

の事件……。

そもそも流し読み程度だったし、これって絶対に初期の事件よね……。連載されてたのって……あたしが生まれる何年前なんだろう……？

「その男の特徴はどんな感じですか？」

「目が悪いものでよくは……」

「ふむふむ。それじゃあ仕方ないですね」

「……………」

あたしはとりあえず初步的な質問を試してみたのだが、ふと後ろの小五郎が面白くない顔をしていることに気付いた。

あちやう、見学なのに、しゃしゃり出ちゃった。

「毛利先生。聞き込みはこんな感じはどうですかあ？ えへへ」

「せ、先生？ う、うむ。まあまあだな」

「ありがとうございます。先生みたいに格好良くできるように頑張りますね！」

「おう。手本を見せてやる。——ところで他の方は犯人の声とか変な音とか聞いてないのですか？」

あたしが何とか小五郎の顔色をみて、やばいと思ひ彼を先生と呼ぶようにすると、小五郎は上機嫌そうな表情になり麻生以外にも聞き込みをする。

なるべく邪魔はせずにそれとなくサポートしなくちゃ。

「はい……、麻生さんが『お嬢様がさらわれた』と叫んでいる以外は静かなものでした」

「犯人を見たのは麻生さんだけってわけですか。要求からみて犯人は谷氏のライバル会社の関係者でしょう！」

うーん。休業命令を出させるためにわざわざ誘拐するもんかなあ。娘が帰ってきたら撤回出来るし、帰ってこないにしても約束が守られるのを確認するまで1か月は長い……。

「くそっ！ あんな要求のうえに金まで取ろうとは……！」

「か、金っ!?!」

「ついさつき電話があつたんだ！ 使用済みの札で3億円用意しろと

な！」

「旦那様……、それはなにかの間違いでは……」

「うるさい！ お前は黙ってろ！」

とか思っていると、お金も要求してきたとか、そんな話も出てきた。休業させてお金ねえ……。お金だけで良いような気もするけど……。どうも引つかかる。

引つかかるといえば、麻生の態度も変ね。間違いとかないでしょ、そんなこと。

「先生、変じゃないですか？ 犯人はなぜ家の中に頑張って入って誘拐したのですかね？ 通学途中を狙ったほうが簡単じゃないですか？ 実際に見られちゃってますし」

あたしは犯人の雑すぎる誘拐に対して疑問を呈した。

どう考えても家に侵入する意味がない。使用人も沢山いるし、見られてるし……。大体、面と向かって口頭で要求を伝える誘拐犯って何なのよ……。

それにしても新一の頭脳ってすごいわね。溢れる知性って感じでドンドン疑問が出てきて推理を始めちゃってるわ。

あたし、こんなに頭が良くなったことないから、ちよつと戸惑ってるわよ。

「それもそうだな。うーん。——おれの推理によるとだな。犯人はかなりのうっかり者だ！」

「なるほど〜！ さすが先生！ これだけのヒントで犯人の性格まで分析しちゃうなんて！ 凄すぎます！」

「だーはっはっはっ！ 名探偵としての経験の賜物だよ。経験の」
「頼りになります！ さすが名探偵です！」

小五郎は思った以上にポンコツみたいね。ちよつとびっくりしちやった。

彼をあたしが名探偵に——？ そんなこと本当に出来るのかしら……。ううっ……。頭が痛くなってきた……。

あら、サッカーボール……。なんだろう体がウズウズするわ——。

「アリスちゃん、またお父さんの機嫌を取ってる。あれ?」

あたしはいつの間にかサッカーボールをリフティングしていた。

うーん。こうしていると落ち着くわあ。

「でもお、そんなないうっかりさんなのに——使用済みの札を要求したりしてますよね。あたし、それは冷静だなくって感心したんです」
「ん? まあ、確かに。犯人は一人じゃないかもしれんなあ。うっかり者としつかり者の複数犯だ!」

「いやーん。すごい。犯人は2人以上いるかもってことですね」

そう。この事件は二面性がある。雑に見つかりながら休業を要求したという一面。

そして、電話から姿を隠しながら使用済み紙幣を要求したもう一つの面。

あまりにやり方が違いすぎる……。

「そ、そんなはず……。あ、あり得ない……」

「えっ? 麻生さん。なんでそんなことがわかるんですか?」

「いや、な、なんとなくです……」

「ふーん」

犯人が2人以上いるとあたしが言うと、麻生は青ざめた顔をしてあり得ないとか言う。

やっぱり、この人からは怪しさしか感じない。

「ねえ、アリスちゃんサッカー上手いのね」

「えっ? サッカー? そ、そうなの。好きなのよ」

「新一も考え事してる時よくやってたよ……。それやると頭が冴えるんだって! アリスちゃん……。新一と似てるんだね」

「そうかしら?」

蘭はあたしがずっとリフティングしてることに對して新一と似てると指摘した。

多分、彼の記憶とか体が勝手に反応してサッカーやってると思う。よく考えたら怖いけど、本当に落ち着くの……。

「うん。さつきからお父さんのサポートもきちんとなして、ちよつと格好いいって思ったよ」

「えへへ。褒められちゃった……あつ！」

あたしは蘭に格好いいと言われて嬉しかったけど、つい集中力を失ってボールを落としてしまった。

すると、ボールが転がって……写真に写っていた大きな犬の元に転がっていった——。

「ガルルルツ!!」

「きゃあ！」

「アリスちゃん！」

「かわいい♡ワンちゃん、大好きよ♡」

あたしは犬好きだ。猫も好きだけど……。だから、寄ってきてくれて嬉しかったりする。

ごめん、蘭……。身構えてくれたという事は——守ってくれようとしてくれたんだね。嬉しい……。

「……えっ!？」

「ふふっ……」

ペロペロと大きな犬はあたしの手の甲を舐める。うふふ、可愛いわね。

「珍しいな、ジャンボがうちの者以外になつくのは……」

谷はこのジャンボという犬は懐かない犬だと口にした。確かにボールが転がっただけで吠えたし……あれ? じゃあ、やっぱりおかしいわよ……。

「——っ!? ねえ、先生。誘拐犯はここの松の木を伝って侵入し出ていったはずですよね?」

「それは、さつき麻生さんが言ってただろ」

「でも、このワンちゃん。家の人にしか懐いてないんでしょ? ということとは犯人は吠えられたんじゃないや……」

「んっ!? 確かお手伝いさんたちは叫ぶ爺さんの声以外は静かだったと言ってたな……」

あたしが番犬がいるのに誘拐犯が吠えられなかったのかどうか疑問を口にする、小五郎はお手伝いさんが犬の鳴き声を聞いてないという発言をしていたことを思い出したみたいだ。

「ということ、やっぱりこの人の言ってることはおかしかった—」

「麻生さくん。逃げちゃ、ダメ」

「あたしはこつそりと逃げようとする麻生の腕を掴む。

もう、今さら逃げてもしようがないでしょう？」

「アリス。でかした！ どこへ行くつもりですか？ 麻生さん！」

「ううっ……」

「何か変ですなあ、あなたの言ってる事は。庭に侵入してきた犯人はお嬢さんを連れあの木から逃げていった——なのに番犬は吠えなかった！」

「そ、それは……！」

「それにあなたの証言にはあやふやな点が多すぎる！ 黒ずくめの男なんていなかったんじゃないですか!? 麻生さん！ いや——誘拐犯人さんよ！」

「麻生さくん！ 貴様っ！」

「申し訳ございません。旦那様！」

小五郎の追及に観念して、麻生は土下座をする。

彼は素直に謝っているから晶子を誘拐したことは間違いないみたいだ。

明らかに色んなことが杜撰としか言いようがなかったから、すぐに解決したわね……。

「何のためにこんなことをした!? 誰かに頼まれたのか!？」

「いいえ、これはわたし一人でやったことです！」

「で、お嬢さんは今どこに？」

「ち、近くのホテルに……」

「……にやはっ！ 一件落着くく！ 名探偵、毛利小五郎の手にかかればどんな事件もたちどころに解決！」

麻生が犯行を認めて小五郎は上機嫌そうな笑顔を浮かべた。いい笑顔ね。

「とりあえずは一つの事件は解決したし、良かったわ……。」

「さすが！ 先生です！ 早速一人目の犯人を見つけましたね！」

「ひ、一人目のお？ どういうこつた？ そりやあ」

「またまたく。先生、さつき仰つてたじゃないですか。犯人は二人以上いるって」

あたしの推理が正しいならまだ事件は終わっていない。

なぜなら、使用済み紙幣を要求している他の犯人がいるからだ。麻生よりも用心深くて周到な……。

「そういや、言ったな。んなこと。だがなあ——」

「だ、旦那様！ お電話が……！」

「忙しいから後でかけ直すと言っておけ！」

「そ、それが……」

「谷だが……」

『3億円は用意できたかな——？』

あたしが第二の犯人について想いを馳せていると、電話がかかってきた。

3億円を要求した、恐ろしい誘拐犯から——。

事件はまだ解決していない。あたしはこの事件を解決して名探偵になれるのか——いまいち不安である——。

社長令嬢誘拐事件 後編

やっぱり、麻生の他にも犯人が居た。おそらく、誘拐されて監禁された場所からもう一回誘拐されたのね……。

可哀想な子よね……。二回も誘拐されるなんて——でも、きつと助け出すから。

犯人からの電話の際に隠れている場所がわかった。晶子がヒントを与えてくれたのだ。

彼女によると、どこかの学校の倉庫でさらに“煙突”が見えるらしい。

学校はたくさんあるけど、誘拐からはまだ全然時間は経ってない。おそらく犯人は——。

「先生、晶子ちゃんはそう遠くに行ってないはずです。煙突が見える学校となれば、限定はされると思うのですが」

事件からの時間がそう経ってないことから、あたしは犯人は近くの学校にいるに違いないと推理した。

そもそも、麻生の誘拐によってたまたまホテル付近で晶子を見つけて誘拐を企んだのだから、これは計画的な犯行ではなく突発的な犯行。それはわざわざ学校の倉庫なんか隠れていることから推測できる。

犯人は逃走などの準備をしておらず、移動手段は徒歩の可能性が極めて高い。

つまり、徒歩圏内の煙突が見える学校というヒントがあるなら、かなり場所は絞られるということだわ——。

「そ、それはそうだが。煙突が見える学校つつつても」「地図を見せてください。——ここと、ここと、ここ。あと、こことここね。煙突が見える学校はこの5箇所」

あたしは近隣の煙突の場所をマッピングして、それが確認出来そうな学校を5箇所見つけ出した。

5箇所か……。確かにかなり絞れたけど——一個ずつ潰すとそれなりに時間がかかりそうね……。

「よし！ 手分けして全部の学校を回るぞ！」

「学校に電話したほうが早いかもしれませんが。休日でも誰かしらいると思いますし」

「電話だと？」

「そうです。もちろん、学校の職員の方には犯人が居たと気付いても知らん顔してもらいましょう。あたしたちが到着するまで。とにかく一刻を争います！ 移動は最低限にして、最短で犯人に到達するようにはしましょう！」

「な、なるほど。片っ端から学校に電話だあ！」

小五郎は手分けして5つの学校をしらみ潰しに探すと書いていたが、あたしは電話して確かめて貰ったほうが早いと思った。

刺激すると晶子が危険に晒されるデメリットはあるが、特定が遅れと殺されてしまう可能性がある。

その可能性と天秤にかけると、やはりスピード重視の方がいい。

「アリスちゃん、何をしてるの？」

「うくん。倉庫の窓から見ただけで煙突だと言ってたけど、見間違えかもしれないでしょ？ タワーとか、ビルとか……、高い建物なら角度によってはそう見えるから——。蘭ちゃんも一緒に地図から探してみてくれない？ あたし、土地勘ないのよ」

あたしは第二の可能性として晶子の見間違えの線を疑った。

もしかしたら、別のものを煙突だと思い込んでいる可能性も大いにあるのだ。

この辺りの地理には詳しくない。新一の記憶から薄ぼんやりと付近のマップは抽出出来るが、推理に必要な知識やエピソード記憶ほど鮮明ではなかった。

だから、蘭にも手伝ってもらって地図上からそれっぽい場所を探す。

「う、うん。高い建物……、高い建物……」

蘭はあたしと一緒に地図とにらめっこして、犯人が居そうな学校を探すのを協力してくれた。

晶子は見つかっていない。それは、電話でのローラー作戦は上手く

いってないということ……。煙突の見える学校にいる可能性が少なくなっている――。

「電話が繋がらない学校が一箇所。ここに違いない！ 行くぞ！」

小五郎は唯一、電話が繋がらなかった学校が正解だと予測してその学校に向かつて走って行く。

そこかもしれないけど、あたしと蘭はまだ地図を見ながら、他にも犯人がいる可能性がある学校ないか探し続けた。

「ねえ、アリスちゃん。この高層ビルはこっちの学校からなら煙突に見えるかも。この二ツ橋中学校なら」

「ほ、本当ね。蘭ちゃん！ すごいわー！」

「んっ……んんっ……、あ、アリスちゃん、いい匂いがする……」

あたしは高層ビルがちょうど煙突に見えそうな学校を見つけた蘭を思いつきり抱きしめた。

さつきも思ったけど、こうしていると心地よい。いつまでもこのままでいたいと思っちゃう。

でもダメよ。いまは晶子を一刻も早く救わなきゃいけないから――。

「あたしたちも急ごう！ ここなら走ったほうが早いわ！」

「う、うん！」

あたしは二ツ橋中学校へと全力でダッシュした。蘭も後ろからついてくる。

急がなくちゃ、犯人が晶子を殺すかもしれない――。

谷がお金を用意したかどうかを確認したら彼女は用済みになるのだから――。

なるべく引き伸ばすように頼んだけど、そろそろ危ない。

「商談は成立した――つまりおまえの役目は終わったって事だ!!」

「……んんっ！」

あたしが二ツ橋中学校の体育倉庫に駆けつけたとき、犯人はちょうどナイフの鞘を口にくわえながら抜いているところだった。

あいつ、許せない——！

「クッククック……！ 死ね！」

「させないわよ！ うっ……！」

あたしは犯人の横をすり抜けて晶子を抱えてくるりとナイフを躲そうとした——けど、肩にナイフが掠ってしまう。

あはは、かつこ悪い……。でも、晶子は無事で良かったわ。

「——っ!? てめえ！ 誰だ?！」

「い、痛い！ もう大丈夫よ。よく頑張ったわね」

肩の痛みには耐えながら、笑顔を作り晶子の口を塞いでいるテープを剥がした。

あとは、この男を捕まえて事件は解決ね……。

「このアマ！ 何を余裕ぶっこいてやがる！」

「つさいわね！ こんなに可愛い子を殺そうとするなんて信じられないわ！ 許さないんだからくっくっ！」

あたしは側に転がっていたサッカーボールを思いきり犯人の腕に向かつて蹴飛ばした。

すると、ボールは犯人の腕に強烈な衝撃を与えて彼はナイフを手放す。

おおーっ、さすが新一の身体能力。サッカーボールがまるで凶器ね

……。女の子になって筋力が落ちてでも大した威力だわ……。

「ぐはあっ——！ ……くそっ！ ナイフが……！」

犯人は自らの腕を押さえて、かなり痛がっていた。

悔しそうな顔をしているわね。まったく、お金のためにこんなに酷いことをするなんて許せないわ。

「ふふーん。女だからってナメないでよね」

「お、お姉さん、誰?」

晶子はあたしの顔を見て、何者か尋ねる。そりやそうだよね。いきなり知らない女が現れて大立ち回りをしてるんだもん。

「あ、あたし？　あたしは藤峰愛梨寿……、探偵……の見習いかな？」
さすがに「探偵」とは恥ずかしくてまだ名乗れなかった。

工藤新一の知識や記憶はあるけど、あたしはまだまだ探偵として彼よりも未熟。だから、こうやって、体を張るようなことになっている。

藤峰愛梨寿の探偵物語は今日始まったばかりなんだ——。

「そつちこそ、ナメんなよ！　男に力で勝てると思うな！　こいつで叩き殺してやる！」

犯人は体育倉庫にあった金属バットを掴みそれを振り上げて嫌な笑みを浮かべる。

こいつ、殺人がどんなに重い罪なのか知らないのかしら？　気軽に殺すなんて言ってるんじゃないわよ！　絶対に負けないんだから。

あたしは犯人を睨みつけて口を開いた。

「あら、それはどうかしら？　強い女の子だって世の中にはいるのよ。ほら、あなたの後ろにも」

「はあ？　そんな手に——」

あたしは全力疾走でしかも近道をしてここまで来た。だけど、そろそろ追いつくはずだ。

空手の都大会優勝者で、とんでもなく強いあの人が——。

「はあああああつ！　とりやあー！　はあつ！　とうつ！！」
蘭は目にも止まらない打撃技の連発で犯人を背後から瞬く間に蹂躪する。

こんなに強いなら金属バットなんて意味を為さないわね。

空手の都大会優勝でこの強さ——全国大会ってあたしの世界じゃ知らないような戦いが繰り広げられてそう……。

「ひでぶつ……！」

「あらあ……犯人さん死んじゃってないわよね〜」

ちよつとだけ、犯人が気の毒になるくらいボコボコにされちゃったのであたしは苦笑いした。

将来、この子の旦那さんになる人は絶対に尻に敷かれるでしょうね……。

そんなことをボーツと考えていたあたしの元に蘭が駆け寄って来

た。

お見事だったよ。おかげで助かっちゃった。

「アリスちゃんのバカ！」

「ふえっ!？」

彼女は涙目になりながらあたしのことを叱った。

あまりにも大きな声でびっくりしてしまい、あたしは声を失ってしまふ。

「危ないことしちゃダメだよ。こんな怪我までして……、アリスちゃんに何かあつたら……」

蘭は涙を流しながら肩の傷を見ていた。こんなのはかすり傷で大事なことないんだけど、彼女にとっては大事だったみたい。

でも、あたしには耐えられなかったんだ。目の前で人が殺されるということに……。だから、勝手に体が動いちゃってたんだよ——ごめん。

「ら、蘭ちゃん……ありがとう。守ってくれて。とっても嬉しかったわ」「うん。アリスちゃんも無事でよかった」

あたしが蘭の目を真っ直ぐ見つめてお礼を言つて彼女をそっと抱く——。

すると、彼女はあたしを抱き返してくれた。

こうしてお互いの体温ぬくもりを感じていると癒やされる——時が止まって欲しいと思うほどに。

何故こんな気持ちになるのだろう——この謎はシャーロック・ホームズなら解けるんだろうか……？

「おまえが犯人だな!? このっ！ このっ！ 誘拐犯は名探偵毛利小五郎が召し捕ったりい！」

しばらく蘭と抱き合っていて、犯人を縛り付けようとか考えてると小五郎が到着した。

谷の家の使用人にここにいると伝えてもらったからだろう。

いやー、最初から割と危ない目に遭っちゃったけど一件落着で良いのかな……。



結局、最初の誘拐事件は晶子の狂言だった。麻生に頼んで仕事ばかりしている父親の気を引きたかったみたい。

子供の発想って怖いわ。段階を何段階も蹴っ飛ばしてるみたいで……。麻生、あんたは乗ってないで代案を考えなさいよ、代案を……。そんな娘の話を聞いて、谷も仕事に熱中するのも改めるみたいだし、麻生も無罪放免になって、めでたしめでたし……。かな。きつと、ハッピーエンドだね。

「助手に的確な指示を与えて娘の居場所をつきとめるとは——さすが名探偵ですな！」

「いやあ、すべてわたしの教育と経験のタマモノですよ！」

「今日もいい勉強が出来ました！ 毛利先生！」

「だーはっはっはっ！ お前もよく働いてくれたな！ 自慢の助手だ！」

依頼人の谷に事件を素早く解決したことを褒められて小五郎は有頂天だった。

あたしが彼に頭を下げると、笑いながら良くやったと頭を撫でてくれる。

なんか、運動会や学芸会でお父さんに褒めてもらってるみたいだ。ちよつと嬉しかったり。

「ではこのお礼はまた後日……」

「ハイハイ。待ってますよ〜」

結構大きな会社の社長からの依頼だったし、スピード解決もしたから報酬はかなり高いんだろうな。相場とか知らないけど……。

小五郎のニコニコ加減から想像すると、半年依頼がなかったことをチャラにできるくらいなんだろう。探偵って、そんな一発当てたらデカイみたいな仕事なのか……。

「ありがと。探偵……見習いさん」

「バイバイ。お父さんにいっぱい遊んでもらいなさい！」
「うん！」

晶子があたしにお礼を言ったので、彼女の頭を撫でると彼女は嬉しそうな顔をして、父親と手を繋いで帰って行った。

あんな笑顔を見られるなら——探偵を頑張るのも楽しいかもね……。

「やったね。探偵見習いだって。今日のアリスちゃん。謎解きに、がむしゃらで——新一みたいだったよ」

「あははっ！ でも、蘭ちゃんが二ツ橋中学校を見つけてくれたし……あたしはまだまだ名探偵には程遠いかな……」

そう、今日一日謎解きを試みて思ったのが、あたしは完全にコナン君みたいにはなれないみたいだ。

新一の知識や経験は頭の中にあるけど、考えるのはあくまでもあたし自身。だから、まったく同じ動きなんて取れないのだ。

ただ、良い面もあった。それは、体が大人という面だ。

コナン君は子供だから戯言としか発言は取られないけど、あたしは助手として小五郎に意見を一応は聞いてもらえる——つまり、漫画よりも素直にアドバイスを受け入れてくれるってわけ。

彼の頭の中で“助手の手柄イコール師匠である自分の手柄”と変換してもらっているみたいだから、良い意見はウエルカムみたいだ。

これは捜査をする面では楽になるに違いない。あたしも堂々と助手を名乗れるわけだし……。

しかし、一抹の不安は本当に毛利小五郎の助手として認められたかどうかだ。もしかして彼は今回の事件限定で認めたのかもしれない。

それは困る。あたしはこの先、黒の組織から薬の情報を手に入れるまで小五郎の助手でいるつもりなのだから——。

「ねえお父さん、アリスちゃんのことだけど……、これからも助手とし

てウチに来てても良いのかな？」

「——助手かあ」

「お願いしまゝす」

「ダメかな？ アリスちゃん、とつても頑張ったと思うんだけど」

帰りのタクシーであたしの不安を感じ取ったのか蘭は小五郎に念押しのようにこれからからも助手で居ても良いのか尋ねてくれた。

小五郎は顎を触りながら少しだけ考えているみたい。

あたしは『気が変わった』って言われるのではと怖かったが、彼はニンマリと笑ってこちらを見た。

「いいぞいいぞ！ こいつが来たたん仕事に来て、スムーズに解決できたんだ！ 何より、こいつと居ると気分がいい！ いくらでも勉強させてやるよ！ はーはっはっはー！」

小五郎はポンとあたしの背中を叩いて正式に彼の助手になることを認めてくれた。

あー、良かった。これで目標に一步近付ける。

ここから彼を名探偵にするのは大変かもしれないけど——頑張るわ。

「良かったね」

「うん。蘭ちゃんのおかげだよ。知り合ったばかりのあたしのために、ここまでしてくれてありがとう。これからよろしくね」

「う、うん。……な、なんだろう。やっぱり見つめられるとドキドキするよ……」

あたしは蘭の手を握りしめて彼女に改めてお礼を言った。

そんな彼女の顔はいつもより少しだけ赤くなっている気がする。風邪かしら？

藤峰愛梨寿——毛利小五郎の助手として探偵デビューです。

アイドル密室殺人事件 前編

「藤峰愛梨寿です。変な時期の転校とはなりましたが皆さんと仲良く出来るように頑張ります」

「うわっ！ 転校生って聞いてたけどすげー可愛いじゃん」

「アイドルみてーだな」

「彼氏とかいるのかな？」

「こりや今度の裏人気投票の順位は入れ替わるぞ」

帝丹高校の2年B組に転校したあたし。この制服可愛いじゃない。気に入っちゃった。

転校生って、やっぱり目立っちゃうわよね。何か変なこと言わないように気を付けないと。

「あっ！ 蘭ちゃん！ 同じクラスじゃん。良かった。あたしって人見知りだからさ。知り合い居なくて不安だったのよね」

「そ、そうは見えないけど……」

「あはは、今日から学校でもよろしくね」

あたしは蘭が同じクラスなのは新一の記憶があるから、もちろん知ってたけど素知らぬフリにして挨拶した。

転生して高校にも入っちゃった。完全に新しい自分としての生活がスタートしたわね……。

「あー、びつくりしたあ。あんなに質問攻めに逢うなんて考えてもみなかった」

「そりや、アリスちゃんみたいな可愛い子が転校してきたら男子が盛り上がるのは仕方ないよ」

「あら、そう？ モテ期来ちゃったかな」

あたしは休憩時間に男子たちの質問攻めに遭っていた。やれ、彼氏はあるのとか、好きなタイプとか——まあいろいろと知りたがるわね、男の子って……。

確かに今の自分のビジュアルは美人になったと思うけど、露骨なんだなく男の人って。

「ねー、藤峰さんってどうして蘭と知り合いになってるの？ あっ！

私、鈴木園子。蘭の親友」

放課後に蘭と話をしていたら、クラスメイトで蘭の一番の親友である鈴木園子に声をかけられた。

彼女は蘭とあたしが何故知り合いなのか気になるらしい。

「よろしく。園子ちゃん。あたしのはアリスちゃんって呼んでいいよ。——ええーつとね。あたしはこのクラスの工藤新一くんと親戚で、その関係でこの前知り合ったのよ」

「へー、あんた蘭の未来の旦那と親戚なんだ。だったら、将来的には蘭とも親戚になるのね」

あたしが蘭と知り合った経緯を話すと園子は面白いことを言う。

そっか、あたしが新一自身でもあるから考えもしなかったけど、そういう見方も出来るわね。

「そうそう。その予定なんだ。結婚式の友人代表のスピーチは一緒に考えてくれると嬉しいかな」

「あはっ！ 面白いじゃん。じゃあ、今から考えちゃう？ 高校のときから蘭は新一ラブが丸わかりでしたって」

「ちよつと、アリスちゃん！ 話を飛躍させないの！ 園子も悪ノリしないだよ」

あたしと園子と一緒にあって蘭を冷やかすと、彼女は満更でもない表情で会話を止めようとする。

でも、想像したんでしょう？ 顔に書いてあるわよ。

「なあに、別にいいじゃない。こうやって新しくクラスメイトとなった子と交流を深めてるんだから」

「うん。交流、交流♪」

「なんか、この二人性格似てるような気がする……」

あたしと園子はノリが似ているからなのか、すぐに仲良くなった。

明るくてムードメーカーな彼女はとっても良い子だ。もう好きになっちゃった。

「へえ、蘭のところのおじさまの助手にねえ。蘭の前だから言いにくいけど、目標にする人間違えてない？」

「園子、本当に言いにくいと思ってるならストレートに言わないでよ」「にやはは、ごめんごめん」

園子はあたしが小五郎の助手つてところに違和感を感じてるみたいだ。

いや、確かにあのポンコツな小五郎を名探偵にする無理ゲーは好んでやるもんじゃないのはわかってるけど……。

「もう。でも、ごめんね。やる気になってくれてるのに、なかなか依頼が来なくて」

「ううん。全然問題ないよ。一緒にご飯作ったり、勉強したりするの楽しいし。それに——先生はきつと有名な名探偵になる人だから。いくらでも待てるよ」

それでもあたしは知っている。小五郎は行く先々で事件に見舞われることを。

まあ、あれはコナン君のせいかもしれないんだけど……。だとしたら、あたしが事件遭遇体質まで引き継いでいるってこと？ そんなの嫌すぎるんだけど……。

「お、お父さんが有名な名探偵に？ まさか」

「おじさまのことそんなに買ってるんだ。じゃあ今日も蘭の家に行くの？」

「そうだよ。だって、いつ依頼がくるか分からないもん」

あたしはあれから毎日蘭のところに通って依頼が来るのを待った。今日も当然行くつもりでいる。

「なんか通い妻みたいね。蘭だったら、旦那だけじゃなくて、奥さんまで作るつもり？」

「——へっ？」

「……んっ？ なんて、あんたたち顔を赤くしてんのよっ」

「べ、別にその、あ、あたしは蘭ちゃんに会いに行ってるわけじゃ……」

「そ、そうよね。アリスちゃんはお父さんの助手で……その……」
あたしと蘭は園子の発言を聞いて、顔を真っ赤にする。

確かに最近は何事というより蘭と勉強したり雑談したりすることが楽しくなっていた。

でも、ダメだから。この気持ちは封印しなきゃ……。

「本当にどうしちゃったの？——じゃあ私も今日は蘭の事務所にお邪魔しようっと。もしかしたら、アリスの探偵助手姿も見れるかもしれないしね」

「そんなに都合良く依頼人が来るかな」

園子はあたしが探偵助手をしている姿を見たいと言ったから、今日は女子3人で毛利探偵事務所に向う。

依頼人来るかな……？前は半年間来なかったらしいけど。

「あ、あなたはくく！お、沖野ヨーコちゃんツ！」

「来たわね。依頼人」

「まさか、アイドルが来るなんて」

「先生、デレデレしてる」

夜になって、あたしと園子が帰ろうとしたとき、何とアイドルの沖野ヨーコが依頼人としてやってきた。

この人は何回も漫画で出てきたはずだから、主要人物に入るのかしら……。とにかく事件に巻き込まれても犯人では無いことは確かね。すっかり舞い上がっている小五郎がヨーコに依頼内容を聞くと、何と最近彼女は様々なイタズラに悩まされているみたいだ。

「家具の配置が変わってて、隠し撮りに無言電話。そんなの間違いないわ。ストーカーよ、ストーカー」

「だとしたら、女の敵ね」

園子はヨーコの話聞いてストーカーだと決めてかかっていた。普通に考えれば、そんな気持ちの悪いことするのはストーカーだも

んね。

「でも、執着されて愛されるのもいいわよね。もちろんイケメン前提で」

「園子！ 被害に遭ってる人の前で不謹慎よ」

園子のぶっ飛んだ恋愛観に蘭は呆れながらヨーコに気を使うように注意する。

彼女は恋バナ好きだもんね。あたしも嫌いじゃないけども。

「うーん。ストーリーカーじゃなくて、ただの嫌がらせてって線もあると思うわ。ヨーコさん、失礼ですが、最近誰かの恨みを買ったりしたこと心当たりはありますか？」

「う、恨みですか？ いえ、特にはありませんが……」

あたしは恨みで嫌がらせをされた可能性も考えて、彼女に心当たりを聞いたが不発だった。

そのうえ、そんな質問をしたもんだから、小五郎が嫌な顔をする。

「こらあ！ アリス！ こんなに可憐で美しくいいヨーコちゃんが恨みを買うわけないだろう！」

「で・す・よ・ねくく♡失礼しましたあ♡」

小五郎に怒られたあたしは鏡の前で練習した可愛い笑顔を作って誤魔化する。

大体、こんな声を出して謝れば小五郎は許してくれるし……。

「変り身はやつ！ すごくいぶりっ子するじゃん」

「えへへ」

速攻で小五郎に媚を売るような態度を見せると、園子は呆れ顔をする。

だって、この人にへそ曲げられたら困るし、扱いやすくしときたいんだもん。

「あおう。この件は内密にお願いできますか？ ヨーコの今後に関わるので」

「お任せください！ この名探偵・毛利小五郎が必ずや解決してみせましょう。それでは、この書類に住所と電話番号を——」

マネージャーの山岸が内密にこの件を処理したいと伝えると、小五

郎は胸を張って依頼を受けるとして、書類を手渡していた。

沖野ヨーコの依頼だもん。大ファンの彼にとつては絶対に解決しなきゃいけない事件だ。彼もやる気満々なんだろう。

「おじさま、ちよつと頼りになる感じじゃん。意外〜」

「そりゃ、仕事なんだからお父さんだつて真面目にやるよ」

いつになく真剣な小五郎を見て、園子は感心したような声を出し、蘭はそれを当然だと言った。

うーん。それはどうかなく。

「あと、この色紙にサインを！ 小五郎さん」へを忘れないで！」

「ああーん。先生だけずるいですう。あたしにもお願いしまーす。」

「アリスちゃん」へって書いてくださいい♪」

「おつ！ アリスもヨーコちゃんのファンか？ わかつてるじゃねーか！」

「あたし、可愛い女の子大好きなんですう」

あたしと小五郎はヨーコにサイン色紙をもらった。

実はあたしはアイドルが大好きだ。だから、ヨーコのサインは本当に欲しかったのである。

「……………」

「ねえ、蘭。大丈夫なの？ あの二人で」

「あ、アリスちゃんは、お父さんに合わせてるだけ……だと、思う。多分……」

こうして、ヨーコからの依頼を受けた小五郎とあたしたちは彼女のいるマンションへと向かった。

マネージャーの山岸の案内によって――。

「うはあつ！ ここが沖野ヨーコちゃんのお住いですか〜!!」

「こ、困りますよ。毛利さん。ヨーコがここに住んでいることは秘密なんですから……」

ヨーコの住むマンションに着いて、興奮の余り大声を出す小五郎に山岸は注意する。

そりゃあそうだ。アイドルが家バレなんて洒落になんない。引つ越さなきゃいけないくなる。

「……し、静かにするんだぞ。お前たち」

「はい♡」

「私たち何も言っていないじゃん」

「お父さんったら……」

それを聞いて、あたしたちに小五郎は注意した。園子はムツとしていたけど、これくらいで目くじら立ててたら彼の助手はやってられない。

「では、中で話を改めて聞いて—— ツツツツ!? きや、きやあああ あ!!」

ヨーコが自分の家の鍵を開けて中に入ろうとしたとき、彼女は腰を抜かして悲鳴を上げた。

こ、これはまさか—— 事件!?

「どうした!?!」

「何があったの? あっ——!?! ひ、人が倒れてる……!?!」

小五郎に続いてあたしもヨーコの家に入ると、男の人が背中から血をダラダラ流して倒れていた。

うわ……、これは死んでるな。何に驚いてるって人が目の前で死んでいることを冷静に受け止めている自分にだ。

以前なら絶対に昼食べたものを戻している。これも新一の体になった影響なのか……。

「警察だあ! アリス! 警察を呼ぶ〜っ!!」

「は、はい! 先生!」

あたしは小五郎の言葉に従って警察に通報した。

これがあたしにとって初めての殺人事件の捜査となる——。

「では、帰ってきた時にはすでにこの男は殺されていたと？」

「はい……」

「で、その時いつしよにいあわせたのが……」

「わたくし、毛利小五郎であります♪ 目暮警部殿！」

「よりによって、君か……」

現れたのはお馴染みのキャラクター、目暮警部。

色んな警察のキャラクターはいるけど、この人がダントツで登場する回数が多いだろう。

目暮警部は小五郎が現場に居合わせたことに対してすごく迷惑そうな顔をしていた。

「いやあ懐かしいですなあ！ 警部殿と追った事件の数々!!」

「ああ……、おまえが部下だったおかげでほとんどが迷宮入りになったがな……!」

そうそう。小五郎って元警察なんだよね。迷宮入りになったのって彼のせいみたいに言うけど、目暮警部もそんなにレベルは変わらないような気もしなくもない。

下手したら小学生の光彦とかよりもヤバいときあるし……。

「まあ！ あなたが目暮警部さんですね。噂は聞いておりますわ。会えて光栄です」

「君は誰かな？ 蘭くんの友人かね？」

しかし、目暮警部は小五郎を名探偵にするにあたって重要な人物だ。あたしの印象を良くしておくに越したことはないだろう。

あたしは目一杯愛想を良くして彼に話しかけた。

「あ、はい。毛利先生の助手をしています。藤峰愛梨寿です！ 警部さんのお話は親戚の新一から聞いております——」

「おー、工藤くんの親戚か。確かに彼の母親の有希子さんに瓜二つだな。しかし、毛利くんの助手になるとは……付き合う相手を選んだ方が——」

「いえいえ、先生は名探偵ですよ。警部さん。きっとこの事件を解決してみせます」

とりあえず、新一と親戚関係というのは悪くない印象みただ。

小五郎の助手というのは、園子と同様に変な顔をされるけど。うむ……、いつかあの『名探偵の助手とは〜!』くらい言われるように頑張らねば。

「うーん。毛利くんが名探偵……想像できん……。——それにしても暑いですなあ!。いつもこんなにエアコンを強く?。」

「いえこんなには……。それに外かける時ちゃんと切ったはずなんですけど……。」

「そりゃあ、妙ですな……。」

そう、入ったときから気付いていたけど、この部屋はエアコンが効きすぎていてとても暑い。

でも、ヨーコによればエアコンは切っていたみたいだ。

「妙なのはそれだけじゃないんですよ。わずかですが死体のまわりに濡れた後があります。雨が降っていたわけでもないし、不自然です」「そしてこの椅子も変なんですよ。荒らされた室内でこれだけがきちんと立ってますから……。」

「さらに暑すぎるこの部屋……。死亡推定時刻を狂わせるためなのか……。いいえ、それなら冷やしたほうが効果的——ですよ?。先生♪ さすがは先生、ひと目現場を見ただけでこんなに違和感に気付くなんて」

あたしはとりあえず現場で感じた違和感を並べて小五郎にパスを回す。

あくまでもあたしは彼のサポート。彼に事件を解いてもらわなきゃならないのだ。

「えっ?。違和感?。そ、そうだな。この部屋は不自然すぎる!。このあたりの謎が事件解決の糸口になりそうだ!。」

小五郎はわからなくてもノリだけは良い。だから、彼は最初から知ってましたって顔をしてくれた。

うんうん。この調子、この調子……。

「ほう、毛利くんがこれだけ熱心に仕事をするととは思わなかった——。で、死因はわかったかね?。」

「死因は包丁が背中に刺さったことによる出血ですね」

当たり前だけど、死因は見たまんまだった。包丁で被害者は背中を刺されて死亡したのだ。

「あの包丁はあなたのものですか？」

「え、ええ……」

警部は当然、家主であるヨーコを疑っている。

あたしはとりあえず漫画でずっと登場してるヨーコは犯人ではないと除外しているけど……。

まあ、理由はそれだけじゃない。最初からヨーコとマネージャーの山岸は犯人じゃないってあたしは思っている。

「まさかヨーコを疑って……!?!」

「被害者に見覚えは？」

「あの、もっと近くで見ないと……。——あつ?!? うわあああつ!」

なぜかヨーコに対する質問に山岸が答えて、彼は死体に近付き、血だまりに足をとられ転んだように見えた——。そして、死体と顔を合わせて驚いて離れたようにも……。

「だけど——。」

「山岸さくくん。ポケットから落ちましたよう。あなたが遺体から抜き取ったものが。ちゃんと、ハンカチを使って拾ってつと」

「山岸さん、ポケットの中身を見せてもらえますか？」

「うっ、うう……」

山岸は死体が掴んでいた髪の毛を転んだフリして抜き取ったのだ。

あたしは彼がそれをポケットに入れたのを見逃さなかった。だって、不自然すぎる動きなんだから。

「この長い茶髪は……、沖野ヨーコさん。あなたの髪の毛では？」

「えっ?」

「そして、この部屋は密室だった。となると犯人はこの部屋の主——。被害者と揉み合いになり、刺した瞬間にあなたは髪を掴まれ何本か髪の毛が抜き取られたでしょう。この髪の毛があなたの犯行を示す証拠です」

「そ、そんな私——人殺しなんか……」

警部は確信しているようにヨーコを犯人扱いする。

被害者が彼女の毛髪を掴んでいるから犯人だと決めつけたのだ。

まあ、一見そのように見えなくもないけど、警部の推理は間違っている。その毛髪はヨーコを犯人だと指し示してはいないのだ。

「そーですよ。警部殿！　こーんなに、可愛くて可憐なヨーコさんが人殺しなんかするはずないでしょ！」

「あ、そう……。そもそも、君の助手が髪の毛を発見したのだが……」「アリス！　お前はなんて余計なことを！」

警部は自分の助手がヨーコ犯人説のアシストをしたと、彼女を擁護する小五郎に伝えると彼はあたしに悲壮感が漂う声で怒鳴った。

小五郎は沖野ヨーコの大ファンだから、その反応は仕方ない。

「もー。先生だったら、そろそろ教えて差し上げてもいいじゃないですかあ♡その、髪の毛こそ可愛くて可憐なヨーコさんの犯行を否定するって」

「はあ？」

「なになに、面白いこと言ってるじゃん。アリス」

「その髪の毛がヨーコさんの犯行じゃない証拠なの？　アリスちゃん」

あたしは被害者が掴んでいた毛髪こそ、ヨーコの無実を指し示すアイテムだとみんなに伝えると、園子と蘭は興味深い顔をした。

「どうでもいいけど、この二人もよく死体が転がっているこの空間で平気な顔してるわね……。あたし、今日はハンバーグ食べられないわよ。」

「じゃ、蘭ちゃんと警部さんに協力してもらいましょう。蘭ちゃんは髪の毛の長さがヨーコちゃんと同じくらいだし、警部さんは体格が被害者に似ているから」

「……………」

あたしは事件を再現してみようと提案した。犯人役を蘭に、被害者役を目暮警部に頼んで……。

「例えば、このあたしの丸めたハンカチが凶器だとするでしょ？　で、蘭ちゃんはこの事件と同様に警部さんの背中を刺してみても、ゆっくり

と……」

「ううん。」

蘭は首を傾げながら警部の背中にハンカチを押し当てた。

さて、ここからが重要だ。

「はい、警部さん。蘭ちゃんの髪の毛を触ってみてください」

「えっ？ あ、あれ？ 手が届かない。これは無理だ」

実際に再現してみるとわかりやすいが、背後から刺されて髪の毛を掴んで倒れるなんて芸当は無理だ。

手が常識離れして長いなら別だけど……。

「でしょ？ だから変な話なんです。死体がヨーコさんの髪の毛を持っていてのって。まるで、誰かがヨーコさんを犯人にしようとしているみたいです。ええーつと、これで、いいですかあ？ 先生」

「そ、そうだ。ヨーコさんは嵌められているんだ。彼女を罠に嵌めた人物こそ、この事件の犯人！」

あり得ない毛髪を被害者が持っていたということは誰かがヨーコを犯人に仕立てあげようとしている証拠だ。

彼女は誰かの悪意によって、犯人にされるところだったのだ。

小五郎はあたしに話を振られて彼女を嵌めようとした人物が犯人だと言ったけど、そのとおりだと思う。

「そもそも、ヨーコさんと山岸さんは名探偵の先生に相談に来て、自らこの部屋に招いたのですよ？」

「そういえば……。警部殿！ この二人が犯人なら死体がある部屋に私をわざわざ入れるはずがありません」

ついでに言っておけばヨーコと山岸が犯人ならあたしたちをわざわざ死体のある部屋に何食わぬ顔して招き入れるなんてあり得ない。

絶対に何かしら犯人ではないとする理由を作ってから死体と対面させるはずなのだ。

「う、うむ。珍しく筋が通っていることを言う……。しかしだなあ、毛利くん。この密室の謎がわからんことには——」

「ねえ、ヨーコさん。この部屋の合鍵とかがってないのですか？」

警部はまだこの部屋に鍵がかかって密室だったことに違和感を覚

えてるらしい。

だから、あたしはこの部屋に合鍵がないかどうかヨーコに尋ねた。「合鍵……ですか？　あるにはあるのですが、山岸さんが最近テレビ局の楽屋で無くしてしまっただけで……」

「そうですか。じゃあ、もし無くしたのではなくて、盗まれたのであれば——その合鍵を持つ人物はこの部屋に入ることができませんね。あと、このイヤリングはヨーコさんのものですか？　そのソファの下にあったのですが」

合鍵は山岸が持っていたけど、テレビ局で無くしたらしい。それは早く言って欲しかったし、マネージャーなら鍵をその時点で取り替えるように手配すべきだったわね……。

それと、同時にあたしはさつきソファの下で見つけたイヤリングを彼女に見せる。

「い、いえ。これは——ゆう子さんのイヤリングだったと思います」「そ、そういうえば、その池沢ゆう子はヨーコに仕事を取られたって恨んでいたような……」

「警部殿……！　間違いありません！　その池沢ゆう子をここに呼び出してください!!」

ここに来て新たな人物の名前が浮上する。彼女の名は池沢ゆう子。人気の女優さんだ。

小五郎はすでにゆう子を犯人だとして、警部に彼女を呼び出すように声をかけている。

彼女の登場によってこの事件は真相に近づくことになった——。

アイドル密室殺人事件 後編

「だから知らないって言ってるでしょ!? イヤリング一つで犯人扱い? ここには一度も来たことないわよ! 私だって忙しいの、その人気アイドル様ほどじゃないけどね。まあ、これからどうなるのか分からないけど」

女優の池沢ゆう子は気の強い人で、犯人扱いされたことにご立腹のようだ。

その上、ヨーコに敵愾心丸出し。うーん。ちよつとくらい隠したほうがいいんじゃないの?」

「ちよつとお手洗い借りるわ」

ゆう子は怒りながら立ち上がりトイレへと向かう。

ここに来たことはないと言ってるのにヨーコの家トイレの場所知ってるんだ。

へえ、後ろ姿——ヨーコにそっくりね……。

じゃあ、あたしは彼女がトイレに言ってる間に気になることをヨーコに聞いてみよう。

「ヨーコさん、あたしたちを信じて本当のことを言ってください。この被害者の方のこと本当は知ってるのではないですか?」

「こらあ! アリス! ヨーコさんが嘘なんか吐くかあ! 何の根拠があつてそんなことを!」

ヨーコは被害者を知らないみたいなお顔をしていたが、あたしはどうしてもそれが信じられなかった。

どうも違和感を感じるのだ……。

「女の勘ですよ。先生。ヨーコさんが被害者の遺体を見たとき……どこか愛しむような——そんな気がしてならなかったのです」

「あー、わかるわかる。女の勘ね。もしも、そんな顔をしていたなら、ズバリヨーコさんの元彼ね。被害者の人は」

あたしはヨーコさんが心の底ではとても悲しんでいるように見えた。

園子はあたしの言葉を受けて被害者はヨーコの元彼だと指摘する。

「も、も、元彼だとお!? んなわけ——」

「いえ、そちらの方が仰るとおり、この人とは高校時代に付き合っていました。——アリスさん……でしたっけ? 私のために頑張つて無実を証明しようとしてくれたあなたや毛利さんなら信頼できます。この情報も役に立ちますか?」

ヨーコはあたしに心を開いてくれて、正直に被害者が彼女の元彼だと告白してくれた。

この事実がこの事件の真相のコアになっているのは間違いないわ。あたしの頭の中であるストーリーが出来かけていた。

想像どおりならこの殺人事件は——。

「はい。とおーっても♡信じてくれてありがとうございます」

「……え、ええ。やだ、私ったらなんでこんなに顔が熱いの……」

あたしがつい、彼女の手を握りしめて笑いかけると、ヨーコは頬を赤らめる。

なんか、アイドルに馴れ馴れしくしてしまつて申し訳なかつたわね……。

「なあくん。その殺された人、あんたの元彼なんだ。じゃあ、やっぱりあんたが犯人なんじゃないの? そんな過去、アイドルには不要だもんね」

ゆう子はトイレから戻ってくるなり、机に置いてあつた自由の女神像の形をしたライターを手にとってタバコに火をつけた。

「そ、そんなことで人を殺したりしません!」

「ヨーコさんの線はあたしの中じや消えてるんですよ。そんなことよ、お姉さん。部屋に来たのは初めてなのに、それがライターってよくわかりましたね。自由の女神のオブジェにしか見えないのに」

あたしはこの部屋に初めて来た彼女が迷わずに一見ただのオブジェにしか見えないオシヤレなライターを当たり前のように触っていたことを指摘する。

この人がこの部屋に来たことないと言っているが、それは多分嘘だ。

「えっ？ あ、ああこれね。知り合いのところに同じやつがあったのよ」

「じゃ、その知り合いの名前を教えてください。あとついでにトイレに行きたいので行き方も教えてもらえませんか？」

目が泳いでいる彼女にさらにあたしはトイレに迷わずに真っ直ぐ行ったことも指摘した。

普通は初めて来た家なら「トイレはどこ？」って聞く。彼女の行動は前にもトイレをこの家で借りた人間がする行動だ。

「そ、そういうや、あんた初めて来たのにトイレにも迷わず行ったな」

「ううっ……そうよ。ヨーコの部屋の合鍵を盗んだのは私——」

ゆう子は観念して全て話した。自分が役を奪われたので、ヨーコのスキヤンダルを掴もうとして、家探しをしていたことを。

その際に被害者の藤江に後ろから声をかけられてびっくりして叫んでしまい、そのまま走って逃げたことまで……。

目暮警部や小五郎は犯人は彼女にしていたがっていたけど、それから藤江に会ったことまで話すのはおかしい。

それにヨーコの元彼を殺す動機も薄い。スキヤンダルにしようとするにしても、殺人なんていうリスキーなことをするよりも、もっとお手軽な手段に思うし……。

「ヨーコさん。ところで、この藤江さんってヨーコさんの方から別れを？」

「ううん。彼からいきなり振られてしまいました。なぜかわからないけど……」

「よ、ヨーコ……、そ、そ、その話はいいじゃないか」

あたしはヨーコに藤江と別れたときの話を聞いてみると、どうやら彼はヨーコを一方的に振ったらしい。

山岸はその話を聞くと嫌な顔をしていた。

「先生、ヨーコさんが振られるってあり得ます？」

「はあ？ ヨーコさんを振る男なんざ世の中にいる訳がねーだろ。よほどの理由がなきゃな」

そう、ヨーコは魅力的な女性だ。彼女を振るってことはよほどの事だと思う。

性格も良いみたいだし、振られたなんて違和感しかない。

「ですよね〜。ところで山岸さんはどうして目が泳いでいるのですか？ 何か隠していることがあれば言ってください。ヨーコさんの安全のために」

「くっ！ じ、実はヨーコ。俺が頼んで別れてもらったんだ。君のアイドル生命のために……」

「そ、そんな……」

あたしはずっとこの話の間、浮かない顔をしている山岸にヨーコのためにも隠していることを伝えろと促すと彼から別れるように頼んだと告白した。

まあ、アイドルに彼氏ってというのは許されないもんね。夢が無くなるし……。

「ここで、恋愛マスターの園子ちゃんに質問です。こんなに可愛い子と不本意ながら無理やり別れさせられると、男はどうなるでしょう？」

「あんだ、そのキャラ何よ？ そうね、経験豊富な私の推理だと、男は失意の底に沈み……もがき苦しむわ。そして、テレビで活躍する彼女を見れば見るほど気持ちは高まって復縁を迫ると思うの」

あたしは園子にその後の藤江の気持ちはどうなったのか推測してほしいと頼むと、思った以上に感情を込めて答えてくれる。

やっぱ、あたしノリの良い園子のこと好きだわ。

「ふむふむ。さっすが、園子ちゃん。想像力豊かね」

「絶対にバカにしてるでしょ？」

「まあまあ、園子……落ち着いて」

「でね、さつきゆう子さんの後ろ姿を見たとき思ったんだけど、そっくりじゃない？ ヨーコさんの後ろ姿と」

あたしは園子の話を前提において、ゆう子の後ろ姿とヨーコの後ろ

姿がそっくりなことを伝える。

そう、あたしの中ではもう謎は全て解けているのよね。あとは、小五郎に事件を解決してもらうだけなんだ……。

「あつー！ 確かに似てるー！」

「じゃあ藤江さんがゆう子さんに後ろから声をかけたのって……復縁を迫るため？ それでヨーコさんと間違えて」

園子と蘭はこの話の根本に気付いたみたいだ。

二人の言うとおり、藤江は勘違いをした。ヨーコとゆう子を……。

「ねー、先生。もしも、先生がヨーコさんと付き合ってたとして、別れちゃうとするじゃないですか」

「バカー！ ヨーコさんと別れるわけあるか！」

「いや、もしもの話ですから……。別れて、その後、勇気を振り絞って復縁を申し込みに行つて——それで他人扱いされて悲鳴を上げられて拒絶されたら、どう感じますか？」

あたしはヨーコの大ファンの小五郎にもしもの話をした。

もしも、彼が藤江と同じ立場ならどう感じるのか想像させてみたのだ。

「付き合ってたヨーコさんに拒絶……。し、死にたい……」

割と小五郎も想像力豊かで涙目になりながら「死にたくなる」と口走る。

そうそう。死にたくなっちゃうよね……。

「藤江さんもそう思ったかもしれないですね」

「ま、待てよ。じゃあ、この男はまさか……。じ、自殺を……。ヨーコさんの殺害に見せかけて……！ そうだ！ この事件は自殺だあ！」

小五郎はこの事件の真相である自殺にまで考えが及んでくれた。

そう、犯人は被害者である藤江自身だ。悲しみに暮れた彼がヨーコを恨みながら自殺したのである。

しかし、犯人の動機がわかったとて真相の究明にはまだ半分しか届いてない。

「毛利くん、藤江さんは背中を刺されているのだよ。自殺でそれは無理ではないのかね？」

「うっ、そ、それは……」

「そうですね〜。床に包丁を立てて、背中から刺さろうにも、この包丁は立ってくれませんか」

自殺であることは間違いない。あとは、背中に包丁が刺さるようにした方法突き止めるだけ。

小五郎に何とか藤江の施したトリックを暴いてもらわなきゃ。

「アリスさんの言うとおりのだ。やはり誰かに刺されたに違いない。例えば、この部屋の合鍵を持っていた——」

「ちよつと、私はさつきも言ったけど本当に殺人なんて」

「あれ？ 見てください。先生。この凹みって、包丁の柄とぴったりにじゃないですか？ それに暑くなった部屋に加えて、この不自然に濡れている遺体……、うーん。包丁を固定することが出来そうなの、何かがありそうなんです……」

ゆう子が再び疑われ始めたとき、あたしは床の不自然な凹みについて小五郎に尋ねてみた。

包丁の柄にぴったりの凹みと、暑すぎるくらいの室温……そして、なぜか濡れている死体……これは一本の線に繋がるのだ。

これこそが藤江が自らの背中を自分で刺したトリックの形跡なのだから。

「包丁の柄とぴったりの凹み……異様にエアコンで暑く調節された部屋……それに遺体が濡れている……包丁を固定——。いや、さて固定？ そ、そうか。わかったぞ！ 氷を使ったんだ！ 氷を！」

あー、良かった〜。ほとんど答えみたいなヒントまで出してやつと小五郎はトリックを看破してくれた。

こりゃあ、コナン君の体なら眠らせて推理ショーをするわ〜。

絶対に子供の話だったらこの人聞いてくれないし……。

あたしの場合小五郎の口調を真似たり、体も大きくなって目立つし助手という立場だから、急に居なくなるのは不自然になっちゃうのよね。

だから、こうして小五郎を答えまで導くスタイルにしなきゃいけない……。

「な、なるほど〜。氷を使って包丁を固定して、あの椅子から背中から飛び込んで他殺に見せかけて自殺した……ヨーコさんの髪の毛はブラシか何かから手に入れて握っていたのですね」

「そのとおりだ！ アリス！ この事件はヨーコさんを犯人に仕立てあげようとした自殺で決まりだあ！」

あたしが如何にも “小五郎の推理を聞いて気付きました” という態度で真相を全部話すと、彼はそれを肯定して、この事件は自殺だと断定した。

あたしの最初の殺人事件は犯人が自作自演した自殺という結論で幕を閉じる。

自殺するまでは、わからなくもないけど——ヨーコを殺人犯に仕立てあげようとするまで恨むのはちよつと理解できないかな……。

「毛利くん。全て君の推理通りだったよ。見直したぞ！ 名探偵！」

「は〜はっはっはっ！ 私にかかれば、この程度の事件！」

目暮警部は事件を見事に解決した小五郎を讃えており、彼も上機嫌そうに笑っていた。

どうやら、藤江の家からヨーコと別れた彼の後悔と苦悩を綴った日記が発見されたようだ……。

「お疲れ様、アリスちゃん」

「うん……。疲れちった。推理って難しいね」

「いやいや、すごいよ。あんた、あの新一君より凄い探偵になれるんじゃない？」

「うーん。それはどーかな？ 新一にはまだ敵わないから」

真相を突き止めるのはもちろんだけど、思った以上に小五郎にトリックや動機に気付いてもらうことが大変だった。

もつと、一人歩きせずにも彼にも少しづつこつちよりの立場になってもらうように気遣いをしなければならぬかもしれない。

そんなことを考えていると、ヨーコがあたしのところに近付いてきた。

どうしたんだろう……。まだ、何か不安なことでも……？

「あ、あの！ アリスさん！ 驚きました。まさか、私よりも年下の子があんなに堂々と毛利さんの助手をするなんて。推理してる姿も格好良かったです！」

彼女は何やら目を輝かせながら、手を握りしめて興奮気味にあたしのことを褒めてくれた。

か、格好良かったかな……。？ あたふたしてたと思うけど……。

「いやー、そ、そんなことないですよ。それより大丈夫ですか？ 藤江さんのこと……」

「正直言つて辛いです。でも、頑張ります。アイドルは私の夢だから」

ヨーコは今回のことは辛いけど、それに負けないように頑張ると宣言した。

うん。この人なら大丈夫そうね……。あたしはそう確信した。

だって、彼女は強い人だから……。

「応援しています！ ヨーコさんなら大丈夫です。きつと乗り越えられますよ！」

「ありがとう。あ、あの。変なお願いかもしれないのですが——迷惑でなければアリスさんと連絡先が交換出来たらな、と思うのですが……。事件はシヨックでしたが、あなたの活躍を見て勇気が出たので……。お、お友達になりたくて……」

あたしが応援すると言うと、ヨーコは恥ずかしそうに目を逸しながら連絡先を交換したいとか口にする。

いやいや、アイドルがあたしの連絡先を欲しがると……しかも友達になりたいなんて……。信じられないんだけど……。

「えっ？ ええーっ!? あ、あたしなんかと？ それは光栄です。――

ーこ、これ。あたしの居候先の番号です。何かあれば、何なりと仰ってください。助けになりますから」

「また、今度連絡しますね♡」

あたしはメモ用紙に博士の家の電話番号を書いて彼女に渡すと、ヨーコは満面の笑みを見せながら連絡すると言つてマネージャーの山岸のところに向かった。

なんか、びつくりね。こんなあたしの推理なんかで人を元気に出来たなんて……。

「ちよつとく、アリスったら。アイドルを誑かしてんの？」

「ふえっ？ あはは、何を言ってるのかな？ 園子ちゃん」

その様子を見ていた園子はニヤニヤ笑いながらあたしの腕を肘でつついてきた。

誑かしてないから……。多分、高校生探偵という人種が珍しいだけだから……。

「でも、ヨーコさんと連絡取りあうなんて、お父さんが知ったらきつと——」

「嫉妬されちゃうわね。ナイショにしとこーつと」

そうそう。沖野ヨーコと友達になったなんて小五郎にバレたら絶対に面倒くさい態度になりそうだ。

これは黙っておかなきゃ……。いつかバレるかもしれないけど……。

「新一も事件にアリスちゃんが関わってこんなに早く解決したって聞いたら嫉妬しちゃうと思うな。あーあ、あいつどこで何してるんだろ……？ ダメだ……。考えると気分が……」

「蘭ちゃん……」

「これは重症ね。まったく、嫁を泣かすなつての」

蘭は新一の話を口にする、寂しげな表情をして泣きそうになっていた。

あれから音信不通なんだもんな。そりゃキツイよね……。

よし、博士が今作っているアレを使ってみるか……。

「ねえ、博士。あれ使っていいかな？」

「ん？ ああ、変声機じゃな。制服に合わせたネクタイバージョンと、私服用のチョーカーバージョンを作ってみたんじゃないが」

「わあ、ありがとう。じゃ、早速電話してくる」

博士の家に戻ったあたしは彼が発明した変声機を使って蘭に電話することにした。

とりあえず、無事だと言うことを伝えないと彼女が壊れてしまう――

「蘭、俺だ。わかるか？」

『し、新一？』

「ごめんな。心配かけちゃった」

蘭はあたしの声を聞いて新一だと思ってくれた。やはり、この変声機は良く出来ている。

彼女の声は明るくなっていった。安心したのだろう……。

『もう、どこにいるのよ。そうそう、新一の親戚のアリスちゃんが――』

「あ、ああ。あいつが来てるのは知ってる。仲良くしてやってくれ」

『うん。とってもいい子だね』

蘭はあたしのことをいい子だっと思ってくれてるんだ。ありがたい。

これからも仲良くしてほしい……。

「そうか。あとな、ちよつと厄介な事件を頼まれちゃって。すぐには戻れなくなっちゃったんだ。だから……寂しい思いをさせてしまうけど……待ってて欲しい」

『新一？ 何かいつもと感じが違うね』

「えっ？ そ、そうかあ？ とにかく待っててくれ！ 事件を解決して帰ってくるからよ」

やつべー、何かわからないけど蘭はあたしの演じてる新一に違和感があるみたいだ。

難しいよ、新一の演技。そうだよね。もっと、こうキザっぽくしなきゃいけないんだっけ？

次はもっと上手く新一を演じなくては――。

ここから、あたしと小五郎のコンビでいくつもの事件を解決してい

くこととなる。

小五郎はあたしのヒントを得て謎を解きまくり、少しずつ名探偵として認知されていった。

おちやらけて頼りなさそうに見えるのに、いつの間にか事件をズバリ解決することから、「ズバリの小五郎」と呼ばれるようになっていく。

ちよつと待って！ 「眠りの小五郎」と比べてすつごく格好悪いんだけど。なんか、占い師みたいな二つ名なんだけど……。

そして、あたしもまた名探偵の助手として、女子高生探偵としてそれなりに有名になってしまっていた――。

コーヒーショップ殺人事件

「あーあ、完全に出来上がっちゃってる……」

「ごめんね。アリスちゃん。今日はお父さん仕事は無理だと思うから諦めて」

今日もいつものように毛利探偵事務所に行くと小五郎は酔い潰れて項垂れていた。

昼間からこの人は——これは、今日は仕事なんか無理ね……。

「そりやそうよね。わかったく。あれ？ 今日随分とオシャレじゃない。誰かとデートするみたい」

「えっ？ そ、そうなの。ちよつと新一と出かけに……」

「へえ、そうなんだ。だから、そんなに嬉しそうなのね。じゃあデート頑張つてね」

「うん、また学校で！」

蘭はいつもよりもお洒落に気を遣っていて楽しそうな顔をして新一とデートに行くと言っていたので、あたしは邪魔しちやいけないと思つて事務所から退散した。

そっかー。デートかあ。青春つて感じよね。

「……蘭ちゃんつたら。そんなに楽しみなんだ。新一とのデート……。あれ？ 新一とデート？ つて、新一つてあたしじゃん！」

あたしはようやく自分の間抜けさに気が付いた。

ちよつと待つてね。蘭は誰と会うんだろう。あたしに嘘までついて……。

ダメだ……。あたしの中の新一が様子を見に行けと言つてるような気がする……。

「おーい。蘭ちゃん」

「あれ？ アリスちゃん。どうしたの？」

あたしが事務所に引き返すと蘭はちよつと出かけるところだった。

どうやつて聞き出そうかな……。まっ、適当でいいか。

「いやー。新一がこの前さ。博士に電話してたの思い出して。結構長

「いこと帰らないみたいなことや言ったから、気になっちゃってさ」「えつ、そ、そうなんだ。ごめんささい。嘘は付きたくなかったんだけど、ちよつとプライベートな話で……。でも、よく考えたらアリスちゃんのこととも紹介すべきだと思ったから、一緒に会ってくれる？」

あたしが彼女に新一と会うのではないということ指摘すると、蘭はバツの悪そうな顔をしたが、あたしを誰かに紹介したいと言いつた。

「あ、あたしを紹介？ 誰に？」

「私のもつても大切な人だよ」

「大切な人ってどんな人なのよ」

「それは話すと長くなるんだけど……。あつ、財布持ってくるの忘れてた。ごめん。アリスちゃん、その喫茶店の中で待ってて！」

「う、うん。気を付けてね」

その大事な人とやらと、この喫茶店で待ち合わせをしているらしく、あたしは蘭に言われるがままにお店の中で待つことにする。

一体どんな人だろう……。推理してみましよう。

「いらつしやいませ。お席にご案内します」

「……………コーヒーツ！」

「えつ？」

「コーヒーっていったらコーヒーよ！ 早く持ってきてなさい！」

「は、はい」

中に入ってきたのはサングラスをした怖そうな女性。

うわあ、店員のいうことを無視して腰掛けたくせに、コーヒーの注文もなんか怒鳴ってるよ。この人ではないことを祈ろう……。

「す、すみません。書き上げなきゃいけない論文があるので、静かな席がいいのですが」

「かしこまりました。こちらにどうぞ」

「カフェオレをひとつ頼もうかな」

次に入ってきたのは大人しそうな男性。なんか、論文を書くために

この喫茶店に来たらしい。

待ち合わせって雰囲気じゃないわね……。

「ちよつと人と待ち合わせをしているの。後で相席になっても構わないかしら」

「は、はい。大丈夫ですよ」

「じゃあ、ホットコーヒーをひとつ」

そして、びっくりするくらいの美人が入ってきた。

あれ？ あの封筒に妃法律事務所って書いてある……？ あっ！

あの人……妃英里さんだ。間違いない。

蘭のお母さんだよ。敏腕弁護士なの。じゃあ、あたしをお母さんに紹介しようとしてくれたのね……。なんか嬉しい……。

ちなみに今のは新一の記憶じゃなくてあたしの漫画の知識だ。新一は蘭のお母さんの旧姓とか顔を忘れてたみたいね……。

「いや〜っ、参ったぜ。マスター。ラグビーの試合で突き指しちまつてよお。おかげで結婚指輪がはめられねえぜ」

「それは不運でしたね……」

そんなことを考えていると、体格の良いおじさんが豪快に笑いながら、包帯を巻いた薬指を見せていた。

ふーん。ラグビーって激しいスポーツだもんね〜。

「ちよつと、トイレはどこ？」

「ああ、トイレでしたら、あの奥です。でも、当店のトイレは男女共用でして……」

「知ってるわ！」

マスターにサングラスの女性がトイレの場所を尋ねていた。あれ？ なんて場所知らないのに男女共用は知っているのかしら……。

「おう、女の子と待ち合わせなんだが、まだ来てないみたいだな」

その後、長髪のチャラそうな男性が女の子と待ち合わせとか言っただけで案内されていた。

うわう。電話で女の子とかモノにしてしまえばこっちのモンとか言っているし、引くわう。

その男性が電話している間に、論文の男、英里、突き指の男の順番で入れ替わるようにトイレに行っていた。

そういえば、怒鳴ってたサンングラスの女の人はまだトイレから出ていないわね……。

彼女のことを気にしていたら、電話を終えたチャラ男がトイレの方に向かっていく。

すると、間もなくしてその男が絶叫した――。

「うわああああッ！」

「どうした!」

「何があったの!?!」

あたしと突き指をした男は同時にトイレへと走った。

こ、これは血液?　なんで、個室トイレの中から血が出てるのよ。ま、まさか……。

「あ、開かないわ。鍵はかかってなさそうなんだけど……」

トイレの個室のドアを開けようとしても、何かがつつかえていて、開きそうにない。

中で一体何が……。こうなったら――。

あたしはドアをよじ登って上からトイレの個室の中を見た。すると凄惨な光景が目に入ってしまう。

「うっ……!」

サンングラスの女性が心臓をナイフで一突きされて血まみれで倒れていた。

じ、事件みたいね……。とりあえず警察を呼びましょう。

「目暮警部……。死因はわかりましたか?　首を紐か何かで絞められた跡がありましたか……」

被害者はフリーターの姫野弥生。ナイフでの外傷とともに、首が絞められた跡もあった。

現場に駆けつけてきた目暮警部とはもう顔馴染みになっている。

短い間に訳がわからないくらい事件に巻き込まれているから――。

「アリスくん。通報ご苦労だった。いつも捜査に協力してもらってますまないね。毛利くんよりも鋭いことがあるから助かっているよ」

「いえいえ、先生の教えの賜物ですから♪ それより――」

今や警部にはそれなりに探偵の助手として信頼されている。

99パーセントはあたしが事件を解いてるんだから、推理力に定評があつて然るべきね。

「ああ、死因はナイフで心臓を刺されたことによる失血死だが、その前に首を絞められて気絶させられたらしい」

「ふむふむ。なるほど」

「トイレの窓は開いていたし、外は人気がない路地。それに、凶器のナイフとともに荷物が荒らされていて、ナイフも空だった。遺体もトイレの入口を塞いでいた事から外部の犯行と見て間違いないだろう」

警部は外部の犯行だと決めてかかっているみたいだ。

この個室トイレの入口が塞がれているので、当たり前だろうけども……。

「それはどうかしら？ あたしは内部の犯行だと予測してますよ」

「ど、どういふことかね？ アリスくん」

「あの窓、綺麗すぎます。外部の犯行なら、あり得ないくらいに」

「清掃が行き届いているだけではないのかね？」

最初に違和感を感じたのは掃除し終えたばかりのようなピカピカの窓。

ナイフで人を刺した犯人がもしも、外に逃げたのならこれは変だ。

あたしは違和感の説明をしようとした。

「ううん。そうじゃないの。窓が綺麗なのが変なのは――」

「これだけの出血……、体に返り血を浴びているはず。でも、逃走に使った窓にはその痕跡はない。ナイフをここに放置するような犯人が痕跡を拭き取ったとは考えにくい。つまり、ナイフがここに放置されていたのは持ち帰れなかったからよ。だから内部の犯行だと考える方が自然。そう言いたいのでしょうか？ お嬢さん」

「は、はい。そのとおりです」

あたしが説明しようとしたことを、全部英里に言われてしまった。もう。格好良く説明しようと思ってたのに。

それにしても、弁護士をしているだけあって、洞察力はかなりのものね。

「き、妃弁護士！ どうしてあなたがここに？」

「偶然、この店に居たんです」

「警部さんは、こちらの女性と顔見知りなんですか？」

「何を言ってるんだね。彼女は君の先生の奥さんだよ」

あたしは知っていたが警部に英里のことを質問した。

すると、当然のように小五郎の妻だと返事が帰ってくる。

「ええーっ！ 先生の奥様?! じゃあ、蘭ちゃんのお母様なんですか？」

「あら、あなたうちの娘の友達？ あと聞き間違いでなかったら、あの人のことを先生と言っていなかった？」

あたしはオーバーなりアクションをとってみると、彼女は小五郎を先生と呼んでいることに疑問を持ったみたいだ。

やっぱり、奥さんなら気になるよね……。

「あ、はい。あたし、毛利探偵の助手を務めています。藤峰愛梨寿です。蘭ちゃんとはクラスメイトです」

「藤峰……? それにその顔……有希ちゃんにそっくり……」

「親戚なんですよ。工藤有希子さんとは」

あたしは英里に自己紹介をする。小五郎の助手をしている蘭のクラスメイトで有希子の親戚だと。

それにしても、英里は見た目が若いなあ。小五郎と同級生みたいだけ。

「親戚? ふーん。一つ忠告しておくけど、あの人の助手なんて趣味の悪いことは辞めたほうが良いわよ。どうせ、ろくでもないことしか教えてもらってないんでしょ?」

「いえいえ。とおーっても勉強になってますよ。先生の教えを活かして、この事件も解決しちゃいますね♡」

あたしは英里にウインクして事件を解決してみせると意気込んだ。

蘭と英里の時間を短くしたくない。早く終わらせないと。

「アリスくんも内部の犯行だと言っていたが、どうやってここから抜け出したのかわかるのかね？ 死体でドアが塞がれていて、ずらした跡もないし、隣のトイレには窓が無いんだよ」

「上から出るって方法がありますよ。体格は限られますが。試してみますか？ ほらっ、こうやって」

「ほ、本当だ。脱出出来る」

あたしはトイレの個室の壁と天井の隙間を通って見せて、入口が塞がれていても外に出られることを実演してみせた。

「で、ここからが大事なんですけど、被害者がトイレに行ったあとにこちらに向かった人は4人います。それは——」

トイレに行ったのは論文の男性——皇祐一、妃英里、突き指のおじさん——殿山十三、チャラ男——若王子士郎の四人だ。

皇は論文を書きに来ており、英里は当然娘の蘭に会いに来ていて、殿山は毎日マスターとおしゃべりしているらしく、若王子は女の子と待ち合わせ。

つまり容疑者は四人なんだけど——。

「まあ、蘭ちゃんに会いに来た英里さんが犯人なわけないですけどね」
「あら、甘いよね。いかなる可能性も想定しないと真実には辿り着けないのではなくて？」

「ふふっ、なるほど。さすがは名探偵の奥様。良いことを仰る」
「あのね……」

あたしが英里を犯人から除外するようなことを口にするると彼女はそれを良しとしなかった。

なんて、フェアな人なんだろう。いい弁護士なんだろうな。

小五郎の奥さんってところを強調すると、嫌な顔をするところがちよつと可愛い。

「大丈夫です。毛利小五郎の名にかけて、助手であるあたしが真実を突き止めます！」

「毛利小五郎の名にかけて、ね……。頼りないわ」

「ありや、手厳しい」

あたしたちは捜査を進めた。

トイレの隙間から移動できそうなのは皇と英里としかいなかった。若王子はぎりぎり無理で、殿山は大柄な体型からひと目で脱出不可能だということがわかったから。

つまり皇が犯人って感じになりそうよね……。うーん。何か引つかかるんだけどなあ。

「警部！ あちらのテーブルからこのような紐が！」

「何っ！ 被害者は紐で首を絞められていた。だとしたら犯人は——!?」

さらに皇の席の近くで紐が発見される。被害者の姫野は首を紐で絞められていたので、ますます皇の犯行の可能性が高くなった。

「ち、違う！ 犯人は僕じゃない！ それは本とノートを縛っていた紐です。信じてください！」

状況的に怪しいのは皇……。あそこから出ることが出来て、なおかつ紐まで持っているから。

英里が犯人ではないならそれでいいはずなのよ。でもなあ……。こんなに単純な話なのかしら……。

「あなた、顔に何か付いてるわよ」
「へっ？ これは血……。かしら？」

英里の言葉に促されて、あたしが鏡で顔を確認すると右頬に僅かに血がついていた。

なんで、こんなところに血が……。？ そういえば、さつき痒くて頬を掻いたけど——。

「あっ!? 手にも血が付着してる。もしかして……」
そう思っ自分の両手を確認すると手のひらにも血痕が付着して

いる。死体にも触れてないのにどこで血がついたのかしら？
「まさか——」

あたしはトイレの壁の上部を確認する——。
「やっぱり……。だとすると……。——あ、あの。凶器のナイフを見

せてもらえませんか？」
思ったとおりね。ならば、凶器のナイフにはその痕跡が残っている

かも。あたしはナイフを見せてほしいと鑑識の人をお願いした。

「ナイフがどうかしたの？」

「握り柄の部分まで血がついていて、細かく途切れています。ということは——逆だったということ？　被害者はトイレで刺されたわけじゃないんだ」

見せてもらったナイフには握っているところにも血が付着していた。普通に刺して抜いたのならこれはあり得ない。

それにその血痕は途切れ途切れになっている。このことからあたしは被害者が刺された場所は個室内ではないと推理した。

「トイレで刺されていない？　こんなに血まみれになっているのよ。個室の中は」

「ええ。なので、あたしたちはまんまと騙されたということです。自分だけは絶対に疑われないように準備した犯人によって。あとは、犯人があれをどこに持っているかだけど……」

犯人はあるトリックを使ってあたかもトイレの個室で姫野が刺されて亡くなったように見せかけた。

問題はその証拠となるモノがどこにあるか、だ。

「あれ？　英里さんったら、結婚指輪はされてるんですね〜」

それを考えているとき、ふと英里の左手の薬指の結婚指輪が目に入った。

「何を急に？　べ、別にうざったい男を寄せ付けなくするための虫よけよ。他意はないわ。勘違いしないで」

「あはは、英里さんは美人ですからモテるんでしょうね。あたしは別に、気持ちはまだ先生にあるって指摘したわけじゃないですよ」

英里の結婚指輪のおかげで謎は全て解けた——犯人はあの人に間違いないわ。

真実を早くみんなに教えなきや。

「じゃあ、どうして——」

「皇祐一、これから署に連行する！」

「やばっ！　待ってください、目暮警部！　皇さんは犯人じゃありません！　真犯人がわかりました！」

あたしはお腹から大きな声を出して犯人がわかったと警部に伝える。

さてさて、ここから推理ショーといきますか。犯人さん。

「アリスくん!? それは本当かね?」

「はい。それでは順を追ってわかりやすく説明しますね。犯人は姫野さんをトイレの個室で殺害した後に、上の隙間から出てきたとあたしたちは考えていましたよね?」

「ああ、内部の犯行なら逃げ道はそこしかないからな。トイレに行つた人物でそれが可能なのが、皇さんと妃さんの二人しかいなかった」
そう、入口が塞がれた個室から出ることが出来る人間が犯人だという前提だと容疑者は二人に絞られてしまっていた。

「しかし、実際は逆なんですよ。犯人はトイレの外で首を絞めて姫野さんを刺したんです。そして、その後トイレの中に彼女を上の際間から放り込んだ。これなら、トイレの個室から脱出する必要がなくなります。その証拠にトイレの壁の上に血痕が残っていました」

犯人が姫野を刺したのはトイレの外だ。これなら、四人全員に犯行が可能となる。

「何!? 血痕がそんなところに? しかしだな。トイレの外で刺したなら血液が外に見当たらないのは変なのではないかね?」

「簡単なトリックです。犯人は紐でナイフの柄を縛っていたのですよ。ナイフを抜いたのは個室に姫野さんを放り込んだ後——。紐を外から引っ張ったときです」

「なるほどね。血が吹き出すのはナイフを抜いた後だから、トイレの外はキレイなままというわけね」

「そのとおりです。英里さん♪」

犯人は紐付きのナイフを時間差で抜いた。姫野を個室に入れた後で。

こうすれば、あたかもトイレの中で彼女が刺されたように見えるから。

「だが、一体誰が犯人なんだ? このトリックを使えば誰でも犯行は可能だが……」

「そもそも、こんなトリックを使う理由は個室から出られないことを主張して、容疑者から逃れることが目的です。さらに姫野さんはトイレの場所をわざわざマスターに尋ねていました。これは犯人にこれからトイレに行くというサインでしょう。とすると、それまでにこの店に居た人物が犯人となります。……つまり、犯人は——殿山十三さん。あなたですね」

あたしが言う条件に当てはまるのは殿山しかない。

彼の大柄な体は見るからに狭い隙間から逃げるのは無理だと思えるし、若王子が現れたのは姫野がトイレに向かった後だ。

「ば、バカを言うな！ 何の証拠も無しにそんなことを！」

「藤峰さん。彼の言うとおりよ。これじゃ証拠不十分。私が弁護すれば100パーセント無罪に出来るわ」

「あれま。証拠不十分ですか」

しかし、英里は証拠が弱いとして彼を弁護する。

なるほど、この人はやはり有能な弁護士ね。

「アリスくん。あるんだろうね？ 他に証拠が……」

「えへへ。大丈夫ですって、警部さん。ちゃんとして、証拠はありますか
ら♡別居中でも旦那さんラブな英里さんの結婚指輪のおかげで気が付きました」

「ちよつと、私は別に！」

「まあまあ、後で話は聞きますから。殿山さん。確か、マスターさんと大声で話してましたよね。ラグビーで突き指をして結婚指輪がはめられない、と。あの時は左手の薬指に包帯が巻かれていたとあたしは記憶してるのですが……」

あたしが殿山の結婚指輪について言及すると、彼は咄嗟に左手を隠そうとした。

あー、今ごろ自分のミスに気がついたんだ。この人は……。

「中指に包帯を巻いているぞ。どういうことだ？」

「首を絞めたのも、ナイフを縛ったのもその包帯。だから、あなたは犯行の後で慌てて巻き直して指を間違えちゃった。おじさん、ちよつと雑すぎるわよ。被害者の姫野さんの血が付着した包帯をずーっと持

ち歩いているんだから。警部さん、あの包帯こそ彼の犯行を指し示す証拠です」

「殿山十三……、殺人の容疑で逮捕する！」

殿山はお粗末にも証拠をずっと身につけていた。

その上、包帯を巻き間違えるという痛恨のミスもやらかしている。悔しいのはあたしが最初にそれに気付かなかったこと。

あーあ、それにさえ気付いていればもつと早く真相に辿り着いていたのに——まだまだ修行不足ね……。

「お手柄だよ。アリスくん。もう既に毛利くんを超えたんじゃないのかね？」

「うふふ、そんなことはないですよ。先生ならもつとスムーズに解決していたと思います」

目暮警部は事件が解決したので、嬉しそうにあたしの背中を叩きながらお世辞を言ってくる。

色々と反省点はあるけど、無事に解決したからよかった。

「大した推理力だったわ。あの人の助手なのが信じられないくらい」

「あはは、ありがとうございます。——あつ！ 蘭ちゃーくん！ こつちこつち！」

英里にも褒められてあたしの機嫌が良くなったとき、蘭がこの店に入ってきた。

「アリスちゃん！ そ、それにお母さんも！ 私、アリスちゃんにお母さんのこと言ったっけ？」

「一緒に事件に巻き込まれちゃったのよ。ほら、またそんな格好して短いスカートはお腹が冷えるから止しなさいって言ってるでしょ」

「もう、いつまでも子供扱いしないでよ。それより、事件に巻き込まれて大丈夫だったの？」

「ええ、あなたのお友達が全部解決したわ。面白い子ね」

英里は母親らしい一面を見せつつ、あたしが事件を解決したことを蘭に伝えた。

あくまでも蘭の友達として接するつもりか……。蘭は家に彼女が

戻ってくるのをずっと待ちわびてるみたいだけど。

「アリスちゃん、また事件を解決したんだ。だんだん、新一みたいになってきたね」

「えへへ、たまたまだって」

「お母さん、知ってるかもしれないけどアリスちゃんは——」

「へっぽこ探偵の助手なんですよ。信じられないけど」

あらら、やっぱり世間で『ズバリの小五郎』として認知されてきても、英里的にはダメダメなイメージが強いか……。

「もう。お父さんとそろそろ仲直りしてよ。10年も経ったんだよ」

「嫌よ、あんなグズで不潔で女たらしの飲んだくれ！ 大嫌い！」

「でも、お父さんも最近は格好良くなったんだから。ほら、見てよ。この前、テレビ局で事件を解決したVTR」

小五郎の悪口を言う英里に、ちょうど喫茶店のテレビがこの前あたしたちがテレビ出演したときに解決した事件の放送をしていた。

あはっ、あたしも映ってる。

「あら、本当に真面目に事件に取り組んでいるのね……」

あたしと小五郎が推理を展開して犯人を追い詰めているシーンが映っており、英里は少しだけ感心していた。

しかし、そのシーンは移り変わり——。

『イズミちゃん。今夜お店行ってもいいかな？ 女房？ いいの、どうせ別居中！ 今夜は熱い夜を過ごそうね』

「……あ、あれ？ ち、違うの、そのこれは……」

小五郎が盗聴などの注意喚起を促すために電話を飲み屋にかけるシーンが映し出される。だらしない顔だなあ……。

実際はこのあと、こんな会話も盗み聞きされているから注意しろ……、に続くんだけど……。

編集でなぜかカットされているみたいね。

「どうやら、まだまだ帰るわけには——」

『もう。先生ったら。奥さんが居なくて寂しいからって。あんなこと言ったらダメですよ』

『ああ、確かにお前の言うとおりでな。夜は特に女房が居ないことを寂しく思うときもある』

あつ、このシーンは使うんだ。あたしがもしも、小五郎の奥さんである英里が見ていたときのために、スタジオで見えていたヨーコさんに寂しいアピールをしたほうがいいですよって小声で伝えただけ。「えっ?」

「ほ、ほら! お父さんだってお母さんが居なくて寂しいから羽目を外そうとしたりしてるのよ」

「あ、あの人が私を……?」

英里はやはり心の底では小五郎に惚れてるらしく、彼が寂しがっていると聞くと頬を赤らめる。

「英里さんみたいな綺麗な奥さんだと未練しかないのは間違いないですよ。先生も変なプライドが邪魔して頭を下げられないのかと」

「そ、そうかしら?」

「アリスちゃんの言うとおりでよ。一回戻って来てみてよ。お母さん!」

「う、うーん。じゃあ、少しだけよ」

「やった〜!」

あたしと蘭がダブルで説得して英里は少しだけ事務所に顔を出すと云ってくれた。

自分も親や兄弟がいない寂しさがわかるから、蘭がお母さんに戻ってきてほしいという気持ちが良く分かる。

やっぱり蘭には幸せになってほしいよ……。

でも、あたしと蘭は失念していた。小五郎が昼間つから酒をアホみたいに飲んで泥酔していることを——。もう、小五郎のバカ……。

外交官殺人事件 事件編

「アリスくん。君のご両親が来たぞ」

「えーっ、あたしの両親？ やーね。博士も知ってるでしょ？ あたしは——」

「転生したんじゃから、両親はおらんのは知つとる。じゃから、アリスくんの体の方の両親じゃよ。一応、簡単な事情は説明したんじゃが……」

「ま、まさか。帰ってきたの？ 優作さんと有希子さんが……」

ある日の夜、阿笠博士の家でくつろいでいたら新一の両親がやってきたと博士が言ってきた。

やだ、あたしスツピンじゃない。完全に部屋着だし……。人前に出られるようになるまで……。どんなに急いでも30分以上かかる。

そんなことを思っていたら、優作と有希子はあたしの目の前に現れた。

「驚いたな。ほら、見てご覧よ。昔の君にそっくりだ」

「まあ、かわいい♡新ちゃん本当に女の子になっちゃったの？」

「え、えへへ……。ど、どうも」

これがあたしと工藤夫妻の最初の出会いである。

新一の記憶があるから初めましてという気がしないが、あたしの両親っていうのもおかしいし、どういう関係なのか考えるのが難しい。

とりあえず一通りの事情を話して、優作からいくつか質問されてそれに答えると彼は納得したように頷いた——。

「ごめんなさい！ あの、勝手に服を持ち出したり、そのう高校に入り直したりしてしまって！ あ、あたしは……。その……」

身の上話に一段落ついたあたしは勝手に工藤家の持ち物やお金を使ったことを謝る。

いや、そうしなくては新一の体も無事ではなかったので叱られるとは思わなかったが、ここまで何の連絡もしなかったこと自体は謝らなくてはならないだろう。

「うーむ。確かに家族しか知らないことも知っているし、以前私が教

えた推理のコツもすっかり覚えてるみたいだ。事實は小説より奇なりというが、自分の小説よりも奇妙なことが起こるとは思わなかったよ」

「えっと、し、信じてくれるんですか？ あ、あたしの体が新一くんのもノだつてことを」

優作は冷静にあたしのことを分析して事實を受け止める。

さすがは、漫画で一番の推理力だと言われる聡明な彼だ。博士よりも簡単にこの荒唐無稽を事實だと認識してくれた。

「信じるさ。記憶もそうだけど、何よりその見た目——何せ世界一美しい私の妻に瓜二つなんだから」

「やだー、優作ったら。世界一美しいだなんて」

「……………そ、そうですか。あはは、仲が良いですね」

優作と有希子は記憶通り仲が良かった。急に惚気を出すんだもん。

でも、その理屈でいけばあたしも世界一美しいってこと？ んもう、照れちゃう…………。

「でも、今は新ちゃんであつて新ちゃんじゃないのよね」

「そうです。あたしにはあたしの人格がありますから。そういう意味では新一くんは今はこの世には——す、すみません、あたしのせいで…………」

あたしには愛梨寿という人格がある。それは新一とは全く違う人生を歩んだ固有の人格だ。

つまり、正確に言えば新一はこの世にはいない。あたしの魂が彼の体に憑依したから——。

「いいのよ。あなたが悪いんじゃないんだから」

「何とか出来る限りのことはします。元の体に戻れば、新一くん的人格も戻ってくるかもしれません。なのであたしは黒の組織をとっ捕まえて、薬の作り方を手に入れます」

「危険だよ。女の子には特に…………。それに新一の人格が戻るということとは君の人格が…………」

有希子も優作もあたしのことを責めなかった。それどころかこちらの心配をする。

二人は愛する息子が居なくなつて堪らない気持ちのはずなのに――
「はい。覚悟は出来ています。でも、この体は工藤新一という男の子のモノです。彼を待っている方々も多くいらつしやいます。ならば、あたしはどんなことをしたつて元に戻る努力をすべきだと思うのです」

ここは本来あたしが居ていい世界じゃない。だから新一に早く体は返すべきだとあたしは思っている。

黒の組織を見つけだすために推理とかを頑張っているのはその義務感が原動力だ。

「健気ね。まるで若い頃の私を見てみたい」

「有希子さんは今でもお若いじゃないですか」

「そうなのよ。まだまだ二十代で通せると思うわ。二人で並んだら姉妹に見られるかもしれないわね」

「じゃあその時はお姉さんって呼ばせてください」

有希子はさすがは元大女優だけあつて自分のビジュアル自信が相当あるみたいだ。

実際、高校生の息子がいるとは思えないほど若々しく、お世辞じゃなくて二十代と言われても納得してしまう。

「新ちゃんじゃ絶対にそんなこと言つてくれないもん。私たちに娘が居たらこんな感じになつていたのかしら？」

「そうだね。もしかしたら、彼女のように愛嬌のある美人さんになつていたかもね。――しかし、やはりオススメ出来ないな。新一の父親としても君が危険を冒してまで恐ろしい組織に立ち向かうことは」

「優作さんの仰ることはわかります。この体が新一さんのモノだからこそ、危険には晒せないということですよね？」

優作はあたしが危険な組織に立ち向かうことに難色を示した。

確かに新一の体を持つあたしが死んじやつたりしたら目も当てられないもんね……。

「そのとおりだ。君さえ良ければ私たちと共に海外に住まないか？ インターポールに知り合いが居るから、彼らにその組織の連中は探ら

せるとして、君は自らの安全を確保すべきだ」

「——安全ですか……。そうですね。それが一番なのかもしれませんが。でも、あたしは自分の手で決着をつけたい。論理的な理由はありませんが、もしも工藤新一なら自分の事件を他人に任せて逃げたりしないと思うんです。だから、あたしは日本を離れるわけにはいきません！」

驚いたことに優作はあたしに海外で一緒に暮らそうと提案してくれた。

でも、あたしは引き下がれない。何故だか分からないけど……。この体に秘められている新一の魂が逃げるなど言っている気がするんだ。

「新ちゃん……。なら、か」

「ふーむ。確かにあの子ならそう言っただけをこねるだろうね。父さんたちは手を出すなって……。まあいいか。しばらくは君の好きにしないさい。危なくなったら、すぐに海外に連れて行くからね」

「あ、ありがとうございます！」

優作はあたしに自由にしていいと言ってくれた。新一ならきつと自分でこの状況を打破しようとするだろうと理解した上で。

「……………礼を言うのはこちらの方だよ。君は何食わぬ顔をして生きていく事も出来たはずだ。それなのに自らの存在を捨てようとしてまで息子の体を元に戻そうと頑張っている」

「そうね。新ちゃんのために危険を承知で悪い人たちに立ち向かってるんだもん。母親として感謝させてね。アリスちゃん」

「いえ、当然のことをしているだけですから……」

二人はあたしが黒の組織に立ち向かおうとしていることに感謝するようなことを言っているけど、やっぱり後ろめたい気持ちしかない。

なんで、神様はあたしの魂を新一の体に入れたりしたんだろう？
こないない両親の元に子どもが帰って来れないなんて可哀想すぎるよ……。

「しかし、もしも君の体が元の新一の体になったとして——その精神は君のままだとしたら……」

「その時はそのときに考えるしかないですよ。男の子として生きていくのか……、それとも……」

「実験できるわけないもんね。私たちのことは本当の両親だと思って頼ってくれて良いから。あと、もしもアリスちゃんの気が変わったとしても、私たちはあなたのことを責めたりしないわ」

「はい。もしもどうしようも無くなったら、頼らせてもらいます」

この体が本来の新一の体に戻ってどうなるかなんてわからない。

とにかく、新一の両親は味方になってくれた。これは心強い……。

黒の組織の手かりは未だに掴めていないが、大きく前進した気がする。

「じゃあ、また会いに来るから、今度は一緒にデートしましょう」

「くれぐれも慎重に行動するんだぞ。冷静さを忘れてはならないよ」

こうして、あたしは優作と有希子に一時的な娘として扱われるようになった。

それにしても、実験か……。確か、コナンくんは新一に何回か戻ってた気がするけど……。

なんだっけ？ 灰原哀が作った解毒剤か何か飲んだからだっけ？

あたしは忘れていた。そもそも、何がきっかけでその解毒剤を作っていたのか……。それを口にするまで……。



「わりーな。連絡遅れちまって。ゴホッ、ゴホッ……」

『もう、新一。久しぶりに電話がかかってきたと思ったら風邪引いちやあってー。さっさと戻って来なさい』

「わ、わかってるよ。なるべく早く戻れるように、ゴホッゴホッ、頑張るからさ」

『あつ、誰かお客さん来たみたい。ちゃんと風邪治すのよ』

「へいへい」

今日は蘭の事務所に向かう前に彼女に電話をした。昨日、少しだけ寂しそうな表情をしていたから……。

しかし、喉が痛いわね……。これはどう考えても……。

「あー、完全に風邪引いちやったわ。事務所に置いてきた資料持って帰って部屋でゆっくりしよ」

あたしは今日は家でゆっくりすることを決めて、事務所に足を運んだ。

事務所に着くと帽子を深くかぶった男が何やら喚いていた。

何をこの人は言ってるんだろう……。

「さあ、出してもらおうか、工藤新一を。はよう、ださんかい！」

「なーに。この人、随分と態度大きいじゃない。ゴホツゴホツ」

「やだ、アリスちゃんも風邪？」

「そーみたい。その資料もらったら、退散するわ」

あたしは蘭に風邪だと告げて、資料を手に取ろうとする。

すると、喚いていた男があたしをマジマジと見つめてきた。いくらあたしが美人でも不躰じゃないかしら？

「あんたが藤峰愛梨寿か。ちようどええ。あんたにも会いたかったんや」

「あら、お兄さん。あたしのファン？ 良いわよ。サインくらい書いてあげる」

「いらんわ。そんなもん」

あたしはファンの男の子だと思ってサインを書いてあげようと言ったら「そんなもん」って言われちゃった。

んもう。可愛げがない人なんだから……。

「むう……。じゃああたしに何の用事なのよ？」

「毛利小五郎の助手として、ちよつと有名になった高校生探偵のあんたに興味があるんや。あくまでも、工藤のついでやけどな」

「あ、そう。ゴホツゴホツ」

男はあたしとか工藤新一とか高校生探偵に興味があるみたいだ。

ついでとか言われてもあたしが藤峰であり、工藤なだけけどな。

「アリスちゃん、大丈夫？ 新一も風邪みたいだったから、流行ってる

のね」

「工藤が風邪？ 工藤の居場所知らへんのに、何であんた、そんなこと知ってるんや？」

「電話よ。さつき電話で話してきたのよ、新一が」

「工藤が電話？ どんなことを喋つとるん？」

蘭が新一のことを口に出すと、男はその会話の内容に興味を示した。

工藤新一になりきって頑張つて話してるから変なことは言つてないと思うけど。

「新一が最近読んだ推理小説とか、サッカーの話とか……」

そう。あたしは新一になりきる為に興味もない推理小説を読んだり、サッカー中継を見たりしている。

その辺の話をしていれば、彼らしさが出ると思ったから。

「あんたのことは？」

「えっ？ 私のこと？ そういえば、新一は私のことなんて一度も……」

「変やと思わへんか？ 何度も電話するくらい好きな相手に元気かどうか気にならへんて。それを聞かん理由はただ一つ。工藤はどっかであんたのことを見てるんや。多分、この近くでな」

あー、確かに蘭の近況は知ってるから彼女のことを気にかけることは少なかったかも。

それにしても、何気ない会話を聞いただけでここまで推理出来ちゃうなんて……。

あのね、窓を開けたつて新一は外から覗いたりしてないわよ。

「ちよつとく、何それ。新一がストーカーみたいなことしてるって言うの？」

「んっ？ 俺の推理にケチつけるんか」

「ケチも、ケチャップも付けたげるわよ。新一はめっちゃめっちゃ蘭ちゃんラブなの。だから、声聞けば元気かどうかくらいわかるんだって。妙な言いがかりつけてこの子を不安にさせないでよ」

ただ、新一が覗き見してるのかそんなことやつてるとは否定した

かったのでそこは否定しておく。

そっかー、蘭の近況を聞かなかったことはミスだったわね。気を付けよう。

「アリスちゃんだったら……、恥ずかしいこと言わないでよ」

「ふーん。ようわからん。女の理屈は」

「大丈夫だよ。蘭ちゃん。新一はきつと戻ってくるから。ゴホツゴホツ」

あたしは顔を赤くした蘭を勇気付けようと言葉をかけようとするが、咳が邪魔をする。

「藤峰、風邪ならええ薬もつとるぞ」

「風邪だけど、あんた誰よ？ 先生の知り合いですか？」

「知らん。上がり込んできて、工藤を出せの一点張りだったからな」

「おっと、言い忘れとつたな。俺の名前は服部平次。藤峰や工藤と同じ高校生探偵や」

薬をくれると言った色黒の関西弁の男は服部平次だった。

アホだあたしは……。なんで、この特徴でこいつのこと分かんなかったんだろう……。

風邪で頭回らなくなってるのかな……。

「あー、あんたが西の名探偵の服部平次かー」

「なんや、俺のこと知ってたんか？」

「え、ええーつと、まあ。な、名前くらいは」

平次はあたしが彼を知ってたからなのか意外そうな顔をしてこちらを見つめてきた。

この人はコナンくんの正体に気付いて味方になってくれてたけど、どーしよっかな？ ある意味、コナン以上に説明しにくいんだよね。あたしの状況……。

「工藤とは西の服部、東の工藤って呼ばれた仲や。いつも比べられとつたわ。最近、あんたの名前もよう聞くようになったけどな。ほれ、薬や」

「あ、ありがと」

あたしは平次から飲み薬を受け取り飲み干した。な、何か変な味ね

……。体が熱くなってきた……。

「でな、その工藤やけど最近ぼったり話を聞かんようになってもうた。だから直接会いに来たっていうわけや。工藤新一はほんまに俺と並び称される程の男かどうかをな」

「男の子って競うのが好きね〜。キャハハハつ！ ヒック」

あー、なんか変な気持ち……。体は熱いし、頭はフワフワするし……。

平次は新一の推理力を見に来たのかー。暇なんだね〜。

「ちよつと、アリスちゃん。顔真つ赤だよ。何飲ませたの？」

「パイカルつちゆう。中国酒や。工藤に出会えるまで、しばらくここに厄介になるつもりやからな。土産持ってきた」

あー、あれ、お酒だったんだ。道理でこんなに熱くなって頭がクラクラすると思っただわ……。

パイカル、パイカル……。どつかで聞いたような……。

あれ？ 解毒剤って、そのお酒の成分を元にして使ってたようなそんな記憶が……。

待って、コナンって……これ飲んで一時的に新一に戻らなかつたっけ……。あ、あたし、これ飲んじやって大丈夫なのかしら？ 変なことにならないわよね……。

「ぱ、ぱ、パイカル〜？ あんた、あたしになんつーモンを飲ますのよ〜っ！ ヒック！ ダメよ、そんなの飲んだら、あたし……」

「酒弱かつたんかいな。そんなに怒らんでもええやん」

あたしが平次に抗議しても彼はなんの意味か分かってないから悪びれない。

いや、未成年に酒飲ますなよ。あんたも高校生でしょーが。

「そ〜じやなくて〜」

「何度も呼び鈴を鳴らしても出てこないのですが、どうなっていますの!？」

あたしが平次に文句を言ってる間におばさんが毛利探偵事務所にやってきていた。

あら、依頼人……。こんなときに……。

小五郎は彼女を座らせて依頼内容を聞くことにした。

彼女は辻村公江——外交官の奥さんらしく息子の恋人の素行調査を小五郎に依頼する。

その恋人さんというのが桂木幸子——24歳。成績トップで高校を卒業して、医大生の彼女は一見完璧っぽいけど。なんで素行を調べてほしいんだろう……？

「完璧すぎるから気に入らんのか。人は誰しも嫉妬深くて疑い深い生き物や。完璧なものを見るとつい粗さがししとうなる」

平次は幸子のプロフィールが完璧だからこそイチャモンをつけたいと断ずるけど本当にそうかしら？ 何か深い訳とかありそうじゃない？ こういうのって……。

「あの、詳しい話は主人と交えて我が家で……」

「これから行くんですか？ でしたら、最初にこちらに二人で来れば

——」

「先ほども言いましたように主人は外交官です。こんなところに入出入りするところが誰かに見られたら……」

「スキヤンダルになるってことか。よっしゃ俺もついていったるで」

公江の家で詳しい話をする事となったので、平次は自分も付いていくと言い出した。

子供連れの方が何かとカモフラージュしやすいと主張しながら……。

うーん。小五郎一人に任せるのは嫌な予感がするわ。体が心配だけど、あたしも行かなきゃ。

「あ、あたしも行くわ！」

「アリスちゃん、風邪大丈夫なの？」

「ええ、平次くんの薬で良くなっちゃった。ありがとね〜」

「ははっ、せやろ？」

嘘よ……。体調は最悪……。頭がガンガンするし……。

でも、もしかしたらこれで新一の魂がどうなっているのか分かるかもしれない。絶対に負けないんだから——。

小五郎は依頼を受けることにして、計画をたてるため服部を含む全員で公江の自宅へ向かうことになった。

「おかえりなさいませ、奥様。おや、そちらの方々は……？」

「古い友人とその家族です。主人は？」

「書齋にいらつしやいます」

大きな邸宅に着いたあたしたちを出迎えてくれた執事は、公江の夫である辻村勲は書齋にいと教えてくれた。

「お母様！ お邪魔してます！」

「ああ、写真——」

「先生！ 大きな玄関ですね。さすがは外交官のお住まいです！」

さらにさつき写真で見た素行調査の対象である幸子が出てきた。もう、小五郎ったら口を滑らせすぎよ。素行調査することがバレたらどうするの？ あたしは朦朧としながら声を張り上げて慌てて彼の口を塞ぐ……。

「……………」

「なぜ、ここにあなたが？」

「親父に会わせるために俺が連れて来たんだよ。何回言っても会ってくれねーから」

どうやら、公江と勲の息子である貴善が幸子を呼んだらしい。

恋人を父親に何度も紹介しようとしているのに会ってくれなさそうだから、業を煮やしたようだ。

「あの？ そちらの方はお母様のお知り合いですか？」

「あなたに母親呼びわりされる筋合いはありませんし、関係がないことですわ。こちらです。行きましよう」

「……なんだよ。後妻のくせに、エラーソーに」

公江は幸子を突き放すような態度を取り、貴善はそれが気に入らないという顔をした。

ふーん。なるほど。そういう家庭なのね……。

「あら、お父様いらしていたのですか？」

「何を言つとるんじや。ワシが釣った魚の話が聞きたいと呼び出しといて」

「そうでしたわね。和室で待っていてください。後でうかがいます」
「うむ……」

書齋のある二階に上がると、勲の父である利光が現れた。

魚拓を見せながら公江が自分を呼んだと告げると、彼女は和室で待っていて欲しいと頼む。

なんで、こんな日に魚の話なんか義父に聞きたがつたんだろう……？

そして、公江は書齋のドアの前に立って、ノックした。

「あなた、いらつしやいましたよ。あなた……、あなた……！ 変ね、居ないのかしら？」

しかし、何度もノックしても返事がない。彼女は首を傾げながら鍵を使ってドアを開けた。

部屋の中で勲は頬杖をついて寝ており、オペラが大音量で流れている。

あー、だからノックしても気付かなかったのか……。

「まったく、こんなところでうたた寝して、ステレオもつけっぱなし……。あなた、起きてください」

「あれま。爆睡してるし。——えっ？」

公江が勲を揺さぶって起こそうとすると、彼は力なく床に転げ落ちる。まるで完全に意識がなくなっているように――。

「あなた！ しっかりしてください！」

「あかん！ もう死んでるで」

倒れる勲の脈をとった平次は首を横に振る。どうやら彼は死んでいたようだ。

やっぱり、小五郎と出かけると人が死ぬ。いや、あたしが出かけた

からか……。

「現場には誰も入るな！ アリス！ 警察に連絡だ！」

騒ぎを聞いて家の人たちがこぞつてこちらに駆けつけると、小五郎は彼らを一喝してあたしに電話をするように声をかけた。

「承知しました……！ うっ……、やっぱ体調悪いわね……」

「アリスちゃん。大丈夫？ 私が電話をかけるよ」

「ご、ごめんね。蘭ちゃん……」

あたしが電話をかけようとしたが、立ちくらみしてしまい蘭が体を支えてくれる。警察への電話は彼女に任せた。

と、とにかく現場の検証を少しでも――。

「死体はまだ温かい。死後それほど経過してないってことね。それになんだらう？ この赤い点……。ん？ あれは、針ね……」

あたしは死体の様子を確認して、髪の毛の生え際に赤い点のようなものを発見した。

そして、机の下に針のようなものも……。

「痛っ――」

それを拾おうとしたら、同時に同じような動作をした平次と頭をぶつけてしまう。

どうやら、彼もこの針が気になったみたいね……。

「ほう、やるやないか。あのおっさんの腰巾着かと思うとつたけど。おれと同じところに目をつけるとはな」

平次はあたしと同じところに目をつけたことが嬉しかったのか口角を釣り上げる。

なんか、子供が玩具を手に入れたみたいな顔してるんだけど……。

「先生に色々教えてもらってるから……。それよりこの針だけど」

「ちよい待ち。おれはあんたと仲良く推理するつもりはないで。ちようどええ。工藤が居なくて退屈しとつたんや。藤峰、おれとどつちが先にこの事件を解決できるか。勝負せえや」

「ふえっ？ 勝負すんの？ あたしと平次くんが」

あたしは平次と針について意見を交換しようとしたら、彼はそれを手で制止しながら推理力勝負をしようと持ちかけてきた。

いや、暇つぶしに利用してほしくないんだけど……。

「なんなら、あのおっちゃんとかセットでも構へんで。工藤の前に藤峰愛梨寿がどの程度の探偵なのか見極めたる」

平次はあたしの探偵の力を見ると言っただけのところを調べだした。

なんで男の人ってこう暑苦しいのかしら……。

熱いといえば、あたしの体温よ……。脈も早くなってきたし……。

こりゃ、早めに解決しないとマジでヤバいかもしれないわ——。

外交官殺人事件 疑惑編

「亡くなったのは、辻村勲54歳……外交官。で、偶然現場に居合わせたのが——」

「私、毛利小五郎と」

「助手の藤峰愛梨寿でーす」

通報から間もなく、目暮警部がやって来た。やっぱり、こう何度も事件に遭遇すると呆れ顔になってくるよね。

小五郎のノリに合わせてるけど、実は頭痛が酷くなっている……。

「いつもいつも……君たちは……、で、今回も殺人事件かね？」

「いや、それがまだ……」

「ええーっ!? 先生、毒殺つて本当ですかあ？」

目暮警部が殺人事件なのかどうか聞いてきたので、あたしは彼に毒殺であると告げる。

これは、死体の状況からすぐにわかったことだ。

「毒殺？ どういうことだね？ 毛利くん」

「そ、それはその……」

毒殺だと断定した理由が気になった警部は、それを小五郎に尋ねるが、彼は言い淀む。

そのとき、間髪を入れずに平次が口を開いた。

「死体の髪の毛の生際に小さな赤い点が残ってるし、遺体の側には凶器らしき針も落ちてる。このおっさん頬杖ついとったけど、きつと殺された後にあのポーズ取らされたんやろな」

そう、平次の言うとおり一見して外傷は見当たらない死体だったが、生え際の近くの赤い点があった。これは毒が仕込まれた針で一突きされた跡だろう。

つまり、頬杖について寝ていたと思われていた被害者は既にあのとき死んでいた——。

「しかし、自殺の可能性も——」

「はい！ 先生の言うとおり自殺の可能性は少ないです。死体の唇と手足の先が紫色に変色していますし、目の結膜に溢血点があります。」

これは窒息死した証拠です。なのに絞殺された痕跡も溺死させられた形跡も苦しんだ様子もありません。残るは毒で神経麻痺させられて窒息死させられた可能性だけです。しかも一瞬で殺せるような怖い猛毒で……」

死体の状況は毒殺を示していた。それも強い毒によって、即死させられた感じだ。

自殺ってことはない。辻村勲は誰かに殺された――。

「なるほど……、では問題はいつ殺されたか……になるが……」

「死亡推定時刻は大体予想がつくで。死体がまだ温かかった事と、死斑や死後硬直がまったく見られんことを踏まえると――俺らが書斎に入る30分以内に誰かに殺されたつちゆうこつちや。この部屋の近くにおつた、誰かにな……」

死亡推定時刻についてはあたしも平次と同じ見解だ。

これだけ限定されると殺人が可能な人物はかなり絞られる。

しかし、服部平次はすごい。新一と同じくらいの推理力があるのは確かね……。

「さっすが平次くん。先生と同じ推理ね」

「……随分と静かなんやな。そつちのおっさんは。喋つとるん藤峰ばかりやん……」

「先生はあたしをテストしてくれてるの」

「ふーん……」

平次はやたらとあたしを意識している。そして、小五郎がここまで全然意見を出さないことを変に思っている。

漫画でコナンくんが小五郎のブレーンであり、新一だと見抜いただけあって、既に小五郎の能力に疑いを持っているみたいだ。

「アリスくん。この少年は君の友達かね？」

「服部平次……、関西の方で有名な高校生探偵です」

「服部……、平次……。おおっ！ 君か！ 大阪府警本部長、服部平蔵さんの息子さんというのは……！」

あたしは目暮警部に平次を紹介すると、彼は大阪府警のお偉いさん

息子だということを教えてくれた。

そつか、そんな設定もあつたわね……。うわっ……。頭がハンマーで殴られるくらい痛くなってきたわ……。

「……うっ、はあ……。はあ……。」

「アリスちゃん。本当に大丈夫？ す、凄い熱よ……。お父さんに任せて休んだ方が……。」

あたしがよろけると、蘭が腕を掴みながら支えてくれた。

どうやら、高熱が出るみたいだ。あーあ、そんな気がしてた……。

「だ、ダメよ。あたしが推理しなきゃ……。」

「………なんで、あいつそこまでして」

あたしが推理しなきゃ、小五郎がポンコツってバレちゃうじゃない。

あたしたちは状況を整理する。書斎の全ての窓には内側から鍵がかかっていて、外からの侵入は不可能。となると、犯人は唯一の出入口となるドアから鍵を使って書斎に入ったことになる。

書斎の鍵は公江と勲の二人しか持っていない。

目暮警部は勲のズボンの二重ポケットから書斎の鍵を発見した。

さらに、あたしたちと共に書斎に入った公江が鍵を持っていたことから――。

「これは、密室殺人つてことになりますね。先生」

「おもろいやんけ。藤峰、絶対に俺が先に事件を解いたるで――」

小五郎ではなくて、あたしにライバル心を剥き出しにする平次。

やっぱり、この人の目は欺けなさそう。完全にあたしが主導で推理をしていると思ってる。

その後、警部が事情聴取をした――。

死亡推定時刻は3時半〜4時の間。執事の小池は近所の人と3時から4時までおしゃべりしてたらしい。

貴善と幸子が訪れたのはあたしたちが来る直前で、小池があたしたちを出迎えている間に二階の書斎に行ったけど、鍵がかかって一階に降りてきた。

利光は2時過ぎに来ていて、書斎の隣の居間でテレビを見ていたそ

うだ。

この証言から、犯行時刻に被害者に近付けたのは貴善、幸子、利光の三人……。つまり、この三人の誰かが犯人ということになる。

「それにしても、すごいCDの数ですなあ」

「はい。旦那様はクラシックがお好きでしたので」

ずらっと並べられて収納されていたCDを見て警部がつぶやくと、執事の小池は被害者がクラシックが好きだと教えてくれた。

「クラシックねえ……。はあ……。はあ……」

『おかしくねーか？ さつきかかっていたのはオペラだった』

「そうね……。凄い音量のオペラだったわ……。ん？」

クラシックという言葉に反応にすると、あたしの頭の中で声が響いた。

これは、男の人の声だ。まさか……。そして、それと同時にあたしは意識が体から引き剥がされるような感覚に陥る……。だ、ダメよ……。今はまだ倒れるわけには――。

「この棚の上の写真は？」

「もういいじゃないですか。そんな二十年前の写真……」

「警部！ 机の上の本はどうしましょう！」

目暮警部が棚の上の写真について公江に言及しようとする、机を見ていた刑事さんが彼に声をかけていた。

そ、そういえばあったわね。机の上に脈絡もなく、まるで本箱からごっそり抜いたような本がたくさん積まれていた……。

まるで、何かを隠すためのように――。

『犯人は被害者の顔を隠したかったのかもしれないねーな』

「また、頭の中で声がする……。頭痛もするし……。心臓まで……。はあ……。はあ……」

頭で声がするたびにあたしの頭はドンドン痛くなって、動悸も激しくなってきた。

ヤバイ……。死ぬかもしれない……。パイカルは幼児化した体には解毒剤のような働きをしたかもしれないが、あたしにはただの毒薬かも……。

「警部。被害者の所持していた鍵に妙なものが……」

「こ、これは……」

朦朧とする意識の中であたしは目暮警部が見せられたモノに注目する。

キーホルダーが半分に割れて、中にセロハンテープが入っていた……。

それに、セロハンテープの真ん中に一本の細い空間が出来てる。何のためにこんなのを……。

待って、ドアには隙間がある。そして、セロハンテープに何かを使えば被害者のポケットに鍵を放り込むことが出来るんじゃない？

じゃあ、犯人はあの人……？

でも、引つかかる。大音量のオペラや不自然に積まれた大量の本……。どう考えても、作画的だわ……。

犯人が無意味にそんな状況にするはずがない。

ま、まさか……、あのと時被害者はまだ――。

頭の中の声のヒントのおかげであたしは犯人が使ったトリックがわかった。

『へえ、やるじゃねーか。俺も同じ推理だ』

「だから、何なの？ この声は――、うっ………ツツツツツ!」

頭の中の声がこれまでになく大きくなったとき――あたしは胸を押さえて倒れてしまった。

だ、ダメだ……、我慢できない……。

「アリスちゃん!」

「アリス!」

「へ、平気……、だから……、そ、それより……、は、犯人が……」

蘭と小五郎は心配そうにあたしを見る。頑張らなくちゃ、ここで倒れるわけにはいかない……。

だって犯人がわかったんだもん……。

「もう、そんなのどうでもいいよ。お父さんも服部くんもいるんだから。あ、あとう。どこかに休む場所はありませんか?」

「ああ、だったら俺の部屋を使え」

蘭があたしのために貴善に部屋を借りてくれた。

そ、そうね……。もしも、このままここで新一になっちゃうようなことがあれば大変だし……。ちよつと休むべきかしら……。

「そういえば、服部くんはどこにいるのかね？」

「彼なら和室の場所を聞いて出ていきましたよ」

平次が和室に……。？ 和室って利光が居たところよね……。

「アリスちゃん。歩ける？」

「う、うん……。ありがとう……。蘭ちゃん……」

蘭に体を支えられて、あたしは部屋を出ようとする。

心臓がとても痛い……。骨が軋むような、そんな不快な感覚もある。

「藤峰、体調が悪うなるのは不運やったな。分かったで、密室の謎も、犯人もな……！」

「——っ!？」

そんな中、平次はさつそうとこの書斎に戻ってきて、自信満々に全ての謎が解けたと宣言した。

良かった……。平次も謎が解けたんだ。それなら問題ない。

「じゃあ、任せたわよ……。はあ……。はあ……」

「なんや、もつと悔しがるかと思つとつたんやけど」

「——っ!？ そ、それはテグス？ だ、ダメ……。うっ……。はあ……。はあ……」

「アリスちゃん。早くこつちに……」

おそらく、平次は間違つた推理をしている……。

でも、あたしはこれ以上どうにも出来ない。

とりあえず、ベッドに横になつて、蘭に氷とか色々とするには用意出来ないものをお願いして、部屋から追い出す。

「く、苦しい……。心臓が痛い……。し、死んじゃう……。んんっ、んっ……、うううっ……」

あたしの勘が正しければ——今から自分の体は——。

「——はあ、はあ……。どういふことだ？ 黒ずくめの男を追つて

……、俺は……」

『あー、やっぱり頭の中の声は新一だったか。やっとお話できたわね』
頭の中の声が自分の口の中から出る。そして、あたしの意識とは関係なしに体が動く。

やはり彼は薬を飲まされた状態までの記憶しかないみたいだ。

「藤峰愛梨寿だったか？　なんで、蘭や毛利のおっちゃんと一緒にいる？　それに、俺は今……」

でも、パイカルを飲んでからの一部始終は見ていたみたいで、あたしの名前も知っていた。

さすがに頭脳明晰な彼でも今の状況は推し量ることは出来ないらしい。

『簡単に説明するから、よく聞いてね。あなたは——』

あたしはかなり手短かに新一に現状を告げた。薬を飲まされた彼が性転換してあたしの魂に憑依され、阿笠博士の助力の元で組織について調べるために毛利小五郎の助手になったことを——。

「なんてこった。そんなに長いこと時間が経っていたなんて……。俺の体が女になっちゃって、オメーの魂が入ってきて……。信じられねえけど、さつきまでこの体は別人だったし……。信じるしかねえか……」

新一はさつきまでこの体が女の子の体だと知っている。それが自分の体に変化したことも——。

だから、状況を受け入れざる得ないみたいだった。それに格好はさつきまでのあたしの格好のままなんだよなあ。帝丹高校の女の子用の制服のまんま……。

『あつ、いつ元に戻るかわからないからブラとか下着は取らないでね』
「はあ!?　そ、そういや、俺、完璧に女の格好じゃねえか!?　こんなの蘭に見られちゃったら……」

新一はようやく自分が女装していることに気が付いたみたいだ。

帝丹高校の制服は上はネクタイさえ取れば男女ほとんど変わらな
いから問題は下よね……。

『ごめん。あと、今あなたが身に着けてるの有希子さんの下着だから』

あたしは勝手に工藤家のお金を使うのも後ろめたくて、ほとんど有希子の服を着ている。下着も含めて……。

もちろん、新品も買っているけど、今日は彼女の下着をつけていた……。

「母さんの!?! くそっ! な、なんで俺がこんな目に遭わなきゃ……」
新一にとつて母親のブラジャーとショーツを身に着けているのは精神的なダメージが大きいらしい。

まあ、普通に考えて嫌だよな……。スカートボタンが弾けて取れるから脱げかかっている。多分ショーツもエライことになってるんだろうな。

『やだー、あたしの新品の下着が良かったっていうの?』

「バーロー! そんなじゃねーよ! とにかく、服部ってやつが間違った推理をしようとしていた。俺がなんとかしねーと」

新一は気を取り直して平次の間違いを正すことに意識を向けるみたいだ。あたしもそれがいいと思う……。

『スカートはズボンと替えるしかないから、あたしのカバンに入れて。もし、途中でヤバくなったら誤魔化さなきゃいけないから』

「ああ、それしかねえみてーだな。慣れねえ、格好だから動きにくい……!」

『あたしだって恥ずかしいわよ。さっきまで身に着けてた下着を男の人が着てるなんて』

「うるせー。でも、ありがとな。蘭の側に居てくれて……」

彼はいそいそと着替えながらあたしに蘭の側に居たことのお礼を言ってくれた。

なんだかんだ言っただけで、彼女のことを一番に心配するところが彼らしい……。

『蘭ちゃんは放っておけなかったから……。それより、あたしの推理当たってるかな?』

「当たってるかな? じゃねーよ。もっと自分に自信を持て。オメーは論理的に筋道を立てて、パズルをちゃんと解いたんだ。悪いな、お前が真相を話すべきだったのかもしれないけど……」

新一はあたしが辿り着いた真相を自分が喋ることを悪いとか言う。

でも、そんなことはない。だって――、

『ううん。ヒントを出し続けてたのは、新一なんですよ？ あたしだけじゃ解けなかったかも』

「それじゃ困るぜ。もし俺がオメーに戻っちまったら、藤峰愛梨寿にはシャーロック・ホームズになってもらわなきゃいけねーんだから」
彼はあたしに自分の推理に自信を持つと言った。

ホームズか……。あたしなんか世界中の誰もが知っている名探偵に近付けるかわかんないけど……頑張ってみるよ……。



「証拠は居間のゴミ箱で俺が見つけたこの針付きの『テグス』や！

このテグスは新素材で出来とる細うて、強い特殊な釣り糸なんや！
釣りをやつとるあんたが知らんとは言わさへんで!？」

「それにあんたは俺らと奥さんがこの書斎に向かう途中、階段の所で、
『和室で待つていてください』て言われとったな。つまりあんたは
犯行後に和室に行ったんや。完全犯罪を確認してな。その和室のゴミ箱からこのテグスが出てきたんが何より証拠つてヤツや」

平次の推理が聞こえる……。彼の推理は簡単に言うと言書斎で被害者を殺したあと、ドアの隙間からテグスを伝わせて被害者のポケットまで鍵を放り込むというトリックだ。

そして、それが可能なのは利光だけとして、彼が居た和室からテグスを見つけ出し糾弾していたのだ。

「すみません。アリスちゃん、見ませんでしたか？」

蘭はあたしが部屋から消えたことに気付いて探しているみたいね
……。

「どうや！ 違うんか!? じいさんよお!？」

「そうじゃ、息子の勲を殺したのは、このわしじゃ……」

平次の推理に対して利光は観念したように、自分の犯行を認めた。

でも、それは――。

「そいつは違うな……」

「――っ!？」

新一が声を発するところちらに視線が集中する。

あれま。みなさん何があつたのかという表情をされているわね……。

「そいつは違うぜ」

「あっ……!？」

「く、工藤くん……!」

「こ、こいつが工藤？ 工藤新一……」

新一がもう一度言い直すと、小五郎や目暮警部は彼の存在に驚き、平次も工藤という言葉に反応した。

「どこ行つてたのよ!？」 居なくなつたと思つたら、いきなり現れて……ぐすつ……、私、心配してたんだから……」

そして、涙を流しながら蘭は新一に近づいた。

あーあ、よっぽど寂しかったのね……。

「バーロー、泣いてんじゃねーよ」

『謝れ! 馬鹿!』

「うっ……、ま、まあ。悪かつたな……、心配かけちまつて……」

「ぐすつ……、でも、良かったあ……」

あたしに促されて新一が謝ると蘭は素直に彼の無事を喜んだ。

こうして、あたしは初めて目の当たりにする。平成のホームズと呼ばれた高校生探偵の推理ショーを――。

外交官殺人事件 解決編

「俺の推理のどこが違うっちゅうんや、工藤」

「お前の推理は机上の空論。100パーセント不可能だって言うてんだよ」

新一は平次の推理は不可能だと断じた。あたしも最初に彼と同じような推理をしたから、大きなことは言えないが、平次の推理には致命的な欠陥があるのだ。

「おいおい、工藤くん。言葉を挟むようだが、彼の推理した密室トリックは完璧だよ！ さっき、ワシのズボンで実験をやったんだ」

目暮警部が新一に先ほどやったらしい実験の説明をした。

まずは、針付きのテグスの針のついてない方の先にセロハンテープでキーホルダーを固定して、針のついてる方をズボンのポケットの内側から通す。

そして、テグスの両端を持って部屋の外に出て、針の付いた方のテグスを引っ張る。

すると、鍵は自動的にポケットに収まり、さらに引っ張ればテグスはテープから外れて、あとはそれを巻き取れば密室が完成という理屈だ。

「本当に鍵が入っているのですか？ 目暮警部」
「えっ？」

平次はこの実験により目暮警部のズボンの二重ポケットの中に鍵が入っていると言ったが、新一はそれを疑う。

平次は少しだけイライラを顔に出していた。

「もちろんや。嘘やと思うんなら、よう見とけよ。きちんと二重ポケットの中に……」

とまで言ったところで目暮の二重ポケットの外側から鍵が床に滑り落ちる。

そう、新一の言ったとおりに二重ポケットの中に入っていなかったのだ。

彼は自分の推理通りにならなかったことに驚いていた。

「そんなアホな……。俺はちゃんと二重ポケットの中にテグスを通したはずや……」

「鍵を入れた時、目暮警部が座っていたからだよ……」

そう、警部が座っていたから、ポケットが折れ曲り鍵の通り道を狭め、奥にある二重ポケットに入る前にテープからテープから外れてしまった……。つまり、このトリックを使うと犯行は失敗する。

「ほ、ほんでも万が一……。いや十回に一回くらいの確率やったら……」

「何回やつても同じ事——思い出してみろ……。被害者のポケットに入っていた時の鍵の向きを……」

「——っ!? あっ!?!」

新一が鍵の向きについて指摘すると、ようやく平次は自分の推理の論理的な破綻に気が付いたみたいだ。

「万が一、二重ポケットに入ってもキーホルダーだけのはずだ。狭いポケットの中で、鍵とキーホルダーが“くの字”に折れ曲って入るわけが無い。それがキチンと入っていたということは——犯人が予め鍵を二重ポケットの中に入れていたってことだ……!」

新一はこうして利光犯人説を否定した。実は新一は針付きのテグスをここに来る前に和室以外で五、六個見つけていた。

そう、利光に濡れ衣を着せたい真犯人が彼がどこに居ても良いように仕掛けられていたのだ。

利光がなぜ犯行を認めたのかは謎だが……。

そして、真犯人の施したトリックについて彼は説明をした。

「藤峰から聞いたぜ。被害者を発見した際、部屋にオペラがかかっている、被害者の前には本が積まれていたことを。前者は毒針を刺した際、被害者が出すかもしれない呻き声を歌声で消すため。後者は同じく刺した際、被害者の苦痛に歪むかもしれない顔を隠すためだ」

「藤峰愛梨寿から聞いたやと? 何を誤魔化すためにそんなことを?」

「それは、お前や藤峰……。それに蘭や毛利探偵に気付かせないためだよ! そう、犯人は奥さん! あなただ!」

あたしも真犯人は公江だと断定していた。被害者はあらかじめ薬で眠らされており、あたしたちが書斎に入ったあとで彼女は被害者に起こすフリをして毒針を刺して殺した。

警察が睡眠薬を体から検知したとしても殺す時に抵抗されないように眠らせたただけだと誤認するだろうから、あの瞬間に殺されたという気付かれない限りトリックはバレない。

「密室にわざわざ探偵を招いて、目の前で人は殺さない」だろうという盲点をついた心理的密室トリックというわけだ。

公江のバックには毒針を収納できる溝のついたキーホルダーが入っており、それが物的な証拠となり、新一の推理が正しかったことが証明された。

何ていうか、すつごく鮮やか……。あたしも公江が犯人だってわかったけど、こんなに流れるように説明は出来ないかも。

動機は復讐——公江の元旦那は被害者の勲と同じく外交官だったが、彼によつて嵌められて汚職で捕まり15年前に獄中死する。

実は幸子は山城との間にできた実の娘であり、書斎に飾ってあった20年前の写真の公江と瓜二つだった。

貴善が恋人として紹介した幸子の姿を見た時、最初は他人の空似と公江は思ったが、写真を見た勲は激しく動揺して交際を強硬に反対する。

公江が勲を問い詰めたところ、20年前に山城に汚職の罪を着せた事などを洗いざらい話して真相を知ることになったのである。

利光のそれに関わっていたからスケープゴートの対象に選ばれたが、彼も後悔していたのか……。濡れ衣をかけられてもそれを否定しなかったみたいだ。

「にしても、工藤。藤峰から聞いただけで、よくこれだけ推理出来たな」

「まあな。実はあいつがほとんど解いててさ。俺はそれをまとめただけなんだ」

新一は気を遣っているのか、この事件の真相にあたしも辿り着いて

いたことを平次に告げた。

「解けたのは新一のヒントのおかげだけどね……」

「なんだ。アリスちゃんのおかげじゃない。それなのに、よくそんなにエラソーにできるわね」

「うっせー、あいつが解けるってことは俺だって簡単に解けるんだよ。」

「うっ……、ゴホツゴホツ」

「新一……、大丈夫？ そうだ、アリスちゃんのために呼んだお医者さんが——」

ここに来て、新一の体調が悪化する。そして、あたしも意識が吸い込まれるような感覚を覚える。

蘭は彼のために医者連れてこようと部屋から出た。

「今回は何から何まで完全に俺の負けや。藤峰にもお前にも」

「バーロー。推理に勝ったも負けたも、上も下もねエよ。だってよ、真実はいつもたった一つしか存在しねえんだからな」

「そろそろや。今回は俺は推理勝負に拘りすぎて冷静やなかった」

平次は新一の言葉を受けて自分が勝負で頭がいつぱいになって真相を究明することを疎かにしたことを反省した。

「そうよね。あたしならともかく、彼が普段どおりなら……あんな誘導に引っかかるなんて思えない。」

その時……、あたしは大きく意識が吸い込まれるような感覚に再び陥った。ヤバい……、これはおそろく——。

「ぐっ……、ううっ……」

『やつぱり、この感覚……。多分だけど元の体に戻りそうなんだわ。新一、走ってそこから離れて！』

「おい、大丈夫か工藤！ どこいくんや!？」

新一は胸を押さえながら玄関を飛び出した。しかし、平次も後を追いかける。

だ、ダメだ……。これは振り切れないかも……。

「う、動けねえ……。はあ……。はあ……」

「どうしたんや？ 工藤。ほんまに大丈夫か？ 医者に見てもらったほうが……。な、何や、それ……」

家の裏の壁にもたれかかった新一の目の前には平次。

彼は青ざめた表情でこちらを見た。そりゃあ、驚くわよね……。どどん新一の髪が伸びて色素が落ち——胸が膨らんでいるんだから。

「……………はあ、はあ」

『す、すまねえ、藤峰……、蘭のこと……オメーに頼むわ……………』

新一の声は徐々に小さくなって……そして、聞こえなくなってしまう——。

さつきみたいに意識を共有し続けるのは無理だったのか……。推理しなくて済むと思っただけだな……。

「ふ、藤峰？ な、なんで工藤が藤峰に……？ ど、どういうこっちゃ？」

平次に新一が愛梨寿になるところをバツチリと見られた。

彼は死体を見たとき以上に信じられないって顔してる……。

「平次くん……、後生の頼みよ。訳は話すから……、このことは誰にも喋らないでもらえるかしら？」

「わ、訳がわからん。俺は夢でも見とるんか？ 痛っ……………！ 何するんや!？」

平次が夢とか言うから頬を掴ってやった。ほら、夢じゃなくなつて現実よ。

さて、どうやって説明しよう？ まあ、優作とか博士に説明したのと同じ感じでいいか。

「夢じゃないわ。工藤新一と藤峰愛梨寿は一心同体なの。もつとも人格はまるで別だけどね」

「……………工藤と藤峰が一心同体？」

あたしは平次に自分がこうなった経緯を説明した。

彼はあまりにも現実離れた話に頭を押さえながらも最後まで黙って話を聞いてくれた——。

「工藤が薬を飲まされたら女に……、んなアホなって言いたいんやけど。実際、目の前で見てしもうたら信じるしかないやんけ」

平次は新一があたしになるところを目撃しているので、容易に話を信じてくれた。

やはり、百聞は一見に如かず——ということだ。

「平次くんのことを信じて話したんだから、お願いよ。このことは——」

「他言無用ってことやる？　心配せんでええって。そんなこと言うたら俺の方が変人扱いや」

「ありがとう。助かるわ。そう言ってくれて」

平次はこのことを秘密にしてくれると言ってくれた。

あたしは新一じゃないからイマイチ不安だったけど、彼は誠実な人のはずだし安心ね。

さすがに間違ってたあたしを「工藤」とは呼ばないだろうし——。

「アリスちゃん！　ここに居たんだ。新一を見なかった？」

「し、新一？　なんか、新しい事件があるとか言って、玄関から出ていったわよ」

「あんにやろうううう！　急に帰ってきたかと思ったら何も言わずに居なくなるなんてううう！」

新一が居なくなったことを告げると蘭は拳を握りしめて怒り出した。

あらくら、思った以上に腹が立ってるみたいね……。平次が引くくらい……。

「まあまあ、久しぶりに会えたんだし怒らないの。あと、この事件に関わったこと……、誰にも言わないで欲しいんだって……」

「えっ？　どうして？」

「わかんないけど、あたしの推理を披露して手に入れた手柄なんてプライドが傷付くから要らないんだってさ……。あと……。ごめん

……。蘭ちゃん……。ちよっと寝るわ……」

「アリスちゃん!？」

あたしは蘭に新一のことを黙っておくようお願いして、その場に倒れた――。

それから、2日ほどあたしは熱にうなされながら入院することになる……。

「で、その高校生探偵とやらに正体がバレてしまったというわけじゃない」

「うん。新一には会えたけどね。彼はやっぱり生きているんだよ。あたしの頭の中に……」

病院から退院したあたしは博士に平次のことについて話した。

新一の意識が頭の中にあることも含めて――。

あれから彼の声は聞こえないけど、確かに新一は生きていた。

「科学的に何が起こっているのかわからんが、そうとしか言えんのう。そのパイカルという中国酒が何らかの作用を起こして、新一の体に戻ったということか」

「そう考えるのが自然でしょ。めっちゃ体がきつかったけど」

「そりゃあ、骨格から何まで変わるんじやから負担は大きいのじやろう」

「うん。そうなんだよね。ところでき、これで解毒剤作れる？」

パイカルを飲んで新一の体になったり、あたしの体になったりするのはかなり身体的な負担が大きかった。

ちなみに後でこっそり小五郎のパイカルを拝借してみたが、酔っ払うだけで新一の体にはなれなかった。どうやら、風邪を引くという条件とかもあるらしい。

しかし、解毒作用があるのは間違いない。だから博士にこれをヒントにして何とかかならないのか質問してみた。

「無理じゃよ。それだけの情報で。それが出来るとすれば、薬の開発に携わった科学者くらいじゃ」

「だよね〜。薬の開発者か〜」

やはり解毒剤を作るには毒薬の製作者である灰原哀の協力が必要

不可欠みたいだ。

あの子は漫画と同じように小さくなったりしているのだろうか……。そしてあたしは彼女に会えるのだろうか……。その答えはまだわからない……。

しかし、知らない内にあたしは巻き込まれてしまう。彼女に深く関わる事件に――。



それから、間もなくして毛利探偵事務所は奇妙な人探しの依頼を受けた。

依頼人は広田雅美――彼女は急に居なくなった父親を探してほしいとあたしたちに頼んだのだ――。

一週間くらいで彼女の父親は見つかって解決かと思われたが、そこからが奇妙だった。

その雅美の父の広田が殺された――。

そこから、あたしたちは雅美が心配になり、彼女を追うこととなる。その過程である事実が浮かび上がった。雅美が最近、世間を騒がせていた“10億円強奪事件”の首謀者だということが――。

彼女はお金を持ち逃げした男を父親だと言ってあたしたちに探させようとしたのだ。

いろんな紆余曲折を経て、あたしと蘭は雅美を発見することに成功する。しかし――。

あたしたちの前で雅美は倒れ込んだ。

「しっかりして！」
蘭は彼女に声をかけたけど、側に拳銃が落ちている。彼女はおそらく――。

「蘭ちゃん、救急車を呼んでくれる？ あと、先生にも連絡を……」

「わ、わかったわ」

あたしが彼女に用事をお願いすると、駆け出してこの場から離れ

た。

なんでこんな状況になってるの？ 彼女を撃つたのは——誰？

「驚いたわね……。アリスちゃん、どうしてここがわかったの……？」
「偶然あなたの腕時計に発信機をつけてしまっただけ、そしたら人が死んでるんだもん。気にするわよ。あと大きなスーツケースをあなたが持つていくところも見たからね。入ってるんでしょう？ あの中に10億円」

雅美の時計に付けた発信器を追ったら、なぜか知らない男に出くわした。

そして、その男は殺されたことがきっかけで、あたしは雅美とこの男と、雅美が父親だと言ってた男が10億円の強奪犯だということを推理したのである。

「か、可愛い妹みたいな子だと思ってたのに……。とんだ名探偵もいたものね……」

彼女から依頼を受けてあたしは毎日のように彼女と電話で会話をしていた。

そのとき、彼女はやたらとあたしのことを妹みたいで可愛いと言っていて、あたしもそんな彼女を慕っていた。

だからこそ、こんな結末望んでなかった。最後の最後まで——何かの間違いであってほしいとあたしは願っていたのだ。

「……喋らないほうがいいわ」

「……計画は完璧だった。何としてもやり遂げて妹だけでも組織と縁を切らせたかったのに……。結局、みんな死んじゃった。私も組織の手にかかって……」

「妹？ 組織……って、まさか……」

「謎に包まれた大きな組織よ……。ま、末端の私にわかっているのは組織のカラーがブラックって事だけ……。あなたの声を聞く度に……。妹を助け出したいって……」

雅美を殺したのは黒の組織——あたしが追いつけている組織だ。

彼女は最後のお願いとして強奪された10億円の入ったスーツケースはホテルのフロントに預けてあるから組織より先に取り戻す

よう頼んで絶命する――。

その後、雅美の言うとおりにホテルのフロントに預けられたスーツケースを警察が押収。

彼女の死は近くに落ちていた拳銃の指紋が明美の物だったことから自殺とされる。

「黒の組織……、狡猾な連中だわ……。それにしても、彼女が最後に言っていた妹というのは――」

あたしは雅美の妹という言葉が気になっていた。

そして、その言葉は間もなくどういう意味だったのか理解することになる。

新一の家の前で倒れていた少女との出会いによって――。

黒の組織から来た女

「いやー、今日は依頼なしか。ここのところ殺人事件ばかりだったから、なんか久しぶり♪早く晩ごはんの支度しななきゃ。博士が痩せちゃう。って、あれ？ 新一の家の前で女の子が倒れてる」
「……………」

珍しく事件に巻き込まれずに毛利探偵事務所から帰宅してたら、新一の家の前で小さな女の子が倒れていた。

大人のサイズの白衣を身にまとった、赤みがかったウェーブ状の茶髪が特徴の彼女が誰なのか、さすがに勘の悪いあたしでも察しがつく。

「こ、この子はまさか…………、いや、間違いない…………」

あたしは行き倒れになっていた少女を抱きかかえて、博士の家に連れていき、自分のベッドに寝かせた。

「んっ…………、んんっ…………、——っ!? こ、ここは…………?」

「気が付いたようじゃな」

「大丈夫? 痛いところとかない?」

「あなたたち…………、誰?」

少女は意識が戻ると、あたしたちの顔を確認して誰かと質問をした。

「こ、こやっつて見ると本当に小学生にしか見えないわね…………」

「わしはこの家の家主で発明家の阿笠博士じゃ」

「あたしは居候の藤峰愛梨寿よ。高校2年生」

あたしと博士は少女に自己紹介する。さて、彼女が思ったとおりの人間ならどう反応するだろう…………。

「藤峰愛梨寿…………? そう…………、あなたが工藤新一ってわけね」

「な、なぜそれを君が知ってるんじゃ?」

「博士、ダメじゃん。それ言ったら。カマかけてるかもしれないのに」

「あっ!?! す、すまん」

おおーっ、名前を聞いただけであたしの正体を見破ったぞ、この人。
コナンさんの正体は多分だけど博士が教えたんだろうし、なんで分
かったんだらう？

工藤新一＝藤峰愛梨寿の構図はコナンが新一よりもかなり分かり
にくいはずなんだけど。

「正体を見破られても冷静なのね」

「まさか。驚いてるわよ。こんな小さな女の子、しかも初対面の子が
あたしの秘密を知ってるんだもん。理由を聞かせてもらえるかしら
？」

本当に驚いていたので、あたしは少女に理由を尋ねる。

彼女の正体はほとんど分かっているけど、素知らぬ顔をしながら。

「シェリー……、これが私のコードネームよ。この意味分かるかしら
？」

「アリスくん。酒の名前をコードネームにしている組織って……」

「ええ、予測はしてたけど、黒ずくめの男たちの仲間みたいね。こんな
小さい子がいるとは思わなかったけど。でも、なんであそこで倒れて
いたの？」

何度か黒の組織の連中とはニアミスしていて、奴らが酒の名前を
コードネームにしていることは博士も知ることとなっている。

とりあえず、この子の話を最後まで聞きましょう。

アポトキシン
「APTX4869……。それが私が開発した薬の名前」

「えっ？」

「そしてあなたの飲まされた薬の名前でもある。工藤新一はこの薬が
原因で女性の体になったんでしょ？ 私も飲んだのよ。あの薬……」
シェリーはあたしが飲まされた薬の開発者だと告白して自分も薬
を飲んだという。

あー、やっぱり小さくなるパターンもあつたんだ。もしかしたら、
男になってしまったり、死んじやったりして彼女が現れないパターン
も考えたけど、この辺りは漫画と同じなのね……。

「ふーん。あれはそんな名前の薬だったのね。ということは、あなた
は元男の子ってこと？ いや、それだと変な話になるわよね。開発し

たとか、言ってたし」

「私は薬を飲んで幼児化したの。大人の体から小さな子供の体にな……」

「幼児化じゃと？ アリスくんとはまるで違うのう」

シエリーが薬で幼児化した話を聞くと博士は驚いた顔をする。

「そうよね。コナンくんっていう前例がいるからそもそも彼女のことを博士は容易に受け入れたんだもん。薬で小さくなる効果まであの薬にあるって知ったらびっくりするわよね。」

「動物実験の段階で薬を投与されて生き残ったマウスが二匹居た。一匹は幼児化したマウス……、そして、もう一匹は雄が雌へと性転換したマウス……。あなたの正体が工藤新一だと分かったのもそれがきっかけよ」

「へえ……」

「あの薬を飲んだ人間であなただけ、死亡が確認されてなかった。知ってた？ 組織はあなたの家に二度ほど捜査員を派遣してたの。私も薬の考案者としてそれに同行したわ」

なるほど、性転換したマウスもいたのか。それなら彼女があたしの正体に気付いた理由も大体予測がつく。

「あー、そうなんだ。下手にあそこに住まなくて良かったわ。鉢合わせしたら面倒だもんね」

「二度目の調査は家の中が埃だらけで人が住んでる形跡もなくお開きになった……。二度目の調査はその一ヶ月後。相変わらず埃だらけで私もあなたが死んだものだと思ひ始めたその時よ……。あなたの母親の洋服ダンスの変化に気付いて鳥肌が立ったのは……」

「……………」

「無くなってたのよ。一ヶ月前にはあった、あなたの母親の服が、下着まで含めてごっそりと……。さつき話したマウスの件があったから仮説を立てるのは容易だったわ。工藤新一はA P T X 4 8 6 9 アポトキシを投与され、性転換した可能性があるってね。そして、彼が消えた後に現れた女子高生の探偵「藤峰愛梨寿」。藤峰は工藤新一の母親の旧姓……。あなたと工藤新一を結びつけるのにも時間はかからなかった」

やっぱり、有希子の服を許可を取って拝借したことが原因だったか。

そして、博士の案だが有希子の旧姓を偽名に使っていることもあたしと新一を結びつける根拠になっていくみたいだ。探偵としてメディアに出てる分、あたしのほうがゴナンよりも目立ってるし……。うーん。性転換を前提にして考えると新一とあたしを結びつけることは可能ってわけね……。

「じゃあ組織は工藤新一が女になったことを……」

「感謝して。あなたのデータは死亡確認に書き換えてあげたから。貴重なサンプルとなったあなたに興味があったから生かしてあげたわ。組織に報告すれば私のところに回ってくる前に殺される可能性が高いからね。ま、データを書き換えたのが組織を裏切った私だと分かれば、再び疑い始めるかもしれないけど」

ふう、良かった。組織ではあたしが死んでることになってるみたいね。

まあ、いつまで安全なのかはわからないみたいだけど。

「うん。データ書き換えてくれて、ありがと」

「……嫌味？ 薬を作った張本人の私に礼なんて」

「感謝してって言ったのはシエリーちゃんの方じゃん。あたしが生きてるのはあなたのおかげ。薬を飲ませたのはあなたじゃない。それだけよ。ダイナマイト投げつけられて怪我しても、アルフレッド・ノーベルを恨んだりしないでしょ？」

シエリーが悪いなんてあたしは思っていない。だって、薬を飲ませてきたのはジンだし。

それよりも、死亡したことにくれた彼女への感謝のほうが大きい。

「呆れたお人好しね。甘過ぎるわよ。ノーベルは別に人殺しの道具を作ろうとは考えてなかったでしょ？ 彼は土木業や建設業のためにダイナマイトを発明した」

「じゃあ、シエリーちゃんは人殺しのために薬を作ったの？」

「……そうじゃないって言えばあなたは信じるっていうのかしら？」

あたしの質問にシエリーは少しだけ哀しそうな顔をして、自分の言うことを信じるのか尋ねてきた。

そんなの——決まってるじゃない。

「うん。信じるわよ」

「——っ!? 少しは疑いなさいよ。探偵なんですよ?」

「目を見れば大体わかるわ。やっぱり、毒薬と知らずに開発に携わってたみたいね。それより、組織を裏切ったっていうのは——」

彼女は利用されただけ。知らずに自分が作った薬を使って人が殺されていたなんてことを知った彼女の絶望は計り知れない。

「いい加減、あの組織が嫌になったのよ。試作段階のあの薬を勝手に人間に投与されたことも理由のひとつだけど、最も大きな原因は私の姉——殺されたのよ。組織の手にかかってね。何度問いただしても組織はその理由を教えてくれなかった。そして、その正式な回答が得られるまで私は薬の研究を中止するという対抗手段をとった。当然、組織に歯向った私は研究所のある個室に拘束され、処分を上が決定するまで待たされるハメになった」

「姉が組織に殺されて……、まさか……」

アポトキシン

「どーせ殺されるのならと、その時飲んだのが……APT_X4869……。幸運にも死のうと思つて飲んだその薬は、私の体を幼児化させ、手枷から私を解放し——小さなダストシユートから脱出させてくれたのよ……」

シエリーの話は大体、漫画で読んで知ってる話だった。

しかし、姉がいたことはすっかり忘れていた。この子のお姉さんつて、間違いなくあの人よね……。

「どこにも行くあてが無かった私の唯一の頼りは工藤新一あなただけ。私と同じ状況に陥ったあなたなら、きつと私のことを理解してくれると思つたから——つて、何するのよ!?!」

「そっか、そっか……。あたしを頼りにしてくれたんだ。何か嬉しいなあ。大変だったわね」

あたしは気付いたら、シエリーをギュツと抱きしめて頭を撫でていた。

何かハーフっぽい見た目でめっちゃめっちゃ可愛いくて堪らなくなっちゃったから……。

「な、馴れ馴れしい人ね。私の話を聞いてた？ この見た目だけ……」

「大人なんでしょ？ わかってるわよ。そんなこと」

「じゃあ離してくれる？ 鬱陶しいから」

あたしが頭を撫でることを、迷惑そうな顔をして抗議する彼女。

髪の毛さらさらしてる……。ずっと触っていたいんだけど……やっぱダメか……。

「え〜、同じ境遇のあたしと仲良くなりに来たんじゃないの？」

「こういうスキンシップは嫌いなの」

「あら、そうなの？ じゃ、晩御飯作っただげるから、待ってて。ごめんね、博士。遅くなっちゃって」

「ああ、ワシは構わんが」

これ以上、抱きしめてたら本気で怒られそうだったのであたしは晩御飯を作るためにキッチンへと向かった。

じゃあ、今日は彼女も来てくれたことだし、あれを作ろうかな……。

「ジャーン♪ 今日のご飯はビーフシチューです♡」

「おおっ！ いつもにも増して気合が入ってるのう」

「ビーフシチュー……？」

今日のメニューはビーフシチュー。

我ながら美味しそうに出来たと思うわ。お口に合えば良いんだけど……。

「うん、美味しい。アリスくん、店で出せるぞ。これは」

「この味は……」

「友達に習ったのよ。ビーフシチューを美味しく作るコツをね」

実はこのビーフシチューはある人から作り方のコツを教えるもなかった。

いやー、大した工夫でもないのにこんなに美味しくなるなんてびっ

くりね。

「ほう、そうじゃったのか。蘭くんかね？」

「ううん。別の人。ビーフシチューを簡単に美味しくするにはね、お肉と野菜を先にバターで炒めて、隠し味にチョコレートと——」

「野菜ジュースを入れる……………」

シエリーがあたしの作ったビーフシチューの最後の工夫を言い当てる。

正解だ。このシチューには野菜ジュースが入っている。

「——そう。最後に野菜ジュースを入れて煮込むと数十種類の野菜の味が馴染んで豊かな味になるの。楽しそうに教えてくれたわ。あなたのお姉さんが」

広田雅美と電話でやり取りしてたとき、世間話がてらこういう話もしていた。

さっきの会話でようやく思い出した。広田雅美はシエリーの実姉だ……………。

「……………気付いてたの？ 広田雅美が私の姉だって」

「何となくね。死ぬ前も妹のことをずっと気にかけていたから。組織から切り離したいって……………。あなたの話を聞いてピンときたのよ。広田雅美があなたのお姉さんだって」

「ええ、広田雅美は私の姉、宮野明美が使っていた偽名……………、めったに会えなかったけど、得意げな顔をして私に料理を振る舞ってコツを教えてくれたわ……………」

シエリーはあたしの作ったシチューを懐かしそうな顔をして口に運んでいた。

そっか、やっぱり妹の彼女にもこのビーフシチューの話はしていたか……………。

「ごめんなさい。助けてあげられなかった。あたしはあなたのお姉さんを……………。もっと早く、推理して違和感に気付けば、もしかしたらあたしは……………」

あたしはシエリーに姉の命を救えなかったことを謝罪する。

何もかも遅かった。あたしが早く彼女を見つけ出せれば……………助け

られたかもしれないのに――。

「……………お姉ちゃん。なんで……………、私なんかのために……………、ぐすつ……………、どうして……………」

スプーンを置いてシエリーは涙を流した。宮野明美が犯罪に手を染めて殺されるまで至ったのは、彼女を救うためだったから。

それを知っているからこそ、姉を失った彼女には堪えたのだろう。クールに振る舞っているが、彼女の姉への想いは隠せなかった――。

「組織から必ずあなたを守るわ。お姉さんの代わりなんて出来ないけど、責任は取らせてもらう」

「……………工藤くん？」

あたしは彼女を守りたい。組織の手から……………何としてでも。

宮野明美はあたしの目の前で死んだ。彼女の身をずっと案じて……………。大した縁じゃないけども、そうしたいのだ。

「あたしは藤峰愛梨寿よ。アリスちゃんって呼んでね♪」

「――さつきからずっと気になっていたんだけど、工藤くんってそつちの気があるの？　そもそも、女性的な心というか……………、正体を明かしても女性のフリを崩さないし、演技が上手すぎるわ」

あー、博士以来だわ。あたしの仕草にツッコミを入れたのは。

確かに新一が性転換しただけなら、正体を知る彼女の前で女のフリをする必要はないもんね。

シエリーは聞いちゃいけない話かもしれないか思ってたそう……………。

「これ、アリスくん。転生の話をしとらんから」

「そうだったわね。あれは、薬の開発者でもわからないもんね」

「……………？」

あたしは彼女に自分は新一の体だけど別の人格が宿っている話をした。

さすがに薬の開発者の彼女もこの話は寝耳に水だったらしく、ポカーンとしながら話を聞いている。

そして、一通りの話が終わった――。

「アリスという女の子の魂が工藤新一の肉体に？ 何それ……？ そんな話……」

「やっぱり、信じられないか」

「でも、あり得なくはないかも。性転換したマウスは気性が激しくて食欲旺盛だった。でも、雌になった瞬間に別個体のように大人しくなって少食になったの。ホルモンバランスが変わったからだと思うけど——何より、あなたがそんな嘘をつく意味がない。薬の開発者である私にそんなことを言うなんて、ナンセンスだもの」

「なるほどのう」

シエリーはあたしの話を聞いて、性転換したマウスの性格が急変した話をする。

なにそれ？ 怖い話なんだけど……。

「じゃあ信じてくれるのね」

「不本意なのは間違いないわよ。スピリチュアルな話は嫌いなの。でも、そう考える方が違和感を感じないから仕方ないわ」

シエリーは渋々ということを強調しながら、あたしの話を信じてくれた。

ふう、良かった。ここの説明が一番難しいのよね……。

「そっか。じゃあ、お互いのことがわかったところで、あなたの名前を考えましょう」

「名前……？」

「そ、名前よ。シエリーちゃんも、宮野志保ちゃんも、使うわけにはいかないでしょう？ でも、呼び名がなきゃ不便だし」

「好きになさい。なんだっていいわよ。そんなの」

あたしたちはシエリーの偽名を考えることになる。

まあ、考え付いたのは漫画と同じで「コーデリア・グレイ」のグレイから「灰」と「V・I・ウォーシヨースキー」の「I」から「あい」を取ってそれを組み合わせされた、「灰原哀」という名前になった。でも——。

「じゃあ、「灰原哀」ちゃんね。むう〜」

「なんで不満そうなの？」

「だって、『哀』じゃなくて『愛』なら、愛梨寿の『愛』とお揃いでかわいいじゃない」

あたしは博士以上に『哀』ではなくて『愛』を使うことを推した。自分の名前に『愛』の字が使われていてお揃いにしたかったから。でも、哀は譲らなかつた。

「理由を聞いて自分の決断に自信が持てたわ」

「哀ちゃん、そりゃないわよ」

お揃いにしたかったというあたしの言葉を聞いて哀はそうしなくて良かったと微笑んでいる。んもう。厳しいこというわね。

「ところで哀くん、解毒剤は作れるのかね？ その、アポトキシンAPT-X4869とやらの」

「無理よ。あんな膨大なデータいちいち覚えてないわ。大体、藤峰さんは転生とやらをしたんでしょ？ 工藤新一の体に戻る必要はないじゃない」

ここに来てようやく博士は哀に解毒剤が作れるか尋ねて、哀は無理だと答える。

さらにあたしは元に戻る必要性がないとも……。

確かにそうよね。体が小さくなったコナンくんとは事情が違うよね。不便じゃないんだもん。

「それが、何とか戻ろうと思っちゃったりしてるんだよね。新一のこと、待つてる人が沢山いるからさ」

「とんだお人好しだと思ってたけど、そこまでいくと馬鹿ね……」

「それは否定しないけど、何とかならないかな？ 哀ちゃんだけが頼りなのよ」

あたしが元通りにしたいという意味をきちんと捉えた哀は馬鹿だと言う。

そうかもしれないけど、戻りたいのは事実だから、彼女の助けは必要不可欠だ。

「残念だけど、研究所や施設は私が消えた瞬間に全部消すくらいのこととはやる組織だから。薬のデータなんか残さない。諦めてちょうだ

い。役立たずで悪いわね」

彼女は黒の組織は哀が脱走して血眼になつて彼女を捜している上に、研究成果を誰かに話しても無駄になるように証拠を必ず潰すと断言した。

「まっ、そんなに簡単じゃないか。気長に頑張るしかないってことね」
「……ところで。いつまで私を膝の上に乗せてるつもりなの？ そう
いうの止めてくれるとありがたいわ」

「だって可愛いんだもん」

偽名を考えるにあたって、あたしは哀をずっと膝の上に座らせて後ろから抱いていた。

いやー、何かわからないけど母性みたいなのが溢れちゃう。

「私はあなたよりも歳上なの。ちよつとは敬意を持ちなさい」

「いいじゃん。昔から妹が欲しかったのよね〜」

「あなたみたいな姉は要らないわ。離しなさい……、——あっ！ 思
い出した。そういえば、あそこなら薬のデータがあるかも」

ムツとした表情でイライラを口にする哀はその瞬間に何かを思い出したみたいだ。

彼女によれば、姉である宮野明美の恩師である南洋大学教授の広田正巳のところ薬のデータが入ったフロッピーディスクがあるかもしれないということだ。

哀が数年前に姉から送ってもらった旅行写真のデータが入ったフロッピーディスクを送り返したときに薬のデータが混じっていたことが原因らしい。

そして、それはビンゴだった。広田教授に電話して確かめたところ、宮野明美が送ったフロッピーディスクの中に変なデータが入ったものが紛れていたとのことだ。

今日はもう遅かったので、あたしたちはアポをとって翌日の夜に静岡に向かうことに決めた。

「じゃあ、今日はお風呂入ってゆっくり寝なさい。疲れてるでしょ？

新一の家から哀ちゃんも持ってくるから」

ということ、あたしは哀にゆっくりするように声をかけた。

彼女がさつき使ってた枕はあたしのだから、新しいの持ってこなきゃ。

「ねえ、ところで……さつき私が寝ていたベッドってあなたのベッドよね？」

「そうだよ」

「私はどこで寝るのかしら？ この家、阿笠博士の一人暮らしだったんでしょ？ いくつも寝室があるとは思えないんだけど」

「あのベッドに決まってるじゃない」

哀は自分が寝る場所を心配していたので、あたしのベッドを使えば良いと答えた。

そんなの当たり前じゃない。

「じゃあ、あなたはどこで寝るのよ？」

「もちろん、自分のベッドで寝るわよ」

「……………」

あたしも自分のベッドで寝ると答えると哀はしばらく黙った。

ああ、スペースの心配をしているのね。

「大丈夫よ、哀ちゃん。小さいから」

「ソファで寝るわ。毛布貸して」

「いやーん。照れちゃってかわいい♡」

「はあ……、この人を頼ってここに来たことをこんなに早く後悔するなんて思わなかったわ……」

あたしが一緒に寝ることを照れて嫌がる哀のことを可愛いと言うと、彼女は思いきり迷惑そうな顔をする。

結局、今度二段ベッドを買う約束をして今日のところは諦めてもらった。

妹が出来たみたいで嬉しいのは本当なんだけどな——。

翌日——大学教授、広田正巳の家に向かったあたしたちはまたもや事件に遭遇することになった——。

大学教授殺人事件

「哀ちゃん、服を買ってきたわよ。ほら、これなんてあたしとお揃いの花柄で……一緒に歩いたらきつと姉妹に見られちゃう♡」

「博士の買った服を着るわ」

あたしが買ってきた花柄のワンピースを一瞥した哀は阿笠博士が買ってきた地味な方の服を選んで着替えると言った。

「どうやらあたしとペアルックは嫌みたい……」

「んもう。ツンツンしてるんだから。でも、そんな哀ちゃんも可愛い」
「はあ……」

彼女をギュツと抱きしめると面倒くさそうな顔をしてため息をつく。

「もー、そんなに照れなくても良いじゃん。」

「ほら、おやつも買ってきたから。着替えたら車に乗るわよ」

「ピクニックに行くんじゃないのよ」

「分かってるわよ。夜のドライブに行くんだもの」

「博士、この人と会話をする方法を教えてくれないかしら？」

おやつを用意して博士の車で静岡までドライブだと口にするると哀は博士にあたしについて苦言を呈する。

「コミュニケーション能力はある方だと思ってたけど……」

「まあまあ、明るいのがアリスくんの良い所じゃし」

「無警戒、ノー天気、甘過ぎる性格。探偵にはどう考えても不向きだわ。工藤新一の知識があつても、これじゃきつとボロがでる」

「ありやま。厳しいこと言うわね」

哀はあたしには探偵としての適性がないと断じた。

確かにそそっかしいし、疑うのとか好きじゃないから彼女の言うてることは正しい。

「だったら、態度を改めること。組織と関わるつもりなら少しの甘さが命取りになるわ」

「うん。わかった。哀ちゃん、心配してくれてありがとう」

「……暑苦しい」

あたしは忠告してくれた哀をもう一度抱きしめて、頭をワシヤワシヤと撫でた。

やっぱ、抱き心地がいい子だね。哀ちゃんは……。

あたしたちは車で3時間かけて静岡県にある広田正巳教授の家に向かった――。

「ああ、阿笠さんですね。主人から話を聞いております」

夜遅くに広田教授の家を訪問したあたしたち。

今日、彼は何人か教え子と会う予定だったらしく……その後なら話を聞いてくれると言っていたのだ。

「客人はもう帰られたのですか？」

「ええ、主人の教え子が何人か入れ違いで来たみたいですけど……。

あら？ 鍵なんてかけてどうしたのかしら？ あなた？ あなた？

変ね〜」

広田の奥さんは彼の客人は皆帰ったあとだと言いながら、彼の部屋をノックする。しかし、返事がない。

どうやら、内側から鍵がかかっているみたいで、ドアも開かないらしい。

「――どれどれ……。――っ!? 奥さん！ この部屋に合鍵とかはありますか？」

あたしはひよいとジャンプして窓から部屋の中を覗いてみる。

すると、物が散乱した部屋の中で本棚に押しつぶされながら頭から血を流している広田がいた。

大変だ。早く中に入らないと……。

「いえ、そんなものはないけど」

「博士！ このドアぶち破るわよ！ 手伝って！ 早く！」

あたしと博士で力を合わせてドアを無理やり開けて中に飛び込む。

ドアが開くと中の様子にみんなが気付いた。

「――っ!?!」

「きゃあああああつ！」

「博士！ 警察を呼んで！」

広田は死んでいた。頭から血をドクドクと流しながら。

なんで、あたしが行く先々でこう人が死んでるのよ。たまには何事もなく返してほしいわ……。

「まさか、毛利さんの助手である君がいるとは思わなかった」

「横溝警部、先日はどうもお世話になりました」

静岡県警の管轄である今日の事件は横溝参悟警部が担当することになった。

彼は早とちりすることが多いけど、真面目で有能な方の刑事さんだ。

そして、小五郎のことを尊敬している貴重な人でもある。

「いえいえ、ズバリの小五郎と阿吽の呼吸のアリスさんの推理は実に素晴らしい。今日はそれが聞けそうにもないですが」

横溝警部は小五郎のおかげであたしのことも割と評価してくれている。

あたしの推理を聞けないと言ってるってことは――。

「あれ？ それはどういうことですか？」

「だって、これはどう見ても事故でしょう。恐らく本棚の上の物を取ろうとして、バランスを崩し本棚ごと倒れ込み、先に棚から落ちた置物で頭を打って死に至ったんです。――その証拠に部屋の窓もドアも鍵がかかってますし、唯一の鍵は散乱した本と共にノートの下に……」

やはり横溝はこの事件を事故だと思っているみたいだ。

状況は彼の言うとおりの如何にも事故って感じよね……。

「確かにそうですが、変なのよね。ほら見てください。この床に落ちてひっくり返った電話……。受話器が外れてません。本が上から覆いかぶさるくらいの勢いで物が散乱してるのに」

「そういえば変じやのう。アリスくんは事故じやないと思つとるのかね?」

「うん。上手く偽装してるけど、作為的なものを感じるわ。殺人事件の可能性が高いわね」

あたしはこの現場に不自然さと作為的なものを感じて殺人事件の疑いがあると口にした。

まあ、窓もドアも閉まって鍵は室内にあったんだけどね……。

「ちよ、ちよつと待つてくださいいよ、アリスさん。だとすると、これは……、密室殺人ということになりますよ」

「ええ。容疑者は広田さんを訪ねたという教え子さんたちになりそうです」

興奮しながら密室殺人だと大声を上げた横溝の言葉をあたしは肯定して、犯人は今日、この家を訪問した人たちの中にいると彼に告げた。

広田が会う予定だと言っていた教え子たちというのが怪しい。

「ところで、アリスさんたちは何故ここに?」

「えつと、博士の知人が間違つてフロツピーを広田さんに渡しちやつて、それを返してもらいにきたんです。多分、あのパソコンの横に……」

「無くなってるわよ。ごつそりと全てのフロツピーディスクが。この分じや、パソコンの中のデータも消されているかも」

横溝にここに来た理由を問われたあたしはそれに答えようとパソコンに視線を送ったら、既に哀がパソコンをいじりながらフロツピーが無くなっていることと、データが消されている可能性について声に出す。仕事が早くて助かるわ。

「あの少女はアリスさんの妹ですか?」

「そうでーす♡」

「親戚よ。ただの親戚!」

「もう、哀ちゃんったら。妹みたいなものなんだから、それでいいじゃない」

「絶対に嫌よ」

哀のことを妹かと問われたあたしが肯定しようとする彼女はいつもよりも大きな声を出してそれを否定した。

「はははっ、仲がよろしいですな。さすがにこんなに小さな子供を連れて人殺しには来ませんよね」

哀のおかげであたしたちはとりあえず容疑者から外された。

それでも疑う人もいるから横溝警部が担当で良かったわ……。

「まさかあの連中がフロッピーを回収がてら……なんてことないわよね？」

「データ回収に訪れた組織が広田教授に見つかって撲殺した可能性は大いにあるかもしれないわ」

「でも、決めつけは良くない。いろんな可能性を疑ってかからなきゃ。まずはここに来た人たちの話を聞いてみましょう」

黒の組織がこの件に関わっている可能性があるけど、そうじゃない可能性も高い。

とりあえず状況を整理することが真実に近づく第一歩だ。

「へえ、あなたの頭にも疑うって言葉があるのね。少し安心したわよ」

「えへへ。これでも名探偵の助手だもん。見てて、必ず真実を解き明かして見せるわ」

あたしは哀にウインクして見せて、この事件を解決すると意気込んだ。

そして横溝警部をお願いして、共に聞き込みをすることにする。

まず、広田正巳の妻である広田登志子は8時から11時まで町内会の会合で出かけていたため、最初に訪れた教え子の細矢としか会っていないとのことだった。

彼女は2、3人教え子が来ると聞いていたけど名前もわからないとのこと。

「うーん。広田教授の教え子を一人ずつ当たるしかないのか……」

「あら、電話に留守電が入ってるみたいね。横溝警部、これを聞けば何かわかるかもしれませんよ」

『メッセージは13件です……。ピー……もし……し……白倉です

……」

あたしは電話の留守電機能に何かメッセージが入っていることを確認して、それを聞いてみることにした。

最初の電話は白倉という男から……。それは良いんだけど……。

「妙ね。このテープ……。とどこどころ音がとんでるわ……」

テープから聞こえる音声が何故か途切れ途切れになっている。これはどういうことかしら？

その次のメッセージは盛岡と言う男のものだった……。

この二人の連絡先を横溝警部が登志子に尋ねていると部屋に男が入ってくる。

「あの一、白倉は僕ですけど……」

入ってきた男はモデルをやっている広田の教え子——白倉という人で、最初に留守電を入れた人間だ。とりあえず、容疑者の一人は彼ね……。

留守電を全部聞いて白倉から10件、盛岡から2件の電話が来ていた。

そして最後のメッセージは——。

「黒……生命です……。当社の新……い保険の説明にお伺いしたいん……」

なにも知らない人が聞いたら保険会社のセールスらしい伝言ね……。でも……。

「この口調……。この声は……。聞き覚えがあるわ」

「ウオツカ……」

最後の留守電は黒の組織でジンの相棒をしているウオツカという人の声だった。

うーん。やつぱり連中もここを嗅ぎつけたか……。

「じゃあ、アリスくん。この事件はやはり……」

「ううん。用心深いあいつらが声の入ったテープを現場に残さないでしょ」

「彼らなら密室トリックなんてまどろっこしいことしないで、殺して終わりよ。テープを回収してね。だから、今ごろ焦ってるんじゃない

かしら。この騒ぎで回収できなくなったから」

「でも、近くには来てそうよね。組織の奴ら。博士のワーゲンを移動させて正解だったわ」

この事件自体は黒の組織が関わっている可能性は低いけど、連中だつてフロッピーディスクを狙っている。

近くに奴らがいる可能性は大いにあるのだ。

その後、同じく広田に会いに来ていた会社員の細矢と獣医の盛岡がやってきた。

細矢は南洋大学を受ける娘の推薦状をもらいに来たものの広田が大分酔っていたために帰ったと証言する。

そして盛岡は広田からの誘いでチェスをしに来たらしい。

彼は時間を決めていなかったため電話をしたものの留守番電話になったため9時半ごろに来たという。

玄関は開いていたものの誰も出てこない中で中に入り、部屋の前まで来てノックしたものの返事がないから帰ったと証言した。

そしてそれから1時間半後にあたしたちが来て死体を発見するという流れ……。

一方、白倉は雑誌の企画に使うために大学祭で女装して広田と撮った写真が入ったフロッピーを借りに来たと証言。

登志子の話によると広田は写真や仕事関係のデータ、盛岡とのチェスの勝敗までパソコンに保存していたんだって。マメな性格してるわよね。

「そのフロッピーを犯人が広田教授殺害後にごっそり持ち去ったという事か……」

「でも、先生がご自分で全部学校に持っていったかもしれませんよ」

「ありえるな。あの人、ラベルとかの印なんかつけてなかったからな。全部まとめて……」

「それにこの部屋、密室だったんでしょ？ どう見たってこれは——」

横溝警部に細矢たちは広田が自分で大学に持って行ったのではと主張した。

確かに状況としてはあり得くはないけど――。

うーん。この部屋の侵入口は全て閉ざされていて……スキがあるとしたら、入口のドアの下の鍵がやっと通るぐらいのスキ間のみよね。

輪ゴムかテグスを使えば――広田を殺害した後に鍵を奪って、部屋の外で鍵を掛けドアの下のスキ間から鍵を部屋の中央に運ぶ事はできるかもしれないけど――都合よくノートの下に滑り込ませることは……まず不可能だわ。

気になるのは部屋中に散乱しているのに……、なぜかドアから電話までの一直線上には問題のノートしか落ちてなかった事と……少々ワカメになってる留守番電話のカセットテープだけ……。

「意外ね。そんな真剣な表情も出来るのね。ヘラヘラしてるだけかと思ってたわ」

「一人が死んでるんだもの。それに、広田さんは哀ちゃんの大事な人の恩師だから、ちゃんと真相を突き止めなきゃ」

あたしは探偵としてはダメダメな性格だけど、事件には真剣に取り組むことは一貫している。

今回は哀の身内の関係者だし、特に気合を容れて取り組んでいた。

「どうしてそこまで、私に構うの？ 薬の開発者だから？ 私はあなたにとって死神かもしれないのよ」

「あたしはこの世界で一人ぼっちだったから、哀ちゃんの気持ちもわかるのよ。たった一人の肉親だったお姉さんがいなくなって、ホントは不安でいっぱいなんだと思う」

「わ、私は別に……」

頼れる人がまったく居なくなるのって精神的には辛すぎる。

転生したてで博士にも信頼してもらってないときは本当にキツかった。

「だから決めたんだ。あたしだけでも、哀ちゃんの味方になろうって。哀ちゃんが安心して暮らせるまで……あなたをあたしは一人ぼっちにさせはしない」

哀を一人にはさせたくない。せめてあたしだけでもずっと彼女の

助けになりたい。

あたしはそう誓って彼女と接して来たのだ。

「——っ!? あなたの甘さは病気レベルね。それに現実が見られなくなっているみたい。この事件にしたってそう。どうやったってノートの下に鍵を運ぶなんて物理的に不可能。ここも危険なんだから早く帰ったほうが賢いわよ」

「まー、そうなんだけどさ。やっぱ気になっちゃうのよ。作為的なものを感じるから。そういう臭いがあたしにいつも真実を教えて——
痛いっただい! ちよつと何これ〜?」

哀は鍵が室内の本の下から出たから事故だと思っているみたい。

でも、あたしにはそれがどうしても引つかかる——とか思っている
と何か硬いものを踏んでしまった。

「チエスの駒でしょ。盛山さんって人が広田教授とチエスをする約束をしてたみたいだから」

「あら、本当ね。こんなものまで撒き散らして。犯人も部屋を散らかすのに容赦ないわね〜」

「諦めなさい。犯人なんて居ないのよ。事故なんだから。それとも何? 自動的に鍵が本の下に入る魔法のスイッチでもあるというの?」

あたしが踏んづけたチエスの駒を見ながら哀は諦めるように促したが、彼女のスイッチという言葉にピーンと来る。まさか……この密室トリックは——。

「魔法のスイッチ? ピタ○ラスイッチ? あっ! そうか。それよ!」

「ピタゴ○スイッチ? 何よそれ?」

「あ、そっか。こっちじゃ放送されてないんだっけ? とにかくわかったわ。この事件はやっぱり殺人事件。広田さんを殺した後、トリックを使ってこの部屋を密室にし、事故死に見せかけたのよ」

あたしはようやくこの事件の全ての謎が解けた。そうよ、チエスの駒や留守電のカセットテープを利用したピ○ゴラスイッチみたいなものよ、このトリックは。

だとしたら、広田正巳を殺したのはあの人に違いない——。

「ええーっ!? 密室殺人のトリックがわかったですって!? 本当ですか? アリスさん!」

「ええ、本当よ。留守番電話のカセットテープとチェスの駒を使えば……もの見事に密室を完成させることができるわ!」

驚く横溝警部にあたしは説明する。カセットテープと留守電話によつて密室に見せかける方法があると。

「アリスくん。本当にそんなことが出来るのかね?」

「面白いことを言うわね。女子高生探偵さん。論より証拠……見せてもらおうじゃない」

あたしの言葉に懐疑的な博士の言葉を受けて哀は実際にやって見せるように言ってきた。

そのつもりよ。見てもらったほうが確かに早いしね。

あたしは周囲の警官に準備を手伝ってもらい、さっそく実験を行う。

警官の人に買ってきてもらった新しいカセットテープを適当な長さだけ外に取り出して電話にセット。

そして、テープを持ったまま部屋から出て鍵のリングをテープに通し、カギを床に置くと残ったテープを持って部屋のノートが落ちていたところに戻り、ポーンの駒3つを三角形に置いて余ったテープの先端を電話に一番近い駒に乗せてその上にノートを置く。

「テープの巻き取る力で駒を倒すつもり? そんなの机上の空論だわ。駒の台座はしっかりとしているからそのままノートの外に出て——」

「駒を逆さにするのよ。頭は丸いけど、このノートみたいに裏の厚紙がしっかりとしてれば、ほら……乗せられるでしょ」

あたしは部屋から出ると部屋の鍵を掛けて床に鍵を置いて、手に持った携帯から電話を掛ける。

すると留守番電話が作動し、テープが巻きとられ——その力で鍵は部屋の中に入り、駒にぶつかってノートの下に……入り込んだ。

さらに、そのまま留守番電話が録音され続けければテープが巻きこまれて証拠が無くなる――。

「どうかしら？　これなら密室殺人は可能ですよ。そして、不自然な回数……留守電を入れた人が一人居ますよね？」

「そうか！　このトリックが使えたのは、10件も留守番電話に伝言を入れている……白倉陽さん！　あなたという事になりますね！　テープが所々ねじれていたのはトリックを使った証拠――間違いありませんね？」

ここまで推理を話したら横溝も誰が犯人なのか察したみたいだ。

10回も電話したのはちよつと怪しかったわね……。

「ちよ、ちよつと待つてください！　さっきのトリックはすごいと思いましたが、何の証拠があつて僕なんです？　大体、僕が犯人だとしてわざわざ現場に戻つたりしませんよ」

しかし白倉は留守番電話が多いだけでは証拠にならないし、犯人なら現場に戻つたりしないと主張する。

「戻つてきたのはある物を回収するためでしょ？　そう、あなたの指紋がベタベタついた――留守番電話のテープをね。さっきテープを見させてもらったとき、一目でわかつたわ。――誰かの指紋が多数付着していることが。恐らく、あなたは何らかの原因で広田さんと口論になつて衝動的に撲殺してしまつた。すぐにあのトリックを考えたのは頭いいと思うけど、手袋すら準備してないんだもの、そりやテープに指紋は残っちゃうわよね」

「くっ……」

でも、白倉の一番の失敗は衝動的な犯行だからこそ証拠隠滅を怠つたことだ。

密室にしたがゆえに回収しそなつたテープには指紋がべつたりだし……、その上――。

「残念だったわね。第一発見者にでもなつて、スキを見てテープをすり替える予定だったんでしょうけど。あたしたちが来てしまつたからそれが叶わなかつた。横溝警部、彼の周辺を調べてみてください。きつと、フロッピーディスクが出てくるはずですよ。この短時間で大量

のフロツピーを確認するのは不可能だと思いますから」

彼がフロツピーディスクを持ってきているのも間違いがないので、彼の近くを探せばフロツピーも出てくるはずだ。

あたしがそれを指摘すると彼は諦めたような表情をする。

「……家の前に止めた車のダツシユボード……。フロツピーは全部そこにあるよ。あの写真が入ったフロツピーもな——」

白倉は犯行を認めて、動機について語りだした。

彼は女装の写真を送ってほしいと広田に頼んでいたが、届いたのは「君の素顔はこれに勝るものなし」というメッセージと、昔の彼の写真——彼はモデルになった時に顔と名前を変えていたらしい。

素顔の写真を編集部に見せられないと何とか女装写真を借りたいと広田に会いに来たのだが、女装の写真はどのフロツピーか忘れたが送った昔の彼の整形前の写真ならすぐに出てくるから編集部に送ってやろうかと言われて思わずカツとなって殴り殺してしまっただいことみたい。

いやいや、キレやすいにも程があるでしょ。まったく、この世界の人たちってすぐに殺してしまう人が多いんだから、嫌になっちゃう。

「多分、広田さんはそのままの自分を曝け出してコンプレックスを克服してほしいって思ったんでしょね。もっと、あなたに自信を持って欲しかったのよ。お節介だとは思うけど……あなたの力を買っていたんでしょね」

「……その言葉は広田先生から直接聞きたかった……。僕は……大馬鹿者だ……」

白倉も広田のことを尊敬していなかったわけではなかったの、後悔はしているみたい。

キチンと罪を償ってほしいものだ……。

「いやー！ さすがはズバリの小五郎の懐刀のアリスさん！ 見事な推理でした！ あなたのおかげで事件が解決できましたよ！」

「あ、そう？ じゃあ、フロツピー返してください♡」

「それはいくらアリスさんの頼みでもダメですよ。証拠物件なんですから」

横溝が推理を褒めて持ち上げてくれたものだから、愛想よくフロツピーディスクを返してもらえるようお願いしたら、やつぱりダメって言われちゃった。

そりや、殺人事件の証拠なんだからダメだよね〜。

「えへへ。やつぱダメですよ〜。じゃ、今日のところは帰ろうか。博士、哀ちゃん」

「……思ったよりもやるのね。藤峰さんって。いつもあんな感じならいいのに」

「ふえっ？ どーしたの、急に。褒めてるの？」

あたしが帰ろうと声をかけると、哀が手放しに褒めてくれた。

あれだけ煙たがれていたからびっくりだ。

「ちよつとだけ、頼りになるって思ったわ。お姉ちゃんが気にしてたのもわかった気がする」

「ふっふっふ、それならあたしのことを『アリスお姉ちゃん』って呼んでも良いんだよ。というか一度で良いから呼んでちよーだい♡」

「死んでもお・こ・と・わ・り……！」

「あーん。酷こつい。哀ちゃんの意地悪〜」

でも、お姉ちゃんとは呼んでもらえなかった。

死んでも嫌だっつてそこまでのこと〜？

あと、後日フロツピーディスクが警察から届いたけど、パスワードを入れた瞬間に内蔵されてたウイルスが作動してデータが全部消えちゃった。

あーあ、そんなに簡単には薬のデータは手に入らないかー。

灰原哀ちゃんとは長い付き合いになりそうね——。

アリスVS怪盗キッド 前編

「怪盗1412号？ アリスちゃん、知ってる？」

「何それ？ 知らなくい」

春休みのある日、園子が唐突にあたしと蘭に世間を騒がせているという泥棒の話振ってきた。

怪盗1412号……全然覚えがない。前世の自分の記憶力の無さが恨めしくなる。

「蘭はともかく、探偵の助手のあんたがなんで知らないのよ!! 今、若い女の人の中でも結構話題のおじさまよ！」

「おじさま怪盗？ へえ、そんなの居たんだ。それがどーしたのよ」

園子が言うには怪盗1412号とは話題のおじさんの泥棒みたいだ。

若い子に人気なのに、あたしも蘭も知らないって……。

「だ〜か〜ら〜、あんたと蘭のおじさまにその怪盗1412号を捕まえて欲しいのよ」

「あたしと先生でその怪盗さんってのを捕まえる？ そんな雲を掴むみたいな話——大体、どこに怪盗さんが現れるなんてわからないでしょう？」

で、本題はあたしと小五郎でその怪盗とやらを捕まえて欲しいということらしい。

うーん。どこに出てくるのか分からない泥棒を捕まえるのはちよつと難しいかも。

「ふっふっふっ、それがそうでもないのよ。今、米花博物館で世界の有名な宝石を集めた展覧会が行われてるの知らない？」

「あー、なんか聞いたことあるわ」

「うちのパパが家宝の宝石——幸運を呼ぶ真珠 ブラックスター 漆黒の星を出してるんだけど。それを怪盗1412号の魔の手から守って欲しいのよ」

園子曰く、博物館で展示されてる鈴木家の家宝のお宝が狙われているから、それを守るついでに怪盗を捕まえて欲しいのだそうだ。

来ることが分かってるなら展示止めればいいのに……。

「だったら、アリスちゃんやお父さんに頼む前に警察に任せたほうが……」

「ダメよ。だって私は怪盗1412号の顔が見たいんだもん。アリスが捕まえたら顔を見せてくれるでしょ？」

あー、園子は怪盗1412号の素顔に興味があるのか。

なるほど。隠しているとミステリアスで魅力的になるもんね。スキー場で恋に落ちることが多いのもこういう理屈みたい。

「いや、まあ。園子ちゃんが見たいならね。そんなに、そのおじさん怪盗に興味があるんだ」

「きつと素敵なおじさまに違いないわ。うふっ……、ねえお願い。親友の頼みだと思ってさ。我が家の家宝を守ってよ。あんたとおじさまが頼りなの」

園子の中では既に怪盗とやらの素顔は超イケメンでダンディなおじ様って感じで固まっているみたいだ。

その怪盗とやらの期待値上がりまくっていることなんて知らないだろう。しかし、ここまで目を輝かせる彼女を見ると――。

「先生の意見はわからないけど。あたしは良いわよ。園子の言う素敵なおじさまにも興味あるしね」

「さすがアリス！ 話が早くて助かるわ」

あたしも興味が出てたりする。本当に格好いい泥棒なのか、それとも見なけりや良かったと思うのか？ こういう話題は大好きだ。

「あまり期待しないでね。――あれ？ 蘭ちゃん、どしたの？」

「あ、あれは新一……!? 新一〜！」

「ちよつと、蘭！ 信号、赤よ！」

横断歩道を渡りきったとき、ふとすれ違った男の人が新一に激似だった。

それを見た蘭が彼を新一だと勘違いして、赤信号に変わったにも関わらず追いかけてようとしたので、園子が慌てて止めたのだ。

「新一……それにあの女の子は誰？」

「今のは新一じゃないでしょ。似てたけど」

「そ、そう？ 新一に見えたけど」

あたしは自信を持ってあれは新一じゃないと断じる。だって、新一はあたしだもん。

「あり得ないわよ。そんなの」

「あれ〜？ アリス。妙に自信満々じゃん」

「そりゃあ、蘭ちゃんのこと愛しちゃうってる新一が黙って女の子と会うなんてあり得ないし」

さっきの男の人は女の子と歩いてた。だから、蘭には余計な心配をさせたくないと思って、あたしは彼が新一ではないと力説した。

「あ、あ、愛して……って、そ、そんなんじゃないから！」

「いつ見ても蘭ちゃんの照れる顔は可愛いなあ♡」

「面白いくらい真っ赤になるもんね。クラス中が夫婦認定してるのに」

「二人とも〜！ からかわないですよ！ 本当に新一だったんだってば！」

ついでに、顔を赤くして照れる蘭の顔を堪能したあたしは、園子から怪盗1412号が出したという予告状のコピーを受け取り、博士の家に戻った――。

「で、その怪盗さんとやらを捕まえに行くの？」

「うん。怪盗1412号って言うって。アルセーヌ・ルパンみたいに予告状を出してるのよ。これ、コピーだけど」

家に戻り、怪盗1412号のことを博士と哀に話す。

哀はあたしが手渡した予告状のコピーに目を通した。

ちなみに、怪盗1412号は世界を股に掛けた大泥棒であり世界中で美術品や宝石を盗んでいる。

FBIだかCIAだかインターポールだかが極秘につけた国際犯罪者ナンバーが1412らしいから、そう呼ばれているんだって。

「エイプリル・フール……月が二人を分かち時……漆黒の星の名の下

に波にいざなわれてわれは参上する……怪盗……なんで、こんなに読み難いのかしら？」

哀はどこどころに亀裂が入っている予告状を朗読する。

そうなのよ。これ、最後のところが切れてるし、とても読みにくいのよね……。

「なんか、園子ちゃんのお父さんがイラツとして破いちやっただって」

要するに、破かれた予告状を継ぎ接ぎしたやつをコピーしたから読みにくくなっている。

大事な暗号なんだからイライラをぶつけないで欲しい。

「ほう。怪盗1412号か。アリスくん、こりやあ捕まえるのは難儀じゃぞ」

「博士は知ってるんだ」

意外なことに阿笠博士は怪盗1412号を知っているという口ぶりだった。

若い子に人気といわれてたけど、博士はミーハーなのかな……。

「この前、ニュースで見てのう。興味本位でパソコンで調べてみたんじゃよ」

「へえ。で、どんな人なの？」

「最初に怪盗1412号が現れたのは18年前のパリ。その10年後に一度姿を消したんじゃが8年たった現在、日本で再び活動するようになったんじゃ。怪盗1412号には『平成のルパン』、『月下の奇術師』と様々な呼び名があるんじゃが、その中で最も親しまれている呼び名がある。各国の警察を子供のように手玉に取る怪盗1412号に興味を持った、ある若手小説家が1412番号を洒落でこう読んだんじゃ『K・I・D』と——」

「『K・I・D』？ あれ？ まさか……」

博士から聞いた『K・I・D』のスペルの怪盗なら、あたしは知ってるかもしれない。

というか、コナンの世界で怪盗といえば彼しか居ないもん。

「怪盗1412号……人呼んで……、怪盗キッド！」

「怪盗キッドっ?!? 怪盗1412号って、怪盗キッドのことなの!?!」
あー、やっぱり怪盗キッドか……。なんでまた気付かなかったんだろう。

あれだ。園子がおじさまとか言ったからだ。

あたしの中で怪盗キッドは若い男だからなあ。確か、彼も高校生のはずだし……。

「あら、随分と驚いているのね? 怪盗キッドのこと知ってるの?」
「あー、うん。何か凄いマジックを使う泥棒ってことは知ってる。1412号っていうのは知らなかったけど。まずいなく。あたし、捕まえられるかな?」

哀はあたしが怪盗キッドを知っていることが意外みたいだったけど、彼がマジシャンの怪盗だってことはよく知っている。

トリックのこととかは、ほとんど覚えてないけど。

「珍しく弱気なのね。あなたでも手に余るくらいの泥棒ってこと?」
「そうね。かなり準備をしないと追い詰めても逃げられるかも。捕まえてみたいって気持ちはあるけど……」

「捕まえるなら至近距離から麻醉銃を当てるしかないじやろう。それで、その暗号は解けそうかね?」

普段はほとんど使わないけど、コナンくんが持っていた時計型麻醉銃はあたしも護身用として持っている。

キッドを捕まえるのなら、確かにそれを当てるしかないかも。

「それが全然分かんないのよ。怪盗キッドが来る方向と時間を指し示していることは間違いないんだけど」

「案外、意味なんて無いのかも。警戒心をそつちに割いて現場の混乱を狙っているの」

「あはは、哀ちゃんらしい考察ね。でも、怪盗キッドは意味のない予告状なんて送らない。楽しんでるのよ。彼は」

残念ながら予告状の暗号はまだ解けてない。哀は意味などないかもしれないと言うけど、彼は無意味な予告状は出さない。

そういうセンスの人じゃないから……。

「会ったこともないのに何でそこまで分かるの?」

「えっ？　そ、そりゃあ探偵の勘よ。探偵の勘！」

まさか漫画やアニメで見て知ってるとも言えず。あたしのキツド論は勘とかいう訳のわからない理屈で終わった。

哀は心底呆れたような顔をしていた……。

3月31日の昼過ぎ……あたしと蘭と小五郎は米花博物館を訪れた。

博物館周辺は警官隊に囲まれていて、既に厳戒態勢だった。

「いやー、毛利探偵！　この度は娘のわがままを聞いてくれてありがとうございます。名探偵であるあなたが来てくれて心強いです」

「なあに、この私が来たからにはたかがこそ泥一匹。簡単に捕まえてご覧に入れますよ。はっはっはっはっは」

園子の父、鈴木史郎は名探偵の小五郎が来てくれて安心だと煽てるので、彼は上機嫌そうに笑っている。

困ったなく。全然、暗号解けてないんだけどなく。

「アリスもありがとね〜」

「おおっ！　君が娘のクラスメイトの毛利探偵の助手か！　娘から話は聞いたよ。一人でも事件をいくつも解決してるとは。大したものだ！」

「ありがとうございます。すべて先生の教えの賜物ですが、あたしも微力を尽くさせていただきま〜す♡」

史郎はあたしの手を握りながら褒めてくれたので、目一杯の笑顔で頑張ると宣言した。

彼は友達のお父さんだし、いい印象を持ってもらいたい。

「うんうん。頼もしい。これなら家宝も安心して展示できるな」

「相変わらずのぶりっ子キャラ」

「えへへ」

普段の学校での態度との違いを指摘する園子に対してあたしは笑って誤魔化す。

自分は毛利探偵事務所の広報みたいなものだから、愛想が大事なのよ……。

あたしたちが漆黒ブラックスターの星を見ている後ろで警備にあたる警官たちがせわしなく動き回っている。

犯行予告は翌日なものその時間がわからないため前日から泊りがけで警備にあたっているとのことだ。

「提無津川ていむずがわの警備に全力で当たれ！ 怪盗1412号は提無津川から侵入するに違いない！」

ここの警備の責任者である茶木警視は大声で川の警備に人員を割こうとしていた。

なぜなら予告状に「波にいざなわれて」とあり、この周囲で波が立ちそうなのが提無津川だけだからとの理屈のようだ。それは、ちよつと安直だし根拠が薄い気がするけど……。

「ぶわーはっはっ」

そんな茶木警視の推理を聞いた小五郎は馬鹿にしたように吹き出した。

「おおー、珍しい。小五郎が他人の推理を笑うなんて……。」

「き、君は毛利小五郎。何がおかしいというのだ？」

「警視殿も甘いですな。波といえば海……海といえば沖……そして星といえばスター……。すなわち、予告状がさすのはアイドルの沖野ヨーコちゃん。彼女はコンサートのラストで必ず「ムーン・レディ」を歌う。すなわち月が分かつときとは、ライブが終わった4月1日の夜9時ごろ。怪盗1412号はその時間帯に米花公会堂のある方角から現れるということですよ！」

なんだろう。時々、小五郎のこのブレなき加減がすごいと思ったりする。

「どうやったたら、こんな発想に行き着くのか……ある意味凄い。」

沖野ヨーコが絡んで来るなんてあたしには想像も出来なかったよ……。

「せ、先生……、見事な推理ですが……」

「なるほど！ 確かに一理あるな！」

「さすがは名探偵！ 見事な推理！」

あたしが小五郎のフォローをする前に茶木と史郎が彼の推理を絶賛する。嘘でしょ……。

いつの間にか小五郎の名探偵像が独り歩きしてアホな意見も名推理に聞こえるようになってしまったみたい……。

まっ、あたしも暗号が解けてないから、しばらくは遊ばせておくか。最悪、あたしだけでも彼に辿り着けば良いんだし。

「ね、綺麗でしょ？ ブラックスターは」

「園子ちゃん？ そ、そうね。魅力的な宝石だと思うわ。ん？」

BLACK・STAR？ BS……、波……、電波……まさか!？」

園子に促されるようにして、改めて漆黒の星を観察すると、英語の表記が目についた。

——そのとき、あたしは閃く。この暗号が示していたその意味に。

「どーしたの？ アリスちゃん、急に」

「方向を確かめてるのよ。楽しい夜にするために、ね」

「……？」

なるほど。そういうことか……。怪盗キッドも手の込んだ暗号を作るものだ。

それなら、彼は必ずあそこに現れる——。



「こんな夜更けに出かけるの？ もう23時過ぎよ」

「ちよつと怪盗キッドに会ってくる。哀ちゃんも一緒にどう？」

「パス。興味ないし。それじゃあ、暗号は解けたのね」

あたしは出かける準備を終えて、哀を怪盗の見物に誘ったが断られる。

まあ、彼女は人前にあまり出たがらないから仕方ない。

「うん。〴〵月が二人を分かつ時〴〵っていうのは人工衛星と太陽の間に

月が入る時……つまり、怪盗1412号が来るのはBS放送が中断する深夜12時半から4時半の間だとあたしは推理したわ(※補足——この時代は、日食現象のせいで深夜の放送が休止されることがあった)」

時間帯についてはかなり範囲が広がるけど、とりあえず深夜の内にやって来ることは確定している。

「で、場所は？」

「BLACK・STARの頭文字がBSでしょ？　つまり、この暗号の“波”というのは“電波”を表しているのよ。怪盗キッドは電波と同じ方向からやってくる。つまり、彼がやってくるのは——杯戸シテイホテルの屋上ってわけ」

怪盗キッドはハングライダーで空を飛ぶ。つまり、ホテルの屋上から空を飛んで博物館を直指そうとするに違いない。

「随分と洒落た暗号だと思ったけど、蓋を開けるとロマンの欠片もないわね」

「えーっ、センス良いと思うけどなー。じゃあ行ってくる」

あたしは正直言つて怪盗キッドのセンスに脱帽しているのだけど……哀には伝わらないのかしら……。

どうやってこんな格好いい文章を書いているのだろう。

「気をつけなさいよ。泥棒なんか無理して捕まえてもあなたに何のメリットも無いんだから」

「キヤー、哀ちゃん心配してくれるんだー♡優し〜い♪」

「もう、二度と心配しない……」

心配してくれる哀をムギユッと胸に押し付けながら抱きしめると、ムツとした表情の彼女に毒づかれた。

哀ちゃん成分補給したし、怪盗さんを捕まえに行きますか！

「おー、本当に来た♪」

「やあ、お嬢さん。こんな所で何をしているのかな？」

ホテルの屋上でしばらく待つていたら、本当に白いマントとスーツとシルクハットでモノクルを付けたファッションの怪盗が現れた。

泥棒とは思えないくらい目立っているわね……。でも、全くスキがない……。

「やだー、あなたに会いに来たに決まってるじゃない。わざわざラフレター暗号文を送ってくれたのに、そんな言い草は酷いわ〜♡」

「これは失礼。まさかあなたのような可憐なお嬢様が招待に応じてくれるとは思ってもよらなかったもので。で、お姫様のお名前は？」

あたしが彼を待つていたと告げると、怪盗キッドはむず痒くなるようなキザなセリフを投げかける。

いやー、あたしのことお姫様だつて。正直なんだから〜♪

「藤峰愛梨寿、探偵の助手をやってるわ。見て見て〜。ほら、色々と買ってきたのよ。ポテチに、チョコに……、ジュースもほら。コーラとかサイダーとか。アルコールはごめんね。あたし、未成年だからさ」

「おいおい。パーティーでも始めるつもりかよ……」

キッドの前であたしはお菓子とジュースを広げると、彼は呆れたような口調になった。

あれま。ポテチの“のり塩”と“コンソメ”は好みじゃなかったかしら……。

「うん♡楽しいパーティーにしましょう。二人きりも良いけど、やっぱり——」

「……っ!? 花火？」

「大勢で集まった方が楽しいわよね？ あはっ！ ヘリコプターもこっちに気付いたみたいよ。怪盗さん♪」

あたしがお菓子の中に紛れさせていた打ち上げ花火を点火させると、ヘリコプターがこちらに向かってくる。

これで、警察たちもキッドがここにいることに気付くはずだ。

「……やり辛いな。どこまで本気なのか掴みどころがねえ」

「そう？ あたしって単純な方だと思うけどな。まさか、パーティー

に来て早々逃げ帰ったりしないわよね？」

「ふっ……」

あたしが逃げないかどうか尋ねると彼は不敵に笑う。

逃げだす瞬間に麻醉銃を撃とうと思ってたけど、そんなに単純には
いかないか……。

彼は懐に手を入れるとおもむろに何かを取り出した。こ、これは
……。

「無線……？」

「こちら、茶木！ 杯戸シティホテルの屋上に怪盗キッド発見！ 米
花町、杯戸シティホテル周辺。パトロール中の全車両及び、上空のヘリ
部隊に告ぐ！ 直ちに現場へ向かうように！」

「え、ワシだ。中森だ。杯戸シティホテル内を警戒中の各員に告ぐ。
キッドは屋上だ。直ちに捕えろ！」

キッドは茶木警視や中森警部の声マネをして、付近の警官をすべて
こちらに呼び寄せた。

うわあ……。やつぱり、この人は他の犯罪者と違ってスペックが桁
違いだ。

「すご〜い。どんな声帯してんのよ。でも、分かんないわね。ただ
の下見でわざわざ警察さんたちを集めるなんて」

「へえ……、今回は下見つてことまでわかってるんだ」

「だって、今日は嘘つきの日だもん。あの予告状には一文、一文に全部
意味があった。最初のエイプリルフルだけ無意味ってわけがない
もんね。ねえ、あれどうやって作ってるの？」

そう。今回のキッドは本気じゃない。エイプリルフルにちなん
で嘘の予告状を出したのだ。

嘘の予告状を出した理由——恐らく目当ての宝石が偽物だから
じゃないかしら……。

「手取り足取り教えてやりてーけど。ほら、パーティーのゲストが
やって来たぜ。中森警部、お早い到着で」

「怪盗キッド！ 今日こそお前を逮捕する！」

キッドがホテルの屋上の出入り口に顔を向けると中森警部が部下

を引き連れて入ってきた。

警部は拳銃を向け、警官たちがキッドを取り囲む。

うーん。どうやって逃げ出すつもりだろう？ 彼のことだから絶対に逃げちゃうんだろ？

「お姫様の言うとおり、今日の予告状はエイプリルフールの嘘。それじゃあ、また会いましょう」

キッドはハングライダーを用意して、退散することをあたしたちに告げた。

ますます、わからないわ。それなら、なぜこのような――。

「かかれい！ やつを飛ばすな！」

「せ、閃光弾!？」

キッドは警官隊が突っ込んできた絶妙のタイミングで閃光弾を放ち、あたしたちの目をくらませる。

あちやー、そうきたか。何も見えない……。

「探偵のお姫様、知ってるかい？ 怪盗は鮮やかに獲物を盗み出す創造的な芸術家だが、探偵はその跡を見て難癖をつける批評家にすぎないってことを――」

「批評家かあ。そうかもね……。でも、楽しかったわ。次はもっとおしやべりしましょう」

キッドはあたしたち探偵を批評家だと断じて、姿を消してしまふ。そして、いつの間にかあたしの手元には彼からの予告状があった――。

〃4月19日 横浜港から出港するQ・セリザバス号船上にて本物の漆黒の星を頂に参上する 怪盗キッド〃

ふふっ、面白いわね。これはあたしへの挑戦状ってことかしら――。

アリスVS怪盗キッド 後編

「今夜は特別な趣向が凝らしてあります。乗船時に渡した箱を開けてみてください」

あたしと蘭と小五郎は、4月19日……Q・セリザベス号で行われる鈴木財閥60周年パーティーに参加する。

史郎の挨拶もそこそこに、園子の母親である朋子が船に乗るときに乗客全員に配っていた箱を開けるように促した。

「蘭ちゃん、これって」

「うん。『^{ブラックスター}漆黒の星』だね」

箱の中に入っていたのは怪盗キッドが狙っている『漆黒の星』。なるほど、面白い趣向を考えたわね……。

「もちろん、本物はただ一つ。それ以外は精巧に作られた模造真珠というわけです。本物を持っているのが誰か知っているのも私一人。さあ皆さん、それを胸にお付けください。そしてキッドに見せつけてやるのです！ 盗れるなら盗ってみなさいとね！」

「へえ、これならキッドも本物を簡単には見つけられないね」

500人余りいる乗客が全員、精巧に作られた『漆黒の星』のレプリカを身に着けていけば、どれが本物なのかキッドであろうともすぐには判別できないはずだ。

だから、この方法はある程度は有効ではある。

「うん。『漆黒の星』を晒すのはリスクあると思うけど。園子のお母さんはキッドのプライドも傷つけたいんだろうね。あれ？ 園子ちゃん、どうしたの？ キョロキョロして」

「姉貴がどこにも居ないのよ。おかしいわね〜」

あたしは誰かを探すような仕草をしている園子に話しかけると、彼女は姉である鈴木綾子を探していると答えた。

最近、婚約した園子の姉がいなくてちよつと変ね。必ず顔を出すはずなんだけど……。

「家に電話してみれば」

「うん。そうしてみる」

園子は家に電話を掛けると、驚いた顔をする。そして、慌ててあたしの方に駆け寄ってきた。

「姉貴とパパがまだ家に居ただけだ……。茶木警視から出港を2時間遅らせるって言われたんだって。じゃあ、さつき挨拶してたのは——」

園子によれば、茶木から史郎に連絡が入って出港が遅れると伝えたらしい。

それで、彼と園子の姉は家にまだいるのだとか……。つまり、電話をしたのが怪盗キッドで……。史郎になりすまして乗船したということ。

「怪盗キッドってわけね。確かに史郎さんが見当たらないわ。——すみません。史郎さん見ませんでしたか？」

「さつきトイレに向かって行っただけを見たけど……」

「ありがとう！」

「ちよつと、アリス〜!?!」

あたしが史郎の行方を尋ねると、彼がトイレに向かったと答えてくれた人が居たので、あたしは彼を追ってトイレへと向かった——。

「遅かったか……」

トイレには変装に使ったマスクや服が放置されていた。

やはり彼は史郎に変装して、ここに乗り込んできたってわけね。

「お、おい。君……、ここは男子トイレだぞ」

「あーん、ごめんなさい。間違えちゃった♡」

「あ、ああ。私は構わないけど……」

あら、失礼。何も考えずに男子トイレに駆け込んだじゃった。そりゃあ、入ってきた人はあたしを見たらびつくりするわよね……。

「先生、キッドが史郎さんに化けて船に乗り込んでいました」

「なんだ。それは本当か？ アリス」

「ええ。恐らく他の乗客に化けて紛れているのかと。それより、蘭ちゃんは？」

あたしは小五郎にキッドが侵入したことを伝えた。

「そういえば、蘭はどこに行ったのかしら？ 姿が見当たらないわ……。」

「お前を探しに行ってたが……怪盗1412号に捕まってるかもしれないね——」

「奴の名前は怪盗キッドだ!!」

蘭はあたしを探しに行ったらしい。小五郎が怪盗1412号の名前を出したとき、中森警部が怪盗キッドだと訂正してきた。

どっちでも良いような気がする……。

「これは、中森警部。先日はどうも」

「ああ、君か。その探偵の命令で深夜の杯戸シティホテルの屋上で張り込んでいた……」

あたしが中森警部に挨拶をすると、先日の夜にホテルの屋上で会ったことを思い出してくれた。小五郎の指示であそこで待機していたと説明したんだっけ……。

「すみません。彼の近くに居たのに逃しちゃって。中森警部もこの船の警備をされるんですね」

「ええ。彼が警視庁で怪盗キッドの専任になっていきますのよ。つまりあなたと同じく、60年間もの間、鈴木家の家宝だった——漆黒の星”を守る騎士^{ナイト}ってわけ。会えて嬉しいわ。話題の女子高生探偵——藤峰愛梨寿さん」

中森警部の話を聞こうとすると、朋子が割り込んできた。

「ナイトだったんだ。あたしって……。」

「どうも。初めまして、朋子さん」

「娘がいつもあなたの自慢話をしますのよ。お手並み拝見させてもらいますわ」

園子がどんな風にあたしのことを話しているのか分からないが、彼女の期待には応えなくてはならない。頑張らないと……。

「いやー、あたしなんか先生と比べたらまだまだ……」

「だーはっはっは！ そうです。キッドを捕まえるのはこの私にお任せあれ！ それよりこの500人の乗客の中で誰が本物をつけてる

のか教えてもらえませんか？」

「精巧に出来ているといつても所詮は模造品。よく見ればわかりません。例えば、私のつけている物のように光沢が鈍いものや毛利探偵がつけられているもののように輝きすぎているものなど……安っぽい見かけのものもありますから。多少は絞れるでしょう」

小五郎はさっそく朋子に本物の「漆黒の星」の所持者を教えて欲しいと頼むけど、彼女は教える気がないっぽい。

「しかし、ひとりひとりをチェックするのは何とも……」

「ふう、仕方ありませんわね。では、とっておきのヒントを……本物は「最も相応しい人」に預けました。偶然にもそれに値するのは50人の内にたった一人しかいませんでしたの」

「そ、それだけ……ですか？」

「名探偵なら、それで十分では？ 優秀な助手も居られるみたいですし」

朋子は「最も相応しい人」が本物を持っているとヒントを与えてくれた。

うーん。誰だろう……。『最も相応しい人』っていうのはどういう意味だ……。

「いやー、やっぱり毛利さんだ！ それにアリスちゃんも！ お久しぶりです。いつぞやの事件ではお世話になりました」

あたしが朋子のヒントの意味を考えると男性が小五郎に声をかけた。この声って……。

「あはっ、旗本さんじゃないですか。それに三船さんも」

「おいおい、まだそっちのおっさんの助手なんかやってんのかよ」

以前に関わった事件で知り合ったフランス料理店を多数出している旗本グループの旗本と三船電子工業の若社長の三船があたしたちに近付いてきた。

彼らも同じ船に居たんだ。この料理は旗本の料理だったのかー。それにしても……。

「三船さん。ダメですよ。ちゃんと真珠つけないと」

「ガキっぽいゲームは嫌いなんでね」

「んもう。それで三船さんが怪盗キッドだって警察の人に疑われても知りませんよ」

「ちっ、しゃーねえな」

真珠を胸につけてなかった三船はあたしに促されると、しぶしぶハンカチを使って真珠を取り出すと胸に付けた。相変わらず、この人は勝手気ままなんだから。

「しかし、蘭のやつどこに行っただ？」

「きつと、船内で迷ってるのよ。蘭って方向音痴だから」

「方向音痴で悪かったわね……」

蘭を気にする小五郎の声に園子が彼女の方向音痴ぶりを主張すると、気まずそうな顔をした彼女が現れた。

「蘭ちゃん、ごめんね。あたしのこと探してくれてたんでしょ？」

「ううん。迷ったのは私のせいだから。こっちこそ心配かけてごめん」

でも、蘭が無事なら良かったわ。キッドに捕まったら大変だもんね……。

「怪盗キッドがこの船にもぐり込んでいます。奴は顔や声、性格まで模写できるので、キッドに対抗するためにペアを作って合言葉を決めておいてください」

「合言葉だつてー。蘭ちゃん、どうする？」

「アリスちゃんが決めて。こういうのよく分からなくて」

茶木警視が成りすまし防止のためにペアを作ってお互いにお互いがかかるように合言葉を決めるように促した。

「んー、じゃあ。あたしが『新一』って言ったら、蘭が『愛してる』っていうのはどうかしら？」

「もー、アリスちゃん。からかわないで、真面目に決めてよ」

あたしがふざけると蘭は困り顔をして、肩を小突いてきた。

「ついつい、彼女をからかってしまう……」。

「えへへ。なら、あたしが『ホームズ』って言ったら、蘭ちゃんは『ルパン』って答えてね」

「うん。わかった。——っ!? あれ？」

——と、その時……急に明かりが消えた。

そして煙とともに鳩を連れた白いタキシードの男が船室の上方に現れる。あれくく、スポットライト当たってるし、何かのショーかしら？

「すでに『漆黒の星』は私の手の中だ……」

「か、怪盗キッド!」

「ば、馬鹿な。いつの間に……!」

いやいや、キッドじゃないでしょ。こんな演出してるのに……。

「悪い怪盗さんには、お仕置きしてあげなくっちゃ……」

「ぐわあああつ!」

そして、朋子がその白タキシード男に向かって銃を発砲して、男は叫び声を上げながら落下してしまった。

「きやあああつ!」

明かりがつくと、血まみれの男がテーブルの上に倒れている。そりや、悲鳴も上がるでしょうね。

だから、この茶番は何なのよ……。

「彼はこの余興のために私が雇った天才マジシャン。真田一三ですわ。皆さん、怪盗キッドの役を見事に演じた彼に拍手を」

どうやら、朋子が乗客を楽しませるためにマジシャンを使ってショーを行ったらしい。

倒れていた男はムクツと起き上がりお辞儀をした。

それにしても、朋子が本物の『漆黒の星』を預けたという人物は誰だろう。

あたしは真田が手品を始めたので、それを見ながら頭をひねる。

そもそも朋子って警戒心が強くてプライドも高い。あたしや中森警部のことをナイトとか言ってたけど、どうも心の底からは信じてもらってないっぽいよね。

つまり、預けるならそれなりに信用に足る人物じゃなきゃならないけど、それに該当するのって……。

それにあれも気になる。小五郎に偽物の見分け方を指南したのも

……。

粗悪品が紛れてるってわざわざ言うことかしら？　せつかく偽物をたくさん用意したのに……。

そこまで、考えたとき——マジックのトランプをシャッフルしていた客の一人がトランプを落としてしまう。あれま、蘭と園子が拾うの手伝ってあげてるし……。

「なあに、カードを落とすくらいじゃツキは落ちませんよ」

真田はカードを落とした客に慰めるような言葉をかける。

「ん？　ちよつと待つて……『ツキ』って確か……。」

「先生、この船の招待客リストを借りてもいいですか？」

「なんだ？　アリス……、んなもん見てどーすんだよ？」

「『漆黒の星』を所持している人が分かるかもしれません」

「最も相応しい人」というのがあたしの考えたとおりの人なら、それに該当する人物はこの船に一人しかいないはずだ。

それを確かめるべく、乗船者リストを持っている小五郎にお願いしているのだ。

「何っ!?　本当か!?!」

「いや〜ん、やっぱり手品見た〜い♡」

「アホか！　手品なんかどーだっていいだろ!?!」

でも、あたしは手品も気になってしまっていた。やっぱ、マジックショーとか気になるじゃない……。

「それでは、あなたの選ぶカードを予言しましょう」

真田は蘭が選ぶカードを予言するみたいだ。へえ〜。当てられるのかしら？　ワクワクするわね……。

「では、ハートのAという事で……」

彼が蘭の選ぶカードを予言すると、彼女は真田の手からトランプを1枚取る。

そして、そのトランプには——。

「えっ？　こ、これは……?」

「クレオパトラに魅了されたシーザーのごとく私はもう貴方のそ

ばに……”

なんと、蘭が手に取ったカードにはキッドからのメッセージが書かれていた。

場内は一気に騒然として、キッドが既にことを成し終えたような雰囲気の流れている。

なるほど。こうやって自分のペースに巻き込んで、人のスキを突くのが彼のやり方ってわけね……。

でも、ほとんど分かったわ。『漆黒の星』を持っている人も怪盗キッドが誰なのかも……。

——船は後10分で東京港につく。

中森警部は部屋から誰も出すなど指示を出しているわね……。

さてと、キッドが動く前にあたしが彼を止めないと……そう思つて動いたとき——。

「あつ!? 真珠が……」

蘭の胸の真珠が床に落ちて転がった……。

「落ちましたよ。お嬢さん。——っ!? な、なんだっ!?」

それに気付いた客が拾おうとすると彼女の真珠が突然破裂する。

真珠の爆発に客が驚いていると次々とそれが転がってきて爆発が連鎖した。

やるわね。ここまでこの場を混乱させるなんて……。あえてスキを突くために彼と距離を取っていたのは悪手だったか……。

パニックに陥った客は次々と真珠を外すけど、爆発騒ぎは収まらない。い。

やがて、客たちは外に出ようと出口に詰めかける——。

「きゃっ!」

そんな騒ぎの中、朋子は転んでしまい慌てて蘭が彼女を抱き起こした。

「あれ? ママの真珠は?」

園子は朋子の真珠がなくなっていることに気が付き声を出した。やはり、盗まれてしまったか……。

そう、本物の『漆黒の星』を持っていたのは——。

「キッドに『漆黒の星』が盗られましたわ！」

今、悲鳴を上げている朋子だった。まったく、見事としか言えない手腕だわ。

でも、まだゲームは終わってないわよ。怪盗キッド……。

客たちは扉の警備を破りついに部屋の外へ逃げて行き、キッドも外に出たと中森警部は後を追う。

「蘭ちゃん。大丈夫？」

「アリスちゃん、私なら平気。びっくりしたね。どうやって怪盗キッドは『漆黒の星』を盗んだんだろう？」

「うん。それも含めて全部分かつちゃった。キッドの正体も何もかも」

あたしは蘭に怪盗キッドの手口と正体がわかったと伝えた。

中森警部は出ていったが、彼はまだこの近くにいるのだ。

「えーっ!? アリスちゃん、キッドが誰なのか分かったの？」

「しーっ……、声大きいよ。それで、蘭ちゃんにお願いがあるんだけど……、ちよつと一緒に来てくれる？」

あたしは蘭の手を引いて機関室へと向かった。

よし、ここなら誰も来なさそうね……。都合がいいわ……。

「ちよつと、アリスちゃん。大丈夫なの？　こんな、誰もいないようなところに来ても」

「ごめんね。人気がないところじゃないと話せなくてさ。間抜けなのよ。あたし……。朋子さんが本物を持っているって分かったのに、キッドに盗まれちゃったから」

あたしが朋子が『最も相応しい人』だということに気付いた瞬間にキッドは船内にパニックを起こして、朋子に近付いて彼女から『漆黒の星』を盗んだ。

指を咥えて見ていたあたしはなんて無能なんだろう……。

「えっ？　アリスちゃん、分かったの？」

「ええ。真珠の宝石言葉は『月』と『女性』。朋子さんの言う『最もふさわしい人』って名前に月の入った女性のことなのよ。で、名簿を

見たら名前に月と入っている女性は船の上では鈴木朋子さんだけだったの」

そう。答えは呆れるくらい簡単だった。真珠の宝石言葉さえ知っていれば……。

「すごい。よく気が付いたね。流石アリスちゃん。でも、キツドの正体も分かったって言ってたよね」

「新一！」

「へっ？」

「だから、あたしが『新一』って言ったら、『愛してる』って返すやつ。いつもの蘭ちゃんのリアクションはあんなもんじゃないのよ。もっとうこう……、ハバネロくんみたいに顔を真っ赤にさせるわ。そこが可愛いんだから」

そして、あたしは違和感を蘭に語った。合言葉を決めるときにふざけて見せたのだが、どうもいつもの蘭と比べて淡白なりアクションだった。

顔を全然赤くしてなかったのである。

「えっ？ そんな変なりアクションとらないよ。まさかそれで私がキツドだって言うの？ アリスちゃん」

「まだあるわよ。さつきやったマジックはトランプを選ぶ直前にすべて予言したトランプと入れ替えて、どこから引いてもそのトランプになったっていうトリックなんだけど。実際にはメッセージカードが出てきた」

「そのメッセージカードを出せるのは真田さんしかないような……」

あたしは先ほどの真田の手品の際にキツドがメッセージカードとトランプのカードをすり替えた話をした。

これを実行するにはキツドがトランプに触らなきゃならない。

「ううん。真田さんは朋子さんに指一本触れてないから……キツドじゃないわ。トランプにも朋子さんにも触れた人物が居るでしょ？ ばら撒かれたトランプを拾ってあげたり、倒れた朋子さんを起こしてあげたりした人物が……。ほら、あなたのことよ……蘭ちゃん。い

いえ、怪盗キッドさんかしら♡」

様々な事実から浮かび上がること——それはキッドが蘭に変装しているってことだ。

彼女はトランプを拾う際に、トランプのうちの一枚を抜いてメツセージを貼り付けてあたかもそれを引いたかのように見せかけたのだ。

「そ、そんな。私じゃない。だって、私はその朋子さんのヒントだって聞いてないんだよ。本物を持っている人が誰かなんて分かるはずないよ」

「ところがそうでもないのよ。朋子さんは手袋をして手の油から真珠を守ろうとしていた。そもそも、三船さんみたいに真珠がデリケートと知っている人もいるけど、そんな大事なものを他人に預けるはずがない」

ヒントがなくても宝石に関する知識と常識的な考えがあれば朋子が本物を持っているという結論を出さざる得ない。

だって、真珠を扱うのって神経使うし、朋子は誰が本物を持っているのか知ってたのに、自分の真珠を丁寧に扱っていたんだもん。彼女が偽物を持っていたとは、考えにくい。

「でも、それだけじゃ……」

「証拠は不十分。でも、朋子さんが色あせた真珠を身に着けていたことから、それは確信に変わるはずよ。真珠の光沢はせいぜい数十年しか持たないの。だから60年前の真珠が今なお美しいはずはないよ。米花博物館で光沢を放っていた真珠が偽物だと気付いたあなたは、予告状にわざわざ『本物』と書いて負けず嫌いな朋子さんに『本物』を持ってこさせたのでしょ?」

色あせた真珠を朋子は粗悪品扱いしていたけど、実際はその逆だ。古い真珠は光沢が無くなっている。だから、キッドは博物館の展示物が偽物だとわかって挑発的な予告状を出したのである。

「もう。アリスちゃんがそんなに疑うなら警察を呼ぼうか?」

「それはさせないわよ! ドライブシュートッ!」

あたしは博士に作ってもらった、どこでもサッカーボール射出ブレ

スレットからガスが入ったボールを出して、それを思いっきり電話に向かって蹴りつける。＼キック力増強ハイヒール＼なんてもんを無理言って作ってもらえて良かったわ……。

転けそうになっちやっただけど、電話は破壊できたみたい。

「あなたが消えちやっただのには、驚いたわ。でも、考えてみれば単純なトリックだった。あのとき閃光弾を使ったあなたは素早く警官に変装したの。沢山いる警官に紛れてしまえば、あたかもその場から消えたように見える。2度同じ手は使わせないわよ。ふふっ、批評家も捨てたもんじゃないでしょ♪」

「ったく。最初から俺を疑って変な合言葉を振ってきたのかよ」

あたしがキッドがああの夜に消えたトリックについて説明すると、彼はようやく素の声を聞かせてくれた。

「ううん。いつものノリだよ。蘭ちゃんの照れる顔を見るのがあたしの趣味だもん」

「そりゃあ、いい趣味をしてやがる……」

まあ、蘭にキッドが化けていたのを疑ったのはあたしがいつものように彼女をからかったことが原因だから偶然なんだけど……。

「でも、あなたがあたしの近くににいるのは何となく予測出来たわ。だって、わざわざあたしの手元に予告状を送るなんてことしたんだもの」

「ちっ、少しカッコつけすぎちまったか。おらよ」

「あら、素直なのね」

あたしが蘭を疑った理由を付け足すと、ついにキッドは降参して、真珠をあたしに投げて返してくれた。

あー、良かった。これであたしや小五郎の面目が立つわね……。

「そうそう、この服を借りて救命ボートに眠らせてる女の子……早く言ってやらねーとカゼひいちまうぜ？ 俺は完璧主義者なんでね♡」
彼は蘭を早く助けた方が良いと言って、下着を見せてきた。

うんうん。新一ですらブラつけるのには抵抗あったのに、躊躇わないのは凄いわね。

「いやーん。えっちなんだから」

「ふっ……」

キッドは閃光弾を投げつける。周囲はまばゆい光に包まれた。

「さてと……、あれ？」

「どこに行くのかな〜？ 怪盗さん♪そういう手はもつと初心うぶな子に使わなきゃ。それに、前は閃光弾にしてやられたんだから、サングラスくらい準備してあるわよ。似合うかしら？」

あたしは予め準備しておいたサングラスをかけて、キッドの右腕を掴んだ。

まあ、彼が女性に対して紳士なのは漫画の知識で知ってたから蘭が裸になんてされてないと確信したわけだけど……。

「よくお似合いですよ。お姫様……。用意周到でイラツとするくらい……」

「ごめんね。相手の失敗に難癖つけるのが探偵だから……許してね♡」

ここにきて、キッドはようやく焦ったような声色になった。

「どうやら、あたしに腕を掴まれたのは彼にとって予想外だったらしい。」

「この前言ったこと、根に持ってるんだな……」

「うん。あたしはそういう探偵の仕事が好きだから。芸術家なんて肩こりそうだし」

別にエンターテイナーになるつもりはないし、難癖つける作業も楽しいから先日のキッドのセリフに腹が立った訳ではない。

でも、彼に探偵の執念深さを教えてあげたいとは思っていた。

「ははっ、こんなにも辛い奴は初めてだぜ。やるよ。腕の一本くらいいい」

「へっ？ 腕が千切れた〜!?!」

キッドはおもむろに自分の右腕を左手で引つ張ると、腕が千切れて真っ赤な血が吹き出す。

あたしは呆気にとられて手を離してしまった。

「いい観客にもなれるじゃねーか。あばよ。お姫様♪」

その瞬間、彼は煙を大量に繰り出してその場から消えてしまう。

しまった。腕を掴んで完全に油断した――。

「今度は煙幕……、悔しい。もう少しだったのに、逃げられちゃった
〜!」

結局、キッドには見事に逃げられてしまう……。あたしは地団駄踏
んだけど時すでに遅いだ。

そして、蘭は救命ボートの中でキッチンとドレスを着て無事だった。
どうやら彼は事前にクリーニング屋さんに化けて蘭の着る服をリ
サーチしてたらしい。やっぱり、怪盗キッドを捕まえるのは容易なこ
とじゃなかったか――。

「お手柄、女子高生探偵……怪盗キッドに完全勝利……か。もう、アリ
スと蘭だけ怪盗キッド様に会えてズルいわよ。どんな顔だったの？」
園子は新聞の一面を見ながらあたしと蘭だけが怪盗キッドに接触
していたことをズルいつて言ってきた。

「ごめんね。捕まえる気満々だったんだけど……。」

「私は眠らさせて見てないけど、アリスちゃんはどうなの？ 直接
対決したんでしょ？」

「うん。若かったよ。もしかしたらあたしらと年齢変わらないかも」

「え〜っ!? それはあり得ないでしょう」

「じゃ、今度現れたら捕まえて証明してあげるわよ。負けたのが悔し
いし」

キッドがあたしたちと同年代と言っても園子が信じてくれないの
で、あたしは彼女に次は彼を捕まえると宣言する。

「こんなに悔しくなるとは思わなかった。」

「新聞は完全勝利って書いてるけど」
「今回はあたしの負けよ。もっと早く確信を持つべきだったわ。蘭
ちゃんの顔をよ〜〜く覚えなきゃ」

「……そ、そんなに見つめられると……、恥ずかしいよ」

あたしは蘭の表情だけで確信が持てなかったことを反省して、彼女

の顔を間近で凝視する。

うん。やっぱり今日も可愛いわね……。

「この照れ顔なのよ。蘭ちゃんの真骨頂は！ 目に焼き付けるわよ〜！」

「も〜う。止めてってば！」

「にやはは、怒った顔も可愛いんだから♪」

真っ赤に頬を染める蘭の顔を拝みながら、あたしはもっとレベルアップしようと誓ったのだった――。

浪花の連続殺人事件 前編

「あれが天王寺動物園、——あれが大阪ドーム、——そして、ここが通天閣や。どや？ ええところやろ？ 大阪は〜」

「うん。良い眺めだね〜」

「東京タワーと変わらね〜じゃねえか」

あたしたちは平次に招待されて大阪に遊びに来ている。

なんか、大阪の美味しいものを色々で紹介してくれるって言ってくれたから小五郎と蘭にあたしも付いて行ったのだ。

「あほ、あんな味気ない赤い塔と一緒にすなや」

「人情の町、大阪〜。風情があつて同じ都会でも東京とはまるで違うわね」

「せやろ」

「でも、大阪といえば食いだおれじゃない？ あたし、もうお腹ペコペコよ」

その美味しいものに完全に釣られたあたしは朝ご飯も抜いて来て空腹だった。

早く大阪の食べ物を堪能したい。

「もうちよい待って。じきに迎えが来るから」

「しゃーねえ、一服するか」

どうやら平次は迎えの人と待ち合わせているらしく、それまでは通天閣で時間を潰さなくてはならないらしい。なので、小五郎はタバコを吸いに行ってしまった。

「で、平次くん。なんか事件あったの？」

「ん？ 今回はなんもないで。仕事抜きや。いっぺんお前らに大阪見せたらうと思つて呼んだんや。人間なんて、いつ死ぬかわからんからう」

前に平次の計らいで長門グループの会長の元に小五郎が呼び出されて事件に巻き込まれることがあったけど、今回は純粋に大阪見物に誘っただけらしい。

「何よ、それ？ あなたって、そんなこと言うタイプ？」

「けつたいな夢見てもうたんや。……今から犯人捕まえるでつちゅーときにや……逆に犯人に撃たれてもうて……お前が死んでしまう夢をなあ♪」

「ありやま。あたし死んじやったの？ 縁起でもないこと言わないでちよーだい」

きつかけは彼があたしが死ぬ夢を見たからなんだって。

嫌だなあ。この体で死んでしまったら、新一に申し訳ないし……。

「まつ、そういうことやから、大阪を目一杯楽しんでくれや」

「おーい。平次くん。すまんすまん、遅くなってもうた」

そんな会話をしていると、メガネをかけた若い刑事さんがこちらに駆けつけてきた。

どうやら、平次のお父さんが小五郎が来るならちゃんとか案内をしなくてはどうということ、大阪府警東尻署捜査一課の刑事の坂田祐介を車の運転手兼案内人ということで送ってくれたらしい。

なんか気を使わせて申し訳ない。ちなみに平次のお父さんは何かの事件の会議で顔を出せなくなったんだって。

「例の車は用意出来たん？」

「そもそも、平次くんに言われたとおり東尻署で一番いいやつを失敬してききましたがな」

あたしたちは坂田の運転でご飯を食べに行くこととなった。

平次が用意させた車というのはもちろん――。

「うわ〜！ パトカーよ、パトカー！ 蘭ちゃん！ 何か犯罪者になつたみたいで楽しいわね！」

「た、楽しいかな？ 他の車が避けてるし……申し訳ない気が……。周囲の視線も痛いし……」

あたしがパトカーに乗ってはしゃいでると、蘭が困り顔をして俯いていた。

別に大阪には知り合いとか居ないし堂々としてればいいのに。

「何ならサイレン鳴らしたるか？ もっとスピード上げれるで」

「えっ？ いいの？ じゃあお願い――」

「バカヤロー！ んなことさせんじゃねえ！ まったく、何でこんな

車で大阪見物しなきゃいけないーんだ！」

サイレンを鳴らすと言った平次に返事をしたあたしだったが、小五郎に大声で怒鳴られてしまう。

現場に急行する気分を味わいたかったけど無理そうね……。

そして、あたしたちは最初の目的地であるうどん屋さんに着いた。

「どや、これがホンマもんのおどんや。出汁が透き通ってて底まで見えるやろ」

「薄味だけど、美味しいね」

「うん。昆布の出汁の風味がスツキリとした感じで、あたしはこっちの方が関東のよりも好きかも」

「味がせん……」

関西風のおどんに舌鼓を打つあたしたち。小五郎は濃い味付けが好みみたいで、ボヤいているけど、あたしは美味しく頂けた。

「平次、どないしたんや？ えらいべっぴんさん二人も連れて。どっちがコレなんや」

「えっ？。せやなー、どっちにしようか迷うところや」

そんなあたしたちを見て平次はお店の店主にあたしか蘭のどちらが彼女なのか聞かれていた。

傍から見れば平次が女の子二人を連れ回してるように見えるみたいだ。

「もう、平次くんったら。おじさんが本気にしちゃうじゃない」

「ち、違います。私たちは東京から来たただの——。——っ!？」

あたしたちが店主の言葉を否定しようとする、蘭がハツとした表情をしてぶるっと震える。どうしたんだろう……。

「ん？ どうした？」

「何か寒気が……」

「ふえっ？。風邪でも引いたの？。大丈夫？」

「うん。そういうのじゃないから」

あたしが蘭の体調を気遣うと彼女は病気ではないと口にした。そ

れなら良いんだけど……。

「ほな、次はどこ行く？」

「そうだな。うどんの次はく大阪名物といたら——」

あたしたちは次なる目的地を目指す。確かに大阪に来たらアレを食べなきゃね……。

「うんめえ〜〜！ めちやめちや美味えなこのタコ焼き」

「タコが大きめに切つてあるから食べごたえがあるわね〜。蘭ちゃん、あ〜〜ん♡」

「も、もう。恥ずかしいよ。あーん。はむっ……、美味しい」

あたしは蘭の口の中に大きなタコ焼きを放り込む。

頬を紅潮させながらモグモグとタコ焼きを食べる蘭の可愛さつたら……、写真撮れば良かったって後悔するくらいよ。

「でしょ？ これは何個でもいけるやつだわ。ダイエットのことは忘却の彼方に置いて……」

「ねえ、アリスちゃん。誰かに見られてる気がしない？」

「あ、そう？ 視線を感じるのはいつものことだから気にしてないんだけど」

「ああ、有名人だもんね。アリスちゃんって」

蘭は誰かに見られてる気がするって言うけど、最近のあたしは外出すると大体視線を感じる。

テレビとかに出たせいだろう。自意識過剰でないと信じたい。

「そんなこと気にせんと、はよ食べて」

「う、うん……」

平次は気にするなというが、蘭はそうはいかないだろう。その、正体不明の視線は次の店で明らかになった……。

「え〜っ!? お好み焼き？ なんで、タコ焼きの前に言わんの？

知ってる美味しい店、北やで。逆やがな。大阪は一方通行が多いから——」

「それなら、僕が知ってる近い店紹介しましよか？」

車の中であたしたちはお好み焼きを食べたいと平次にリクエストしたら、彼の行きつけの店が逆方向だった。

それなら……という事で坂田の知ってる近くのお店を紹介してもらおう。

「良かったね。近くにいいお店があつて」

「うん。お好み焼き大好きだから楽しみ！」

「ほんなら、おれ、おかにちよつと電話してくるよつて。おつちやん、飯も忘れんといてよ」

「えっ？」

平次がお母さんに電話するというのはわかったけど、その次の発言にはあたしたち三人が耳を疑った。

お好み焼き&ライスですつて？ そんな組み合わせってありなの？

「飯と一緒に好み焼き食べるのか？」

「フツいやんけ。お好み焼きはおかずやで」

平次は当たり前みたいにお好み焼きをおかずだと言い張る。お好み焼きを焼きそばとかタコ焼きとかと一緒に食べるならわかるけど……。

「あはは、炭水化物&炭水化物……」

「ちよつと抵抗あるよね」

「飯にタレがついて、それがまた美味いんや」

「へえ〜」

カロリーの王様みたいな組み合わせだけど、それがこつちで王道ならそれに従おう。

「……こりゃあ、帰ったらマラソンでもしなきゃ」

「じゃあ一緒に走ろうよ。——っ!? あっ! そこは、友達……」

蘭と一緒に走る約束をしたとき、ポニーテールの可愛い女の子が平次の席に腰掛けた。

なんだか、すごく不機嫌そうな顔してるわね……。

「……あんたらやろ？ 工藤と藤峰って」

「えっ？」

「んっ？」

ポニーテールの女の子があたしたちを工藤と藤峰だと呼んだものだから、蘭はキョトンとした。

えっと、工藤も藤峰もあたしなだけだな。

「平次にいつも聞かせてもろてんで、あんたらのこと」

「服部くん？ アリスちゃんと新一のこと？」

「この子ってまさか……」

「あんたら二人とも！ 東京で平次を誑かしてるんやろ！ 惚けたつて無駄やで！」

「あたしたちが平次くんを……」

「誑かす……？ あ、あの何か勘違いを……」

あー、間違いないわ。この子は平次の幼馴染の和葉だ。

それで、あたしとか蘭のことを思いっきり勘違いしてるんだ。平次が新一とかあたしをライブル視していたせいで……。

「二つだけ言うといたるわ。アタシと平次はその昔、鉄の鎖で繋がれた仲やねんからな。平次にちよっかい出すときはこの私を通してからに——」

「なんや和葉。お前、ここで何してんねん？」

和葉があたしたちを牽制しようとしたとき、ひよっこり平次が現れて何をしているのかと声をかけた。これで、誤解が解けそうね……。

「あはははっ、工藤は男や。んで、この姉ちゃんが工藤の女や」

「……わ、私はその」

「そうそう。蘭ちゃんは新一とラブラブなのです！」

「アリスちゃん！」

とりあえず、まずは蘭の誤解をとく。新一という相手がいると知れば大丈夫だろう。

「ふーん。まあ、その毛利って子のことはええわ。そっちの藤峰は平次のことを誑かしてるんやろ?」

「あ、あたし? 何で?」

「なんでって、そりゃあ平次があんたに会うためにわざわざ東京まで行っただんやで。絶対、平次を誘惑したに決まってるやん」

どーやら、和葉の中ではあたしが平次を誘惑していることに決まっているらしい。

うーん。どうしようかな……。否定しても信じてくれないだろうし……。

「あー、なるほど。ダメじゃん、平次くん。ちゃんと和葉ちゃんに好きって言わなきゃ」

「な、な、何をヤブから棒に言うてんねん! なんで、おれが和葉なんかにそないなこと」

「……なんかやつて? あと、あんた。そんなこと言っただけ誤魔化さうたって無駄やで」

あたしが平次に告白しろと促しても彼は乗ってくれなかった。

そして、和葉にも誤魔化すなど言われてしまう。

「でも、鉄の鎖で繋がってるんでしょ? そんなに簡単に関係は絶たれないよ。どんな話か興味あるな」

「大した話やないで——」

あたしが話題を変えるために鉄の鎖で繋がった話を振ると平次がその話をし始めた。

それは、幼い頃、服部の家の屋根裏部屋で父親が使っていた古い手錠をみつけ、ふざけて刑事の真似事をしていたら二人の腕に付けた手錠が外れなくなってしまう話で——どうやら、風呂もトイレも一緒に済まさないやいけなかったらしく、和葉にはかなり大きな思い出になっているみたいだ。

「アタシはちゃんと記念に手錠の鎖のカケラをもろて、お守りにいれてんねんで」

「気色悪く、はよ、捨てや。そんなもん」

何それ？ 和葉、めっちゃ可愛いじゃん。ピュアだし……。一途だし……。

「ねえねえ、二人って付き合ってるの？」

「そりゃ、付き合ってるでしょ。こんなに仲良しなんだから」

「へっ……？」

蘭が平次たちが付き合ってるのかどうか質問すると、彼らの目が点になって固まった。

そんな変な質問なのだろうか……。

「ちやうちやう、アタシと平次はただの幼馴染。いつつも平次の面倒見てる、お姉さん役やねん」

「よー言うわ。大阪府警の刑事部長やってるこいつの親父はおれの親父と親友でガキの頃からよう知つとるちゆうだけのこっちや」

平次と和葉が幼馴染なのはもちろん知ってたけど、何と和葉はあたしたちを通天閣から見張ってたらしい。東京の変な女に誑かされないために……。

しかも、蘭はともかくあたしは完全に和葉にロックオンされていて、さつきから凍てついた視線がずっと突き刺さってる。蘭にも新一の仲を疑われたことがあるが、それよりも拗れてる気がする。

どうやら平次はあたしと事件を解決した話を普通に和葉に喋ってるらしく、それが話を厄介にしているみたいだ。

「とにかく、藤峰愛梨寿。平次に手え出すんなら覚悟しときー」

「アホくさ、付き合うとれんわ！ 藤峰とは何でもないけどな。何でいちいち、お前に弁解せなあかんのか！ バカバカしい！」

「そうやってムキになるところが怪しいんよ。あの見た目で探偵なんて信じられへん。どーせ、平次の気を引こうって算段なんやろ？」

その証拠に和葉はずっと平次にあたしとの仲を疑うような態度で喋っている。

喧嘩するほど仲がいいと思うけど……これは……。

「うわー、見てみて！ 修羅場だよ。蘭ちゃん」

「アリスちゃんがその修羅場の原因なのに、楽しそうだね……」

あたしが平次と和葉の口喧嘩を興味深そうに眺めていると、蘭が苦

笑する。

いや、そうなんだけどき。なんかワクワクするじゃない……。

「なんで付いてくるんや?」

「別にええやん。それとも、何? 藤峰と二人きりになりたかったんか?」

「しつこいやっちゃつな。——っ!」

パトカーに乗ってきた和葉に平次はうんざりした顔をしていたが、その時外が急にざわついた——。そして——。

「——なっ!」

パトカーのボンネットにいきなり人が落下してきた。

腰にロープを巻き、胸にはナイフが刺さっている。それも、財布が間に挟まって刺されているという異様な死に様だ。

「いきなり、ボンネットに人が……このビルの屋上から」

「ん? 誰かいる……!」

「坂田はん! 警察に連絡を頼むで!」

「ちよつと平次!」

「アリスちゃん!」

ビルの屋上から遺体が落ちてきたことを確認するために上を向いたら、屋上に人影が見える。

あたしと平次は急いでビルの階段を駆け上がった——。

「んっ?」

屋上には呆然とした表情で下を眺めていたおじさんがいた。

この人が犯人だと思うけど……。

「おじさん、教えて貰おうかしら? パトカーの上に遺体を落とした訳を」

「ええーっ!?! ちゃ、ちやいまんがな。ワシはただ——」

結論から言うと屋上にいたおじさんは犯人じゃなかった。

二階で喫茶店を営んでいるらしい、このおじさんは何にも知らないみたい。

「誰かに電話で変な人が屋上にいるって言われて呼び出されて上に
行ったららしいですよ。先生」

「はあ？ 何でそんなことで、遺体が降って来るんだ？」

「どうやら、屋上のドアを開けたら遺体が落ちるような仕掛けをして
いたみたいです」

遺体を縄でくくりつけて、ビニールシートで包んで隠しておき、ド
アが開いた瞬間に縄が外れておくような仕掛けがされてあった。

つまり、誰かに電話で屋上に呼び出された喫茶店の店主は遺体を落
とす役にされちゃったみたい。

「死亡推定時刻は一日前——つまり、昨日の今ごろに殺して、屋上にあ
の仕掛けを施したつちゆうわけや」

「でも、なんでわざわざパトカーのボンネットに？」

「それは偶然やろうけど、こんなに派手な死体の発見をさせたのは、誰
かに向けた見せしめかもしれない。財布に刺さったナイフ——こ
ら、どーみても例の事件と——」

平次曰くこの事件は何らかの事件と関わっているみたい。

そんな話をしていると、誰かの怯えたような声が聞こえた。

「う、う、うあ……あああつ……」

「——っ!？」

「ちよつと、待ちなさい！」

「オバハン！ 何をそんなに怯えてんねん！」

青ざめた顔をした30代後半から40代くらいの女が走って現場
から離れようとしたので、あたしと平次は不審に思って彼女を追いか
けた。

しかし、彼女は足早に車に乗ってどこかに行ってしまう。

「あかん。逃げられてもうた」

「大丈夫よ。ナンバーは覚えたから。——ところで、さっき言ってた
例の事件って何かしら？」

あたしは車のナンバーを記憶してメモを取りながら、平次が口にし
ていた「例の事件」について尋ねた。

恐らく財布がナイフで刺されているような事件が他でも起きているということだろうが……。

「ああ、それはな——」

「平次！　また、その子とイチヤイチャしてるやん！　後で内緒で会う約束してるんやろ？」

平次が口を開いたとき、和葉がこちらに向かってきて、あたしたちが内緒話をしていることを追求してきた。

あれま。彼女、かなり怒ってるみたいね……。

「和葉ちゃん。マジであたしと平次くんのこと疑っちゃったりしてるの？」

「当たり前や。あんたみたいなの、あぎとい女が一番質が悪いんやから」あぎとい女って所は否定できない……。あたしの処世術だから……。

でもなあ。このまま疑われっぱなしなのもなあ……。

「平次くん。さっさと告白して和葉ちゃんと付き合いなさいよ。あたしに変な疑いがかかっているじゃないの」

「なんで、おれがそないなごのために和葉に……。自分の疑いくらい自分で何とかしいや。探偵やろ」

そもそも平次がとつとと和葉と付き合わないのが悪い。

それを指摘すると、平次はあたし自身で何とかしろとか言ってくる。な、何て奴なのよ……。

「何よ、無責任な男ねえ。和葉ちゃん。待つだけ無駄よ。早いとこ、あなたからアタックして決めちゃいなさい」

「な、な、何を急にそんなこと言うてんねん。あ、アタシは別に平次のことなんか」

だったら、和葉が平次に告白すれば丸く収まると思って提案するも、彼女も彼女で幼馴染を拗らせている。

「あらあら、こりゃあ進展しないわけだわ。平次くん、とりあえず先生にもその事件とやらを話してあげて」

「そりゃ、構わんけど。別にあのおっちゃん、戦力外やろ」

あたしはこの子たちの仲の進展を諦めて、平次に小五郎を交えて事

件の話を聞かせるように頼んだ。

「……頼むから誰かがいるときにそういうのは止めてね。あたしには必要なことなんだから」

「また、内緒話してるやん！」

「あははっ、ごめんごめん。気を付けるわね♪」

小五郎をナチュラルにデイスる平次を小声で咎めると、和葉に嫌な顔をされてしまったので、あたしは彼女に謝罪した。

これは、信頼してもらえるまでかなりの時間がかかりそうだ――。

あたしたちはこの事件との関わりがある「例の事件」についての話を東尻署で聞くことにした――。

「れ、連続殺人？ さつき落ちてきた男がその三人目ってことなのか!?」

「そうや！ 三件ともナイフが財布を突き抜けて胸に刺さった。わざわざ首を何かで締めて殺した後でな……」

なるほど、やはり似たような事件が他でも起こっていたのか。

しかし、財布を刺すという行為には何の意味があるのだろうか……。

「お金がらみで恨まれとったんやないの？」

「いや、それがそうとは言えんのや――最初に殺された長尾秀敏はコ
ンビニの店長。次に殺された西口多代にしぐちたよは居酒屋の女将はん。そして、
さつき殺された野安和人のやすかずとはタクシー運転手や。みーんな金で恨みを
買うほど、金回りはええことあらへん。それどころか、この三人には
生まれも育ちも含めて、今のところ何の繋がりもないねん」

平次は殺された三人について共通点が何一つないと教えてくれた。
それでも同じ殺され方をしているのだ。無関係なはずがない。

「でも、わざわざあんな殺し方をしてるんだもん。必ず理由はあるはずよ。あのオバサンの動揺も気になるし……」

「せやな。犯人に近付くにはそれを解き明かすのが近道や」

「平次くん！ あつたで、共通点！」

「ほんまか？ 坂田はん!？」

あたしたちが、被害者たちの共通点について話し合っていると、坂田が駆け込んできて、それが見つかったと言った。

彼は持ってきたDVDを再生する。

「これは、府議会議員の郷司宗太郎が6年前にかけられた汚職疑惑の際の映像やな」

「ああ、秘書がすべてを被って辞めて有耶無耶になったっていう……。確かその秘書の名前は長尾——。つておい、長尾つて……」

「そう、最初の被害者の長尾秀敏は府議会議員の秘書やった。けど、それは調べついたらやろ？」

平次は最初の被害者が元府議会議員の秘書だということは知っていると言った。

てことは、他の誰かが……。あつ！ 居た……。

「ねえ、平次くん。この運転手つてさっきの」

「アリスちゃんの言うとおり、野安は四年前まで郷司宗太郎の運転手をやっとなつたみたいですよ」

東尻署の方は一連の事件は郷司が絡んでいるとして、動いているみたいだ。

まあ、こんな偶然あり得ないから当然だろうけど……。

小五郎は郷司が警察嫌いだと言っていて、会うだけでも難儀だと言ってた。うーん。あたしも会いに行きたいところだけど……。

「ほなら、坂田はん。おれらも行こか？」

「おいおい、んなこと警察に任せときや良いだろ？」

「アホウ、あんたらの大阪見物をめっちゃめっちゃにしくさつた犯人をほつとけるわけないやないか。和葉におれのウチ聞いて、先に行つていってくれや。——藤峰、お前は一緒に来るか？」

平次は犯人を見過ごせないとして、郷司の元に行くことにしたらしい。あたしも誘ってくれたけど……。

「平次！ こんなときによろ女をデートに誘えるな！」

「はあ？ 何言うてんねん！」

やっぱり和葉は面白くないらしい……。彼女の気持ちはよく分かる。だけど……。あたしは――。

「先生、あたしも先生の代わりにお手伝いさせてもらっても良いですか？」

何か嫌な予感がするのよね。平次の力を疑うわけじゃないんだけど……。

「お前も物好きだなあ。おれの評判を落とすことだけはしないように気を付けろよ」

「はい♪承知しました。じゃあ、蘭ちゃん。また後でね」

「う、うん。気を付けてね。怪我とかしちやダメだよ」

だから、あたしもこの事件を追ってみることにした。

小五郎の許可を取り、あたしも平次に同行する。

「平次！ ちゃんとあのお守り持つてんの？」

「ああ、持つてるで。心配すんな」

和葉は平次にお守りを持つているか確認していた。

どうやら、彼女が彼に渡した特別なお守りみたいだ。そして、坂田の運転する車にあたしと平次は乗り込んだ。

「あーあ、和葉ちゃんに悪いことしちゃったかな」

「なんや、あいつに悪いことって」

「あなたと調査に出かけたことよ。彼女、絶対に嫌な気持ちになってるから。後でちゃんと謝ろう」

やましい事がないとはいえ、和葉は面白くない気分になっているだろう。

きちんと謝ったほうがいいわよね……。なんで、平次は気にしないんだろう……。

「はは、優しいんやね。アリスちゃんは。じゃあ、僕からも何もなかったって証言しときます」

「あはっ、坂田さん。優しい♡助かります」

坂田の気遣いにあたしは感謝する。平次があてにならない以上、身の潔白はこうやって証明しとかないと。

「女の考えることは、ようわからんわ」

「それはそうとあの議員の事務所に向かっとなるんですが、平次くんの言うてた不審な女の身元が分かりましたで！　アリスちゃんから聞いたナンバーで割り出せましたわ」

「ほんまか坂田はん」

野安の殺害現場にいた女の身元が分かったらしい。

車両ナンバーが分かっていたから、時間はかからないと思っただけど朗報だ。あの人は多分何かしら知っているはず。

「ええ、丁度事務所に行く途中の近辺の西都マンションに住んどる岡崎澄江っちゆう名前ですわ。歳は39歳。先にこつちに行ってみます？」

「せやな。なんか知っとなるって様子だったし」

「そんなら電話してみますわ」

平次もあの女から何かヒントを得られると感じ取ったらしく、こつちに先に行くことにした。

「あ、岡崎さんのお宅ですか？　私、大阪府警東尻署の坂田という者ですが……」

『け、刑事さん！　早うここに来て私を守って！　このままやと殺されてまう！　昔のことみんなしやべるから早う、早う！』

「と、とにかく落ち着いて！　家に鍵をかけて誰も入れんようにしてください！」

坂田からの電話に出た女は何か怯えてる様子で普通じゃなかった。殺されてしまう……？　つまり彼女は今までに殺された人の共通点を知っているってこと……？

「あかん！　西都マンション、もう過ぎてもうたで！」

「ど、どないします？　御堂筋この通り混んどるし、回り道しとつたらえらい時間が……」

電話をしているうちにどうやら女の住むマンションを通り過ぎてしまったみたい。回り道は時間がかかるとのことだ。

犯人がこうしてる間に彼女の所に行くかもしれない……。それなら――。

「走った方が早いわ!」

「そうね! 坂田さん、止めて貰えます!?」

「あつ! 平次くん! アリスちゃん!」

あたしたちは車を飛び降りて、西都マンションに向かって走り出す。

鍵をかけるようにと、坂田が電話をしていたから大丈夫だとは思うけど――。

「おい! オバハン! さつき電話した刑事の連れのモンや。開けてくれ!」

「ねえ、平次くん。玄関の鍵……。かかってないわよ」

マンションの彼女の部屋まで着いたあたしたち。彼女はインターフォンに出ない……。だけど玄関の鍵は開いていた。

なんで鍵をかけてないんだろう……。

「オバハン! 大丈夫か! いてはるんなら返事してくれ!」

「岡崎さん! あたしたちは警察の関係者です! どこにいますか?」

あたしたちの中に入るとさつきの女を探した。

うーん。人の気配がしない……。これは、中に誰もいないのでは……。

「変ね。坂田さんが出ないように言ったのに……。ここにはいないみたい」

「ダメや、見つからへん。坂田はんももうすぐ来るみたいやから、いつペン合流――」

「ううあああああつ!」

平次が坂田との電話を終えた、その時……。男の人の悲鳴が響き渡る。

この声は尋常じゃないわね……。一体、何が――。

「下からやー!」

「公衆トイレ? まさか!」

あたしたちは声がした方の場所を見ると、公衆トイレの前で掃除道具を持った男が腰を抜かしていた。

このタイミング……部屋の中に岡崎がいないことから――嫌なことが起こってそうね……。

「あかん。もう死んどる。何でや? なんで、外に出たんや? このオバハン」

「それにナイフがまた財布越しに胸を貫いているわ。一体、誰が……なんのために……」

第4の殺人が起きてしまった――。犯人はなんのためにこんなことを――。

そして、鍵をかけるように言ったのに、どうやって外におびき出したのだろう……。

あたしと平次はこの連続殺人の謎を追いかけることになった――。

浪花の連続殺人事件 後編

「平次くん、遺体を見つけたんは？」

「坂田はんが来る3〜4分前つてとこや。このトイレ掃除のおっちゃんが見つけたんや」

現場に警察と坂田刑事が駆けつけて検証を開始する。

やはり、岡崎の死因は今までと同じ絞殺だった。財布を刺したりしてる意味は未だに分からない。それに、坂田が鍵かけて出るなど言ってるにも関わらず外に出たという理由も……。

あたしたちは岡崎の部屋に行き、留守電に録音されているメッセ―ジを聞いた。

『ピー……今すぐ心齋橋に來いや。昔の仲間にあわせたる……ピー……午後1時8分』

『ピー……どうや、見ての通りや。次はあんたがこうなる番や……ピー……午後1時10分』

メッセ―ジはこの事件の犯人からみたかった。

これを聞いたから岡崎は怯えたような口調だったのね……。

「仲間っていうのは今までの被害者の人たちっていう意味かな？」

「そう考えんのが自然やな。それに気になるのは……」

「ええ、この最初とその次の留守電の記録……かかってきた時間は2分しか差がない。來いという内容と見たかかっていう内容なのに……」
妙なのは2件の留守電のインターバルが僅か2分だけということ。

岡崎が家を出て野安の遺体がボンネットに落ちてきた現場を見たという前提の電話をすぐにかけているということから推測できるのは――。

「犯人はどこかであるのオバハンを見てたつてことちゃうか？」

「うん。そう考えるのが自然だけど……、何かありそうね……。あたしたち、作為的に動かされてるんじゃないかしら？ ずっと嫌な予感がしてんのよ」

どうもこの事件はきな臭い。もちろん、あたしも平次も考えた上で行動してるんだけど、それでも何か見えない力によって操られてるよな……そんな気がしてならないんだ。

「嫌な予感……？ 藤峰……お前……」

「何よ？ 死体でも見た顔して」

「いや、何でもあらへん……」

平次が急にあたしのことを青ざめたような顔をして見ていたので声をかけると、彼はそっぽを向いて誤魔化した。何なのよ……、一体……。

そしてあたしたちは、再び坂田の運転する車に乗った――。平次、さつきからブーツとしてるけど大丈夫かしら……？

「……くん、平次くん！」

「おおうつ……、なんや。坂田はん」

「なんや、じゃありまへんよ。次、どこ行きます？ 郷司さんの事務所にでも行きましょか？」

「ああ、せやな」

坂田が何度か話しかけてようやく返事をした平次は郷司の家に行くことを了承する。

この事件に関わるヒントを得られそうな場所はそこくらいしかないので妥当な判断だ。

「それにしてもけったいな事件ですわ。誰も見とらんところで犯行が行われてちゆうのに、被害者の身元はすぐに割れよる」

「そういや、そうやなく」

「坂田さん、四人の身元ってどうやって分かったんですか？」

そっか、身元がすぐにわかったっていうのも立派な共通点よね。あたしは坂田に四人の身元がわかった過程を尋ねてみた。

「四人とも財布の中に免許証が入ってたんです。なのですぐに」

「免許証……」

「それや！」「それね！」

なるほど、財布が刺されていた理由……それは免許証を指し示して

いたのかもしれない。

免許取得者は大勢いるけども、その点を調べれば何か分かる可能性は大いにあった。

ということ、あたしたちは門真運転免許試験場に行ってみた――

「あかん。四人とも別々のところで免許取っとる。取得した年も別々や」

なんと四人が四人とも無事故無違反上に何の共通点もなかった。何か変わった点はないかしら？　どんな些細なことでも良いから……。

「ビンゴだと、思ったんだけどな。あつ！　でも、岡崎さんだけは何か兵庫で免許を取得してるのね？　他の人たちは大阪なのに……どうしてだろ？」

「ああ、そこは合宿免許が安うて有名なところですよ」

「あー、合宿免許かあ。ん？　合宿免許と言ったら……、平次くん、あの電話……」

「ああ、仲間がおる……。——おっちゃん、その番号分かりまっか？」

兵庫県でわざわざ免許証を取得した岡崎のことが気になって試験場の方に尋ねてみると、彼女は格安の合宿で免許を取得したと教えてくれた。

なるほど、合宿ということ——犯人の仲間という言葉に符合するわね。あたしたちはこの合宿について探ることにした――。

「なにい！　岡崎澄江と西口多代が20年前の合宿のときに相部屋やて!」

「ようやく一歩前進ね」

「んでも、この一歩は大きいで」

最初にわかった事実は岡崎と西口が合宿で相部屋だったということ。

さらに驚いたことに最初の被害者である長尾や、ボンネットに落ちてきた野安、そして府議会議員の郷司もその20年前の合宿に参加していたという。

これは……この合宿で何かあったのは間違いないわ。連続殺人の契機になった出来事が……。

一番気になるのは岡崎以外が別のところで免許を取り直しているってことね……。

「それだけやありまへんで。その合宿に聞き慣れた人物が参加してましたわ」

「誰や……？」

「沼淵……沼淵己一郎……！」

「——っ!？」

「沼淵って、今逃走中の強盗殺人犯よね？」

「ああ、もしかすると、もしかするかもしれない……」

最後にわかった事実は拳銃を持って逃走中の強盗殺人犯の沼淵己一郎が同じ合宿に参加していたことだ。これは偶然だろうか……。

その後、あたしたちはその合宿で撮った集合写真を見たが、確かに沼淵を含めた全員の顔と名前が一致する。それに全員がきちんと卒業していたこともわかった。

なのに——免許をそこで取得したのは岡崎だけだったのだ。真相はやはりこの合宿にあるとあたしは確信する。

そこで、あたしたちはその合宿で何があったのか探ってみることにした——。

「あった、これや。合宿の最終日に教官の一人が飲酒運転で事故を起こして死んだる」

「稲葉徹治……教習所きつての鬼教官……。うーん。そんな運転にう

るさそうな人が飲酒運転……?」

合宿最終日に飲酒運転で教習所の教官が死亡。あたしは「教習所きつての鬼教官」って所が気になって仕方なかった。

そんな人が酒を飲んで運転したりするのかしら……。

「なあこんなんはどうや? 逃亡資金が尽きた沼淵が府議会議員の郷司脅して金をせびろうとして、断られ……次々と昔の事件に関わった仲間を殺して再度脅しをかけた——」

「沼淵を使ってスキヤンダルを揉み消そうとしたのかもよ。郷司って人、今度は国政に出るつもりらしいじゃない——」

平次とあたしは各々の持論を展開する。いずれにせよ、郷司は特にこの件に関わっている可能性は極めて高いだろう。

「そら、どっちもあり得ますな。長尾と野安は郷司の元を去るとき、ごつつい額の退職金をもたらしいですから」

ということ、あたしたちは府議会議員である郷司の元に向かうことにした。

さて、何が出てくるやら……。

「なにい!? 郷司のおっさん会^おうてくれへんやとお!」

「ああ、わしらも夕方からこの部屋で待たされとんのや」

郷司のところに行ってきたあたしたちだったが、彼は頑なに警察を拒んでいた。

先にここを訪れた東尻署の刑事さんたちはずっと待たされてるみたいだ。

「おれが直にかけおうたる!」

「まあまあ、平次くん。ここは先輩たちの顔を立てておとなしゅうしてください」

「でも、会わないところをみるとやましい事はあるんでしようね。焦らず、待ちましょ」

これだけ警察が駆けつけても会わない態度を崩さないということ

は余程のスキヤンダルを抱えているということだ。

ずっと籠城するなんて無理なのだから慌てずに待つのも一つの手だとあたしは平次を諫める。

「そういうマイペースなどがお前の悪いところやで、鉄は熱いうちに打たなあかねや。まあええわ。少しだけ待ったる！」

平次はムツとした表情であたしを一瞥したが、素直に腰掛ける。

あたしは試験場から持ち帰った資料をもう一度見直すことにした。

「ちよつと便所行つてくるわ」

「僕、車に忘れもんしてきました」

平次はトイレに……。坂田は車に行くために席を立った。

あたしは合宿の集合写真に目を通してている。

「はいは〜い♪ふーん、この人が亡くなった……。稲葉教官ね。――

あれ？ この人は……。まさか……」

稲葉教官の顔をよく見た瞬間――あたしが今までずーつと感じていた違和感が晴れるような気がした。

この事件の犯人は……。あの人だ。だとしたら、犯人は今……。

「どうした？ アリスちゃん」

「い、いえ……。あ、あたしもちよつとお手洗いに……。平次くん、戻ってきたらこれを見せてくれませんか？」

「ん？ ああ、わかった」

あたしは合宿の集合写真を平次に見せるように刑事さんに頼んで、立ち上がった。

ことは一刻を争う。あの人のところに行かなくては――。

「せっかく楽しいデートの待ち合わせなのに……。雨が降ってたら気分が落ちるわよね」

「……………?!」

あたしは郷司のところの倉庫に隠れている人間に話しかけた。外は雨が降っている……。

こんなところで待ち合わせるなんて、ムードなんてあったもんじやないわね……。

「待ちぼうけしているなら、あたしがデートに付き合っただけよっか？ 坂田さくくん♡」

「……アリスちゃん。何を言うてはりまんのか？ 言つとる意味がよう分かりませんわ。僕は変わった倉庫があったから見とっただけや」

倉庫の陰に隠れていた坂田があたしの前に出てきた。

「どうやらしらばっくれてるみたいだ……」。

「もー、鈍い男はモテないんだかね。あなたが連続殺人犯だと言ってるのよ。ちなみに郷司さんなら、殺されに来ないわよ」

「僕が犯人？ 冗談きついですわ。東京の方でも面白いこと言わはるんですね。はははっ……」

そう、この連続殺人の犯人は坂田だ。彼はまだ誤魔化そうとしているけど、あたしは彼が犯人だと確信している。

「考えてみたら、あたしたちは坂田さんの敷いたレールの上をずっと走っていた。違和感の正体はそれよ。野安さんが殺害されたのも坂田さんが選んだ店の真ん前。岡崎さんの家に走って向かったのも坂田さんが西都マンションを過ぎる寸前で話を振ったから、郷司との繋がりも、免許証の件も全部、あなたがあたしと平次の思考を誘導していた」

そう、あたしたちは彼の巧みな誘導に乗っかって、真相を追求している気になっていた。

あたしたちがどこかに進むとき、決まって坂田が一言何かを添えている。違和感を感じていても、それにずっと気づかなかったのは間抜けな話だ。

「そ、そんなん。僕はただ、事件を早く解決するんやって頑張っ……」

「そうね。それじゃあ、岡崎さんが殺された時のことについて話しましょうか。あなた、内装も全部同じレンタカーを2台用意したわね？」

あたしたちが降りたあとで、自分もどこか近くに停車させて岡崎さんに電話をする。あなたは警察という立場を利用して「危ない」とかそういう理由で彼女が公衆トイレに隠れるように仕向けた……あたしたちを追いかけながら……」

「……………」

特にあたしと平次の目を盗んで殺人を犯した岡崎の件は手の込んだことをしていた。

2台のレンタカーまで用意するなんてね……。

「その後、彼女を殺害し、もう一台借りていたレンタカーに乗って回りで時間がかったという演出とともに何食わぬ顔で合流したのよ。平次くんの運転手になったのも、あたしたちにヒントを与え続けたのも、一緒にここに来ることでガードの固い郷司さんを殺すためってわけね」

すでに殺害した他の四人と違って郷司だけは簡単には殺せなかった。

彼は用心深くボディガードもいる。そんな彼に自然に近づくには平次に真相を探らせて一緒にこの事務所に向かうほか無かったのである。

恐らく沼淵についての情報をあたしたちに漏らしたのは、すべての犯行のスケープゴート役に彼を選んだからだろう。彼は知っているのだ……沼淵の居所も……。

「驚いたな……どこから気付いたん？」

「怪しいと思ったのは、西都マンションを過ぎる絶妙のタイミングであたしらに岡崎さんの話を振ったこと。警察署でもその話は出来たはずでしょ？ 不自然だったわ」

最初の違和感は変なタイミングで思い出したかのように岡崎の話をしたことだ。

小さな違和感だったが、これが後々点を線に繋いでいく役割を果たす。

「それだけで……？」

「ううん。一番変だと思ったのは西都マンションで再び車に乗ったと

き……あたしの香水ってそんなに匂いは強くないんだけど、車から降りて1時間くらいだとほんの微かに香りが残るのよ。男の人はあまり気付かないかもしれないけど……。それが全くしなかった……。香気に清掃や換気なんてするはずがないのにな」

そして、あたしは二度目に車に乗ったときに自分の付けてた香水の香りが全くしないことに違和感を覚えた。

まあ、このときはまだ気のせいくらいに思っていたけど……。

「変に思っただけで色々観察するとサイドミラーの角度も変わってたし、野安さんや岡崎さんと同様にフロントミラーを弄っていた。まるで同じ人と関わっていたみたいだったわ。確信したのはさっき……集合写真を見ていたときよ——」

「稲葉教官と坂田はん、あんたらの顔はよう似とった。まるで親子みたいにな！」

「へ、平次くん！」

あたしが最後に感じ取った稲葉教官と坂田が似ているという事実を言おうとしたとき、平次がこの場に駆けつけた。

あの刑事さんに写真を見せてもらってあたしと同じ推理をしたみたいね。稲葉教官と坂田は多分……親子だ。

「藤峰、大阪に来て抜け駆けは許さへんで！」

「あはは、そんなつもりじゃないんだけどな。鉄は熱いうちに……でしよっ。」

平次はあたしが彼の見せ場を奪って、いいところ取りをしようとしていると言及してくる。

いやー、急がなきゃ人が死んでたかもしれないし……仕方ないじゃん。

「お前のそないな所がマイペースやっちゅうんや。——坂田はん。20年前に何があったか知らんけど……自首するんやな！」

「そうよ。これ以上、罪を重ねようとするんじゃないやなくて、自首することで罪を少しでも償うことを考えて！」

「平次くん、アリスちゃん……。ごめんな。こうなった以上は……。もう終いやわ……。」

あたしと平次の説得も虚しく、坂田は拳銃を取り出して、頭を撃とうとする。

嘘でしょ!? 自殺なんて許さないわよ……。

「坂田さん、馬鹿なことはやめなさい!」

「アホなことはよせ! 坂田!」

「来るな! 来たら撃つ! もう……もう終わりにしたいんや……!」

坂田は興奮しており、あたしたちに近付くと撃つって脅してきた。んなこと言われたって、みすみす目の前で人が死ぬなんて見逃せないわよ。

「くっ! やめるのよ! 死ぬなんて許さないんだから!」

「うわああああっ!」

あたしが坂田に何とか飛びかかろうとすると、彼は動揺して2発拳銃を撃ちだす。

「藤峰! 危ないっ!!」

「平次くん!? うっ……腕がっ……!」

その瞬間、同時に動いていた平次があたしを突き飛ばして、あたしは腕に……平次は胸に銃弾を受けてしまった。

へ、平次……、まさか……あたしを庇って……。

「も、もう、ダメや……、何の恨みもない平次くんまで手に掛けて……ば、僕は……、僕は……」

「馬鹿! なんでまた死のうとしてんのよ! 平次くんが……、平次くんが……必死で止めようとしたのに……!」

平次が倒れたのを見た坂田は再び自殺をしようとしたので、あたしは彼の腕を掴んで彼を止めようとする。この人を死なせるわけにはいかない。絶対に……。

「離してや! 僕はもうおしまいや! 死なせてくれや!」

「て、手に力が入らない……、あたしじゃ止められない……!」

しかし、腕を撃たれたあたしは上手く力が入らない。それに女の腕力で現役の刑事と揉み合いになって勝てるはずもなかった。

「ええ加減にせえよ! このアホンダラ!」

「平次くん……！ な、なんで……！」

そんな中、平次がムクツと立ち上がり坂田を取り押さえて、残りの銃弾を撃ちだした。

これで、坂田の自殺をとりあえず止められたわね……。

「これで銃弾は全部や！ もうふざけたマネは出来へんぞ！」

「で、でも燃料に銃弾が当たって燃えてるわよ！」

しかし、その銃弾が運悪く灯油か何かを貯蔵しているタンクに当たってしまい、倉庫がメラメラと燃えだしてしまった。これは、早く逃げないとまずいわね……。

「わかつとる！ はよ、逃げるぞ！ 藤峰、坂田はん！ ぐうっ……」

「平次くん。やっぱり胸に銃弾を……!?!」

平次は胸を押さえて苦しそうな顔をした。やはり銃弾を受けてしまっていたのだろうか……。

「おれは平気や。藤峰、お前は無事か？」

「あなたのおかげで腕を掠っただけよ。大丈夫」

「よし、行くぞ……！」

「僕のこととは放っておいてええから。どうせ、もう……、生きる価値なんかないんや」

あたしと平次は怪我をしても逃げ出すことが出来そうだったが、無傷の坂田はこの場に座り込んで死のうとしていた。

まったく、まだウジウジしているの？ 早く逃げなきゃ火が……ここまで……。

「情けないこと言うなや！ あんた、日本で唯一……拳銃を持つ事を許されとる警察官やぞ！ 何でそれを誇りに思わんのや……！」

平次は坂田の胸倉を掴みながら叫んだ……。警察官が情けないことを言うなど、激しく叱責するように。

「立てや坂田ア!! 手帳に付いとる桜の代紋が泣いとるとオ!! うっ……」

「へ、平次くん……。僕は……。僕は……」

坂田は平次の熱い言葉によって目に光を取り戻したように見えた。あの熱血はあたしにはちよつと真似できないかな……。

しかし、平次は胸をまた押さえて苦しそうな顔をしている。

「平次くん。あたしが肩を貸すわ……。坂田さん、彼の心意気にあな
たが応えられるくらいの良い良識が残ってることを期待してる。どうす
れば良いか……。わかるわよね……。？」

「……………平次くんは、僕みたいなもんにも最後まで生きろって言っ
てくれはった。僕はただ死んで責任から逃げようとしてただけやっ
たわ」

あたしは平次に肩を貸して、坂田は観念した表情のまま倉庫を出
た。

倉庫の外には騒ぎを聞いて駆けつけた刑事さんや、あたしたちの帰
りが遅いことを心配して、ここまで来たという小五郎と蘭と和葉がい
た――。



その後、坂田は罪をすべて認めて自首。やはり全ての罪を擦り付け
て、自殺に見せかけて殺そうと考え、監禁していた沼淵の場所も吐い
たので、彼も捕まった。

どうやら、今回の事件の被害者と沼淵と郷司は20年前に稲葉教官
に無理やり大量の酒を飲ませて事故死させた過去があったらしい。

父の死に疑問を持って刑事になった坂田は、ある日のこと指名手配
中の沼淵を追い詰めた。

そのとき、稲葉教官と瓜二つな彼を見て驚いた沼淵は20年前の出
来事を全部彼に話して命乞いをしたらしい。

そこから彼の復讐劇が始まったみたいなのだ――。

ふう、それにしても……。まさか撃たれるとは……。命があつて良
かったわ……。

「お、おい！ アリス！ お前、平気か!？」

「アリスちゃん、撃たれたって聞いたけど……。大丈夫なの？」

「う、うん。あたしは平気……」

その後、あたしは小五郎と蘭に無事を報告する。いや、平次に庇ってもらってなきや重傷だったかもしれないわ……。借りがまた出来てしまった……。

「平次！ しっかりしてや！ 平次！」

「……………」

和葉はソファで横になっている平次に声をかけ続けていた。

あんなに必死になって……。よほど彼のことを心配してるのね……。

「い、嫌や！ そ、そんなん！ 平次、お願いやから目を覚ましてや！
ぐすつ……。うえええんつ！ 平次イイイ！」

「——うるさいわ！ 耳元でキンキン大声出しよってからに！」
「……………」

泣き叫びながら平次に呼びかける和葉だったが、彼が起き上がり彼女を怒鳴ると絶句して彼を見つめる。

「……平次？ もしかして平気なん？ 胸を撃たれたって聞いたんやけど……」

「当たり前や。お前がくれたお守りのおかげやけどな。ちようど、坂田はんが撃った銃弾がお前がお守りに仕込んだ手錠の欠片に当たりよってな、軽傷で済んだちゆうわけや」

そう、平次に向かっていった銃弾は奇跡的に和葉がこっそりお守りに忍ばせていた手錠の欠片に当たった。そして、彼は助かったのである。

すごいなー。和葉のお守りのご利益は……。

そして、そのことをあたしに話したあたりで彼は昨夜徹夜であたしたちに大阪観光のガイドをどうするか考えていたことが影響してなのか、唐突に睡魔に襲われたのだ。

つまり、あたしはグースカ眠っている平次に肩を貸しながらみんなの元に彼を連れて行ったのである……。あたしにマイペースとか言ってたけど、彼も大概よね……。

「だ、だって藤峰……さんが……気絶した平次を運んどったし……、そ

んなこと言わんかったから」

「いや、あたしはちゃんと言ったわよ。大丈夫だって。大体、重症なら救急車呼んでるから……。まっ、あたしの声が聞こえないくらい……。大好きな平次くんのが心配だったんでしようけど。くすっ……。」
誤解のないように言っておきたいのは、あたしはきちんと和葉にそのことは伝えた。

しかし、彼女は平次の胸が撃たれたというくだりを聞くと顔を真っ青にして上の空になってしまう。

彼女にとつて平次はそれだけ大事な人だから、仕方ないけど……。
「す、す、好きちゃうわ！ でも、ありがとな、平次を助けてくれて。あんたのこと……。勘違いしとったわ。ちゃらんぽらん女が平次を誑かしているんかと」

「にやはは、普段の行いを反省するつきやないわね。ちゃらんぽらんは否定できないし……。和葉ちゃんが心配するのも当たり前よ」

別にあたしの印象が良くないのは、彼女の立場からすると仕方ないし、自分の性格もお世辞でも良い方じゃないので彼女が悪い印象を持つのは無理がない。

むしろ、彼女があたしにお礼を言ったのが意外だった。

「あんた、ええ子やな……。アタシ、結構失礼なこと言うたのに」

「それに、あたしも和葉ちゃんのお守りのご利益のおかげで助かったしね。あのとき、平次くんが庇ってくれなかったら、あたしもかすり傷じゃ済まなかったろうし……」

そもそも、平次のおかげであたしは助かった。これは間接的に和葉のお守りのご利益かもしれない。

根拠はないけども、そんな気がしたのだ。

「……なあ、ホンマに平次とは何でもないんか？ 別に怒らんから正直に言うて欲しいんやけど」

「同業ってだけで何にもないわよ。和葉ちゃんの大事な人に手を出したりしないから……。出来たら、仲良くして欲しいな」

泣きそうな顔をして、再び平次の関係を問う和葉に返事をしながら、あたしは彼女に手を差し出す。

「ホンマにホンマやな？ 信じるからな。アリスちゃん」

「うん！ 信じてくれてありがと。じゃあ、平次さんと付き合ったら教えてね♡お赤飯炊くから」

和葉があたしの手を握ってくれたので、あたしは彼女に平次とそういう関係になったら教えてくれと声をかけた。

彼女の顔がみるみると赤く染まる……。こういうところは蘭に似てるわね……。

「そ、そういう意味で確認したんちゃうで！ 勘違いせんといてな！」

「ふふふつ、顔真っ赤にして否定しても説得力ないんだから♪」

「もくもく！ 違う言うてるやろ！」

あたしと和葉はようやく打ち解けて話をする事が出来るようになった。

やっぱり、この子は可愛い子だわ……。

「あーあ、アリスちゃん。また悪い顔してる」

「なんや、和葉のやつ。あんなに藤峰のこと嫌ったのに、楽しそうに話しとるやんけ。女つちゆうのはよう分からんで」

こうして、大阪で遭遇した連続殺人事件は解決に至った。

もー、毎回出かけると事件に遭遇する体質は何とかならないかしら……。きつと無理なんでしょうね……。

黒の組織との再会 前編

「あら、哀ちゃん。お友達と今帰り？」

「ええ、そうよ。あなたこそ、どうしたの？ 学校は」

「ああ、今日は帝丹高校休みのよ。何かの記念日で。だから、早めに買い物に行こうって思ってた。哀ちゃん、風邪気味だったから生姜をたっぷり使った鳥団子スープでも作ろうかしら」

平日だというのに高校が休みだったあたしは、探偵事務所も小五郎の麻雀の予定で休みだったので早めの買い物に出かけて、下校中の哀と鉢合わせした。あら、一緒に帰ってるお友達って……。

「ねえ、灰原さん。こ、この人ってまさか藤峰愛梨寿？」

「間違いありませんよ！ 彗星のごとく現れて、怪盗キッドをも打ち破る切れ味の鋭い推理で一世を風靡している女子高生探偵です！」

「この前もテレビに出てたよなあ。おい、灰原、お前と知り合いなのかよ！」

恐らく漫画で出てきたコナンのクラスメイトであろう、歩美、光彦、元太の3人があたしに気が付いて口々に哀に話しかけていた。

コナンが居なくても、友達になってくれてたみたいね……。この子たちコミュニケーション能力ありそうだもん。ああ、良かった……。

「あたしと哀ちゃんは一緒に住んでるのよ。阿笠博士の家で。この子は妹みたいなものだから」

「ただの親戚よ……、親戚……！」

あたしは哀の頭を撫でながら子供たちに彼女と同居していることを告げる。彼女は迷惑そうな顔をしてあたしの手を振り払いながら妹って言葉に過剰反応した……。

「えー、知らなかった。博士も教えてくれなかったし」

「これはニユースですね。まさか、身近に有名な探偵が住んでいたなんて」

「でもよー、実物はなんか頭良さそうに見えねーな」

「そう言われてみれば」「そうかも」

元太から頭悪そうって言われて、歩美と光彦が同意した。

ええーっ!? テレビの編集抜きにするとあたしって小学生から見ても、そんな印象なの……? そりゃないわよ……。

「あはは……、あたしって子供にまでバカそうに見えるのね……」
「その緩みきった表情のせいじゃないかしら?」

あー、昔は先生によくヘラヘラするなって怒られたっけ……。あたしもコナンみたいに眼鏡をかけてみようかしら? ダメだわ……。眼鏡をかけたなら賢そうに見えるって発想がもうバカっぽいもん。

「じゃあな!」

「また、明日!」

「バイバーイ!」

「気を付けて帰るのよ♪」

少しだけ雑談して子供たちは帰路についた。あたしはとりあえず買い物その後回しにして哀と博士の家に戻ることにする。

「いや、哀ちゃんに友達が出来ていて良かったわ。お姉さん、安心してちゃった」

「……そうね。でも不安になるわ。私の存在があの子たちの日常を――」

「大丈夫よ。あたしがそんなことさせない。約束したじゃん。あなたを守るって」

哀は自分の存在が他の人を傷つけることを恐れているみたいだ。だからこそ、あたしは黒の組織を許さない。彼女と出会ってから彼らをとっ捕まえてやろうという気持ちさがさらに上がった。

「わかってないのね……。あなたはまだ組織の恐ろしさを……。――っ!?!」

「どしたの? 哀ちゃん。そんな顔して……。あの黒いポルシェに何かあるの……?」

そんな会話をしてる折にふと、哀は歩みを止めて顔を青くする。

黒いポルシェが止まっているけど……。それに反応してるのかしら?
?

「うーん。ポルシェ356A……。50年前のクラシックカーというや

つね。うわあ……古つ……、完全に趣味の車じゃん。持ち主は出かけているみたい」

「ジン……、ジンの愛車もこの車なのよ……」

あたしが新一の知識からこの車が相当な年代物だということ口にすると、哀はジンの車だと告げる。なんですって……それじゃもしかして連中はこの近くに……。

「へえ、そりゃあ良いことを聞いたわ」

「なんで、笑ってるの？」

あたしの口角が釣り上がったのをみて、哀は訝しそうな顔をした。だってラツキーじゃない。ターゲットがわざわざこっちに来てくれたんだから。

「アリスくん、言われたものを持ってきたが、一体何を？」

「サンキュー、博士。昔の車はこうすれば……」

博士が持ってきてくれたハンガーとペンチと針金を利用してポルシェのドアを開ける。

よし、上手くいった。さてさて、どこに仕掛けようかしら……。

「ちよ、ちよつと、あなた……、何するつもりなの？」

「えっ？ 発信器と盗聴器を仕掛けるんだけど」

「バカなの？ まだ、彼らの車だと決まったわけじゃ……。——っ!？」

ふ、藤峰さん、通りの向こうに——」

あたしがガムで発信器と盗聴器を包み込み、助手席付近に仕掛けていると哀が通りの向こうにジンとウオツカを発見した。

ビンゴじゃない。相変わらず目立つ格好してるから遠目から見えるのね……。

「ん？ 車の周り、やけに雪が荒れてるな……」

「通行人が見てたんじゃないですかい？ 兄貴の車……珍しいから」

「フン……ドイツのアマガエルも偉くなったもんだ……」

なんか、ジンがウオツカに車を褒められて嬉しそうにしてた……。
やっぱり、車好きって周囲の人に注目されると嬉しいもんなのかし
ら……。とりあえず気付かれないで良かったわ。

「さあ、博士追うわよ。でも、ナンバー覚えられたら厄介だから車間は
出来るだけ開けてね♪」

「無謀よー。あなた、何の準備も無しに組織に関わるのがどんなに危
険なことか!」

「虎穴に入らずんば——だよ。哀ちゃん。ちよつと静かにしてね」

博士に距離を取りつつ追跡メガネを利用して追いかけることを伝
える。

哀が危険とか言ってるけど、盗聴が出来ないからとりあえず黙って
貰おう。

『ああ、オレだ……。どうだ？ そっちの様子は。——なに？ まだ
来ない？ ふつ、心配するな。ターゲットは18時丁度に杯戸シテイ
ホテルに顔を出す。テメーの別れの会にならとも知らずにな』

ふむふむ、杯戸シテイホテルで何かするつもりね。この口ぶりは十
中八九——殺しでしようけど。

『とにかく奴の手が後ろに回る前に口を塞げとの命令だ。ぬかるな
よ、ピスコ。なんなら、例の薬を使っても構わねーぜ』

「ピスコ……。？」
「そのコードネームなら耳にした事があるわ……。会ったことはない
けど……」

コードネーム、ピスコ……。そんな人、黒の組織に居たっけ？ と
にかく、ピスコって奴が殺しをするってことね。

『あ、兄貴……。何ですか？ それ』

『多分、発信器と盗聴器だ……。』

「あれま、バレちった」

「な、なんじゃと!？」

あちやー、ジンのやつ……。やるわね。こんなに早く発信器を見つけ
るなんて……。

「どうするのよ。追跡がバレたわよ。だから危険だって言ったでしょ。早く逃げなさい」

「うん。ジンを侮ってたことは認めるけど、このまま引き下がるつもりはないわ。連中、杯戸シティホテルで殺人を計画してた。それを潰すつもり」

哀は逃げるように進言するが、あたしはこのまま殺人が起こるのを指をくわえて見過ごすつもりはない。

幸い、奴らの会話から杯戸シティホテルで事が行われることがわかった。だから、あたしはそこを目指す。

「相変わらずの正義感ね。くだらない……。私は巻き込まれるのはごめんよ」

「もちろんよ。哀ちゃんはあたしと違って顔が割れてるもん。子供の頃の顔も知られてるし——。博士と一緒に車で待ってて、例の薬の情報くらい持ち帰るから」

「れ、例の薬……?」

アポトキシン

「そう、例の薬——恐らくAPT_X4869。ジンが匂わせてたからね。ピスコって人がそれを使用することを」

もちろん、哀を巻き添えにするつもりはこれっぽっちもない。

アポトキシン

しかし、APT_X4869の使用を匂わせる発言もあったし、あたしはこの機を逃すなんて考えられなかった——。



「哀ちゃん、ホントに一緒に来るの?」

「考えてみたら、あなたただだと暴走して逆に危険なもの。それに……あの薬を作ったのは私だから」

「……あまり思い詰めないでね。開き直りも時には大事よ」

哀はきつと薬の開発者としてこれ以上殺人にあれが利用されることを見過ごせないだろう。

正義感なんてくだらないとか言ってるけど……本当は優しい子だ

から……。

「……そんなことより、ここで合ってるの？」

「うん。ピスコに『別れの会』とか言ってたから、間違いないと思うわ。彼のターゲットもここにいるはず」

哀がここで合ってるかどうかを聞いたこの場所は『巨匠を偲ぶ会』の会場だ。

映画監督の酒巻とかいう人を偲ぶ人たちが集まっているんだって。さて、どうやって入ろうかな……。

「哀ちゃん、お願い……」

「仕方ないわね……。あー！ ボールが転がって行っちゃったあー」

「あらあら、ダメでしょ！ 哀ちゃん、勝手に入ったら！ おほほ、すみません。すぐに出ますので」

哀に子供が勝手に会場に入ってしまった演技をしてもらって、あたしはそれを追いかける保護者のフリをして中に潜入する。

コナンなら子供だから素通り出来るだろうけど、あたしが無策で通り抜けようとしても絶対に受付に捕まっちゃうもんね……。

さて、ピスコってやつを探すわよ……。

「助かったわ。哀ちゃん」

「え、ええ……。こ、これくらい、な、なんでもないわ」

「ピスコが殺そうとしているのは恐らく——」

「うっ……。——はあ、はあ……。ううっ……」

哀のおかげで容易に会場に入れたけど、それに伴うように彼女の顔色がみるみる悪くなっていった。明らかに精彩を欠いている……。

「ねえ、やっぱ1回出ましようか？ いつもの哀ちゃんらしくないじゃない。どうかしたの？」

「……イヤな夢を見たのよ」

「イヤな夢？」

「彼らに見つかって、追い詰められ——あなたが撃たれる夢よ。そして、その後……。私に関わった人間が次々と……」

哀はあたしが死ぬ夢を見たらしい。この前、平次もそんなこと言っ

てたし……。

人の夢の中で何でこんなにあたしは死ぬんだろう……。それで、そんなに不安そうな表情なのかあ。

「ま、またあたし……人の夢で撃たれちゃったんだ。どんだけ危なかつしいって思われてるのよ……。ほら、これを付けて」

「追跡メガネ？」

「うん。これって凄いのよ。長年の幼馴染だつてこれ付けられるだけで、近くに居ても正体に気付かないの」

あたしは不安がる哀に追跡メガネをかけさせた。

この眼鏡はなかなか便利だし、正体を隠すにはもってこいのアイテムだ。

「何それ？ 漫画かアニメの話？」

「まあね。あたしの知ってる一番凄い探偵のお話よ。頼りにしてるわよ、哀ちゃん♡」

「……………うん」

哀の背中を軽く叩きながら声をかけると、彼女は目を逸しながらコクンと頷いた。

なんか、いつものリアクションと違うんだけど……。

「あり？ 本当にどうしたのよ」

「別に……、そのサングラスと帽子似合わないって思っただけよ」

「仕方ないでしょー。割と有名人になっちゃったんだから」

あたしが哀の顔を覗き込むと、彼女はツンとした表情でサングラスと帽子を深く被っている格好をディスプレイしてきた。

今回は藤峰愛梨寿が関わっていることがバレたら面倒だから自衛くらいしなくちゃならない。

哀ちゃんはいつもの感じに戻ってくれたわね……。

「彼女は直本賞受賞の女流作家、『南条実果』、彼はプロ野球の球団オーナーの『三瓶康夫』。それに、敏腕音楽プロデューサーの『樽見直哉』……アメリカの人気女優『クリス・ヴィンヤード』に有名大学教授『俵芳治』……、さらに自動車メーカーの会長の『増山憲三』っ

て……経済界の大物まで来てるのね」

「そうそうたる顔ぶれね」

「なんつっても、『巨匠を偲ぶ会』だもん。あはっ、TVカメラまであるわね♪」

おおーっ、会場の中は有名人だらけだ。TVカメラもあるし、ホントにこんなところでピスコは人殺しをしようと思っっているのか。

大胆なやつよね。薬を使うってやり方だったら、食べ物や飲み物に混ぜるっていうのもアリだけど……。

「あなたはこんな状況でも緊張感の欠片もないんだから……。それで、分かったの？ ピスコが狙ってるターゲット」

「うん。ジンが電話で言ってた、18時前後にここに来て、尚且つ、明日にも警察に捕まりそうな人物は……。今あそこでレポーター達に囲まれてる、あの人よ。きつと」

「なるほど、『呑口重彦』——今、収賄疑惑で新聞を賑わせてる政治家ってわけね」

ターゲットを見つけるのは簡単だった。後ろに手が迫るっていうのは即ち逮捕されるっていうこと——つまり、収賄疑惑のかかっている『呑口重彦』議員がピスコのターゲットだろう。

「捕まる前に口を封じるってことは、あの政治家も組織の一員なのかな？」

「さあ、どうかしら？ 捕まればわかるんじゃない？」

さすがに哀も組織のメンバーを把握しきれいでないので呑口についてはノーコメントだった。

とにかく、呑口をマークしよう。助っ人も、もうすぐ来ることだし……。

「ちよつと失礼しますよ」

「あ、あれは目暮警部」

「うん。あたしが呼んどいた。犯罪防止の抑止力にはなると思ってさ。あの政治家が殺されるかもしれないってね」

警察がいるのといないのでは、犯罪のやりやすさも全然違うだろ

う。あたしは会場に入る前に、呑口が会場に入るのを見かけていたの
で、予め目暮警部に一報を入れていた。

殺人を未然に防ぐには、相手に諦めてもらうのが一番だ。目暮警部
が牽制すればピスコも諦めるかもしれない。

「では、皆さん。酒巻監督が生前ひた隠しにしていたと言う秘蔵フィ
ルムをスライドでご覧に入れましょう」

アナウンサーの「麦倉直道」が、今からスライドを使うと口にし
た。

あらく、会場内が消灯しちやつたわね。こりや、何か嫌な予感がす
るわ。とりあえず、スライドの光だけが頼りね……。

「ちよつと、彼がいなくなつてゐるわよ」

「嘘でしょ!？」

哀の言葉であたしは呑口の姿が見えなくなったことに気が付いた。

あたしたちは呑口を探す。目暮警部たちもまた同じように探しま
わるけど、彼の姿を見つけることは出来ない。

「——んっ? フラッシュユ?」

誰かがカメラのフラッシュ機能を使い、写真を撮つたみたいね。何
を撮つたんだらう?

「この音は……何かしら? 上に向かっていくような……。——つ
!？」

フラッシュユにアナウンサーの麦倉が反応したところ、変な音が上に向
かっていくのを感じた。そして——ガラスの割れる音が響き渡る。

な、何が起こつたつていうの? 早く電気を付けてもらわないと何
もわからない。

「明かりをつけろー!」

「……ありや、これは……ハンカチ?」

明かりをつけるように叫ぶ声を聞きながら、あたしは頭の上にヒラ
ヒラと落ちてきたハンカチを手にする。なんで、こんなものが上から
……。

「……ようやく電気がついたわね。くっ……、まさかこんなことつて

……」

会場の明かりが戻りーあたしは目にする。呑口がシャンデリアに押し潰された状態で亡くなっているのを――。

信じられないわ。警察が見てる中でこんな大胆な殺しをやったのけるなんて……。

とんでもないわね。あの組織の連中は……。

「警視庁の目暮警部です！ 皆さん、お静かに。そして、ここから離れないようにしてください！」

目暮警部が大声を出して、会場内の人間に外に出ないように声をかける。

いつもならあたしがしゃしゃり出て捜査に加わるんだけど、ピスコがどこに居るのか分からないので今は自重することにした。

「おい、どうだ……？」

「駄目ですね。もう息はありません」

「そうか……直ぐに、署に連絡してくれ」

目暮警部は高木刑事に呑口の生死を確認させていた。やはり見た目どおり死んでいるみたい……。

くっ……、みすみす目の前で殺されるなんて悔しいわ……。

「あんたらにしては、やけに来るのが早いな」

そんな彼らのやり取りを見ていた球団オーナーの三瓶は事件が起きてすぐに目暮たちがいることに疑問を呈する。

「通報があつたのですよ。呑口議員が誰かに狙われているとね」

警部は三瓶に通報があつたことを伝えた。まあ、誰かというか。ピスコなんだけど……。問題はピスコが誰かって事よね。

目暮警部の聞き込みによると、呑口の近くにいたのは女優のクリスと大学教授の俵。特に俵に至っては服が破れていることから、かなり際どいところにいたみたい。

そして、クリスは、不審な人物は見えていないとのこと。

まあ、どう見ても事故っぽいからプロデューサーの樽見つて人が言うようにシャンデリアの鎖が古くなって切れてしまい、偶然にも下に

いた呑口が死んだと考えるのが自然よね。

「だけどあなたたちをここから出すわけにいかないわ。今日殺される予定の人がたまたま事故死なんてあり得ないんだから。」

「じゃが、殺人を示唆する通報があったんじやろ？ それはどうするんだね？ 我々を詮索する前に、まずは通報者の事を詳しく教えて欲しいもんじや。もしかしたら通報者が犯人かもしれないんからもう」

自動車メーカーの会長である榊山はその通報者が犯人かもしれないと目暮警部にその通報者を明かすように求めた。

「まっ、彼にはあたしは別件で調査してることがあるということ、名前は伏せるように頼んでいるから黙ってくれたけど……。」

「普段から彼に信用されるように頑張ってきて良かったわ……。」

「天罰に決まってますよ。普段の行いが悪いから……。」

「よく死体の前で食べられますね」

「フン……、肝の小さい若造は黙ってる！ ——っ!? ペっ——！」

おい！ シエフを呼べ！」

こんなときに呑気に料理を食べていた三瓶は何か異物を口に含んだらしく、それを慌てて吐き出した。んっ……？ あれはまさか……。」

「これは……、シャンデリアの破片ね……。なんで料理の中に……？」

あたしはハンカチを床に落として、それを拾うフリをしながらこっそりと三瓶が吐き出したものを拾った。ハンカチで包みながら……。」

これは犯人のトリックを解くための大きな鍵になりそうね……。」

「殺人ならシャンデリアに何らかの仕掛けがないと変ですよ？ しかしそれが見当たらないなら事故で決まりじゃないですか？ わかったなら、私たちを早く解放してくださいさる？」

あたしがシャンデリアの破片を回収した頃、警部たちは作家の南条に解放しろと迫られていた。確かに彼女のセリフは的を射ている。

これは風向きが悪いわね。警部にはもう少し頑張ってもらいたいけど……。」

「藤峰さん、引きましよう。私たちがいることが奴らに知られれば危

険だわ。あなたなんて顔が割れてない優位がこの件で台無しになるかもしれないんだから」

「確かに危険は危険よね。——でも、ここでピスコを捕まえられればかなり安全になるんじゃない？ 哀ちゃんの明日が……」

哀は逃げたほうが良いとあたしの手を握りしめながら言った。

でも、あたしはこんな危険人物を放置出来ない。それに哀の身の安全を考えるなら、このチャンスに組織の人間を捕まえておいたほうがいい。

「そう言ってくれるのは嬉しいけど、あなたが優れた探偵とはいえヒントがその鎖だけじゃどうしようもないんじゃない？」

「手がかりは2つあるわよ」

「えっ？」

「このハンカチが落ちてきたのよ。シャンデリアが落下した後、明かりがつく前に……」

あたしはさっき手に入れた紫色のハンカチを哀に見せる。これがシャンデリアの破片と同様にこの事件を解く鍵になるかもしれない。

「それがなんだって言うのよ。犯人の名前が書いてあるわけでもあるまいし」

「そうでもないわ。ほらこの祭典の名前が入った刺繍があるでしょ。実はこのハンカチはここで配られていたものなのよ」

このハンカチの刺繍から会場で配られていた品であることがわかった。だから、招待客はみんなこれを受け取っている。

「ふーん。それが何なの？」

「よく周りを見て。他の客達の持つハンカチはそれぞれ色が違うでしょ？ 色が違うのは、酒巻監督の代表作、『虹色のハンカチ』から来てるみたいなの。つまり、受付の人に聞けば、紫のハンカチを渡された人たちがわかるということよ」

さらにこのハンカチの色は映画にちなんで7種類あるので、紫色のハンカチを受け取った人に限定して調査すればかなり人数が絞れるはずだ。

一気に容疑者が1／7になるのだから、それだけで大きな前進って

わけ。

「でも、それは本当に、あの殺人に関係してる物かどうかなんて……」
「もちろん、まだ何に使ったかも、犯人のものかさえも分らない。でもね、あたしは事件に関わっているってかなり確信をもっているわ」

哀はハンカチが犯行に関係あるのか懐疑的だけどあたしはこの推測にそれなりの自信があった。

「どうして？」

「これね、あたしの頭の上に落ちてきたのよ。哀ちゃんの頭の上なら誰かの手元から落ちてきた可能性もあるけど、あたしの背丈で頭の上に落ちてきたのなら……」

「かなり高い位置から落ちてきた可能性が高いわね」

「そして、被害者も頭上から落ちてきたシャンデリアに押し潰されて死んでいる……。どう？ 何の関わりもないって考える方が不自然じゃない？」

そう、ハンカチはあたしの頭に落ちてきたのなら、高い位置から落ちたということになる。

つまり、誰かが誤って落としたという線はないのだ。ハンカチが頭に落ちてきて、それとほぼ同時に……シャンデリアが天井から落ちた。

この因果関係こそ、この事件の核心なのではとあたしは推理している。

「いつもいつも、知らないうちに真相に迫っているんだから。そのクールな顔がずっと続いて欲しいものね。ところで、ここから出て受付まで行けないでしょ？ 容疑者候補はここにいる全員なんだから」
「まあ、気が進まないけど……目暮警部に何とかしてもらおうわ。哀ちゃんはあるべくあたしの近くから離れないようにして隠れてて」

この会場は警察によって外には簡単に出られなくなっている。トイレと言つて出ることには出来るが、招待客ですらないあたしがそれを言うのはリスクだ。サングラスに帽子という格好も怪しい……。

こういうときは子供の体が羨ましくなる。

やはり、目暮警部に頼むのが一番無難だろう……。

「呑口議員が亡くなられたのは本当ですか！」

「事故死だと聞いたのですが！　どうなんですか!？」

「あ、後で答えますから……」

「早く教えて下さい!!」

あたしが警部に近付こうとしたとき、会場の扉が開いて記者たちが騒いでいて警察の制止を振り切ろうとしていた。

うはあ……、こりや警部たちも押さえるの限界だろうなー。

「ど、どうします？　警部……」

「うむ、どう見ても事故にしか見えんし……ひとまず帰すか……」

困り顔の高木刑事が目暮警部に話しかけて、彼も会場内の人たちを帰そうと言い始めていた。まあ、この状況なら仕方ないけど……。

「警部……、それなら条件に当てはまる人を除いて帰してあげてください……」

「そ、その声はアリ……むぐっ……」

小声で警部に話しかけると、彼があたしの名前を口に出そうとしたので、咄嗟に彼の口を塞いだ。危ない、危ない……。

「すみません。あたしのことは他言無用で……。容疑者が絞り込めましたので、今から話す条件に該当する人たちを事情聴取してくださいませんか？」

「わ、わかった……それで、その条件は？」

目暮警部にあたしは受付で紫色のハンカチを渡した人物のみを事情聴取するように手短に話した。

恐らく容疑者はその中にいるからだ。人数を絞れば、それだけ監視しやすくなるし……。

「紫色のハンカチだな。承知した。高木くん！」

「今から受付で聞いてきます！　——つて、うわっ！」

「日売テレビです！　事故のときどこにいましたか！」

「状況を詳しく教えて下さい！」

「この事故についてわかることを話してください！　お願いします！　！」

高木が受付のところに向かおうとしたとき——記者たちが扉の前の制止を振り切つて会場内になだれ込んできた。

困ったわね……。せめて哀だけでも外に連れ出した方が良さそう
だわ……。

「これは……、一度退散したほうが賢いわね。哀ちゃん、出るわよ。——あれ？」

記者たちが大勢入つたこの状況であたしは哀を見失つてしまった。
ちよ、ちよつと……。どこに行つてしまったのよ……。

「哀ちゃん！ 返事をして！ 哀ちゃくくん!!」
何ということだ……。哀が会場から忽然と消えてしまった。

あたしは猛烈に嫌な予感がしながら彼女を探したが見つからない。
黒の組織との本格的な死闘が始まった——。

黒の組織との再会 後編

「哀ちゃん！ 哀ちゃん！ ねえ、聞こえる!？」

『ふ、藤峰さん？ どこにいるの?』

「ホテルの前に停めている博士の車の中で、追跡メガネを介して交信してるのよ」

あたしは会場内が混乱してきたので、警部に容疑者たちのことを任せてホテルを退散し、博士の車から哀に交信を続けていた。

よーやく、彼女の声が聞けて少しだけ安心したわ……。

『私……、どーしたの?』

「落ち着いて、よく思い出してもらえる？ 目暮警部に話しかけている時に、あなたがどうなったのかを」

どうやら哀は記憶が混乱しているらしく、自分の置かれてる状況もまだ把握してないらしい。

あたしは彼女に冷静になるように声をかけて順を追って話してもらうことにした。

『ああ……そういえば私……、記者がなだれ込んで来て、あなたを見失って……それから誰かが後ろから……。あっ——!？』

「後ろから……どうしたの?」

『誰かに薬を嗅がされて、どこかの酒蔵に監禁されているみたいよ……』

哀は会場が慌ただしくなった混乱の中で何者かに捕まって酒蔵に監禁されていると告げる。

監禁した人物が誰なのかは想像するに容易い。

「誰かにつて……まさか!？」

『ええ、恐らく警察の監視下で殺人をやったのけた組織の一員……ピスコー!』

「やっぱり……。状況はわかったわ。それで、ピスコは近くにいるの?」

『いいえ、今は誰もいないわ。扉にはしっかりと鍵がかかっているけどね……』

ピスコは哀の監禁場所である酒蔵にはいないみたいだ。

哀にもう少し詳しく様子を聞くと、残っているのはダンボール箱と清掃員のツナギ。どうやらピスコはトイレに用意していたダンボール箱に彼女を入れツナギを着て、ここに連れてきた可能性が高い。恐らく、会場で呑口を殺しそこねた時はトイレで殺害する予定だったのだろう……。

「わかったわ。まずはその酒蔵からの脱出方法を考えましょう。大丈夫よ、落ち着いて考えれば必ず——」

『いい？ 藤峰さん。よく聞いて。私の体を幼児化させてあなたを性転換させたAPTX4869の“アポト”は“アポトシス”……つまりプログラム細胞死のこと。そう……、細胞は自らを殺す機能を持っていて、それを抑制するシグナルによって製造してるってわけ』

「ふえっ？ 哀ちゃん？」

哀と一緒に脱出方法を考えようと提案しようとする彼女はいきなり科学の講義を始めた。

いやいや、そんな話は今いらないでしょーが。

『ただ、この薬はアポトシスを誘導すだけじゃなくテロメアザ活性も持っていて、細胞の増殖能力を高め——』

「ねえ、哀ちゃん。そんなことより、今は脱出を考えるべきでしょー」

『いいから！ 黙って聞きなさいよ！——もう2度と、もう2度とあなたと言葉を交わすことなんてないんだから……』

あたしが哀に薬の話を抑めるように声をかけると、彼女はもう話すことが出来なくなるから話しているとか言ってくる。まさか、哀は——

「正体がバレたから……ってこと？ 哀ちゃんを監禁してる奴は幼児化してもあなたに気付いたから……」

『そうよ。例え、ここから脱出出来たとしても2日も経たないうちに彼らは私を見つけるわ。そうなれば、組織はあなたも博士も私と関わった全員を殺す。だからもう、私はここから脱出しようがあなたには会えないの。せめて私が生きている間に私が知ってる薬の情報を

あなたに教えるわ——。あなたは私にとって最後に出来た大切な人だから……』

哀の言葉には悲壮感と覚悟が込められていた。

組織の恐ろしさを嫌というほど知っているからこそ、彼女はあたしに自分の知識を出来るだけ伝えてくれようとしているのだろう。

「あ、哀ちゃん……。——あのさ、さっきから気になってたんだけど、あなたの後ろの方で鳴ってる電子音って博士の作ったゲーム？」

しかし、あたしはその前に気になっていることがあった。

ピコピコと哀のセリフの隙間から電子音が聞こえてきたからだ。

『こんなときに、どうでもいいことを聞くわね。学校で円谷くんから返してもらった博士のゲームが入ったMOを持ってたからそれをピスコがパソコンで中のデータを調べていたのよ。パソコンに携帯がケーブルで繋がっているから——ああ、やっぱり私の顔を検索したんだわ』

「えっと、哀ちゃんは今は縛られたりはしてないのね？」

哀がパソコンを触っていると聞いてあたしは彼女が拘束されてないことを知った。

ピスコは哀を縛ったりしなかった——これが意味することは大きい。

『だから急いでるんじゃないの。彼等が長時間、私を縛りもしないで放って置くわけがないから——』

「ううん、ピスコは戻らないわ。あと一時間くらいは……」

ピスコが戻るまでまだ余裕があることを哀に伝える。だって奴はあたしの仕掛けた網に引っかかってくれたのだから。

『ど、どういうこと？』

「あたしが警部に頼んだのよ。紫のハンカチをもらった人を事情聴取してホテルから出さないようにしてって。あの後、警部に聞いたんだけど、紫のハンカチをもらって会場に残っていたのは7人。つまり、その中にピスコが居たってこと——」

あたしは彼女にピスコが置かれた状況を手短かに説明した。

哀が拘束されていないことと携帯に繋ぎっぱなしのパソコンの状態

から推測すると、恐らく哀を監禁した奴は何かの目的でちよつとだけホテルから出ようとした所を出口で刑事に止められ事情聴取を受けてる。

しかも、奴は今、外部との連絡が取れないでいる可能性が高い。だって哀がいなくなつてから、もう1時間近く経っているのに仲間が現れていないんだから。

この状況から導き出せる答えは単純。紫のハンカチを持っていた7人の中にピスコはいる。

その7人とはすなわち紫のハンカチを持っていた——「南条実果」、「三瓶康夫」、「樽見直哉」、「クリス・ヴィンヤード」、「俵芳治」、「柀山憲三」、「麦倉直道」の7名のことだ。

『じゃあここはまだ杯戸シティホテル内つてこと?』

「そのとおり♪だから、あたしがちやちやとピスコが誰か見抜いて殺人の証拠さえ挙げちゃえば、奴は警察に捕まる。つまり、哀ちゃんは助かるつてことよ」

まだ、1時間ある。その間にピスコの正体を掴んで警察に捕まえてもらう。これで哀を助けることができるはずだ。

『それができるの?』

「当然!。あたしだつていつまでも名探偵の助手止まりじゃないんだから。安心しちやつて大丈夫よ♪だから——2度と言葉を交わせないなんて、寂しいこと言わないでよ。あなたはあたしにとつても大事な人なんだから。……あたしを信じて——哀ちゃん……!」

『いつもそうやつて甘いことばかり言つて……。期待せずに待つてあげるわ』

あたしだつて、通常では考えられないくらい殺人事件の現場で犯人と対決した経験がある。

その経験はちゃんと自分の中で蓄積されているんだ。

だから、今日だけでも良いから——あたしは名探偵になる……!!

「うん!。じゃあ哀ちゃんは脱出する方法を考えてみて!」

しかし、ことは簡単じゃない。助けを呼べば助け出した従業員が組織に狙われたりして無事ではないということ、哀は助けを呼ぶこと

を拒んだのだ。

「じゃあ自力でなんとかそこから脱出する方法を見つけるしかないけど、脱出できそうなところとか見当たる？」

『あるのは古びた暖炉くらい——こんな体じゃなきゃ、手足を突っ張って登れそうだけど……』

「こんな体じゃなきゃ……ああーっ！ そうだ！ 哀ちゃん、パイカルっていう中国酒ってそこにあるかしら？ 酒蔵なんですよ？」

そういえば、哀ちゃんは風邪気味だった。あの外交官の人が殺された日のあたしと同じで……。

背丈の問題はパイカルがあれば何とかなるかもしれない。

『……ちよつと待って。ええ、あつたけど……パイカル。こんなものどうするのよ？』

「それを飲めば、一時的に元の体に戻るわ」

『はあ？ あり得ないでしょ。そんなの』

哀は酒を飲んで元に戻る話を信じようとしなかった。

そりゃあ、科学者なら尚更信じられないわよね。

「あたしはそれを飲んで新一の体に戻ったの。まあ、その逆を見られて平次に秘密がバレたんだけど」

『ああ、そういえば関西の探偵って人があなたの正体を知ってたわね。そういう経緯だったんだ……。にわかには信じられないけど……試ししてみるわ……』

「効果が出るまで少し時間がかかるわよ。体調も悪くなるから、逃げる準備だけはしていてね」

あたしが平次に正体がバレた経緯とこんな嘘をつくはずがないと考えた彼女は素直にパイカルを飲んでくれた。

早く体の大きさが戻れば良いんだけど——。



『いませんぜ、ピスコのヤツ。30分後に落ち合う段取りなのに音沙汰ねーし、発信機を頼りに来てみればパソコンはあるものの、奴の姿

はどこにもねえ。一体、何処に消えちまったんだか。——大体、なんなんですかい？ この酒蔵』

『恐らくピスコが、念のために確保しておいた部屋だ。会場での殺しが失敗した場合、どっかで殺った後、ここへ運び込むつもりだったんだろうよ』

『とにかく、早くずらかった方が良さそうですね、兄貴』

『ああ、そうだな……』

危なかつた。もう少しでこいつらに哀が見つかるころだった。

哀は体が元に戻るまでの間、必死でMOに薬のデータを転送しようとしていた。薬のデータを閲覧するためのパスワードが“SHER RING FORD”というコナン・ドイルがシャーロック・ホームズと名付ける前の仮の名前という推測が当たって良かったわ。

“出来損ないの名探偵”ってこの薬は呼ばれてたみたいだから、新一の記憶を辿って思いついたんだ。

そんなことをしていると、哀は大人の体に変化する前兆がきて苦しみます。

さらに間が悪いことにパソコンに付けられていたらしい発信器が反応しないことを訝しく思ったジンとウオツカが酒蔵に向かっている姿を確認した。

そして、間一髪——哀は元の体に戻り、暖炉の中をよじ登って身を隠すことに成功したのだ。

「哀ちゃん、服着てる?」

『ええ、清掃員のツナギがあつたでしょ? これを着てるわ。データが入ったMOも持ってる』

哀は冷静だった。元の体に戻って素早く着替えて暖炉の中に隠れたのだから。

これで煙突を登って外に出られそうね……。

「さすがね。じゃあ、焦らずに慎重に脱出して。あたしも何とかかなりそうだから」

『まさか、ピスコが誰だかわかったの?』

「うん。まあ、一応最初からこの人っぽいなって思ってたから。今は確信を持てたわ。まさか南条と樽見があんなことしてるなんて思わなかったけど、おかげで謎はすべて解けた」

あたしは事件が起こって目暮警部が捜査を開始したあたりで目をつけていた人物がいた。

犯人だからこそ、変なことを口走ったあの人は最初から怪しかった。

南条と樽見がああ暗がりの中で抱き合っている写真を見てようやくあたしはあの人を犯人だと確信できたのである。

『ふふっ、今日はいつにも増して冴えてるじゃない』

「哀ちゃんのためだからね。このハンカチに付いている焦げ目と料理の中に入っていたシヤンデリアの破片はやっぱり重要な鍵だったわよ。じゃあ、あとで落ち合い——」

あたしが手に入れた2つのヒントはやはり犯行を裏付ける重要なアイテムだった。

これでピスコの正体がわかったので奴を追い詰めることができる。犯人の落とし物には重要なヒントが眠っていることが多いわね。

ん？ 落とし物——？

そういえば、哀ってジンの車とか知ってたってことはそれなりに親しかったのかしら……。

彼はとんでもないスピードで発信器を見つけた。大した観察眼だと思う。抜け目がない……。

そこまで考えたとき……背筋が寒くなった気がした——。



「ほ、本当？ 警部……、本当にあの人は紫のハンカチを持っていたんですか？」

ピスコを逮捕してもらったために、あたしは警部に電話をしたが彼からの返答は思いもよらないものだった。あの人は既に警察の手を離れていたのである。

『ああ、済まないが解放せざる得なかった。それより事件の真相がわかったと言っていたが——』

くっ……、誤算だったわ。あたしがあの人の紫のハンカチは持っているから、それで時間を稼げると思ったのに——。

「ごめんなさい、警部！ あとでまた連絡します！ 博士、あたしは哀ちゃんのところに向かうわ！ あとよろしく！」

「お、おい！ アリスくん！」

あたしは走り出した。哀が危ない……！ なんてことだ……誤算だったわ……。

とにかく彼女を何としてでも守るんだ——。

「兄貴、本当にシエリーの奴は来るんですかい？」

「ああ、間違いない。髪の毛だ。見つけたんだよ。暖炉のそばで、奴のその赤みがかった茶髪をな。ピスコにとっ捕まったんだか、やつがない間にあの酒蔵に忍び込んだのか知らねえが、聞こえてたぜ。暖炉の中から、奴の震えるような吐息がな」

哀が監禁されていたのはホテルの旧館の物置にされている一室だった。

そして、あたしはその屋上の出入り口で身を隠しながらジンとウオツカを確認する。

やっぱり、髪の毛が車の中とか物置に落ちていて、それをヒントに哀の存在に気付いてたのね。

彼女とあたしは博士の家の地下を私室としていて掃除とかも交代でやってるんだけど、哀は代謝が良くなっているのか髪の毛が部屋の中に結構たくさん落ちてたりする。

だから少しだけしか滞在してなくても髪の毛の一本や二本落としてい
る可能性があった。

つまりジンくらいの観察眼なら既にあのとき、哀が暖炉に潜んでい

ることに気付いていたかもしれないと思ってしまったのだ。

敢えて暖炉を探さずに泳がせたのは彼女が煙突を登って来ることを予測して、ここで仕留めたかったからだろう。尋問をしながら……。危なかった——一步間違えたら哀が殺されていた。

ピスコの足止めが出来ると思っただけであたしはジンとウオツカの待ち伏せのリスクを回避する方が良いと考えて、彼女に物置に戻るよう指示を出したのだ。

「それじゃあ、何で暖炉で始末しなかったんでやすか？」

「薄汚れたあの暖炉の中でやつてもよかつたんだが、せめて死に花ぐらい咲かせてやろうと思ってな」

「You are a romanticist. It was unexpected」

あたしは変声機で声を渋いオジサンっぽい声に変えて英語で話しかけた。

理由はその方が勝手に敵を想像しそうだったからである。

「誰だ!？」

「I, m sorry, she won't come! 地獄への列車からは途中下車してもらったからな! ようやく食い付いてくれましたね。彼女を餌にした甲斐がありましたよ!」

そして、変声機を駆使して次々と声色を変えてこちらの人数を多く見せかけようとした。

簡単にコチラに近づけさせないように……。

「まさか、FBIかCIA……!? ちっ、踊らされてたつてわけか……!」

「シェリーのバックにそんな連中がついてたつてことですかい?」

「動揺するな。撃たないで隠れているところを見ると銃は持つてねえみたいだ。背を向けずに一人ずつ消せばいい」

しかし、英語とか人数を多く見せようとかそんな子供騙しに引っかかるジンじゃない。

お構いなしに声のする方に近づいてくる。

「くっ……」

「そこだー！　だ、誰もいねーだど!?　うっ……!」

ジンが銃を向けた場所にはスピーカーを仕込んでおり、そこから音が流れるようにしていたのだ。ふう、声をかける前にこっそりと前もって投げて置いたけど、雪がクツシヨンになって音を消してくれたから助かったわ……。

ジンが銃を向けたので、その腕を麻酔銃で狙い撃ちにしてやった。彼はうめき声を上げて膝をつく。

「てめー、やりやがったな!」

「シュートツ!」

「――ぐあッ!　銃がッ!」

膝をついたジンを見て、怒り狂ったウオツカが銃を撃ちながら、あたしがいる屋上から下に向かう階段の方まで走ってきたので、即席のサッカーボールを彼の銃口めがけて蹴りつける。

割れやすくなっているサッカーボールはウオツカの銃を吹き飛ばして四散する。あたしはそのまま彼らを放置して退散した。

よし、あとはピスコから哀を守らないと――。

「素晴らしい。君はまだ赤ん坊だったから覚えちゃいないだろうが、科学者だった君の御両親と私はとても親しくてね……。開発中の薬のことはよく聞かされていたんだよ……。でもまさかここまで君が進めていたとは……。事故死した御両親もさぞかしお喜びだろう……。」

「……………はあ、はあ。あなたがピスコだったのね」

「そうだよ。君にはこれから死んでもらう。これも命令なんだ。悪く思わんでくれよ――志保ちゃん」

「そこまですよ！　榊山さん。それとも、ピスコって呼んだ方がいいのかしら?」

「ここは哀が監禁されていた物置――。」

体のサイズが元に戻り、体調を崩している哀にちよつかいをかけているのは自動車メーカーの会長である榊山。

そう、ピスコの正体は彼だったのだ――。

「――っ!? だ、誰だ!」

「あなた、最初から怪しかったのよね。あなただけよ、通報というワードに過剰反応して目暮警部からあたしの身元を探ろうとしたのは……。そりゃあ気になるわよね。組織の人間としても、殺人事件の犯人としても、自分の犯行を警察にチクったのは誰なのか……」

組織の作戦がバレていたというのは彼としても想定外だっただろう。だからこそ気になってしようがなかった――通報者が誰なのか……。

全員が事故か殺人か……を論じてる中でそんなところを最初に気にしていた彼にあたしは違和感を感じていた。

「上手く?・口議員の頭上にシャンデリアを落として事故に見せかけたつもりだろうけど、そうはいかないわよ。あれはあんたが落としたのよね? サイレンサー付きの拳銃を使って……」

「どこだ!・どこにいる!」

「目印は、あらかじめシャンデリアの鎖に付けておいた蛍光塗料ね。スライド上映で会場内が暗くなれば、その光が浮かび上がるって寸法よ。もちろん、そのまま発砲すれば銃口から火花が出て周りの人に気付かれちゃうけど、ハンカチをサイレンサーの先に被せれば、発砲と同時にハンカチが吹っ飛び、火花を隠してくれるという理屈」

キョロキョロとあたしのことを探しているピスコにあたしは彼が呑口を殺したトリックの解説をする。

焦げ目が残ったハンカチやシャンデリアの破片のおかげでこのトリックは看破できた。

「酒巻監督を偲ぶ会のハンカチを使ったのも、後で回収しなくても足がつきにくいって思ったからでしょうけど、不運ねえ……。あの紫のハンカチを貰った客は、すでにほとんど帰っちゃってたから、容疑者はたったの7人だけになったんだもん」

「シャンデリアの真下に居て、鎖を狙えないクリスさんと俵さんはシロ、証拠の鎖を口から吐き出した三瓶さんと司会で客に注目されていた麦倉さんも違うわよね。事件直前に抱き合っていた樽見さんと南

条さんはあり得ないでしょ。つまり、あの会場であの犯行を成しえる事ができたのは、榊山さん、あなただけなのよ」

「そこか！——す、スピーカー？」

あたしが榊山を犯人だと特定した理由を話したとき、彼の放った銃弾が木箱に当たり、お酒がこぼれた。

そう、その箱にはスピーカーが仕込んでいる。

「ちなみに？口さんがシャンデリアの下に来たのは、その真下の床にも蛍光塗料を塗っていたからね。逮捕寸前の彼に、挽回のチャンスをやめるから明かりが落ちたら光る場所で指令を待て、とでも脅しをかけたんでしよう？ 違うかしら？ ピ・ス・コさくくん♡」

「誰だ、何者なんだ！ お前は！」

「藤峰愛梨寿……探偵よ！ ついでにこの子の騎士^{ナイト}ってところかしら」

あたしはピスコと対峙した。後ろにいる哀の盾になりながら……。

この男が哀を酷い目に遭わせようとしたのは許せない。

「き、貴様は……あの、女子高生探偵の……！ だから、警察の取り調べがあそこまで執拗だったのか……、信頼の置ける筋の情報だったから……！」

「ふふっ、あたしのことを知ってるなら警察と密に繋がってることも知ってるでしょ？ 上の2人も警察に捕まっちゃった頃だろうし——教えてもらおうかしら？ どうしてあなたが取り調べ中にあの紫のハンカチを持っていたのかを。だから警部はあなたを解放しちゃった。一体あのハンカチは……」

たった一つだけ……分らなかったのは彼が紫のハンカチを持っていたことだ。

それさえなければ、ピスコは警部に任せて哀を救出して終わりだったのに……、彼は解放されてしまった。

「ハッ、世の中には知らなくてもいいこともあるんだよ。それに状況をよく見ろ。警察なんか呼べやしない」

「ピスコ、あなたこそ観察力不足じゃないかしら？ よく自分の足元を見なさい。その水たまりは——『スピリタス』アルコール度数9

6%の強々いお酒なんだから。さて、アリスちゃんからの問題で、す♪そんな酒が気化してる側で煙草なんか吸ってるとどうなるでしょうか〜？ 正解は、このあとすぐ♪」

タバコをのんきに吸いながら余裕ぶっこいている彼を見てあたしは作戦を考えた。

度数の高い酒瓶を彼に割らせることで気化したアルコールが彼の周りに立ち上る。

そして——またたく間に火の手が上がった！

「おい、小娘、どこだ、出てこい。くそっ！」

火事になれば当然警察が駆けつける。警部には梶山が犯人だということは伝えた。

もうあたしの出る幕はない。哀を抱きかかえてここを脱出する——。

これで一気に組織の連中を3人も捕まえられたはず——そう思ってたんだけど……。

「うそっ!?! ジンがピスコを射殺したの!?!」

「ああ、哀くんが暖炉に置き忘れたメガネから会話を聞いたつたんじゃが、射殺後またすぐに煙突から逃げて行ったようじゃ」

変ね、麻酔銃で撃たれて動けるんなって……。どうやって動いたのかしら……。

眠ったら警察から逃れられないと思ってたのに……。

「それで？ バレちゃったの？ 私の体が小さくなったこと」

「いや、バレとらんようじゃ。安心せい」

「じゃ、安心して暮らせるわね。哀ちゃん」

ジンとウオツカに逃げられたのは痛いけど、哀の秘密がバレなかったのは不幸中の幸いだ。

これで彼女と一緒に暮らせないとかわわなくて済む。

「バカね、私がこの町に潜んでいると知られた以上、もうあなたたちの

側にはいられないわよ。ツナギに入れておいたあのMOも燃えてしまっただろうし。もう、私がここに留まる意味も——」

「あるわよ。あたし、哀ちゃんが居ないと寂しいもん」

でも、哀はジンたちが自分のいる町を知ってしまったからには側に居られないとか言ってきた。

MOのデータなんてどうでも良いから、あたしは彼女と居たいのに……。

「寂しいもん、じゃないわよ。聞き分けが悪いわね。私は嫌なの。何よりもあなたに迷惑をかけるのが」

「あたしは哀ちゃんからだったら、いくらでも迷惑かけられてもいい。それに、大丈夫よ。ジンって奴があなたの性格を知ってるなら、この町を探すなんて無駄なことしないだろうし」

ジンはきつと哀の性格ならこの町を危険だとして出ていくと予測するだろう。

その思考をさらに発展させるために海外の人間が彼女のバックにいると匂わせたし……。

「なんで、ジンが私の性格をよく知ってるってあなたは言い切れるの？」

「んん？ 女の勘ってやつ？」

「はあ？」

「冗談よ髪の毛一本であそこまであなただと見抜いて、その後の行動パターンも見事に予測した彼があなたのこと知らないはずがないって思っただけだから」

もしかしたら、薬のことを気にして杯戸シティホテルに哀が来ることからジンは読んでいたのかもしれない。

たった一本の髪の毛でそこまで予測することが出来るジンはこの町を探すのは無駄だと判断するだろう。

「なるほど、そういうことなら安心できそうじゃのう」

「でも、ごめん。哀ちゃん……。守るって言ったのに、危険な目に遭わせてしまつて……。あたしがもつと……」

危険な目に遭つて運が悪かったら殺されてたかもしれない。もつ

とちゃんと状況を判断していれば監禁されることもなかっただろう。「なんで謝るのよ……。あなたのおかげで怪我もなく生き残れた。だから……。ありがと……」

「えっ？ 何か言ったあ？ ごめん、よく聞こえなかったんだけど」彼女にあたしが謝罪すると、哀は小声で何かを言った。

もつと大きな声で言わなきや、わからないじゃない。

「な、何でもない……」

頬を桃色に染めてパイと顔を隠す彼女。どうしたんだろう……。

後日、ピスコの関わっていた会社とか呑口の家族が粛清されていた。

やはり組織は危険な存在だ。油断したらあたしも危なかったのだろう。

でも、連中と戦うことを諦めるわけにはいかないわ。次に対決するときはもつと爪を研いでおくから……。覚悟してなさい——。

帝丹高校学園祭殺人事件

「学園祭楽しみだね〜」

「う、うん。でも、本当に私なんかヒロインで良いのかな？ アリスちゃんにやって欲しいって人、多かつたのに」

「にやはは、あたしは姫って柄じゃないのよ。それよりも騎士^{ナイト}をやりたいかつたし」

学園祭で演劇をすることになったあたしたち。園子が脚本のラブロマンス大作、〃シヤツフル・ロマンス〃のヒロインを演じることになったのは我らが毛利蘭である。

そしてあたしは黒衣の騎士こと、スパイド王子役に立候補して役を勝ち取つたのだ。

「なんでまた騎士役をそんなにやりたがつたの？」

「そりゃあ、新一以外の男に蘭ちゃんとラブシーンをさせるわけにはいかないでしょう」

「なるほど！ アリスは露払いを買って出たわけね〜！ まあ、アリスがやらなかつたら私がやろうと思ってたけど」

「そ、そんなことに気を使ったの？」

騎士役を買って出たのは、まあ他の男連中に蘭とイチヤイチャさせるくらいならあたしがやってやろうの精神だ。

あたしが立候補しなかつたら園子も同じ考えだったらしい。うーん、本当かな……。

「そんなことって、大事なことよ。だってさ、例えばこうやって……、ほら勢い余って蘭ちゃんの唇を奪うなんて——」

「あ、あ、アリスちゃん？ ち、近い……」

「目を瞑って……、ほら優しくしてあげるから♡」

あたしは立ち上がり、座っている蘭の顎をクイツと上げて顔を近づけた。

すると、蘭は怯えながらもいつの間にか目を閉じている。

「う、ううっ……、んっ……っ……」

「と、まあこんなことあつたら危ないじゃないはっ？」

蘭の唇に人差し指を当てながらあたしは自分が騎士役をやる意味について話す。

しかしまあ、蘭もなかなか色っぽい……。

「蘭だったら、ホントに目を瞑っちゃってるし。意外とそっちもイケる口なのか」

「……もう、人が悪すぎるよ」

「蘭は悪ふざけが過ぎたからなのかジト目で睨んでくる。」

怖がらせてしまつて、すまない。

「ごめん、ごめん。でも、想像してみ？ こんな感じで新一が迫ってくるのをさ」

「し、新一が………？？」

「あんたの顔、正直よね。犯罪者にはなれないタイプだわ」

「そんじゃ、いつもの照れ顔が見れたところで、蘭ちゃんとラブラブな騎士様の役作り頑張ろうと」

新一が騎士役を演じてる様子を想像している蘭の赤くなった頬を見つめながら、あたしは練習を頑張ろうと誓った。

「一度ならず二度までも……、私をお助けになる貴方はいったい誰なのですか……？」

「ああ……、黒衣をまとった名もなき騎士殿……。私の願いを叶えていただけのなら……どうかその漆黒の仮面をお取りになって素顔を私に……」

「おお……、それが姫の望みとあらば、醜き傷を負いしこの顔——月明かりの下にさらしましょう……」

「あ、貴方はもしやスパイド……。昔、我が父に眉間を斬られ、庭から追い出された貴方が——トランプ王国の王子だったとは……」

「ああ……、幼き日の約束をまだお忘れでなければ、どうか私の唇に……、その証を……」

「んっ……」

あたしと蘭はキスをするような芝居をする。いや、これは中々攻めたラブシーンだわ。

演劇とはいえ、ドキドキするもん。齒の浮くようなセリフも多いけど……。

「カット！ いや、すごいよ二人とも！ ラブシーンも完璧じゃない！」

「……アリスの演技上手っ！ さすがぶりっ子演じてるだけあるわね。マジでどっからどう見てもイケメン騎士様じゃん。ちよつと惚れちゃうかも」

園子はあたしの騎士役を絶賛してくれた。男装のメイクのコツとカ有希子さんに聞いたりして良かったわ。

顔はかなり様になってるじゃん。黒衣の騎士役は上手くやり遂げられそうね。

「あはは、ありがとう。でも、なんか、日増しに見物に来る女の子が増える気がするわ」

「そりゃあ、あんたの宝塚もびつくりなくらいの男前加減が噂になってるからよ。まさか、男装がそんなに似合うとは思わなかったわ。そのおっばいで」

まさか男役でこんなに反響があるとは思わなかったわ……。

女子の後輩とかに握手とか求められるし、探偵するよりも女の子ウケが良いんだけど。

「鎧の厚みで誤魔化してるから、何とかね……。ちよつと胸が苦しいのは我慢しなきゃいけないけどね」

「こりゃ新一も嫉妬するかもね。女のライバルが現れるなんて思いもしないだろうけど」

「あはは、さすがに新一もあたしに嫉妬はしないでしょ。ねえ？ 蘭ちゃん」

あたしが騎士役やって新一が嫉妬ねえ。それはそれで面白いけど、そりゃあ無いでしょ。

新出先生とかがするのは訳が違う。

「……………えっ？ ごめん、ボーツとしてて」

「もしかして、蘭も満更じゃないんじゃない？ 騎士になったアリスに」

「……そ、そんなんじゃないけど。新一、学園祭も来ないつもりなのかなって……」

「蘭ちゃん……、大丈夫？」

「う、うん……、大丈夫だよ。大丈夫……、あつ……！」

新一が学園祭に来ないことを残念がっている蘭は元気がない。

空元気を出そうとして、手元の台本を落としてしまう始末だ。

とりあえず、あたしが新一とは微塵も疑われたりしてないんだけど、だからこそ彼が側に居ないのが不安材料ね……。

「落としましたよ、台本。見事な演技でしたね」

「あ、ありがとうございます。すみません、手元が滑ってしまつて」

蘭の落とした台本を拾ったのは、たまたま劇の稽古を見学していた帝丹高校の校医である新出智昭先生だ。

ハンサムで優しいので生徒からの人気は凄い。

「いえいえ、体調が悪いのでしたらすぐに言ってくださいね。藤峰さんも素晴らしい演技でした。あれだけ上手く演じられると僕たち男の立つ瀬がありません」

「またまた、お上手なんですから」

「お世辞じゃありませんよ。女優さんを目指してみても良いんじゃないですか？」

「あはは、学校の成績悪くなったら考えます」

彼もまたあたしの演技を褒めてくれた。うーん、女優だった有希子に似たボディだし、コナンもまた子供の演技上手すぎだったから、記憶を引き継いでるあたしにも影響してんのかな……。

蘭が心配だな……。せめて、学園祭だけでも新一を来させてあげられないかな……？

「というわけで、解毒剤とか出来ないかな……？」

「そんな即席ラーメンみたいに出来るわけないでしょ。パイカルの成分が、風邪の症状のときにだけ解毒作用を引き起こすというヒントしかないのよ」

哀は情報不足だとして、あの薬の解毒剤を作るのは無理だと言った。

それはわかっている。出来てたら、あたしが死ぬ前にコナンは完結してるもん。

「んー、完全な奴じゃなくていいのよ。この前みたいに一時的に姿を戻すことが出来ればさー、新一が学園祭に行けるじゃん」

「あなた、お人好し過ぎるわ。リスクが高すぎる」

哀の言うリスクはわかっている。現状、新一の生存を知る者は少ない。

表舞台に彼が立てばそれが噂になり組織に伝わってあたしや蘭……、その周りにも危害が及ぶかもしれないのだ。

「哀ちゃんも台本読み、手伝ってくれたから見に来てね。愛してるって言ったら恥ずかしそうな顔するのが可愛かったなあ」

「あなたの演技がクサすぎるから見てられないだけよ」

哀も台本を覚えるために読み合わせをしてくれた。

ラブシーンになると照れた表情を隠そうとするのが何とも言えない可愛さだった。

「そっかー、哀ちゃん。愛してるぞ」

「はいはい。私もよ。そんなこと言っても薬は出てこないんだから」

「あはは、やっぱ無理かー」

「と、言いたいところだけど。ほら、これ」

哀は薬が無いと言いながら、ピルケースから錠剤を取り出した。

あれれー、この薬はなんだろうー。

「まさか、それって……」

アポトキシン

「そ、APT X 4869の解毒剤の試作品。安全性を考慮して時間制限をかなりシビアにしたけど、試してみる？ 工藤新一が生きてるって組織にバレるリスクがあるから毛利さんにだけこっそりと会うのなら使っても良いわよ」

「マジで？ うん、使ってみる。哀ちゃん、ありがとう〜。大好き〜
♡チュツ♡」

「ばか……」

なんやかんや言ってあたしのワガママを聞いてくれた哀をギュツと抱きしめて額にキスする。

彼女は呆れたような顔をしてあたしを見つめていた。

「蘭ちゃん、アリスちゃん、演劇見に来たで」

「和葉のやつが行こうってうるさいから仕方なくやけどな」

「誰がうるさいやって？」

「お前や、お前。毎日、毎日、しつこくてかなわんかったわー」

大阪から平次と和葉がわざわざ帝丹高校まで演劇を見に来てくれた。
た。

相変わらず二人のかけ合いは面白い。

「来てくれてありがとね。和葉ちゃん、平次くん」

「うん。二人とも大阪からわざわざ来てくれるなんて。嬉しいよ」

「ほんで、工藤くんはどこにおんの？ 呼んでんねんやろ？」

あたしと蘭は二人を歓迎した。和葉は新一に興味があるみたいだ。

そういえば、彼女だけ新一の顔を知らないのよね。

「呼んだには、呼んだんだけど……」

「来れへんような余程の事情があるんやろ。和葉もあまり突いたらあ
かんで」

「なんや、平次にしては気が利く言い方するやんか」

「大丈夫だよ。蘭ちゃん。新一は必ず来るから」

「藤峰……？」

あたしが新一は必ず来ると言ったら、平次の眉間がピクリと動い
た。

彼はあたしの言ってる意味がますます分からなかったんだろうな
……。解毒剤とか考えられないだろうし……。

さてと、解毒剤は劇が終わるくらいで効くように時間調節して飲まなきゃ……。さすがに新一を舞台に上げるのはまずいし……。

そう思ってたんだけど――。

「……はあ、はあ。随分といきなりじゃねーか。学園祭で演劇なんて」
『蘭ちゃん、寂しがつてたからさー。解毒剤の効果がどこまで続くかわからないけど、夜くらいまでなら大丈夫だから。ごめんね、劇が終わった瞬間に戻るように調節したんだけど』

なんか、思った以上に早く解毒剤が効いちやって劇の途中であたしは新一になっちゃった。

哀が体への負担を極力抑えてくれたおかげで前よりは変化する瞬間が楽な気がする。それでも骨が溶けるような感覚はマジでキツイけど……。

「すまねーな。世話ばかりかかせちまつて」

『別に構わないけど、くれぐれも目立たないようにね。あなたが生きてるとバレると厄介なことになるのよ』

「ああ、わかった。恩に切るぜ」

ということで、役者交代。新一が黒衣の騎士として舞台上上がることになった。

「お、おのれ！ 何奴!? これをブリツチ公国、ハート姫の馬車と知つての狼藉か!」

劇は最高潮に盛り上がる黒衣の騎士がハート姫を助ける寸前の公国の兵士が帝国の兵士と対峙するシーンだ。

「元より承知の上よ!」

「姫を亡き者にし、婚姻を壊せとのご命令だ!」

「我ら帝国にとつちや、公国と王国には、今まで通りにいがみ合ってもらった方が、都合がいいって訳よ!」

「蘭ちゃん！ 空手や空手エ！ そんな連中、いてもうたつてえ！」
あはは、和葉つたら面白いツツコミを入れるわね……。蘭が空手で兵士を圧倒したらそれはそれで面白いけど……。

さて、いよいよ出番ね。黒い鴉の羽がヒラヒラと降り始めるのが、黒衣の騎士の登場の合図だ。

「こ、黒衣の騎士ッ！」

黒衣の騎士が登場して、帝国の兵士たちは逃亡し、蘭が演じるハート姫の元に彼は近づく。

ここから盛り上がるところなんだけど――。

「1度ならず2度までも、私をお助けになる貴方は、一体誰なのです!?!」

「……………」

「ああ、黒衣を纏った名も無き騎士殿！ 私の願いを叶えて頂けるのなら、どうかその漆黒の仮面をお取りになって、素顔を私に！」

本来は黒衣の騎士がセリフとともに顔を晒すシーンなんだけど、声がいきなり変わるのもなー。

変声機を置いてきちゃったし、どうしようかしら……。

『姫を無言で抱きしめてー!』

「えっ？ アリスちゃん……?」

新一に蘭を抱きしめるように指示を出す。場内はその大胆な演出にぎわつきだした。

蘭に至ってはびっくりして小声であたしの名前を呼んでるし……。

「うはっ！ アリスのやつ！ なかなか大胆じゃねーか!?!」

「あれ、アリスちゃんなんやろ？ えらい男前に見えるなあ」

小五郎はあたしが蘭に抱きついていいると思ってるから笑って見るけど、新一だと知ったら怒るんだろうなー。

園子があたしのアドリブだと思つて気を利かせてくれたので、カンペを出してそのまま続けるように蘭に伝えた。

「あ、貴方はもしや、スパイド……? 昔、我が父に眉間を切られ、庭から追い出された貴方が、トランプ王国の王子だったとは……」

「ああ、幼き日のあの約束をまだお忘れでなければ……どうか私の唇

に、その証を……」

「蘭ちゃんと、アリスちゃんがっ……!」

「えらい攻めた脚本やなく!」

「アリスのやつが男に見えてならん……!」

『キッスキッス♪』

『うるせーな』

あたしが新一を煽っていると、客席から悲鳴が上がった。嘘でしょ……、また何かあったの……。

「——キヤアアアアア!!」

客席に転がっていたのは男の死体だった。あー、厄介な状況のときに事件が起きちゃったわね……。

『あれま。学園祭まで事件が起こるんだ』

『オメー、事件にやけに慣れてんなー』

『残念だったね。蘭ちゃんとキス出来なくて』

『バーロー、んなこと言ってる場合じゃねーだろ』

劇は当然、中断して警察が劇場の中に入ってきた。

うーん。この状態だと捜査には参加できそうにないわね……。平次がいるのが幸いだっただわ。



「亡くなったのは蒲田耕平さん、米花総合病院の医師か。劇を見ている最中に倒れられたということですが?」

「は、はい……、なんか急に苦しみ出して……」

「倒れられた時間、いつ頃かわかりませんか?」

「午後2時40分ぐらいだと思います」

「蘭くん!?!」

死亡時刻を目暮警部が尋ねたとき、蘭はその時刻を正確に答えた。そりゃ、あたしたちは分かるわよね……。

「丁度悲鳴が聞こえたのが、劇の中盤の見せ場のシーンでしたので……。ねっ、アリスちゃん」

『領いて』

「……………」

蘭に話を振られて、新一は黙ってうなづく。彼女の言うとおりで、劇の稽古していたあたしたちはどのシーンが何時頃なのか把握していた。

「アリスちゃん？」

「そっちは、アリスくんなのかね？ 珍しく静かだな」

警部も蘭もいつもなら捜査に積極的に参加するあたしが何も喋らないことに疑問を持っているみたいだ。

だって、喋ったら新二ってバレちゃうんだもん。

「死因はわかりましたか？」

「はい、恐らく——」

「青酸カリや」

「え？」

高木刑事の問いに答えたのは平次だった。死体の様子からそれに気付いたのだろう。

だって死体は——。

「たぶんこの兄ちゃん、青酸カリ飲んで死んだんや。ツメの色や唇の色が紫色にならないどころかピンク色になつとる。他の毒で死んだんなら、血行が悪くなるんやけど、青酸カリは飲んだらな、細胞中の電子伝達系がやられて血液の酸素が使われなまま、逆に血色が良くなるんや」

「ええ、彼の言うとおりでアーモンド臭もしますし、死因は青酸カリによるものかと…………」

「服部くん、こっちに來てたのかね？」

「ああ、藤峰に誘われてな。なんで、あいつこっちに來んのやろ？」

平次もあたしが捜査に加わらないことを不思議がっていた。

行きたいんだけどね。あたしというか…………、その…………。

「ねえ、アリスちゃん。捜査しなくて大丈夫なの？」

「……………」

『我慢して、平次くんも居るんだから』

『わ、わかってる!』

蘭がこちらに声をかけたとき、ウズウズしている新一に気が付いて待ったをかけた。

平次ならきつと解決してくれるから……信じましょう。

そこから、捜査は始まってどうやら青酸カリは蒲田が飲んだ売店のアイスコーヒーの中に仕込まれていたことが濃厚になった。

被害者の飲んだアイスコーヒーに触ったのは容疑者は蒲田と同じく帝丹高校の演劇部のOBとOGである三谷陽太、野田夢美、みたにようたのだゆめみ鴻上舞衣の3人と蒲田の元婚約者で売店の店員をしていた蜷川彩子。こうがみまいにながわあやこ

売店で飲み物を買ったのは鴻上だったが、彼女の買った飲み物は被害者と同じくアイスコーヒー。彼女は売店が混んでいて開演寸前に席に辿りついたため、トイレに行きたいと三谷に4つの飲み物を渡して座席の横に置いてもらっていた。

三谷は被害者の隣に座っていた野田にアイスコーヒーを被害者に渡してもらった。

ちなみに三谷はウーロン茶、野田はオレンジジュースを頼んでいる。フタにどの飲み物が入っているか書かれているから、二人はフタを開けてはいないと証言していたし、単純に手渡しをしただけだから毒を盛るような時間はなさそうだった。

鴻上が2つのアイスコーヒーに毒を仕込んで自分のものは飲まないという殺害方法も考えられたが、彼女はきれいにコーヒーを飲みきっていた。

そこで、ガムシロップやミルクに青酸カリが仕込まれていたと小五郎は指摘するも、被害者はなんと両方とも入れてないという事実も確認される――。

入れなかった理由は蒲田がブラックコーヒーが好きでなく「カップの中身が……、アイスコーヒーじゃなく、コーラだったから……」

蜷川は、ワザと注文間違いをすることで、蒲田が取り替えに彼女の元に来て婚約破棄の理由を聞きに来ると考えたらしい。

まあ、開演寸前に飲み物を渡しているからコーラ飲んじやっただけど……。

『女心って分からないわね〜』

『おいおい、女のオメーがそれを言うのかよ……』

「なーんだ、だから私のもコーラだったのね。もうちよつとで、このミルクとガムシロップ、入れちゃうところだったわ」

鴻上はポケットから開けられていないミルクとガムシロップを出した。確か、彼女はトイレから帰ってきてきて上映が開始して暗くなつてから席についたんだっけ……。

『あたしなら暗がりだったら気付かない自信あるわ〜。両方入れて根性で飲む!』

『はあ……、おれの体、こいつに預けて大丈夫か……つて気になつてきたぜ。——つ!? 待てよ、おい藤峰! お前、今……、なんて言つた?』

『根性で飲む!』

『バーロー、その前だ』

『暗がりなら気付かない自信が——あつ!』

あたしは新一のツツコミで犯人が誰なのか気が付いた。間違いない。犯人はあの人だ……。

ということは……、つまり毒を仕込んだのは……。

そして、証拠となるアレはあそこに……。

うわ〜、犯人がわかったのに言えないって苦しいわね。平次なら気付くと思うけど……。

「これより本件は、自殺と断定して……」

「待つてください。目暮警部……!」

『バカー! 声出しちゃダメって言つたじゃん!』

「——つ!?!」

目暮警部が自殺と断定しようとしたとき、新一が声を出した。

誰もが新一をあたしだと思つていたので、男の声が黒衣の騎士から発せられたのに驚いている。

「これは自殺じゃありません。極めて単純かつ初歩的な、殺人です」

『新一！　こちら、黙りなさいって！』

「そう、蒲田さんは毒殺されたんです。暗闇に浮かび上がった舞台の前で。日ごろから持っている、たわいもない自らの嗜好を利用されて。しかも、犯人はその証拠を今もなお所持しているはず。僕が導き出した、この白刃を踏むかのような大胆な犯行が、真実だとしたらね」

「き、君は一体……？　アリスくんではないのかね？」

あたしのバカっぽいいい言い回しじゃなく、男の声でしかもオシャレなセリフを放つ黒衣の騎士に警部は正体を尋ねた。

「お久しぶりです、目暮警部。工藤新一です」

『お久しぶりじゃないわよ！』

「うおおおおつ！　工藤！　工藤！　」

工藤新一復活ッ！　みたいな感じで人気者だった彼の出現に帝丹高校の生徒たちは沸いた。

すごい盛り上がりね。やはり平成のシャーロック・ホームズは伊達じゃない。

「しっ！　静かに。祭りの続きは、この血塗られた舞台に幕を下ろしたあとで」

「かあく、相変わらず語るねえあの男は」

キザなセリフ一つで場内を静まり帰らせる彼は流石といったところだ。

新一なら何とかしてくれるという期待感もあるのだろう……。

「新一？　なんでアリスちゃんと入れ替わって……」

「ああ、藤峰がなんかの事件で呼び出しがかかったとかで急に代役してくれって言われちゃって。あと、服部……、オメー10円玉持ってねえか？」

「おつ？　そりゃ、1つか2つやったら持つてるけど、そんなもん何に……。——はっ!?　ははくん、そういうことか」

そこからは新一の独壇場だった。犯人である鴻上が毒を氷に仕込んで、氷を食べるクセがある蒲田を毒殺したと指摘したのだ。

鴻上は両方のアイスコーヒーに毒入り氷を仕込み、自分の氷は口に含んで取り出し、スキを見てフードの中に捨てるといったトリックで蒲

田を殺した。

その証拠に彼女のフードの中で溶けた青酸カリを含んだ水が酸化還元反応を起こして十円玉をピカピカにする。

彼女がアイスコーヒーがコーラだと気付いたのは劇場に入る前に毒入り氷を仕込んだからだだったのだ。

まあ、雨なのにフードを被らずに蒲田の車に案内したり怪しい点は多かつたわよね。

蒲田は自分の学説のために患者にワザと間違った薬を投与して殺したりしていた結構なクズで、鴻上はそれが許せなかつたらしい。だからといって、告発するとかやりようはあつたでしょうに……。

『ちやんと、警部とか学校みんなに口止めするのよ。面倒なことが起こらないように』

『す、すまねーな。我慢できなくてさ』

過ぎたことは仕方がない。新一に情報の漏洩を防止するように努力させるしかないわね……。

「いやー！ 相変わらず頼もしいね、君は！ アリスくんも見事だと思っていたが、やはり君が推理すると鮮やかに聞こえるよ」

「いえいえー」

『むうー、目暮警部つたら。聞こえてるわよ』

新一が見事に一瞬で事件を解決したので、目暮警部はあたしと比較して彼を絶賛する。

そりゃ、新一はすごいけど……あたしだって頑張ってるんだからね。

「久しぶりに事情聴取に立ち会わないかね？」

「いえ、野暮用があるんで。あと、今回の事件に僕が関わったことは内密にしてください」

「それは構わんが——最近謙虚だな、君は」

当たり前だけど時間が限られてる新一は事情聴取に付き合うことを拒否した。同時に自分が関わったことをオフレコにするように警部に頼む。

「なあ工藤。なんで事情聴取に立ち会いへんねや？」

「ふつ、トリックなんて、所詮人間が考えだしたパズル。頭を捻れば、いつかは論理的な答えを……導き出せる。——情けねーが、人が人を殺した理由だけはどんなに説明されても分からねえんだ。理解は出来ても、納得できねーんだよ。まったくな」

まあ、あたしだつて怒ることはあるけど、人を殺そうとまではとても考えられないだろうな。

世の中には色んな人が居て……考えが相容れない人もいる。殺すことは間違いだつてあたしは言い切れるけど、理屈で何でも片付けることが出来ないから人間というのは争うんだ。

「お前にも分からんことがあるっちゆうことか。それはそうと、藤峰はもう……」

「いや、あいつにはまだ世話になる。どうやら、この体は時限式らしいからな」

「工藤、お前が完全に戻ったら……藤峰、居なくなるんやろ？ アホやな、あいつ。なんでそないに一生懸命になるんやろうな……」

「さあな。ま、あいつになら蘭を任せられるし、戻れなくても恨まねーでいるつもりではいるよ」

平次は新一が元の体に戻ったからあたしが消えたもんだと思つたみたいだ。

いつかみんなとお別れするときが来るんだろうな……。未練がないと言ったら嘘になるけど……こればかりは仕方ない。



「口止めに時間がかかっちゃった。待たせて悪かったな。蘭……」

「ううん。それで、話つて何だったの？ わざわざこんな高そうな店を予約するなんて……」

新一はあたしが予約しておいた店に蘭を呼び出した。

平次の機転もあって、帝丹高校のOGが殺人事件を起こしたなんて外に漏れたら高校の評判が落ちるとして、誰にも今日のことには喋らな

いようにみんなに口止めをした。

これでどれくらい抑止になるかわからないけど……助かったわ。
「ああ、話つてのはな。いつか、お前のところに戻ってきて、のんびり出来るようになったら……、約束してーことがある。それまでは何かあつたら藤峰を頼れ」

「えっ？ アリスちゃんを？」

しかし、タイミングが悪いことに思ったよりも早く解毒剤が切れかけてきた。

だから、新一は蘭にあたしを頼るように口添えして、完全に戻つたら告白することを匂わせた。

「ちやんと話せるようになったら——素直におれの気持ち全部伝える……、だ……からさ……、わ、わりーな、ちよつと用事思い出しちまつた……！」

「ちよつと新一!? 新一! どこ行くのよ!?!」

そして、走つて店から出ていって——近くのホテルのトイレに駆け込んだ。

ふう……、間一髪……。この体に変化するような感覚の不快感は酷いわね……。

「はあ……、はあ……」

『やっぱ、この辺の時間が限界みたいね。体の負担も半端ないし』

『藤峰……ありがとな……、蘭のことよろしく頼むぜ……』

『うん、任せて。着替えも用意してるし、大丈夫よ』

そして、あたしはコインロッカーに預けていた私服に着替えて蘭の元に向かった。

帰つて新一が事件を解決したなんて伝えたら哀は怒るだろうな。

あたしの下手な芝居は見たくないとか言つて来なかつたけど、あんなことがあつたから逆に良かったかもしれない。

「ありや、蘭ちゃん。ホントに居た」

「アリスちゃん、どうしてここに？」

「いやー、新一が晩飯代払ったけど食べられなくなったから奢ってくれるって言ったからタダ飯を食べに来たのよ」

あたしは蘭の正面に座りながらさつき考えた言い訳を話す。

悪いわね……。デートの邪魔をしてしまつて……。

「もう、自分勝手なんだから。それにアリスちゃんも何も言わずに新
一と代わるなんて酷いよ」

「あはは、ごめんごめん。でもドキドキしたんじゃない？」

「うん。びつくりしたし、嬉しかった。でもね、演劇と一緒に練習したアリスちゃんと、その成果を見せたかったとも思っていたんだよ。どっちみち、あんなことになつて……ダメだったけど」

蘭は意外にもあたしと一緒に最後まで劇をやり遂げたかつたとも言つてくれた。

嬉しいこと言うじゃんか。あたしも練習の成果が出せなくて消化不良だったわよ……。

「また発表する機会を作ってもらおうよ。あたしも先生とかに掛け合つて見るからさ」

「……そうだね。園子にも相談してみる」

「じゃ、乾杯しよつか？ ハート姫とスペイド王子に――」

「乾杯♪」

あたしと蘭は笑い合つてグラスを鳴らした。

あたしはあなたの王子様じゃないけれど――その日が来るまで代わりを務めてみせる。

色んな感情を流し込むように、あたしはグラスを一気に空にした――。

バトルゲームの罠

「うわあ、可愛く撮れてるね」

「うん♪色んなバリエーションがあって楽しいね」

「でしょ、でしょ、学校からも遠いし穴場発見って感じ」

「ん？ あの人って……」

ある日のことあたしと蘭は園子に誘われて学校から少し離れたゲーセンに遊びに行った。

プリクラを撮ったりして遊んでただけど、あたしはギャラリーが集まる中でシューティングゲームをしている金髪の女性が気になってしまう。

「ねえねえ、あそこに居るのジヨデイ先生じゃない？」

「何言ってるのよ、アリス。ジヨデイ先生がゲーセンにいるはず——」

と言っていた園子も思わず口を止める。だって、我が校の英語教師が次々とゲーム内のゾンビを撃ち倒すんだもん。

「あつ、ホントにジヨデイ先生だ。シューティングゲーム……すつごい上手」

「学校だと、クールな印象なのに分かんないもんだね〜」

最後は上方に投げた銃をクルツと回ってキャッチして——バキユンとゾンビを狙い撃ち。

完璧なプレイを見せてくれた。そりゃあギャラリーも出来る訳だ。

『PERFECT!』

「カッコいい！ パフォーマンスを入れて完璧な操作……、ありや相当やり慣れてるわね」

「ジヨデイ先生、どうしてここに？」

「Oh！ 毛利サンに鈴木サン……、それに藤峰サン」

あたしたちがジヨデイに話しかけると彼女は少し驚いた顔をしてあたしたちを見る。

高校からちよつと離れてるから帝丹高校の生徒が来ることは滅多にないんだろう。

「先生？」

「あれ、帝丹の制服じゃね？」

「じゃあ、高校教師？」

「ノーノー、人違いデース」

ジョディ先生は少し離れたところにあたしたちを連れて行って説明をした。どうやら、彼女は毎日このゲームセンターに来てたみたい。

日本のゲームが大好きなゲーマーで、本場のゲームが毎日できるという理由で教師を志したのだとか説明してた。

あたしはさすがにジョディがFBIの捜査官つてことくらいは覚えてる。まあ、変な疑いかけられたくないから素知らぬフリをしてるけど……。

注意力を持って聞いていれば、カタコトでも文法完璧だし日本語が堪能だつてことはわかる。

潜入調査中にクビとか勘弁して欲しいだろうから、素行に気を使つて学校では真面目にして離れたゲーセンに遊びに来てたのね……。

黒の組織についてなんやかんやあつて調べてるのよね。彼女も……。

あたしとか哀のことを今のところどれくらい掴んでいるのかしら……。

あたしに対する視線は単純に高校生探偵に対する興味なのか、それとも……。平次や新一もいるんだからコナンほど不自然じゃないはずなんだけど……。

「ダカラ、ここに居たコトはナイショにしてくださいネ！」

「でも、カツコよかったです。先生」

「ビリーTheキッドみたいでした」

「思わず惹きつけられたもんね」

「では、もっとエキサイティングなゲームやってみますか？」

ということ、ジョディの薦めで、最近大人気だというバーチャル格闘ゲーム「グレートファイタースピリット」に蘭が挑戦してみる事

になった。

「うわあ、何か蘭ちゃん痛そうなんだけど」

「コレハ、ゲームのキャラクターのダメージがプレイヤーにも伝わる、バーチャルファイティングゲーム！ オンナノコにはツラかったカシラ？」

何それ……、闇のゲーム？ それとも海馬コーポレーションが考えたのかしら……。

あたしは蘭を心配したけどそんなのこの子には無用だった。

「はあああああッ！ うりやあああッ！」

リアルファイトで強い蘭はゲームでも強かった。敵キャラをあつという間にボッコボコにする。へえ、普通の格ゲーって体力ゲージがあるのにこれは顔色で判断する感じなのね……。面白いわ……。

『YOU WIN!』

「これでも蘭は空手の都大会で優勝してるんです」

「Oh！ チャンプ！」

しかし、なんか次のゲームの敵は挑戦的だった。ジョディ曰く誰か他のプレイヤーが乱入してきて蘭に挑戦をしてきたらしい。

しかも、そのプレイヤーは熟練者らしく初心者蘭は簡単に負けてしまった。

「さあ、負けたならさっさと退きな。そのゴールドシートはおれ様の指定席なんだぜ」

金髪のチンピラみたいな男は蘭に席を譲れと言ってきた。やばい……、なんかセリフから漂う小物感がやばい……。

「蘭ちゃん、譲ったげなよ。こんな席なんかどーでも良いんだから」

「ダメよ、あいつにもう一回挑戦して勝つのはよ」

「無理無理、パンチとキックしか使えない蘭ちゃんじゃ、やり込んでるあの人に勝つのは無理よ」

ゲームはセンスも必要だけどやり込みはそれ以上に必要だ。技の出し方からみてもあのチンピラはかなりの手練。ゲームやりたての蘭では何度やっても結果は同じだろう。

「そっちの子の言うとおり、諦めた方がいっすよ。勝ち目ないです

から」

「おら、早くしろよ！」

「うわっ！」

あたしに同意してくれたゲーセンの店員は何かのゲーム機の近くで作業をしていたけど、チンピラに蹴られていた。

マジでこういう大人は気持ち悪い……。

「ガラ悪すぎ……、最低ね……。行きましょ、気分悪いし」

「本当ね。なんなのよ、あいつ」

「〃米花のシーサー〃とか呼ばれて糞がっているただのチンピラだよ。最近、ますます態度がデカくなって迷惑してんだ」

あたしたちの会話を聞いていた麻雀ゲームをやっている小太りのおじさんはあの男の世界一どうでもいいあだ名を教えてください。なんで、こういう界限ってそんなあだ名をつけるのかしら……。

ていうか、店の業務妨害っぽいことしてるのなら出禁にすればいいのに、出禁に……。

おじさんの言うとおり、あのチンピラはゲームの腕だけは確かだった。繊細で精密な動き……。

いや、どーでも良いわよ。あのゲームで強くなりたいとか1ミリも思わないし……。

このおじさんは乱入プレイがあると映像が流れるという巨大なスクリーンで蘭とチンピラの戦いを見ていたんだという。

ふーん。わざわざそんな感じでプレイヤー同士の戦いを見せたりするんだ……。

「やつに勝てるとしたら、杯戸町で無敗を誇った——」

「〃杯戸のルータス〃……このおれしかいないだろ」

また変な人が来た。ジャケットを着た背の高い30歳くらいの男……、〃杯戸のルータス〃。この人もあの格ゲーが得意らしい。

「待ってたぜ、アニキ。とつととケリ着けようや」

「まあ、待て。一本くらい吸わせろ」

なんかどーでもいい戦いが始まろうとしているの？ 〃米花のシー

サー」と杯戸のルータス」とやらのゲーム勝負ってやつが。男の人っていつまでもこういうのに夢中になれるのね。

「あはっ、ジョディ先生。レーシングゲームも得意なんですね」

「うわー、すごーい！」

「ハイスコア出ちゃうんじゃない？」

ジョディのレーシングゲームをあたしたちは見物していた。これ実際に本物の車の運転も上手いし、無茶苦茶なカーアクションとかしちゃうやつだ。

今後、彼女と関わることになったら乗ったりするのかなあ。

「あらく、米花のなんたらと、杯戸のうんたらの試合始まったのね……」

「良いじゃんそんなの、どうだって」

「う、うん……、でも……」

「一方的過ぎるような気もするわね……」

「どっちが勝ってんの？」

「あのチンピラ……」

チンピラと長身の男の勝負はワンサイドゲームだった。

おかしいなあ。蘭以上に何もさせてもらってない。長身の男も杯戸では負けなしみたいな話なのに……。

チンピラが蘭が初心者なのを見抜いて手を抜いてたってことかしら……。

「なんだよ、杯戸のルータスも大したことねーな」

「ありゃ、立ち上がるのに時間がかかるぜ」

「いや、立ち上がる前にいつものアレでトドメだろ」

「……あれ？ 動かないわね。敵を倒す絶好のチャンスなのに……」

『DRAW!』

フルボッコにしたチンピラのゲームキャラは突如として動きを止めた。

長身のキャラクターがそういう技を使ったのかと思ったけど違う

みたい。

ゲームは結果として勝負はつかずに終わってしまった。

「ひ、引き分け？　なんで……、あんなに優勢だったのに……」

「お、おい、何か様子が変だぞ」

「さつきからピクリとも動かない」

そして、プレイヤーのチンピラの様子から変だとギヤラリーがざわめきだした。

ピクリとも動かないですって……。まさか――。

「あ、アリスちゃん！」

「アリス！　どうしたの!?!」

「……し、死んでるわ。蘭ちゃん！　警察を呼んで！」

「――っ!?!」

チンピラはゲーム機に拘束されたまま息を引き取っていた。

どういうことかしら？　さ、さつきまでゲームをしたのに突然

……。とにかく、警察が来るまで待ちましょう。



「ゲームの対戦中に死んだあ？　本当かね？　アリスくん」

「ええ。あのモニターで二人が戦っているところを見たのですが、被害者が相手を追い詰めたところで操ってたキャラクターが動かなくなり――」

「プレイヤーである彼もまた動かなくなっていたということか」

そう、ゲームで対戦していて急にプレイキャラクターが動かなくなったと思ったらあのチンピラは死んでいた。

「驚いたよね。勝つと思ったところで動きが止まるんだもん」

「うん。アリスちゃんが死んでるって言ったとき信じられなかった。何が起こったんだろう?」

高木刑事によると、亡くなったチンピラみたいな男は尾頭賢吾、21歳で無職。このゲーセンでは素行が悪くて有名で嫌われていたみたい。

「カレ、藤峰サンや毛利サンの知り合いデスカ？」

「あ、はい。こちらの目暮警部は蘭ちゃんのお父さんの父親の元上司なんですよ。蘭ちゃんのお父さんはあたしの探偵の先生でして……」

「ん？」

「こちらはジョディ先生、私たちの学校の英語の先生です」

あたしと蘭はジョディと目暮警部を互いに紹介し合った。

これからきつと関わるが増えるんだろうな。

「ジョディ・サンテミリオン、デス。ヨロシクお願いシマス」

「マイネームイズ、ジューゾウメグレ。アイアム、ジャパニーズ、ポリスマン！」

「チツチツチツ、〃ポリスマン〃 違います。〃ポリスマン〃 オツケー？」

「ぽ、ポリスマン？」

「ノンノン……」

「ジョディ先生、そのくらいにしてあげて。高木刑事、ゲームのプレイ中に怪しい人物が見当たった情報とありましたか？ このとおり、ゲーム中は拘束されちゃうので毒を服用しての自殺とかは無理なんですよ」

何か目暮警部のお茶目な一面をもつとみたい気もしたんだけど、あたしは事件が気になって高木刑事に不審者がいなかったかどうか質問した。

「それが、この辺りを歩き回る不審人物は居なかったみたいなんだよ。アリスちゃんの言うとおり、何かを口に入れたりもしてる様子はなかったみたいだね」

「しかし、なんだね。この格好はまるでSFだな」

「ゲームのダメージが直接プレイヤーに伝わるように出来てるんですよ」

「伝わると言っても携帯電話のバイブくらいで、殺人が出来るほどじゃないですけどね」

目暮警部にゲームの仕様を説明したのはゲームセンター店員の出島均と、ゲーム雑誌のライターで〃杯戸のルーカス〃こと志水高保。

志水はゲーム内のダメージで殺したとか思われないうために補足説明をしたんだそうだ。

「まっ、言いたくはないがおれはやらねばならぬでね。二、三発程度しか入れてねーよ。ガムまで噛んでゲンを担いだってのに」

「そうなのかね？」

「は、はい。確かにそんな感じでした。ねえ、アリスちゃん」

「……………」

「アリスちゃん？」

「……………そ、そうね。こんなに力の差があるもんなんだって思ったわ」

どうも気になるのよね。あのワンサイドゲーム。

攻撃が当たらないにしても、何か技らしい技くらい使っても良さそうなのに…………。

それを考えていると、蘭に話を振られたことに気付かなかった。

「ちえっ！ お嬢ちゃんたちにカツコ悪いところまで見せちゃまって、ついてねーぜ」

「問題は死因だが…………」

「恐らく、毒…………ですよ。窒息死なのに、首を絞められた跡もありませんから」

あたしは十中八九、死因は毒による呼吸困難からくる窒息死だと推測している。

自殺もやってなさそうだから毒殺ってことになるわね。

「毒？ しかし、アリスくん。何かを口に入れたりした訳ではないし、予め何かを飲まされていたのなら気分が悪くなったり何らかの反応があつたんじゃないのかね？ そんな様子は——」

「なかったよね。蘭とゲームしてタコ殴りにしてたし」

「元氣そうだったよ。アリスちゃん」

被害者が最後のゲームをする前は元氣に蘭とゲームで遊んでいたのだから、前もって毒を摂取してた可能性はない。

だけど、何も毒というのは口からじゃなくても体内に入れることは出来る。

「そう、この人はゲームを開始するまではピンピンしていた。だとし

たら、考えられるのは毒を針か注射器で体内に注入するというやり方です」

暗殺みたいなやり方だけど、こうすれば被害者は毒を体内に摂取することが可能だ。

幸いなことにゲームセンターという空間はそれを行うのに適している。

「おいおい、それだと彼がうめき声を上げたりして、何らかの反応を示すだろう。それに誰も気付かないっていうのはないんじゃないか？」
「ううん。それは大いにあり得ます。だってさっきまでこのゲーセンの中はすつごく煩かったんですもの。近くの人の声も聞き取りにくいくらい。それに、さっきも言いましたが、このとおり、プレイ中はゲーム機に拘束されちやいますから。体調に異変を感じても動けないんです。その上、普段の室内はモニターをよく見えるようにするために薄暗い。ギャラリーはほとんど巨大モニターに釘付けになります」

視覚や聴覚が働きにくい空間で無防備な姿をゲーム中に晒すことになる被害者は、誰にも気付かれずに毒殺される可能性は十分にある。

犯人がこんな大胆な犯行に及んだのは見つからない自信があったからだ。

「だとすると、多少乱暴なことをしても気付かれないかもしれないですね」

「うむ。無防備な上にゲーム音と暗い照明で犯罪を隠すことは可能ということか。よし、遺体を司法解剖に回せ。死因を突き止めるんだ」「はっ！」

「あら、ジヨデイ先生。あたしの顔に何か？」

「ノー、驚いてマス。授業中の雰囲気とはマルデ違いマスから」

「やっぱり気になるかく。あたしのことが……。単純な興味っぽい感じではあるけど……」

「問題は容疑者ですね。三十人以上、ゲームセンターには居るみたいですから、これは骨が折れますよ」

「高木刑事、大丈夫ですよ。あたしは被害者の隣のレーシングゲームをプレイ中のジョーディ先生の側に居たんです。被害者に近付いた人物が6人しか居なかったことを知ってます」

「ほ、本当かい？ いやー、いつも助かるよ」

容疑者を割出そうとしていた、高木刑事と目暮警部に被害者に近付いた人を全員話した。

被害者に近付いたのはあたしたち4人と、ゲーセンの店員の出島に、被害者と対戦した志水の6人。

「目撃者は藤峰サンだけではアリマセン。ホラ……」

「防犯カメラ!？」

さすがはジョーディだ。防犯カメラを最初に気にしていたか。あたしも後で言おうと思ったけど、これで確認するのが手っ取り早いわよね。

ということであたしたちは防犯カメラの映像を見に行くことになった。

しかし、さつきから変な音がするわね。これは金属音……？ 気になるわ……。

防犯カメラの映像から最初に被害者に近付いたのはゲーム機内のお金を集金した出島。

その次に近付いたのはゲーム戦略の探りを入れたという志水。

そして、あたしたちが巨大モニターに注目していたときに隣でレーシングゲームをプレイしていたジョーディ。

と、いった感じだった。しかし、ジョーディはハイスコアを出していたし、そもそもFBIの彼女が犯人なわけない。

そんな中、最後に被害者の側でしゃがんでいたらしい、麻雀ゲームをやっていた小太りのおじさんがのっそり現れた。

ありや、この人も被害者に近付いていたんだ……。見落とすとはあたしもまだまだね……。

——多分、あの方法なら尾頭を殺せるし、あたしの違和感も解消さ

れる。

「だけど、問題は凶器がどこにあるかってことよね。それが見つければあそこにあるモノが証拠になるし……。」

「これからそれを探さないと——。」

しかし、ジヨデイはよくあたしを観察してる。見られてもあたしと新一が同一人物とまでは気付かれないだろうけど、行動には気を付けないとね……。」



タクシードライバーだという小太りのおじさんは江守敏嗣。

彼は小銭をばら撒いてそれを拾ってただけだと主張していた。過去にはレーシングゲームのミスを被害者にデイスられたこともあったらしい。

そんな話の中で志水の妹が被害者と同棲していて、被害者がヒモ同然だったということや、出島もまたゲーマーで被害者に完敗した経緯があり、髪型を変えてゲーセンの店員になった話が聞けた。

そして、司法解剖の結果——被害者の死因は毒によるもので、検出された毒はテトロドトキシシン。針のようなもので右脇を刺されて血管に注入されたみたいね。

「テトロドトキシシンってフグの毒かあ……。」

「テトロドトキシシン——通称TTX。致死量は0.5〜1mg。青酸カリの500分の1で死んでしまうクレイジーな毒。フグに多く含まれていて、口から入れれば中毒症状の進行が遅く助かる場合が多いけれど、直接血液中に注入されると、短時間で神経が麻痺し、ジ・エンド」

「先生……？」

「って、ユウジンのドクターが行ってマシタ。日本ではフグの毒には気をつけるツテネ」

「うーん。ジヨデイって、なんだろう。怪しさ満載すぎるわ。」

「急に流暢に喋られたら驚くでしょーが。」

「とにかく凶器を探しますから、皆さんも現場に戻ってください」
「ちよつと待って！ 出島さん、こつちに来てくれませんか？」

あたしはずつと気になってる金属の擦れるような音の出どころが
出島さんということに気が付いて、彼に声をかけた。

「な、何ですか？ 一体……」

「ああ、やっぱり……。靴から変な音がしますよ。靴の裏を見ても
見えませんか？」

「えっ？ あつ、こ、こんなところに……」

出島の靴の裏には銀紙が貼り付いていた。ガムでくつついている
みたいね……。

「ま、まさかそれが凶器……。タバコに毒針を仕込んでガムで銀紙に
固定して……」

「犯人は期待してたのでしょね。誰かが踏んで遠くに運ぶことを――」

そう、犯人は毒針をタバコの中に仕込んで凶器として持ち歩き、ガ
ムを銀紙に吐き出すフリをして凶器をくつつけて、床に落とし――誰
かがガムごと凶器を靴に付着させてどこかに運ばせようとしていた
のである。

「しかし、問題は誰が殺したということになるが……」

「それはもう分かりました。犯人が誰なのか、どういう経緯で被害者
を殺したのかも」

「ほ、本当！ 相変わらず、いつの間にか分かっちゃってるのね」

「とりあえず、現場の方が分かりやすいと思いますので、そっちに行き
ましょう」

凶器が見つかったので、犯人を追い詰める準備は出来た。

あとは現場で犯人がどんな手口で犯行をしたのか説明するだけ――

犯人とあたしの対決が始まった――。

「さて、アリスくん。犯人が誰なのか分かったと言っていたが……」

「ええ、順を追って説明します。まず、出島さんは被害者に近付いた後に志水さんが話しかけているので犯行は無理です。刺されたのは右脇なので、左側にしか近付いていなかった江守さんも無理。レーシングゲームからどんなに手を伸ばしても被害者に届かないジヨデイ先生や、同様の理由で離れていたあたしたちも無理ですよね」

あたしは一人の人物を除いて犯行は不可能だという理由を話した。つまり消去法で浮かび上がる犯人は一人しかいないのだ。

「ということは、犯行が可能なのは……志水さんだけということになるな」

「おいおい、そのお嬢ちゃんの言うことを真に受けんなよ。おれはゲームであいつと対戦してたんだぜ、その最中に死んだ奴にどうやって針を刺すんだよ！」

「そりゃあゲームをする前に決まってるでしょ？」

志水の言うとおりゲームの最中に人殺しは無理だ。それが彼の理論武装であり、彼が犯人から除外される理由でもある。

しかし、その前提は間違いだ。ゲームが始まったとき——すでに尾頭は死んでいた。

「お前、見てなかったのか!? おれがあ野郎にボコにされてんのを」「そうよ。あのチンピラが一方的な感じでタコ殴りにしてたじゃない」「」

「アリスちゃんも一緒に見てたでしょ」

志水の言葉に同意するように園子と蘭はうなずく。

しかし、あたしは最初からあの勝負は変だと思ってた。ゲーマーというほどゲームは得意じゃないけど、そんなあたしでもあの試合は違和感しかなかった。

「うん。異常なくらい棒立ちだったキャラクターがボコボコにされる光景は見ていたよ。あり得ないよね。あのルータス……初心者の蘭よりもボコボコにされてたもん」

「わ、悪かったな。本気のあいつが思った以上に強かったんだよ！」

「いいえ、その逆。死体はゲームなんて出来ない。あなたは誰も操作してないルータスをシーサーを使って一方的に攻撃してただけ」

「——っ!？」

あたしは志水が使ったトリックの根幹を口にすると、彼の顔色が変わる。

試合を見ていた全員が騙されていたのだ。ワンサイドゲームを演じていたシーサーは被害者が操作していると。

「論より証拠。再現してみましよう。あたしと蘭ちゃんがゲームで対戦しますから。蘭ちゃん……、ちよつと来て。みなさんは巨大スクリーンに注目してください」

あたしは蘭にいくつか指示を出して100円玉を入れてゲームを開始した。

あはっ、このゲーム……面白いじゃん。こりゃあストレス解消になるわ……。

「さて皆さん。被害者の最後のゲームと同様にワンサイドゲームになりましたが、どっちがどっちのキャラクターを動かしていたのか、分かりますか？ 例えば出島さん、このゲームには詳しいんですね」「えっ？ いや、二人の持ちキャラが誰だかわかりませんし、ゲームの上手さも知りませんので……。どっちがどっちなのか分かりません」

これがこのトリックの肝だ。巨大スクリーンを見るだけじゃ、実際に誰がどっちのキャラクターを使っているのかわからないのだ。

「そうなんです。このゲームって体力ゲージも表示されないの、巨大スクリーンを見ただけじゃ、誰がどちらをプレイしてるのかわからないんです。蘭ちゃん、目隠し取って良いわよ」

「わかったー」

「ええっ!？ 蘭ってば、目隠ししてたの?」

「うん。それに力を抜いて何もしないでって頼んだのよ」

蘭には脱力して動かないように指示を出した。ネクタイで目隠しをしてもらって。

なのにも関わらず、誰一人として蘭の異変に気が付かなかったのだ。

「でも、蘭さんの体は動いていたよ。アリスちゃん、これは一体……」

「振動するんですよ。このゲームはダメージを受けると、その箇所が。それがいい感じに働いて手足が動くものですから、死んでいても傍目から見るとゲームをプレイしてるようにしか見えません。つまり、これは先入観を上手く使ったトリック。被害者の尾頭さんがシーサーを、そして犯人である志水さん、あなたがルータスを使うだろうという先入観をね！」

キャラクター名が異名が付くくらいこの界限で有名になった2名のプレイヤー。

あたしたちも蘭がタコ殴りにされたのを見たせいで尾頭がシーサーを使っていると思っただけなので、ゲーセンの常連はなおさらそう思い込んだのだろう。

「なるほど、互いの使うキャラクターを逆にして、あたかも被害者がゲームの最中も生きていたかのように演出したのか！ それなら凶器に志水さんの指紋が残ってるかも」

「いいぜ、調べてもらっても。好きにしな」

「警部さん、無駄なことはしないでいいですよ。志水さんは凶器が見つかることも想定してましたから」

志水のあの態度はやはり証拠隠滅をしているという自信の現れだろう。

「ここまで話してもまだ余裕があるみたいだ。

「なぜ、そう言い切れるのかね？」

「過剰反応——見せつけるようにガムを噛んだのは凶器が見つかったも、わざわざ警察の前で犯人ならガムを噛んだりしないとも言ってもりだったのかしら？ 確かに噛んでるガムも凶器についてるガムと違うし、何ならタバコの銘柄も違う。まあ、こんなもの自分のを使わずにその辺に捨てられてるのを使えばいいもんね」

目暮警部に対して、これでもかとガムを食べてることをアピールしていた。

それはガムを使って証拠を消そうとしていたからだろう。

「でも、被害者刺すときには指紋は付くだろう？」

「指と指で挟むとか、ソフトタイプのタバコの箱を手袋代わりにして

握って刺すとか、指紋を付けない方法は幾らでもありますよ」

「はっ！ どっちにしろ、証拠がないのなら犯人扱いしないでもらいたいな！」

あたしが警部に指紋をつけずに被害者を刺す方法を教えていると、志水が苛立った表情で証拠を催促した。

「そうね。あなたは完璧に証拠を隠滅したと思っっている。でも、思い出して。出島さんは被害者がゲーム機に座る寸前に集金作業を行ったのよ。あなたはこのトリックを仕掛けるために被害者のゲームを終わらせて再びゲームをするために100円玉を入れたはず。つまり、あたしが言ったとおりに事が行われているなら、ゲーム機の中には本来はあたしが入れた100円玉と被害者の入れた100円玉の2枚しかないところに——入ってるはずよ！ 3枚目の100円玉がね！」

本来はたくさんの100円玉の内の1枚になり、志水さんの指紋がついても何の問題もなかったはずだった。

しかし、出島が集金をするとなると話は別だ。志水の指紋がついた100円玉があるのは理屈に合わなくなる。

「あ、ありました！ 100円玉が3枚！」

「では、これを鑑識にまわして——もしかしたら志水さんの指紋が——」

「ついてるよ……オレの指紋……。あの100円玉はしっかり握って入れたんだ……。オレのラストゲームにするつもりだったんだからな……」

3枚目の100円玉を見た志水は観念して語った。ヒモみたいな生活を送っている尾頭のために体を壊してまで働いている妹が不憫だったのが動機らしい。

いつも思うけど、殺す以外の方法を考えてほしいものだ……。

「いやー、また助けられたねー。アリスくん！」

「あはは、出島さんが集金してたり、ガム踏んづけてくれたおかげですけどね〜」

今回は半分以上は出島のおかげで解決したようなものだ。

こういう偶然に頼っているうちはまだまだなんだよね……。

「ううん。こないだの新一にも負けてなかったよ」

「あんたって軽いノリで片付けちゃうからいつつも驚かされるのよね」

「そ、そうかしら？　じゃあちよつと調子に乗っちゃおうかな〜！」

「アメージング！　すごいデース、アリス！　まるでケイト・マーティネリみたいデシタ。普通の女子高生にしか見えナイのに不思議デース」
あたしが蘭と園子に褒められて笑っているとジヨデイが力いっぱい抱きついてきた。

「うわー、やはり欧米人は積極的なんだね。あたしも人のこと言えないけど……。」

「あ、ありがとうございます。なんかこうされるのって新鮮……」

「あー、いつも抱きしめる側だから、ちよつと照れくさい感じもあるわね。」

でも、なんか癒やされるわー。

「Mysterious girl……、ホントに不思議な娘……」
「えっ?」

「バイバーイ！　またスクールで会いまショウ！」

ジヨデイは耳元で何やらつぶやくと、笑顔であたしたちに手を振った。

FBIも大変そうだな。他の職業をこなしながら潜入捜査もしなければならぬのだから……。

あたしはまだ知らない。FBIと黒の組織の戦いに巻き込まれて、今まで以上に命がけの勝負に身を投じることになることを――。

園子のアブない夏物語

「ちよつと園子どこ撮ってるの!？」

「ん〜? 想い出作りよ。想い出作り……。あと、旅のお裾分けを新一くん……。ま〜どうでも良いんだけど」

「なんかいつになくやさぐれてるね」

「作戦の根本が崩れたからよ。ナメてたわ。あの子、ただでさえモテるのに水着になつたら——」

「ごめんごめん、何か色んな人に声かけられちゃつて」

赤いビキニを着てビーチを歩いてたら、びっくりするくらい男の人にナンパされた。

いやー、モテすぎるのも考えもんだわ。探偵事務所に変な噂も立てられたくないからやんわり躲すのも面倒だし……。

「何ですよ。何であんたばかり! この理不尽おっぱいのせい!？」

男はやっぱりおっぱいなのか! こいつが揺れるたびに男共の視線があんたに集中するのよ!」

「んんっ……。♥な、なんで、涙を流しながら胸を揉むのよ!？」

園子がいきなり、あたしの胸を鷲掴みにしながら滝のように涙を流す。

こりゃ、いつもより面倒な感じになってるわ……。ていうか、別に園子だって小さくはないじゃん。

「あんたがせ〜くんぶ持つて行ったからよろ〜! ビーチに来てから言い寄ってくる男のほとんどあんた! 残りは蘭! ナンパの列が出来たの初めて見たわよ! この企画を考えたのは私なのに! それだけじゃないわ! 電車でも花火でもあんたや蘭ばかり!」

園子が企画したのは「非お嬢様大作戦」——旅先で泊まる場所が、園子の家の別荘か高級ホテルばかりだから「高嶺の花にはとても手を出せない」とか思っちゃう、チェリーなボーイたちを安心させるために、わざわざ古びた旅館に宿泊しようという作戦らしい。

何かあたしのせいで失敗したみたいなき感じになってるわね……。

嫌味になるから言わないけど、このボディになってから怖いくらい

モテる。素顔で出歩きたくないくらい。そしてこれも事実だから否定してないけど、男子、めっちゃ胸見るじゃん。

気付いてないフリしてるけど、気付いてるからね。

何なら探偵になって観察力が上がったからなのか、盗み見なんてきれようものなら余計に気になる。

「あ、あたしの場合アレよ、アレ……。ほら、先生と一緒にテレビとか出てるから……。サインとかさ」

「探偵ねえ。知的に見える女性がモテる……。とか？ いや、アリスに限ってそれはないか」

「そこはかとなくディスるのやめてもらえる？」

ちよつと有名になってるからその補正分で話しかけられてるだけで、あたしが園子や蘭と比べてビジュアルが良いとは思わないけど……。と言おうとしたら、頭悪そうって言われちゃうあたし……。否定はしないけどね……。

「ねえ、君たち……。もしかして暇？」

「えっ？」

「お昼でも一緒に食べないかい？ もちろんおごるからさ！」

ベタな感じであたしたちに声をかけてきたのは爽やかそうな感じの男だった。年齢は大学生くらいかしら……。

「はいはい、君たちとか言ってるどーせこっちのアリスの体が目当てなんですよ。それともこっちの蘭の方？ 言つとくけどこっちは旦那がいるから、変なことしちやダメよ」

「園子ちゃん、言い方……」

園子はあたしと蘭の背中をグイって押しながら、投げやりな口調になる。

体目当てって、そういう言い回しはやめていただきたい……。

「いや、僕が誘いたかったのは君の方なんだけど……」

「ふえっ……。わ、わたし？」

男はスツと園子に近付き、彼女に笑顔を向けて本命は彼女だと告げた。

なんか、すつごく驚いてるけど、おそろくさつきまでガツガツして引かれてたのが、しおらしくなって丁度いい感じに落ち着いて見えただんだと思う。

園子なんて普段通りにしてたら可愛いし、気さくだし、気が利いて、優しいんだから京極さんが現れるまで放って置かれる方がおかしいのよ。

「やったじゃん。園子！」

「……あー、園子ちゃんって照れるとそんな顔するんだ♪ んじゃ、蘭ちゃん。あたしらは二人でデートしよつか？」

「うん！ 二人の邪魔したら悪いもんね！」

あたしは蘭と手を繋いで彼女と男を二人きりにしようと思案すると、蘭もそれに乗ってくれた。それなのに――。

「……で、園子ちゃん。そろそろあたしの腕を離してもらえないかしら？ 気を利かせてるつもりなんだけど」

「園子？ どうしたの？」

もう片方の腕を掴みながら不安げにあたしを見つめる園子。

いやいや、非お嬢様作戦がせつかく成功したってのに何でそんな顔してんのよ。

「ご、ごめん。アリス、蘭……、ふ、不安だから付き合って……」

「えっ？」

いざというときに思った以上に乙女モードになってしまった園子に頼まれて、あたしと蘭も食事に付き合うことにした。

それじゃ、上手いこといくようにアシストしますか。

園子をナンパした男は道脇正彦という名前で、現在は米花大学の学生さんらしい。

偶然だけど小五郎の後輩みたいね。話も盛り上がってきたわ……。

「で、道脇さんはどうして伊豆に？」

「ああ……、彼女にひどいフラれ方をしてね、まあただの失恋旅行さ」

「そうなんですか……」

「でも来てよかったよ！ 天使を見つけることができたからさ！ 僕

の勘が正しければ、恐らく君は救いの女神になるはず！」

道脇はフラれて傷心旅行中らしい。でも、園子を見つけて運命の人だと思っただけだ。

なかなか、ロマンチックな言い回しをするじゃない。こりや、ナンパ慣れはしてそうね。

「えっ……？」

「あはっ、園子ちゃん。天使だって。女神だって。顔赤くしてないで、ほら。何かいいなさいよ」

「あ、うん。その……。——っ!？」

珍しくデレデレな園子の顔を愛でながら、彼の言葉に何か返事をするように促すと、ドンという音とともに道脇の前にビールが置かれる。

「生ビールお待たせしました……」

「あ、ども……」

あー、びつくりした。色黒で眼鏡の男の店員が道脇の注文した品を置いてただけか。

それにしても、この人から只者じゃないオーラを感じるわ……。

「お客さん、タバコの灰、気を付けてください。掃除大変ですから」

「……？ あ、あの店員さん、どこかで会ったことない？」

店員の男が去ったあと蘭は園子とあたしにどこかで見たことないか聞いてきた。

うーん。どっかで見た気はするけど……。

「私たちが泊まってる瓦屋旅館の息子さんよ！ 夏休みだから手伝いに帰ってるんだって。この海の家も同じ経営なのね」

「へえ、あの人がカッコ良かったもんね。やっぱりチェックは欠かさないんだ」

そっか、旅館に居たんだっけ。眼鏡だけど端正な顔立ちだし、何よりあの怪盗キッドもびつくりなくらいスキのない動きは惹かれるモノを感じるわ。きっと園子のリーダーにも反応して——。

「ち、違うわよ！ 私たちのことジロジロ見てたから、旅館の人に聞いただけよ！ ていうか、アリスの男の趣味悪くない？」

「ふえっ？ そーかな？」

「彼ならあんたに譲ったげるわよ」

「いや、別にそういうつもりで言ったんじゃないし」

いい人だと思ったからとて、付き合いたいとかそんな気は一切湧かない。

それにしても、ジロジロ見てたとか言ってたけどあたしはそんな視線感じなかったな……。つまり、彼は園子だけを見ていたってことよね……。

「ところで君たちさあ、瓦屋旅館に泊まってるの？ 僕のホテルの近くだよ！ どう？ 今夜みんな海辺の洒落たレストランで食事でも……。車で迎えに行くから」

「ええーっ！ いいんですかあ♪」

道脇が夕食に誘うと園子は甘えたような声を出す。あらあら、いつもはあたしのことをぶりっ子とか言ってるのに……。

「ああ……。そのかわりカメラを忘れないこと！」

「え？」

「どうしてですか？」

「二年前、そのレストランのそばの浜辺で、茶髪でロングヘアの女性が腹を刃物でメツタ刺しにされた殺人事件があったらしい」

「さ、殺人!？」

彼は何故かレストランにカメラを持っていくように頼んできたので理由を尋ねると殺人事件の話をしてきた。

なーんか、きな臭い話になってきたわね……。

「その女性はレストランに向かう途中で殺されたらしいんだけど、目撃者もなく未だ事件は未解決……。それでも一年たち——客も事件の事を忘れてレストランが繁盛しているのはいいが……。困った事にその女性はレストランが気に入ってしまったらしく、今も通ってるそうなんだ」

「か、通ってるって……?」

「そのレストランで撮る写真に、腹が裂け臓物が飛び出た、グロテスク

な幽体となつて写るらしい……」

「蘭ちゃん、ビビりすぎ……」

蘭が怖がりながらあたしの腕にしがみついてきた。

そんなに幽霊って怖いかしら？　すぐに人を殺しちゃう殺人犯の方が怖いけど……。

「だから本当にそんな写真が撮れるかどうか、試してみようよ」

「ね、ねえ、どうする？　カメラまだフィルム残ってるけど……」

「いいわね。心霊写真って興味あるし！」

「アリスちゃん、何言ってるの!?　ダメ！　絶対！」

あちら、マジで怖がってるのね。確かに空手は幽霊には通じなさそう……。

しかし、殺人事件の影響で心霊写真が撮れるって本当かしら……？　いやー、その理屈でいったら毛利探偵事務所なんて……蘭には黙つとこう。

「でも新一くんに見せたら何かわかるかもしれないわよ。例の衝撃的な写真も彼に見せるんだし」

「だからー、あんな誰だかわかんない写真を見せてどーすんのよ？」

「彼の推理力なら誰なのかわかるわよ」

「推理力？」

道脇は新一の話に興味があるのか身を乗り出してきた。

お尻の写真だけで蘭かどうか判別できるのか……、か。あたしは自信あるけど……、彼も簡単に解きそうね。

「この子の彼、探偵なんです！　ついでにそつちの子も」

「へえ……」

「んっ？」

何か嫌な視線ね。あたしみたいなのが探偵やってたら何か悪いのかしら……。

頭悪そうなのに探偵なんて考えられないとか思ってるのかな……。

「で、その写真ってどんな？」

「ふふ……、それが——」

「園子ッ！」

「——っ!?!」

「焼きそば、お待ち!」

蘭のお尻ドアップ写真のことを道脇に話そうとしたそのとき、乱暴な感じで焼きそばが運ばれてきた。とりあえず、食べよつと。

「わあ♪ 美味しそー♡」

「客がつかえてますんで、さっさと食べてくださいよ」

「ふあーい! ずずずっ……! ごちそうさま!」

「アリスちゃん、早すぎ。あの店員さんもそこまでの速度を求めてないから」

あたしが店員に促されるまま、急いで焼きそばを食べ終わると蘭に苦笑いされた。

混んでるから、早くしてあげようと思ったんだもん。

「何なんだ、あの店員。僕たちに恨みでもあるのかなあ?」

「それよりそのレストランやめませんか? 気味悪いし……」

「大丈夫! 心霊写真はただの噂だし、もう一年も経つんだよ? 殺された彼女もあのレストランに飽きてる頃さ」

道脇はどうしてもその心霊レストランに行きたいらしい。

なんだろう……。そんな心霊写真が好きなんだろうか……。

「おい聞いたかよ? 線路沿いの林でまた見つかったってよ!」

「なにがだよ?」

「遺体だよ! 茶髪の女性がまた被害に遭ったんだってさ!」

「——遺体っ!?! 蘭ちゃん、園子ちゃん、ちよつと行ってくるわ!」

「アリスちゃん!?!」

そんな話をしてる中で殺人事件が起こったという話をしている人の声があたしたちの耳に届く。

また被害に……? 何回もそんなことが起こってるっていうの……? ……?

「腹部を刃物でメツタ刺しか……」

「一年前と同じですね……」

「ああ……、この女性も観光客のようだしな。死亡推定時刻は昨夜の8時から9時の間、花火大会が終わった後か」

現場では横溝警部が検証を行っていた。花火大会が終わった頃ならあたしたちもかなり近いところになっていたわね……。

「えっ……、それって昨夜、私たちがこの辺りを通った頃じゃない？」

「そういえばそうね」

「なんか怖い……、ほら私もアリスも茶髪だし」

「あー、ターゲットにされちゃうかもね」

「そっか、二人とも茶髪の観光客……」

嫌なことに、茶髪の観光客の女性という特徴はあたしと園子が該当する。

園子は完全に怖くなったのか、いつものような快活さがなくなってしまうた。

「ヤダよ……、こんなところで死ぬなんて……。まだやりたいこともやってないのに……」

「大丈夫だよ。この伊豆にいる間、僕が君を守るから」

涙目の園子の肩を優しく抱いて、道脇は勇ましいセリフを口にする。

彼女はそれを聞いてキュンとしてるみたいだ。

「んじゃ、あたしは蘭ちゃんに空手で守ってもらおうと。お願い……、守って♡」

「も、もう、顔が近いよお。アリスちゃんはいつもしようがないなあ……」

「ねえ、あの子って……」

「ええ、だから彼氏がいないみたいなの……」

あたしが蘭の首に手を回しながら、顔を近付けて守ってもらえるようにお願いすると、道脇と園子に変な顔をして見られた。

仲良くしてるだけなんだけど……ダメかしら……。

「夕食の場所も変えた方が良さそうだね」

「そうですね。園子がこの様子じゃ……」

「じゃあカメラも……」

「もちろん、無しだ。7時頃迎えに行くから、旅館の玄関先で待っててよ」

その後、心霊レストランに行くのはナシになって道脇と待ち合わせの約束をした。

そして、横溝警部に気を付けるように声をかけられた。

園子はあたしに事件を解決するように言ってきたけど……。通り魔的な犯行はトリックを使った密室殺人なんかよりもよっぽど解決するの難しいのよね……。

「あちやー、雨強くなってきたわね……」

「早く来てくれないかなあ道脇さん」

「焦らない、焦らない。ヒーローは遅れてくるものなんだから道脇との約束の時間になったが、彼はまだ来ない。

ウチの園子を待たせるとはいいい度胸してるじゃん。

「もー、それじゃ私がワクワクしてるみたいじゃん。——っ!」

「……………」

「なんだろう？ この傘……」

「使えってことかな……?」

急に旅館の玄関が開いたかと思ったら、海の家で会った店員の色黒の男が傘を無言で置いて去っていった。何か言えばいいのに……。

「あの人、園子ちゃんに気があるんじゃないの?」

「えっ……?」

「なんだー園子、モテモテじゃない」

「やめてよー。あんな暗い男……。ほらアリス、あんたカッコいいって言っただから責任持ちなさい」

あたしと蘭が園子にモテ期到来を喜んだら、彼女は好みではないと言ってきた。

あたしに責任って何を言ってるのかな……。

「だから、なんであたしが。ていうかあの人にも選ぶ権利あるし」

「そっかー、園子は道脇さんひとすじってわけね」

「も、もうー、照れるからやめてよー」

そっか、道脇のことがあるから他の男に目が向かないのか。

今日はずっと恋する乙女モードだなあ。顔赤くしてて……。

「園子ちゃんって、恋愛になると純粋になるわよね」

「あつ、ヤバっ！ 財布忘れちゃった。ちよつと取りに行ってくるー！」

「うん。待ってるわ」

園子がどうやら部屋に財布を忘れたらしく、彼女は慌ただしく走ってそれを取りに行った。

そんな矢先である。今度は蘭の顔色が変わった。

「……アリスちゃん、どうしよう」

「どしたの、蘭ちゃん。青ざめた顔して」

「園子から取り上げたカメラ……海の家で置きっぱなしにしてたことを今思い出したのよ」

園子があまりにも変な写真を撮るから、蘭は見かねて彼女からカメラを取り上げて、しかもそれを海の家に忘れてたらしい。

二人とも忘れ物なんて珍しいわね……。

「あ、そうなんだ。じゃ、明日取りに行く？ まだ、店やってると思うけど、雨の中取りに行くのもなあ。道脇さんも来るし」

「でも、あの写真も入ってるし。誰かに持っていかれちゃったら……。」

「ご、ごめん。急いで取りに行ってくる。傘、借りちゃっていいよね？」

「わかった。じゃ、とりあえず園子ちゃんに伝えとくかな」

ということ、蘭は例の傘を借りて海の家に向かい、あたしは園子が思ったより遅いので彼女の元へと向かっていった。

「んんんっくく！ んっ！」

「あれ？ 園子ちゃん、何してるの？」

部屋にたどり着くと変な声がしたので、あたしは襖を開ける。

すると苦しそうな顔をした園子が座っていた。

「ぐっほっ、ぐっほっ……」

「ちよつと、大丈夫？ な、なにかあったの？」

「変な男がいきなり襲ってきて、窓から外に……」

なんと園子は暴漢に襲われていたらしい。なんてこった、また事件だ……。

園子が無事で本当に良かった——。

「窓から……!? ダメね、逃げられた後か……、でも、なんで園子ちゃんか……」

「知らないわよお……、襖を開けたらその男が私たちの荷物を漁って……、大声出そうと思つたらナイフで襲ってきて……。きつと下着泥棒よ。美人女子高生が3人も同じ部屋に居たから狙われたんだわ」
「ナイフ!? 連続殺人と同じね……。——それで？ どんな人だった？」

下着泥棒がナイフなんて持つかしら？ まずは状況を確認しましょう。荷物を漁ってたということは何かを探していたということね……。

「わからない……。部屋は真つ暗だし、怖くて……。何も見てないわ」
「え？ でも男だったんでしょ？ 声とか聞いたの？」

「ううん。もみ合ってる時、咄嗟に腕に噛みついてやったの。毛深かったから男だと思う」

「そんな状況で噛み付いたんだ……。すごつ……」

つまり部屋の中は顔が確認出来ないくらい暗かった。ということ
は単純な泥棒の類なら逃げ出すはずだ。

園子の衣服に乱れはなかった——となるとそういう目的で襲つた
のではなく、本当にナイフで殺そうとしていたということである。

なぜ、園子が殺されそうになったのか——そして、その男は何を探
していたのか……。

「どうしたんだい？ 部屋に明かりもつけないで」

「あ、道脇さん……」

そんなことを考えていると道脇が電気をつけて声をかけてきた。
ズボンの裾に泥がはねている……。それにシャツも濡れているわね

……。

「車がエンストしちやつてき。慌てて走ってきたんだけど、遅れて申し訳ない」

「そうだったんですか。それにしてもこの部屋がよくわかりましたね」

「うん。着いてすぐに旅館の人に聞いたから。玄関に君たちが居なかったし」

彼は車がエンストして遅れたと話していた。そして、旅館の人に尋ねてこの部屋に辿り着いたとのことだ。

「そーいえば、蘭はどうしたの？」

「カメラを忘れたって、海の家に」

「カメラを忘れたんだ……。どこに？」

蘭の話になったので、あたしがカメラのことを話すと道脇は急に真顔になって話に割り込んできた。

「えっ……。？ う、海の家ですけど」

「あははっ……。、そっかカメラはあの海の家に忘れてたんだ。なるほど」

「……………」

なんで、この人……。そんなにカメラのこと気にするんだろう……。

そういえば、心靈写真を撮ろうと言ってきたりしてカメラの話を切り出したりもしてたわね……。

「どうかしましたか？ お客さん」

騒ぎを聞きつけたのか、旅館の息子だという色黒の男が部屋にやってきた。

右腕に包帯を巻いてるけど、どうしたんだろう……。

「それが、物騒な事件がありました」

「物騒な事件？」

「ええ。変な男があ窓から入ってきて、あたしたちの荷物を漁ってたかと思えば、彼女をナイフを持って襲い……。もしかしたら大惨事になるところでした」

「へえ、恐らく泥棒か何かでしょう。前にも一回あったんで」

あたしが簡単にこの経緯を話すと彼はその男を泥棒だと断じた。

いや、それだけじゃないはずよ。普通の泥棒にしてはやることがおかしすぎる。

「前にもって……！　なんで教えてくれなかつたのよ！」

「戸締まりをきちんとするように言ったはずです！　それに……、こんな時間へソを出した格好をしてるあなたもあなただ……、それじゃ襲ってくれと言ってるようなもの。あなたに似合うとも思えません」「ひつどろい！　これ、お気に入りのよ！」

戸締まりを怠つたのはあたしたちの落ち度よね。

色黒の男は園子の露出の多い服装が気に入らないみたい。なんか、古風な考えだなあ。

「大丈夫。君は何を着ても魅力的だよ。もちろん。浴衣も水着もね……」

園子がどんな服を着ても似合うと慰める道脇。彼女はそれで気を取り直したみたいだ。

「んっ？　まさか……」

あたしは今、恐ろしい結論に辿り着いている。まさか、園子が殺されかけた理由って――。

全てが一本の線に繋がった。あたしの想像が正しかったとしたら、とんでもないことに巻き込まれたわね……。

さて、どうやって話を持っていくか……。あたしは足早に部屋を出て旅館の玄関を確認した……。やはり、あの人は嘘をついている。園子を殺そうとしたのはあの人だ……。

「ちよつと、あなた何してるの？」

「部屋を移してあげるんですよ。空いている別の部屋に。男が侵入した部屋で一夜を過ごしたいなら別ですが」

「お気遣いありがとうございますけど、部屋を移す必要はないですよ。あたしたちはこの部屋でも安眠出来ますから」

部屋に戻ってきたとき、色黒の男が部屋を移そうとしていたので、

あたしは彼を止めた。

もうこの事件は解決するから――。

「アリス！ あんたが物好きなのは知ってるけど、部屋を移して貰ったほうがいいわよ」

「そつちの方の言うとおり……。なかなか変わったことを言うお客さんだ。スリルでも味わいたいのですか？」

「いえいえ、侵入した男は警察に捕まるので、あたしたちは安心できるっていうわけです」

園子は訝しい顔をして、色黒の男は表情には出さなかったが、理解に苦しむみただった。

だから、あたしは宣言する。この部屋に入ってきた男が分かったと。

「へえ、君は探偵って聞いたけど、すごいなー。もうここに誰が侵入したかわかったんだ」

「はい。まず、園子ちゃんは犯人の顔もよく見えていません。暗かったので、ナイフを持ってたことくらいしか判別できなかったんです」
「お客さん、さつき男だと言ってませんでした？」

「彼女は噛み付いたんですよ。その男の毛深い二の腕にがぶりと……。ねえ、凄くないですか♪園子ちゃん、こんな状況で反撃したんですよ」

「アリス……。話が脱線してる……」

あたしは順を追って説明をする。園子が暗がりの中で噛みついた結果、まずは犯人は男だと絞ることができた。

異様に毛深い女もいるけど、まず男だと考えて良いだろう。

「ん？ 二の腕？ そういや、あんた……。右腕に包帯巻いてるな。それはなんだ!？」

「ああ、これは前に酔ったお客さんに絡まれて。疑うなら包帯を取って見せても構いませんよ」

「大丈夫です。園子は毛深いって言うてましたから。彼女が噛み付いたのは、あなたの腕ではない」

そのとき、色黒の男が包帯を腕に巻いていることに道脇が気付く

が、あたしは毛深くないことを指摘して気にしなくても良いと口にする。

彼も平然としてるから、傷口を見せることに抵抗する気もないんだろう。

「な、なるほど。僕も大丈夫だ。毛深くはないし、ほら歯型もない」
道脇はシャツをめくり両腕を見せながら、自分が噛まれていないことを主張した。

うん。彼も腕は噛まれていないみたいね。

「てことは、アリス。私を襲ったのって、もしかして旅館の従業員とか？」

「まさか、ウチの従業員を疑ってるのですか？」

「いいえ。この部屋の中にいますよ。園子ちゃんを襲った犯人はね……」

「——っ!?!」

あたしはこの部屋に園子を襲った男がいると言いつつ切った。

園子は大きな勘違いをしてるんだ。だから、犯人は今もお何食わぬ顔をしてる。

「おいおい、探偵ちゃん。犯人っていうのは毛深い二の腕を噛まれてるんだろ？ 僕もそっちの男もどっちも毛深くはないし、僕なんて噛まれてもない。そっちの方は包帯でわからないけど」

「そうよ、アリス。二人とも違うわ。もしかして犯人がこの部屋に隠れてるの?」

「嘘だろ!?! まさか屋根裏とか……」

「そんなところには居ませんよ。ねえ、園子ちゃん……。腕を噛みついたって言うってたけど、顔も見えないくらい暗い中で絶対にそうだと言い切れる?」

あたしは園子に尋ねた。暗い中で腕だと確実に言いきれれるのかどうか。

顔も見えないくらい暗かったのに——。

「えっ……。いや……。腕だと思って噛みついたけど……。太さ的にも……。絶対って言われたら自信ないけど……」

「園子ちゃんが噛みついたのが、腕じゃないとしたら……。例えば、ふくらはぎ付近……」

「——っ!？」

あたしは園子が噛みついた場所は本当はふくらはぎだったと推理した。

腕はつるつるでも脛毛はボーボーって男の人はよくいるでしょう？

「腕が毛深くなくても、その辺は毛が生えてる男の人っていますよね？　そこで気になったわけですよ。変なことを言ってる人がいるなーって。園子ちゃんの浴衣姿が魅力的とか」

「むう〜、アリス！　私の浴衣が似合わなかったっていうの!？」

あたしが道脇が園子の浴衣姿が魅力的だと言うのは妙だと声に出すと、彼女はムツとした顔をする。

「違うわよ。あたしたちが浴衣を着たのは、昨日の夜に花火を見に行ったときだけなのよ。なのに、今日会ったばかりの道脇さんがそんなことを言うのはおかしい」

「そういえば……」

「変ですね……」

「そ、それは想像で……」

あたしたちが道脇に会ったのは今日の昼くらい。浴衣姿だったのは花火大会に行ったときのみ。

見てないのにわざわざ似合うというのは変なのだ。

「まだあるわ。あなたはカメラや写真にちよつと不自然なほど興味を示してた」

「ごめんごめん。面白い写真があると聞いて興味を持ってしまったんだ。別にいいだろう？」

そして、カメラに異様に食い付いてきたのも変だ。

心霊写真を撮りに行くという話から、さつき蘭がカメラを取りに海の家に向かった話まで……。この人はカメラのことを随分と気にしていた。あたしが探偵ということにも、どこか警戒していたし。

「うん。いいわよ。あたしが勝手に変だと思ってること言っただけだ

から、一番変なのはサンダルなのに、靴下履いてることだけどね」

「あつ！ そういえば、靴下履いてる。さつきは裸足だったのに……」

「玄関に行つて確認したけど、靴に履き替えたわけじゃなかった。靴下の下にはおそらく、園子ちゃんの歯型が付いてるはずよ」

サンダルなのにわざわざ靴下だけ履いてるのは不自然すぎる。

あんなことがあつた後ではなおさらだ。その理由は一つ。園子に噛まれた跡を隠すためだ。

「み、道脇さん……、何で……？」

「簡単よ。彼があたしたちを見たのは浴衣を着て花火大会から帰っている途中。で、あの写真を撮られたのが気になったんでしょ？ 決定的な瞬間が撮られたことをあなたはフラッシュの光で気付いてしまった。だから、証拠隠滅のためにカメラを探したり、写真撮影していた園子の口封じをしようとした」

「……ちつ！ ああ、そうだよ！ お前の言うとおりカメラを探していた！ お前らが楽しそうに語っていた殺しの現場の写真を警察に見せる前になあ！」

引つかかってくれた。あたしはカマをかけてみたんだけど、見事に自分で殺しを告白した。

あたしは一言も「殺人現場の写真」なんて言っていないんだけどな。

つまりこういうこと——。道脇は昨日の夜にあの林で女性を殺した事件の犯人で園子に写真を撮られたと思い込んでいる。

おそらく、殺しの最中に電車のパンタグラフか何かの反射をフラッシュだと思つてその方向を見ると、ちょうど花火大会から帰っているあたしたちを見たのだろう。

そのとき、たまたま園子がカメラを持っていたから、彼は写真を撮られたと勘違いして海で彼女をナンパした。証拠隠滅のために……。

あたしは彼のその勘違いを逆手に取つてカマをかけたのである。

さて、あとはさつき横溝警部に頼んで呼び出した刑警さんが部屋の外で待っているから来てもらつて……。

あれ？ 入って来ないわね……。

「殺しの現場写真？ えつ、てことは道脇さんがあの茶髪の女ばかり

狙っている。きやつ——!?!」

「言っただろ？ ヒドイ振られ方をしたって！ そこから無性にハラワタを抉りたくなるようになったんだ。お前らみたいなチャラチャラした茶髪の女を見るとな！ まさか見るからにバカそうなあの女に全部見透かさられるとは思わなかったが！」

刑事が入って来ないことを気にしていたら、園子がナイフを突きつけられて大ピンチになっていた。誰が見るからにバカそうな女よ……!

というより、なんつーヒドイ理由で人殺してんのよ……。

「殺人現場の写真なんて知らないわよ！ やっぱ、あの林にあった死体は……」

「そうだ。オレが殺したんだ！」

「やはりお前だったか！ 警察だ！ その子を解放しなさい！」

道脇が昨日の殺人も認めたタイミングで刑事が入ってきた。遅いわね……、園子が人質にされる前に来てほしかったわ。

スキを見て麻酔銃で眠らせるしかないか……。

「ちつ、サツも居たのか！ お前ら、動いたらこの女を殺す！ ナイフを腹に振り落としてなア……!?!」

「……なんで、なんで……、私に言い寄る男はいつも……」

園子は悲しんでいる。自分にせつかく好意を持ってくれる男性が現れたと思ったのに、こんな男だと知ればへこむのも無理はないわ……。

「ごめん……、園子……。あたしが余計なカマをかけたから、あなたを危険に——。」

そのときだ——あたしは衝撃の光景を目にすることになる——。

「……だから、言ってるでしょう。そんな格好で歩いてるから——」

「なんだ？ 動くなって……、——っ!? ぐふっ！ げはっ！ ぐふうっ！」

それは鮮やかな蹴り技だった。信じられないスピードでナイフが蹴り上げられたかと思うと、瞬く間に道脇の腹に膝裏に……あらゆる

場所に蹴りが突き刺さり、彼は園子を手放して気絶してしまった。

「嘘っ……、ナイフが振り下ろされるより早く動いて——一瞬で……!?! こんな蘭ちゃんでも出来るかどうか……」

蘭が犯人をボコボコにすると、どこを何回も見ることがあるあたしだけ、彼は明らかにそれ以上に強かった。

何者なの……、この人は——。

「まったく、危なっかしい人だ。私がたまたま側に居たから良かったものを」

「たまたま、じゃないでしょ。園子ちゃんのことずっと気にかけてたじゃないですか」

「さすがは探偵さん。よく見てますね……。あの男は前にも2、3人声をかけていたので、ちよつと心配していました」

この人は海の家からずっと園子を気にかけていた。

さつきまで……、ずうーつと。熱烈な視線を送っていたのだ。

「でも、どうして私を？」

「あなたは知らないでしょうけど、私はあなたを一度空手の試合会場で見ているんです。必死で友人を応援するあなたの姿をね」

「空手……、蘭ちゃんより強い……、色黒……、ま、まさか……」

あつ、あたしは馬鹿だ。この人が園子の彼氏になる京極真さんじゃん。

そりゃ強いはずだ。素手なら名探偵コナンで最強の人物じゃん。目の前で強さを確認するとちよつと引いちゃうくらい強かった。

「あ、それと、必要以上に男を挑発するその下着のような格好はできればやめるのをお勧めしたい……。もちろんあなたに好意を寄せる幾多の男のうちの一人の戯言として、聞き流していただいても構いませんが……」

「は、はい……」

京極さんのおかげで事件は解決。園子も最高で最強の男性を手に入れることが出来た。

彼は海外に武者修行に出かけたから遠距離恋愛になるんだってさ。まだ強くなりたいんだ……。

とにかく、園子にはいい夏の思い出が出来てめでたしめでたし——

「アリス！ 蘭！ 野球部の練習試合に行くわよ！ 相手校のエースがイケメンで有名らしいのよー！」

「ふえっ!?! 園子ちゃん、京極さんは？」

「あれは、あれ。これは、これよ……」

「もう、園子ったら」

京極さくん、もうちっと肉食系になった方がいいわよ。まあ、彼女のことだから浮気はしないと思うけど……。

このカップルもこれから楽しみね——。

謎めいた乗客

「いや〜、哀ちゃんと一緒に旅行をオツケーしてくれるとは思わなかったわ」

「あなたが毎日しつこいくらい誘うからよ」

「まあまあ、哀くんもたまにはリフレッシュした方が良いじゃろう。ゴホツ、ゴホツ」

博士が懸賞で当てたスキーツアーにあたしと哀は同行することになった。

哀は最初は留守番をすると言っただけで聞かなかったが、あたしが半ば強引に外に連れ出したのだ。

「もー、張り切つてスキーのハウツービデオなんてずっと見てるから。風邪引くのよ」

「若い君たちに負けたくなかったんじゃが……、ゴホツ、ゴホツ」

「自業自得よ。私も藤峰さんも止めたし」

「返す言葉がないのう」

夜ふかしして風邪を引いた阿笠博士……。家で休むことを勧めただけで、美味しい料理も食べれるからって薬を片手に出てきた。

悪化しないようにホテルではゆっくりしてほしい。

「でも、ホントに嬉しい。こうやって哀ちゃんと遠出するのが」

「……あなたは怖さを知らないから、そんな呑気なことが言えるのよ」

「まあ、そうかもね。——っ!? あ、あの人、黒ずくめの——」

哀は相変わらずあたしのことを呑気者扱いする。でも、警戒くらいしてるわよ。ほら、黒ずくめの男が来たわ……。気を付けなきゃ。

「違うわよ。匂いがしないもの。組織に染まった人間から発する独特の嫌な——、んっ……、何するの?」

「哀ちゃんいい匂いだなあって……、あたしは好きだな。哀ちゃんの匂い」

「……バカなんだから」

哀に抱きついてうなじの匂いを嗅ぐと、彼女はちよつと頬を桃色に染めてそっぽを向く。

最近、こうやってスキンシップを取っても嫌がられなくなったけど、少しは仲良くなれたのかな……。

「でもさ、ピスコのときはどうだったの？」

「何となくわかってたわよ」

「えっ？　じゃあ、教えてくれても良かったんじゃない？」

嘘でしょ、あのときあたしはピスコの正体を見破るのに必死だったのに……。知ってたなら、早く言って欲しかった。

「自信がなかったのよ……。もう一人居たような気がしたから……。ピスコよりも、もつと強烈で……。魔性のオーラを纏ったような——」

「あー、なるほど。もう一人仲間が居たんだ。だから、ピスコは紫のハンカチを持ってたのね。やっと疑問が解決したわ。ん？　哀ちゃん？」

そういうことか。あの会場に黒の組織の人間が他にも居たのね。だから、紫のハンカチを持っていたのか……。納得したわ……。

てことは、柘山を除いた6人の中に黒の組織の人間が居たってことね。

「——うっ……。また……。この感じは……。藤峰さん……。席が変わって。私を隠して……。お願い……」

「……。うん。大体わかった。組織の人間が近くに居るのね」

哀は杯戸シティホテルで巨匠を偲ぶ会に潜入したときみたいに怯えた表情をした。

組織の人間がこのバスに乗り込んで来たのね……。

「……………」
「黙ってていいわよ。あたしに任せて……。あの二人は……。なるほど」

哀は窓際の席に移ってフードを被って俯いている。

今さら思い出したわ。あの6人の中でクリス・ヴィンヤードって人が黒の組織の一員だった。確かコードネームは——ベルモット。

変装の名人である人に化けているんだっけ……。

「おや、藤峰さんじゃないですか」

「Oh！　アリスサ〜ン、偶然デスネ」

バスにジヨデイと新出先生が揃って乗車した。そうそう、新出先生にベルモットって化けたんだよね。

てことは、あたしの正体を知ってる？ あの人って有希子の友達っぽかった気がする……ならば彼女と似てるあたしの姿から新一を連想するかもしれない。

哀が前に言ってたネズミの性転換という実験結果を知ってたらなおさらだ……。取り敢えずあたしがとる行動は――。

「あはっ♪新出先生とジヨデイ先生じゃないですか！ デートですか？」

「ザツツライト！ 上野美術館でこれからデートシマス！」

「これは、連休明けのゴシツプは決まりですね♡新聞部にビッグカツプル成立と――」

いつもどおりの自分を精一杯演じる。女優の彼女を騙しきれるか分からないけど、あたしが気付いてるということに気付かせてはならない。

漫画の知識とか彼女は想像もしないだろうから警戒はされないだろうけど。

「勘弁してください。彼女とはたまたまバス停で出会っただけです」

「およ、新出先生が女性に恥をかかせるとは思いませんでした」

「アリスサンの言うとおりでス。私じゃダメなのデスカ？」

「いやー、参ったな。藤峰さん、噂をばら撒くようなことはしないと信じてますよ」

「にしし、どーしよっかなあ」

うんうん。いつものあたしなら、こんな感じだからかうよね。

自然体を演じるのって思ったより神経を使うわ……。

「アリスくん。知り合いかね？」

「うん。うちの学校の校医の新出先生と英語教師のジヨデイ先生だよ」

「ジヨデイ・サンテミリオンドース、よろしく」

「ゴホッ、ゴホッ……」

ジョーディが博士に挨拶をしたとき、咳をしている帽子を被ってマスクをした目つきの鋭い男がバスに乗ってきた。

「風邪流行ってるわね……、大丈夫……、安心して……」

「はあ、はあ……」

哀はベルモットの気配に完全に飲まれてるみたいね……。組織の人間を判別できるのは便利だけど、ここまで精神的に追い詰められるのは考えものね……。

「今からもうスキーウェア？　気が早い人もいるもんね……。いや……。ゴーグルまで付けてるのは……」

「騒ぐなア！　騒ぐと命はないぞツツ！」

「——っ!？」

スキーウェアにゴーグルを着た男が2人入ってきたことを不審に思った刹那、彼らは銃を片手にバスジャックをしようと動き出した。

なんてことを……。ベルモットとかFBIとか色々いる中でこんなこと……。ああ、外出すると面倒が起きるコナンの体質が恨めしい。

「きやあああッ！」

「あの銃弾……。本物の銃ってことね……」

撃ち出された弾丸はバスに穴を空ける。本物の拳銃だ。

下手に動けば死人が出るわね。コナンとは違ってあたしは大人だから軽率な行動は子供の悪ふざけでは済まない。

落ち着いて、慎重ならなきゃ……。今、あたしがすべきことを考えるのよ……。

「とりあえず、扉をしめて、行き先を回送中にして適当に都内を走らせろ！」

「は、はい」

「さてと、携帯電話を預からせて貰おうか。隠すなよ。隠せば一生電話をかけられないようにしてやるぜ」

バスジャックの男たちは拳銃を突きつけ、運転手にバスを走らせ、あたしたちの携帯電話を回収しようとした。

参ったわね。外部との通信手段が断たれるのは痛いわ……。
一人ひとり銃で脅されながら携帯を男に差し出す。さて、あたしの
番が回ってきたか……。

「け、携帯ですかあ？ えっと、どこにやったっけ？ ううっ……、す
ぐに出しますのでえ」

「早くしろー」

あたしは涙目になりながら、テンパったふりをして携帯が見つから
ない演技をした。

伊達に普段からぶりっ子を演じてはいない。これくらいは慣れた
ものである。ここはなるべく無害な人間を演じることが肝心だ。

「ごめんなさあい。ぐすっ……、ぐすっ……、ここにも無いし……、あ
あ、ありましたあ。これが1つ目の携帯でぐすす」

「まだ、あるのかー」

あたしは時間をたっぷりかけて1つ目の学校用の携帯電話を差し
出した。

実はあたしは携帯を2台持ちしてて、もう一台、探偵の仕事用で
使っている携帯を持っている。

この携帯には目暮警部や高木刑事に佐藤刑事など警視庁の刑事た
ちの番号から横溝警部など地方の刑事の番号まで入っている重要な
アイテムだ。

「あ、はい。い、急がれてるなら、他の方のを先に回収されます？ 探
してますから……」

「ちっー」

あたしは一生懸命にトロい感じの女を演じてバスジャックの男を
先に行かせた。

よし、彼は後ろを向いているし、もう一人の男は運転手に銃を向け
ていて座席で隠せば携帯は見えない……。。

「……やっ」

「おい！ お前！ 何をしてやがる！」

隠れて目暮警部に電話を発信させたとき、大声を上げた男に後ろか

ら肩を掴まれた。

あれま、さつそく下手打ってんじゃん……あたし。でも、落ち着かなきゃね……。

「ひいつ!? す、すいませえん。彼氏から着信があったので、ついついものクセで……。ほら、あたしの彼氏の十三クンから……。いやーん、あ、あたししたら間違って発信押しちゃってたく。——ご、ごめんなさい、ごめんなさい。バスジャックされるなんてえ、初めての経験なんです……」

あたしは死ぬほどビビりながら泣くふりをして、彼にあえて発信中の電話を見せた。

目暮警部は十三くんで登録してるので、パツと見では警察に電話してるようには見えないし、警察に電話してる人がバスジャック犯にわざわざそれを見せるとは思われないうらう。

そして、自分も大声を上げること目暮警部の声をかき消し、バスジャックに遭っている状況だけ一方的に伝えて電話を切る。

「うるさい！ さつさと、それを寄越しやがれ！ つたく、バカ女が！」

「ふえーん、バカって言われたく、ぐすんっ……」

あたしは泣きながら2つ目の携帯を手渡して、演技を続ける。

とにかく警戒されないように徹底しなきゃ。牙を見せるときは連中を仕留めるときだ。

「くそっ！ 余計な時間を——。——っ!? がっ……!」

「先生……?」

「この女！」

そんなことを考えてると、ジョディが携帯を回収し終わった男を足で引っかけて転ばした。

うわー、大胆なことをするわね……。

「Oh! ソーリー、オーマイゴッド、What have I done, t……」

「もういい！ 変な女ばかり乗り込みやがって！」

あたしたちはあ然としていたが、ジョディはまくし立てるように英

語で謝罪をして、手を握るふりをしながら、相手の拳銃の安全装置をかける。

さすがはFBIね。銃に対しての対応が上手い。

「It's ^ワvery ^ワvery ^シexciting^タね」

「くすつ、Me^ワtoo^タ……」

とりあえず、ジョディは頼もしい仲間だ。彼女と連携しながらこの事態を何とかしたい――。

「たった今、あんたのところのバスを占拠した。要求はただ一つ。現在服役中の矢島邦男の釈放だ。出来なければ、一時間毎に乗客の命が一人ずつ亡くなると警察に伝えろ！ 20分後また連絡する。それまでに準備を済ませておけ！」

ここにきて、ようやくバスジャック犯の目的が明らかになる。

矢島邦男――先月、爆弾を作って宝石店を襲った強盗グループの一人……。ということは、この人たちもその強盗グループの……。

確か、強盗グループは4人組で捕まったのが矢島だけだったのよね……。彼は元宝石ブローカーと聞いたわ。

――なるほど、奪った宝石が捌けないからボスを奪還しようってことか……。

矢島の仲間は3人居るのにバスジャック犯は2人しかない。そして、あたしが2つ目の携帯で電話しようとしたとき――2人の死角を突いたのに、すぐさまその行為がバレってしまった。

てことは、おそらくもう一人仲間がいるってことね。

あたしの後ろの座席のうちの誰かが宝石強盗犯のはず。まずはそれが誰なのか特定しないと動きが取れないわ……。

それから、20分は直ぐに過ぎて、バスジャック犯は再び連絡を入れた。

「へっへっへ……、そうか……解放する気になったか……。1時間後に矢島に連絡させろ。奴が安全な場所に逃げられたことを確認したら……まずは人質を3人解放する。いいか、くれぐれも下手な真似す

るんじやねーぞ」

「どうやら、矢島は解放されたらしい。とすると、彼らがやることと言えれば逃げることだけど……。」

「スキー袋を2つ——バスの通路に並べて置いたわね……。あの中身はまさか……。」

「あたしは見られていることを想定しながら、バスジャック犯が後ろ向きになっているところを見計らってスキーバッグを覗き見た。」

「おい！ 何をしている!?!」

「……き、緊張を紛らわそうとガムを噛もうとしたら、落としちゃって……、ぐすん……、ご、ごめんなさい」

「すぐさま、バスジャック犯はあたしに近づいて拳銃を向けながら怒鳴ってきた。」

「あたしはワザと落としたガムを拾おうとしていると主張しながら謝る。」

「てめー、大人しくしてねーんだったら、永遠に眠らせてやってもいいんだぜ！」

「ふえっ!?! そ、そんなあ。あ、あたし……、まだ死にたくない……。」

「やめてください！ 彼女は謝ってるじゃないですか！ それにあなたちの要求は飲まれた。殺しなんてしたら、計画に支障が出るのではないですか!?!」

「苛ついているバスジャック犯が銃を持つ手に力を入れると、新出生が身を呈して守ってくれた。」

「なんで、あたしをこの人が庇ってくれるんだろう……。」

「なんだと、この青二才！ お前から死ぬか！」

「バカ！ 下手なことをして、あれに当たってみろ！ とつと戻つてこい！」

「……そ、そうだな」

「……ふう。やばかったわ……。やっぱり目立った動きをするのは控えないきやね……。」

「スキーバッグに銃弾が当たるとまずいということとは、やっぱり中身

は爆弾っぽいわね。

となると、いよいよ選択肢を間違うと大惨事が起こるわ……。

「はあ、はあ……、うう……」

「哀ちゃん……」

「無茶はダメネ、アリスさん。グッドチャンスはすぐにキマッス。Oh? 怖がらなくてもダイジョーブ。赤ずきんちゃん、お名前は……?」

ジョディに無茶しすぎだと怒られた。確かにちよつと攻め過ぎたかもしれない。

赤いフードを被ってる哀を赤ずきんちゃんと気にかける彼女だが、哀はあたしの手をギュツと握りしめ何も言わないようにと無言で訴える。

「——そんなことより、前を向いた方がいいかもしれませんよ。先生」

「おい! 何をやっている!」

「ジョディ先生……、あまり彼らを刺激しない方が……」

「イ エー ス。 わ か り マ シ タ。
Let's talk about it later」

あたしと新出先生がジョディに前を向くように促すとそれ以上なにも聞かれなかった。

とにかく、哀は新出先生に扮するベルモットを警戒して身動きが取れない。でも彼女は得体の知れない奴だから、知らんぷりするしかない。

それよりもバスジャック犯のもう一人の仲間の特定ね……。

後ろの座席に居る三人の乗客で一番怪しいのは音を出しているマスクの男だけ——咳なら博士もしてるし、音もほとんど同じ。あたしがバスジャック犯なら、判別しやすいように博士を移動させるなりするわ。

音ならガム噛んでるあの女も出してるけど、咳の音のほう大きい。あとはあの黒ずくめの男の補聴器がワイヤレスの通信機ということも考えられるけど……、バスジャック犯は2人ともイヤホン付けてないし、声なんてブツブツ出してたら両隣の二人が怪しむはずよね

……。とにかく最後尾に座っているあの三人のうちの誰かがバスジャック犯の仲間に違いないわね……。

「おい！ ジジイ！ 何をしてやがる！」

「せ、咳止めの薬を……」

また察知した。阿笠博士が薬を飲もうとするとすぐに彼らは気付いてやって来た。

やはり何かしらの信号を飛ばしているのね……。一体どうやって……。

「じゃあ、3日後……いつもの場所で落ち合いましようや」

奴らのボスである矢島が解放されたみたい。目的を達成した奴らが次にすることは警察がマークしているこのバスから逃亡することだ。

バスだつてガソリンが有限なんだからいつまでも走らない。

給油なんて悠長なマネはしたくないだろうし……。どうするつもりなのかしら……。爆弾を置いていることも気になるわ。

「よし、運転手。首都高に乗って中央道に入れ」

高速に入る……。ますます袋のネズミになるような気が……。

んっ……。あれって……。あたしは窓の外を飛んでいる風船を見てあることに気付いた。

「おい！ その青二才！ そして、後ろのマスクの男！ こっちに来い！」

「——っ!？」

「何をしている？ 早くしろ！ 殺されてえのか!？」

高速に乗ると連中は新出先生と最後尾に座ってたマスク男を呼びつけた。

なるほど……。そういうことか……。だからこいつら……。

ともすると、思った以上にヤバい状態ね。あいつらの計画が成功す

れば、あたしらは全員死ぬ……。

さて、どうやってこの状況を打破するか……。あたし一人じゃ無理だわ。手助けしてもらえない——。となると、頼りはジョーディと博士ね。

あたしはチャーカーのダイヤルを捻って、博士の眼鏡に内蔵している通信機と交信する。

「博士……、博士……、聞こえる……？ 聞こえたら黙って頷いて……。これから話すことをよくよく聞いてね——」

博士は通信機からあたしの声を聞き頷いてくれたので、これから行う作戦について話した。

失敗は許されない。あたしはこれから勝負を仕掛ける。

「あとは……ジョーディ先生に……」

さらにあたしは座席の下から彼女に作戦内容を書いたメモを渡した。

読み通りならトンネルで連中は行動を起こすはず——。

「お前ら、このスキーウェアに着替えて座れ。おっと、ゴーグルも忘れるなよ」

「少しの間、オレたちの身代わりになって時間を稼いでもらうぜ。解放された客に紛れて逃げるオレたちのための時間をな。心配しなくてもお前らの無実は他の乗客が教えてくれるさ」

トンネルに入ってバスジャック犯は二人にスキーウェアとゴーグルを身につけるように命令した。

そう、彼らの作戦は解放した人質に扮してここから逃げる事。新出先生とマスク男を身代わりにして……。

大胆な作戦だが、これはまだ連中の作戦の半分だ。

「運転手、お前がオレたちの指示どおり動くために人質を1人取らせてもらうぜ。——さて、誰にするか……。一番後ろのガムの女！ 前に来な。お前を人質にする！」

「は、はい……！」

ガムを噛んでいた女が人質として選ばれて彼の元に行こうとする。

彼女は怯えながらも、バスジャック犯たちの方に向かっていく。
下手ね——怯える演技が……。見てられないわ……。

「……さて、と。あんたらの思い通りにはさせないわよ」

「——っ!？」

あたしはガムの女に麻酔銃を撃つ。彼女は一瞬で眠りにつき倒れそうになるので、あたしは彼女を抱き止めた。

そう、この女がバスジャック犯の仲間だ。彼女は不審な行動を発見すると風船ガムを割って知らせ、ガムを取る手の左右と指の数で座席の位置を仲間に教えていたのだ。

バスジャック犯は、この女を人質にしたフリをしてバスを降りたら、起爆装置を使ってバスを爆破して全員の口封じをする計画を立てている。

そうなれば、警察は何かしらのアクシデントで爆弾が誤って爆発したと判断し彼らは逃げ果せるだろう。

「だ、大丈夫ですか？」

あたしは女を介抱するフリをしながら声をかける。バスジャックの男たちは突然彼女が倒れたので困惑しているみたいだ。

「ど、どうした!? おいつ! 何があった!」

「わかりませ〜くん! 急にこの人、倒れちゃって……、ぐすつ……、あたしで良ければ代わりに人質になりますからあ……、この人は助けてあげてくださいあい」

「ええいつ! お前なんかどうでも良いんだよ!」

あたしが泣き真似をしつつ、バスジャック犯をこちらに誘導する。

そりゃ、あたしなんか人質にしても仕方ないわよね。こちらに向かってきたのは、ジョディが銃の安全装置をかけた方のバスジャック犯だ。

「今よっ!」

「がっ——! 何しやがる!？」

バスジャック犯がジョディの横を過ぎ去ろうとしたとき、足払いをされてすっ転んだ。

「テメー、覚悟は出来てるんだろうな! なっ——!?! た、銃弾が——

「バカね……。トカレフは撃鉄を軽く起こして中間で止めると安全装置がかかるのよ？ これくらいジャックする前に勉強しておきなさい……」

「なんだとツ……!?!」

すかさず起き上がって彼女を撃とうとする彼だけど、拳銃から弾丸は当然出てこない。

彼は動揺してフリーズしてしまう。トンネルで車内が暗いのもう一人の仲間も状況が飲み込めてないみたいだ。

「ジョディ先生、カッコいい♡」

「ぐはっ……」

バスジャック犯の男はジョディの強力な膝蹴りで昏倒した。

さあ、このバスを解放できるまでもう少しよ……!」

「あと一人ね♪」

「It's like a spy movie!」

「こいつら! ぶっ殺してやる! なっ、あのジジイと女……! 爆弾を盾に——」

最後のバスジャック犯は怒りに声を荒げたが、銃を簡単に使えないことに気付いた。

あたしと博士がそれぞれ彼らがスキーバッグに入れた爆弾を盾にして立っているからだ。

トンネルの中で視界が悪いのに拳銃なんて正確に撃ち込めるはずがない。間違つて爆弾を爆発させれば自分も死ぬのだから。

つまりこのトンネルを抜け出すまでが勝負——。

「急停車! 運転手さん、早く!」

あたしが拳銃がこちらを向いたのを確認して運転手に急停車を指示する。

運転手はトンネルの出口寸前でブレーキを踏み、バスを止めた。バスはトンネルから出たところで車体が止まる。

「うわっ——!」

「よしっ!」

バスの急停車の勢いによって、男は立つてられなくなり倒れてしまった。

あたしも博士も爆弾を必死に倒さないように踏ん張り、何とか耐える。さて、とりあえず爆弾は床に置いて——あの男を……。

「くそっ！ この女ツ！」

「仕方ないキック力増強シューズで……、——っ!？」

出来ればベルモットが見てる中で切り札は使いたくなかったが、思ったよりも男が体勢を立て直すのが早かったのであたしはそれを使うことを覚悟した。

そのとき——。

「ぐはっ………」

「何、あの手刀……!？」

マスクの男が恐ろしい速度の手刀をバスジャック犯の首に見舞う。あたしじやなきや見逃すほどではないけれど、あの動きは只者じゃない。まさかあの人って……、ええーつと超重要人物の……。

「よしっ！ これで事件は解決♪ ねえ、哀ちゃん………」

「——はあ、はあ………、ううっ………」

あたしは哀にバスジャック事件が解決したと声をかけたが、彼女は明らかに精彩を欠いている。

そうよね……。解決したということは彼女と——。

「きやあああつ！ 今の衝撃で！ 爆弾の起爆装置を押しちゃったわ！ 早く逃げないと！ 爆発するくく!!」

「——っ!？」

そんな中で起爆装置が起動したという声がバスの中に響き渡り、あたしたちは急いでバスから脱出した——。

「こちら、佐藤……。トンネルの出口でバスは急停車した模様……。

——っ!？ アリスちゃん！ 目暮警部が言ってたとおりバスに乗ってたのね！ これは、一体どうしたの!？」

バスの近くで車を止めて様子を窺っている佐藤刑事があたしに声

をかける。

よかった。周りに警察の人が集まってくれてるみたいね。

「爆弾の起爆装置が作動したみたいですよ！ 周辺に人を近付けないでください！ あ、あとバスジャック犯、三人の検挙をお願いしますー！」
「わ、わかったわー！」

あたしは口早にバスジャック犯の検挙とこの場から離れることを佐藤刑事にお願いする。

犯人は警察に捕まり、乗客たちや周りの車両はここから離れていった。じゃあ、あたしはこれから――。

「^{あぐい}哀ちゃん♪やっぱり逃げ出さなかったのね」

「藤峰さん……！ 何で来たのよ？」

哀は逃げずにバスの座席に座っていた。そして、戻ってきたあたしに驚いた表情をしている。

「よっこいしょ……、そりや哀ちゃんとお話するためよ」

あたしは彼女の隣に座って彼女の手を握りしめた。哀の手は血の気が引いているのかとても冷たい。

「何くつろいでるのよ！ 早く逃げなさい。私だけ死ぬのが最善策よ。この場は助かってても、事情聴取の時に否が応でもあの人と鉢合わせになる。このまま私が消えたら、彼らから見た組織とあなたや博士の接点は消滅するから……」

「……………」

「ホントはわかってたの……。組織を抜けた時から、私の居場所なんてどこにもないことは……。わかってたのに。バカなのよ、私……。あなたと出会って……。今の生活が好きになってしまった……。でも、もう終わらせないと――。――っ!? 何、してんの？」

哀はそれなりにあたしとの生活を気に入ってくれてたみたい。それだけであたしは嬉しくて、彼女をゆっくりと抱きしめる。

「もーう。まだそんなこと言ってる。哀ちゃん、そろそろ諦めなさいよ」

「だから、諦めてるでしょ。生きることを……」

「じゃなくて、死ぬことよ。あたしはあなたと運命を共にするし、博士も覚悟は出来てるわ。繋がりつてあなたが思ってるほど簡単には切れないの」

彼女がどんなに逃げたくても、切りたくても、そんなことをあたしはさせない。

あたしの中で彼女の命はそんなに安くない。理屈じゃなくて感情で動いているけれど、それが間違った選択ならあたしは喜んで間違える。

「だからって、こんな心中するようなマネしないでもいいでしょ？」

このままだと、このバスは爆発して2人とも死んじゃうのよー」

「死なないよ？ 起爆装置の時計はあたしが彼女から奪ってるし。そのあとで、あたしがこうやってあの女の声で『爆発する』って……、言っただもん」

哀が心中という言葉を持ち出すものだから、あたしはポケットからガムの女が持っていた起爆装置の時計を取り出して、チョコレートの変声器を使って爆発の話をしたことを打ち明けた。

そう、起爆装置なんてそもそも作動していない。

彼女があたしの横を過ぎるとき1時という表記の腕時計をしていてピンときたのだ。これは起爆装置だと……。おそらく起動すると1分で爆発する仕掛けなのだろう。

「はあ~~~~？ な、な、何のためにそんなことを!? あなたのことがバカだと思っただけど、こんなにバカだなんて」

なぜこんなことをしたのかと、今までにないくらい呆れたような声を出す哀。

いや、なんでって言われても――。

「だって、こうでもしないと腹割って話せないでしょう？ もう死にたいなんて言わないでよ……。あたしは哀ちゃんのこと家族だっと思ってんだかんね！ 哀ちゃんの居場所ならあたしがなるからさ……」

バスジャック事件の事情聴取が行われる前に人払いをして、彼女と

キチンと話したかった。

哀に自分さえ死んだらとか考えて欲しくなかった。

彼女にはあたしと一緒に前を向いて欲しい。孤独なんて感じて欲しくない……。

「……………はあ、よく考えたら私が死んだら、あなたみたいな甘い人——直ぐに組織に殺されそうよね……」

「哀ちゃん……う？」

哀は諦めたような口調であたしが簡単に殺されそうだと口にする。

まあ、確かに黒の組織の非情さは怖いけど……。

「起爆装置を持っていても何がきつかけで爆発するかわからないから……、早く出るわよ。アリス……」

「うん♪ じゃあ、ちよつとズルいことするわよ」

「ちよつと？ 何を？」

このバスから出ようと声をかけた哀をあたしは抱き上げて、車外へと足を進める。

じゃあ、奥の手を使うとしますか……。

「アリスちゃん、無事で良かった。バスはまだ爆発して……ないみたいだね」

「高木さくくん。お願いなんですけどお……聞いてくれますう？」

あたしは現場付近に来ていた高木刑事の姿を発見すると、哀を抱えたまま彼の近くに駆け寄った。

そして、甘えるような声で彼に声をかける。

「えっ？ な、なんだい？」

「この子なんですけど、熱と吐き気があるみたいで……病院に連れて行って欲しいんです……。事情聴取は隣に座ってたあたしで十分ですし」

「返事を聞く前に車に乗せるんだね……」

あたしは高木刑事が乗っていた覆面パトカーに哀を乗せながら、病院に連れて行って欲しいと頼み込んだ。

事情聴取でベルモットと鉢合わせるのが怖いならそれをさせなきやいい。あたしならそれが出来る。

「今度、佐藤刑事が最近ハマってるケーキ屋さんのケーキ教えますよ……」

「……ま、まあ、わからないことがあったら後日聞けばいいし。アリスちゃんが隣に座ってたなら証言も問題なさそうだ。わかったよ」

高木刑事の弱点は知ってる。佐藤刑事の情報をチラつかせながらあたしは彼に哀のことを託した。

「ありがと♡高木さん！ 大好き！」

「ははっ……、佐藤さん見てないよね……？ じゃ、じゃあ急いで病院に行ってくる！」

彼に飛びついてお礼を言うと、高木刑事は佐藤刑事の視線を気にしていた。

この人たちの恋愛事情もかなり面白いのよね〜。

「……哀ちゃん。今度こそは楽しいお出かけをしましょう」

あたしは高木刑事と哀を見送って、ひと息ついた。

ようやく事件が解決したという達成感に浸りながら――。

「ミスティアスガール……、本当に不思議デス。――なぜ、英語の先生の私にあんな指示を出しマシタ？」

哀を見送ったあたしにジョディはストレートに自分の疑問を伝えてきた。

あたしが手放しに彼女の能力を信じたことが不思議なのだろう。彼女は彼女なりにそれをカモフラージュしてるのだから。

「えっ？ ええーっ と、そう で す ねえ。

I, 残念だ sorry, I 教え can't 伝え tell あなた you ……
A 女は秘密を着飾って美しくなるんだから secret make a woman woman ……」

「――っ!？」
新一の母、有希子が好きな英語のセリフをカツコつけて言ってみる。

すると、ジョディは目を見開いてあたしを見た。あれま、なんか

滑ったみたいなの雰囲気になってるわね……。

「冗談ですよ♪もつと仲良くなったら教えてあげます。先生^{せんせい}♡」

「……Oh! アリスサンはお人が悪いデス」

あたしは彼女にハグをして冗談だと告げると、ジョディは困ったような顔をして微笑む。

「うふふ……」

「藤峰さん、大丈夫ですか？ 無茶すぎですよ。探偵とはいえ、まだ高校生なんですから」

「あはっ、新出先生、あるとき庇ってくれてありがとうございます。探偵とて、まだやっぱ、恋人にするには先生みたいな人がいいかも♡」

新出先生はベルモット……のはずだけど、さすがの演技力なのか完璧に彼にしか見えない。

「だけど、そのおかげであたしも彼として接することが容易にできる。」

「大人をからかわないで下さい。でも、怪我はなさそうで良かったです」

「……うん、ホントに良く無事だったなあ、あたし。さ、早く行きましょ、事情聴取は多分長くなりそうですよ♪」

「わっ! 藤峰さん」

「アリスサン!」

あたしは笑いながら二人の手を掴んで走る。

何が本当で何が嘘なのか……騙し合う戦いなのかもしれないけど、自分の中で絶対だと思いうことを信じていこう。

「哀ちゃん、大丈夫だよ。あたしは誰にも負けるつもりはないからね。」

シカゴから来た男

「あー、楽しかったわー。やっと哀ちゃんと二人つきりでデート出来たね〜」

「はしやぎ過ぎ……、その辺の子供よりも興奮してたじゃない」

あたしと哀は二人でポール&アニーのアニマルショーという、動物たちがサーカスのようなことをする興行を見に行った。

哀に初デートだねって、言ったらちよつと照れてたのが可愛い。ショー自体はとても面白くて何度も歓声を上げてしまった。

「あはは、でもあのホワイトライオンのレオンくんの芸達者ぶりは誰だって感動するでしょ」

「よく羨けられてたとは思うけど……。……なによ」

「とか言って、レオンの記念ストラップをちやんと買ってる哀ちゃんが可愛いなあって」

そっけない顔をしながら、きちんと人気者のレオンくんのストラップを一緒に買ってくれた哀。

あたしがそんな彼女の顔を眺めていると、彼女は目をそらす。

「べ、別にいいでしょ。あなたが思い出に……。とか言うから……」

でも、哀もあたしと出かけたことは楽しいと感じてくれたのか、思い出は大事にしようとしてくれてるらしい。

「あら、あの人だから……」

「ランディ・ホーク……。このショーのスポンサーね。石油を掘り当てたお金で世界中の動物を集めて、その趣味が子どもたちに伝染しているしか世界を股にかけて動物ショーをするようになったって」

あたしたちの目の前で記者たちが外国人を取り囲んでいた。

その外国人を哀はあたしにさつき見たショーのスポンサーであるランディ・ホークだと説明する。あー、この前テレビで見たような……。

「へえ、詳しいじゃない。やっぱり今日のこと楽しみに——」

「勝手な想像しないで、ほらパンフレットに書いてあるでしょ。ボデイガードをつけないのは代々カウボーイの家系だから自分の身は

自分で守るんだって。だからマスコミに簡単に囲まれるのよ」
「ふーん。でも、そんなタフガイそうな感じじゃないね。明らかに困った顔してるもん」

ランディ・ホークはカウボーイの片鱗も見えないような困り顔だった。

ちよつと記者に囲まれたくらいで動揺しすぎじゃない？ あれなら小五郎の方がハートは強そうだ。

「ワタシ、ホークサンではアリマセーン」

「またまた、ジョークがお好きなんですから！」

「今回、3年ぶりの来日ですが日本の感想はいかがですか？」

「日本のフアンに何か一言！」

「ホークさん！」

「教えてくださいよ」

「ホークさん、頼みますよ！」

彼は自分のことをホークではないと主張するが、記者たちはそれ信じない。

それどころか、彼を質問攻めにしてた。

「I can't answer your questions
一度に答えられませぬ
at the same time！」

「自業自得ね。こっちはボディガードを付けたくてもつけられないのに」

記者たちに耐えかねた彼が英語で抗議するも、質問攻めは終わりそうもない。

哀は自業自得と言うけれど――。

「まあまあ、困ってるんだから助けてあげましょ。勘違いで質問攻めは可哀相だし」

「勘違い？」

「ちよつと失礼。先生の依頼人に何か用事ですか？」

あたしは記者たちをかき分けて彼の元に行つて、彼を小五郎の依頼人ということにした。

記者たちは一瞬だけ静まり返る。

「依頼人？」

「先生？」

「なんだ？ 君は？」

「私は毛利探偵事務所の助手を務めております。藤峰愛梨寿です。彼はトーマスさんという方で、毛利先生の依頼人でここで待ち合わせをしていたのですよ」

あたしは名刺を記者たちに配りながら、彼の名前を適当に述べてここで待ち合わせをしていたことにする。

それなりに顔は売れてきたから報道関係者なら誰かしらあたしのことを知ってるだろう。

「も、毛利探偵の助手？ 藤峰って、確か……」

「あの女子高生探偵だ——！」

「ズバリの小五郎の懐刀で本人も数々の事件を解決してるっていう——！」

「この前、バスジャック事件を解決してたよな！ 顔小さい……生で見るとこんなに可愛いんだ」

「取材したことあるから、本人で間違いない」

「ごめんなさい。記者さんたち。今日は仕事なので、また何かありましたら毛利探偵事務所の宣伝お願いしますね♡ さ、行きましょ、トーマスさん」

あー、良かった。誰それ……？ みたいなこと言われないで。

おかげでこの人を記者たちの元から解放出来たわ……。

「サンキューベリーマッチ！ ホークサンとニテルとは言われたことはよくアリマスが、こんなにマチガワレタのはハジメテネ」

「いえいえ、ショーを見に来ただけであんな目に遭うのは可哀相でしたから。お好きなんですか？ ポールとアニーのアニマルショー」

「オウ、イエス！ 彼らのショー最高デス。それにこれがドウシテモ欲しくてネ。ニッポンに来たのデス」

ホークと間違われた男はポール&アニーのアニマルショーの大ファンらしく、このために日本に来たとレオンのストラップを見せて

きた。

へえ、熱心なファンもいるんだなく。あのショーって……。

「あつー！ そのストラップ、あたしたちも買いました」

「でも、それって世界中で大人気って聞いたけど。わざわざ日本に来るほどのものかしら」

「ノーノー、ストラップの裏を見てくだサーイ。インジャパンって書いてあるデシヨ？ それ買えるのニッポンだけデース」

哀がストラップは世界中で買えると指摘すると、彼はコレクターなのか日本のバージョンが欲しかったと主張する。

こりや、筋金入りのファンだわね……。

「そういえば、なんでこの人がランディ・ホークじゃないって分かったの？」

「ああ、それはこの方が “can't” を “cant” って発音してたからよ。あれはクイーンズイングリッシュ。つまり英国訛りってことね。代々カウボーイの家系でバリバリの南部訛りのランディ・ホークがこんな喋り方をするのは変だもん。あと、写真と顔が違うし。似てるっちゃ似てるけど」

要するに出身地が明らかに違うってことと写真の顔との差異から別人と判断しただけのことだ。

これくらい素晴の観察が出来なくて探偵は務まらない。

「How perceptively you! 私の名前はジェームズ・ブラック！ お嬢サンは有名な探偵と聞きマシタがもう一度、お名前を聞かせてくだサーイ」

「藤峰愛梨寿です。こちらで探偵事務所の助手をしていますから、御用があれば是非よろしくお願いします」

へえ、ジェームズ・ブラックっていうんだ。この人……。

これは間違いない。覚えてるわよ、この人の名前は……。ジョーディや、この前のバスジャックのときに出会った赤井秀一の上司だ。

つまり、この人はFBIってことね……。

「アリスさんデスネ。実はフレンドとあそこで待ち合わせしてたのデスガ……長髪の男を見まセンデシタ？」

「いいえ、見ませんでした……。哀ちゃん、見た？」

「あんなにたくさん観客が居たのよ。把握しきれないわ」

へえ、長髪の男か……。誰のことだろう？ 赤井秀一は短髪だったし……。ダメだ……。覚えがない……。

「そうデスカ。では、フレンドとのランチは諦めるとして、どうですか？ お嬢サン方、ワタシの知っているとっておきのお店のとつてもオイシイランチでも」

「あら、まさかこんなに歳上のオジサマにナンパされるとは思いませんでした。哀ちゃん、暇だし構わないわよね？」

「好きにしたら。あなたも物好きね」

ジェイムズがあたしをランチに誘ってくれたので、それに乗ることにする。

これから黒の組織と戦うにあたって、彼らの力はどうしても必要になるだろうし、彼の人となりを知っておくのは悪くないだろう。彼はカタコトおじさんを演じてるけど……。

「では、レンタルしたワゴンを取ってキマスので待っていてください。運転、ガンバリマス。右ハンドルとつてもムズカシイ」

「へえ、ジェイムズさんって今はイギリスに住んでないんですね。右ハンドルに慣れてないってことは……」

「イエース。生まれはホームズのいたロンドン……。育ちはシカゴ

……
The windy city where capone starred

ジェイムズの個人情報なんてみーんな忘れてる。よく考えたらFBIなんだからアメリカに在住してるに決まってるか……。

「ねえ、あの人……。何か感じない？」

「んー、悪い人には見えないかな？」

「ふーん、だったら良いけど」

警戒心の強い哀はジェイムズが怪しいと思ってるみたいだ。

そりやそうよね。あたしだって、ジョディも赤井秀一もジェイムズもみんな悪い人だと思ってたもん。

そして、あたしたちは思いつきり待たされた――。

「遅い……、もう40分も経ってるわ」

「あの口ぶりだと近くの駐車場って感じだもんね。哀ちゃん。ここで待っててくれる？ ちょっと見てくるわ」

あたしはあまりにも待たされたので、付近のコインパーキングを探してみることにした。

なーんか、事件の予感しかしないのよね……。

「で、この駐車場に止まってるワゴンがジエイムズさんの借りてたレンタカーってこと？」

「まず間違いないと思うわ。〴〵ナンバーのワゴンでレオンのぬいぐるみまで乗ってたし。何より鍵が挿しっぱなしで空いてたのよ。ドアが……」

「あなたじゃなくても事件を疑う状況ね」

はい。やっぱり事件っぽい状況になってました。

レンタカーの鍵挿しっぱなしってどう考えてもそういうことでしょう。何が起こったって言うのよ……。

「でしょ？ 一番考えられるのはホークさんに間違われての誘拐とか……かしら」

「お姉さ〜くん、その車の人と知り合い？」

「ええ、お友達よ。外国人の方なんですけど、もしかして心当たりってる？」

「うん。コートを着た男の人が二人、その人を連れてあっちに行っちゃったのを見たよ」

「あっちに……？ ありがとう！ ボウヤたち！」

駐車場の近くで遊んでいた男の子たちがジエイムズがコートを着た男と共に路地を歩いて行ったとあたしたちに教えてくれた。

やはり、予想通り誘拐か……。ならば犯人たちの目的はおそらく――。

「これは……」

「レオンのストラップ……。彼がここでストラップを落として他の車に乗った可能性がありそうね。やっぱり事件？」

「うん。見て、このストラップ……」

路地の先の歩道にレオンストラップが落ちていたので、あたしはそれを拾う。目の前は大きい道路……。車に乗せられた可能性が高い。

“W with Paul & Annie”と書かれたレオンストラップは——“P”と“&”と“A”の部分が赤く血できれいに塗り潰されていた。

なんだろう……。？ 何かの暗号と考えるのが自然だけど……。

「おそらくあたしたちが探しに来ることを予測してジエイムズさんがメッセージを残したのよ」

「意味分かる？」

「ううん、まだわからないけど……。とりあえず警察には連絡入れようかしら」

暗号の意味は分からないけど、あまり悠長に構えている時間はなさそうだ。

警察といっても細かい説明が面倒だから、やっぱり知り合いに連絡するのが早そうね……。

『アリスちゃん、どうしたの？ まさか、また事件かい？』

「あー、良かったです。高木刑事に繋がって……。目暮警部には繋がらなかったのです。ちよつと、知り合った外国人が誘拐されてしまったみたいでして」

目暮警部が出なかつたので高木刑事の携帯に電話して彼に事情を話す。

コナンだったら小五郎の名前を出さないと相手にされないこともあるけど、あたしなら真面目に話は聞いてもらえる。

『誘拐？ それは大変だ。詳しく状況を教えてくれるかい？ わつ、さ、佐藤さん……！』

『アリスちゃん、今どこにいるの——?』

高木の近くに佐藤刑事がいたらしく、彼から電話を奪ってあたしがどこにいるのか質問してきた。

あたしは今いる場所を告げると彼女は「わかった」と声を出して——

『じゃあ、そっちまで行くわよ。アリスちゃんが事件つて推理してるなら間違いなさそうだし』

「ほ、本当ですか? じゃあ待ってますので」

佐藤と高木があたしのところまで来てくれるらしい。彼女曰く、夜まで特に用事がないみたいだ……。

「随分と信頼されてるじゃない」

「まあ、日頃の行いってやつ?」

何度も事件を解決したおかげで警視庁には力を貸してくれる人も増えたし、あたしのことも買ってくれてる。

哀を守るためにも、心強い味方を増やさないと——。

「でも、警察が動いても車を使われたりしたら見つけるのは——。——っ!! ねえ、今の車に乗っていた人見た?」

「赤井秀一さん……。バスジャックの時に風邪を引いてマスクをつけてた人が乗ってたわね」

「やっぱり……。なんでこっちを見てたのかしら?」

あたしたちが話をしていると、黒い外車に乗った赤井秀一がこっちをチラッと見てきた。

あー、そういうこと。やっぱりジエイムズと待ち合わせたのは彼だったのね……。

「そりゃ、可愛い女子高生がいたら見るでしょ」

「はあ……? 脳みそ一回洗濯したら?」

哀の疑問に冗談で返したら、本気でバカにされちゃった。

だって、本当のことと言っても今は信じてくれないでしょう……。

そうこうしてるうちに、佐藤刑事の愛車が目の前に止まって、二人の刑事があたしたちの元に駆けつけてくれた。

さて、捜査を真剣に始めるとしますか……。

「その誘拐されたかもしれないジエイムズ・ブラックさんだけ？
誘拐されるような理由がある人なの？」

「ええ、ランディ・ホークさんっているでしょ？ この動物サーカスの
スポンサー。ほら、この人に似てるんですよ」

「なるほど、彼はランディ・ホーク氏と勘違いされて誘拐されたってわ
けね。じゃあ、まずいかもしれないわね」

「はい。急がないと……、彼の身が……」

ジエイムズが誘拐されたのは理由は身代金目的でランディ・ホーク
と間違われたという可能性が極めて高い。

それを二人に告げると、彼女らは顔を曇らせた。

「どういうことですか？」

「今、ラジオでホークさんが生出演してるんだよ。犯人が気付かなけ
ればいいんだけど……」

「誘拐しようとしてる人間の予定を調べないはずないから、きっと
チェックしてるでしょうね」

なるほど、ホークはラジオで健在ぶりをアピールしてるのか。

これはジエイムズはツイてないわね。彼が別人だと犯人が知れば
――。

「だとすれば、間違いなくジエイムズさんは消されるわ」

「彼にたどり着くヒントは『P & A』のみ……。咄嗟に残した暗号と
はいえ難しいのよね」

哀の言うとおり犯人はそう遠くない未来にジエイムズを殺そうと
考えるだろう。

FBIの仲間がいて助けられるのかもしれないが、それも100%
ではない。出来ることはやらなくては――。

「PとAねえ……、誰かのイニシャルとか」

「それで絞るのはかなり厳しいですよ」

「ピストルとアサシン……」

「君って、物騒なことばかり言うねえ……」

P & Aについて連想出来ることを口々に述べるが、中々しつくりこ

ない。

高木は哀の子供っぽくない回答にちよつと引いていた。

「Parking Areaっていうのはどうかしら？ そのジェイムズさんって人の車が停めてあった駐車場に何かヒントがあるとか」「なるほど、さすがは佐藤さん！」

「あたしもそう思ってた探ってみたんですけど……特にこれといったものはありませんでした」

佐藤のパーキングエリアはあたしも最初に連想したが、あのコインパーキングにヒントらしいものは一切なかった。

うーん。なんか初歩的な見落としをしてるような気がするのよね……。

「そう。なーんか、クイズ番組の連想クイズみたいね。PとAが付くものなんて無数にあるし……」

「クイズ番組？ そっか、そういえばそんなクイズもあったわね」

「この暗号が出題されたクイズを見たの？」

佐藤の言葉からあたしは答えを閃いた。これは悔しいわね……。なんで直ぐに分からなかったのだろう……。

「うん。前に見たクイズ番組で似たような暗号があつて、『&』を『a・n・d』として扱っていたのよ。つまりP&AはPとAで分けるんじゃないかって——、それをつなげて読んで」

「『panda』……、パンダってことね！」

「じゃあ誘拐犯はパンダのいる場所に？ 動物園とか……」

「いいえ、ジェイムズさんはパトカーに乗せられているということ伝えてたかったんだと思います」

ジェイムズが残した暗号は『panda』——そして、それが指し示しているのはすなわち、パトカーのことである。

「パトカー？ 確かに白と黒のボディのパトカーは日本の警察の隠語でパンダと呼ぶことはあるけど」

「ジェイムズさんって、イングラウンド系のアメリカ人なんでしょ？」

そっちの人が日本の警察の隠語を知ってるなんて思えないけど……」

「ジェイムズさんがロンドン生まれだからこそですよ。昔はイギリス

のポリスカーも白黒で塗装されてたんです。そこからポリスカー＝パンダって呼び名が定着してます。英語の辞書にもパンダカーってあるくらいですよ。ですから、ジェイムズさんくらいの年齢なら警察車両を見てパンダって連想するはずですよ」

佐藤と高木はパトカーという解答に懐疑的だったのだが、ここであたしは新一の記憶にあるウンチクを述べる。

ロンドンで生まれ育ったというジェイムズはパトカーで攫われたというメッセージを暗号にして送っていたのは間違いない。

「検問を張りますか？ 不審なパトカーを見つけ次第調べるような形にして……」

「そうね……、逃走経路が分からないから、かなり広範囲になりそうだけど……」

「おそらく犯人はジェイムズさんの人違いに気付いています。ならば、きっと人目のつかない場所で殺すはず……。周到にパトカーまで用意して誘拐計画を立てているなら尚更バレないように始末したいと考えますよね？ もう一度本物のホークさんを誘拐するためにも」

誘拐にパトカーを用意するほどの犯人だ。そこまでしたからには計画は破綻させたくないと考えよう。

ならば殺すとしても絶対に見つからない場所で行うに違いない。

「それなら山奥にでも連れて行って殺しそうなものね。人里離れた場所に出ようとするのはまず間違いない」

「哀ちゃんの言うとおりです。この通りから東京都外に出るための最短経路を通っている可能性が高いと思われます」

哀の予測はおそらく正しい。彼らが目指すのは田舎の山奥だ。

埼玉を経由して群馬を目指したりしてそうね……。

「高木くん。検問をするわよ……、逃走経路になりそうなところ全部に」

「は、はい」

「あと、犯人は武器を持っている可能性が高いと思います。もしかしたら拳銃とか……」

検問をするのは良いとして、あたしは不安要素を口にした。

それは犯人が拳銃を持っている可能性だ。

「それはなぜ？」

「そのパンダの暗号を残したのが、駐車場からここまで歩いて来た間だからでしょ。ここに来る前に怪しいと思っていただけ、抵抗出来なかったのは、武器で脅されていたから」

そう、P & Aの文字に血を塗り込むなんて一瞬で出来るはずがない。

ある程度時間の猶予があったのに逃げられなかったのは拳銃を突きつけられるとかそういう状況にあったからと考えられる。

それにしても、今日の哀ちゃんは冴えてるわね……。

「なるほど……、下手に検問で怪しむと暴れられて、銃を乱射する可能性も高いつてことか。不審な車両を見つけてもやり過ぎして被害者の安全が確保できるまで追跡したほうがいいのかしら……」

「とにかくその車両の位置の特定を急いだほうがいいですね。こっちの方向に向かったのは間違いないのですから」

「そうね。高木くん、行くわよ……」

「あとは、僕たちに任せて。何かあったら連絡するから」

佐藤刑事と高木刑事はジエイムズを誘拐したパトカーを追おうとして、車に乗り込もうとした。

いやー、このまま指くわえて待ってるなんて性に合わないわよね……。

「——こうやって犯人を追跡するのって憧れてたのよね〜♪」

「あなたは何でも楽しむんだから」

「えーっ！ き、君たち！ なんで乗ってるの？」

「仕方ない子ね。飛ばすから舌噛まないように注意するのよ！」

「——っ!?!」

あたしと哀は佐藤の車の後部座席に座る。やっぱり、気になるもんね……。

そんなあたしたちを見て、佐藤刑事は楽しそうに微笑み、とんでもないドライブテクニクで車を爆走させた——。

「勢いよく飛び出したのは良いけど……、事故で渋滞か……」

「でも、犯人もここに引つかかった可能性はありますよ」

車はすぐに事故現場で立ち往生してしまう。もちろん、緊急車両として通過するつもりなんだろうけど……。

「由美！　ちよつと良かった。ちよつと前に変なパトカーがこの辺りにいなかった？　外国人を乗せているような」

ちよつと佐藤の友人の交通課の宮本由美が事故現場付近にいたので、彼女に不審なパトカーの情報はないか尋ねてみた。

「えっ？　パトカー？　被疑者を連行中のパトカーなら先に通したわよ」

「怪しいところはなかったかしら？」

「うーん。特に無かったけど……、ちゃんと刑事二人が被疑者の頭にコートを被せてたし……」

「それね」

「間違いありませんね」

予想通り、この道が犯人の逃走経路だったらしく、由美は犯人連行中らしいパトカーを通していた。

おそらく顔を隠されていた人物こそジエイムズだろう。

「えー、何なに？　ていうかアリスちゃん乗ってるじゃん。今度、合コン開くんだけどう？」

「あの、忘れてませんか？　あたし、未成年」

「あ、そうだった？　そーいや、女子高生探偵だもんね〜」

由美は相変わず合コンばかりやってるみたいであたしを誘おうとしていた。

警官が高校生を飲み会に誘わないでください……。

「このまま行くと埼玉県警の管轄になりますね。追いますか？」

「当然でしょ？　出来れば、犯人が人質作戦を取る前に決着をつけたいし。由美！　ここ通るわよー」

「ちよ、ちよつと！　美和子!!」

佐藤の顔つきがさらに真剣な表情に変わって、車を再び爆走させ

た。

何気にこの人ってハイスペックよね。美人で頭もいいし、身体能力も高い上に車の運転まで上手いんだから……。

「すごっ！ どんどん車を追い抜いていく」

「このまま行けば追いつく可能性は高そうね」

「問題はどうかやってジェイムズさんの安全を確保しつつ犯人を追い詰めるか……、だけど……」

「じゃ、あたしたちが誘拐犯になるのって、どうです？ 協力できる警察の人が沢山いれば面白い作戦が実行出来るんですけど」

「誘拐犯？」

犯人の暴走を食い止める作戦をあたしは考えついた。

名付けて「誘拐犯になりきろう大作戦」だ。そのためにはこの車に乗っているある人が、一番重要な役割をしなくてはならない。それは――。

「哀ちやくん♡ちよつとお願いがあるんだけど、引き受けてくれるかしら？」

「その顔はろくでもないことを考えてるときの顔ね。アリス……」

あたしが優しく哀の手を握りながら声をかけると、彼女はとっても嫌そうな顔をした。

でも、人助けなんだし……。やってくれるわよね……。

「由美、こっちに来てる？」

『言われたとおりに付いてきてるけど、何するつもりなの？ アリスちゃんが関わってるなら変な事件が起きてるんでしようけど』

「由美って、確か……この前の埼玉県警との合コンの幹事やってたわよね？」

『えっ？ やってたけど、それが何か？』

「じゃあ、今から誘拐犯を捕まえる作戦を話すからよく聞いて――」

佐藤の車を追うようお願いした由美がパトカーで彼女に追いつく。

由美の人脈のおかげで作戦は上手くいきそう。合コン好きって役

に立つのね……。

「見つけたわ。あれが誘拐犯の乗ってるパトカーね。じゃあ高木くん、哀ちゃん、お願い！」

「いや〜！ 助けて〜！ 誰か〜！」

「静かにしなっ！ このクソガキ！ ハジキぶっ放すぞ！」

高木が誘拐犯を演じて弾丸を抜いた拳銃を哀に突きつけ、哀は必死に助手席の窓から顔を出して外に助けを求める演技をする。佐藤は車を飛ばして誘拐犯のパトカーの真ん前を陣取った。

ノーネクタイでスーツを脱いでもらったけど、高木刑事って悪役向いてない……。

「……………な、なんだ!？」

「お、おまわりさ〜くん！ ぐすん……、たすけて〜！ ふえ〜くん！」

「うるせえ！ 黙れっ！ ホントに撃つぞ！」

困惑する誘拐犯にこれでもかと哀は迫真の演技を披露する。

やるわね哀ちゃん。アカデミー賞ものじゃない。高木の棒演技をフオローしてるわ……。

「すいませ〜くん。本庁の宮本です。あの誘拐犯の確保に協力してください！」

ここで、由美のパトカーがピタリと犯人のパトカーの右側について警察手帳を見せながら協力を要請した。

犯人たちは自分たちが追われているのではないと安心したのか由美のパトカーが隣に居るのにそのまま速度を変えずにあたしたちの後ろを走っている。

「袋小路あんないにご案内♪ ほら、哀ちゃん。もつと泣き叫んで……！」

「覚えてなさいよ……。助けて〜！ おまわりさ〜くん！」

あたしが小声で哀に演技を続けるように指示を出すと彼女はちよつと怒気を含んだ声で不満を言ったが、素直に演技を続けてくれた。

やっぱり根はいい子なんだよね……。哀ちゃんは……。

「こんにやろ！ 静かにしろって言うてんだろ！」

「高木くん……、悪役下手すぎ……。子供の哀ちゃんよりも演技下手って……」

「勘弁してくださいよ。佐藤さん……」

高木の演技を見かねた佐藤だったが、それでも犯人を惑わすには十分だったみたいで、誘拐犯のパトカーは彼らが気付かない内にドンドン埼玉県警のパトカーに囲まれていった。

「じゃ、そろそろ蓋を閉めてあげますか。佐藤刑事……、上手く減速して進行を塞ぐことって出来ますか？」

「もちろんよ。ほら、こうすれば連中はもう逃げられない」

「チエックメイト……」

「ええ、あとは佐藤刑事の号令でブレーキをかければ——」

「犯人たちは一網打尽ってわけね」

最後に止めといかんばかりに佐藤刑事の車で犯人のパトカーの進行方向に蓋をして完全に囲み込みが成功した。

佐藤の号令で一斉にすべてのパトカーがブレーキをかけたので、瞬間に犯人のパトカーは急ブレーキをかけざるを得なくなり、犯人たちはバランスを失い倒れ込む。

こうなれば、もう人質をとる暇などない。彼らが気付いたとき——周りの警官たちは一斉に銃を彼らに向けていた——。

「みんなありがとう！ 今度の合コンもきれいどこ集めておくわね」

「いえ、自分は佐藤さんさえ来れば……」

「うんうん……」

「そ、それにあそこにいるのって、藤峰愛梨寿じゃないか？」

「ホントだ！ スッゲー美人！」

「佐藤さんとのツーショット……、くうくう、カメラ持ってきてくりやよかった！」

埼玉県警の協力の元、無事に誘拐犯を捕まえることが出来た。

なんか、すごく視線を感じるわね……。

「ねえ、アリスちゃん。ジエイムズさん見なかった？」

「ふえっ？ そういえば、いつの間にか居なくなってますね……」

「さっきまでいたのに……、ねえ由美く〜！」

そして、肝心のジエイムズだけど、居なくなっちゃった。おそらく赤井秀一に拾ってもらったんだろう。

事情聴取くらい受けてもいいじゃん……。

「事情聴取前に姿を消すって、やっぱ怪しいわ。もしかしたら、あの人はワザと捕まったりしたのかも」

「何のために？」

「分からないけど、そもそもあの暗号からも何か誘われてるような気がしたの。バスジャックの時に居た得体のしれない男も近くにいたし」

あー、なるほど。あたしの探偵としての力を試してみたみたいな感じかもなー。分からないけど……。

なんか、大きな事件が近いうちに起こりそうな気がするわね……。

「まっ、良かったじゃん。ジエイムズさんは無事だったんだし。何かあるなら……次に会ったときに聞けばいい」

「無警戒なんだから。すべてを疑うくらいじゃなきゃダメよ」

「でも、信じることも同じくらい大切だとあたしは思ってるよ。哀ちゃん」

あたしは疑うことも大事だけど、信じるって気持ちも大事にした
い。

高木刑事や佐藤刑事は信頼に値する人たちだし、何もかも敵だと思っていると疑心暗鬼に潰されてしまう。

「無理よ、私には……。信じれる人はあなたや博士くらいしか居ないもの……」

「そっか、ありがとう。信じるって言ってくれて」
「うん……」

哀から信頼されてるなら、あたしもそれに応えなきゃ。

彼女の小さな手を握りしめながら、あたしはそう誓った――。

遺産相続殺人事件 前編

「やっぱ、ハンバーグにはチーズトッピングよね」

「私はデミグラスソースがあれば何でもいいわよ」

「じゃ、一緒に特製デミソースを作りましょ」

あたしは哀と夕飯の買い物に行つて帰宅している最中だ。

今日は博士が発明品の売出しに遠出していて戻らないので哀と二人きりでご飯を食べる。

「大根おろしも良いんじゃない？ 久しぶりに日本らしいものを食べたいわ。——アリスちゃんつて、ちゃんとお料理するのね。感心、感心」

「——!?!」

ハンバーグの話をしてるあたしたちの後ろから聞き慣れた声がする。

いや、聞き慣れているのはこの体だけなんだけど……。

「ゆ、有希子さん!」

「久しぶりね。アリスちゃん」

振り向くと工藤有希子が居た。旅行かばんを引っさげて。

ロサンゼルスから帰つてきたのね……。なんでだろう……。

「でね、優作つたらいつも朝早くから出かけたと思うと、ベロンベロンに酔つ払つて帰つてくるのよ。もう、頭に来ちゃう! あら、とっても美味しいわね。これ」

「お口に合つて良かったです。……えっと、まさかそれでロサンゼルスからこつちまで戻ってきたんですか?」

「工藤くんには会つたことないけど、彼が一人暮らししてた理由が何となくわかるわ」

「どうやら有希子は痴話喧嘩して日本に戻ってきたらしい。しかも優作に黙つて……。」

最近物騒な事件ばかり相手にしてるから平和な話にしか聞こえない

い。

あ、でもあたしと哀が作ったハンバーグを美味しそうに食べてくれたのは嬉しいな。

「だって酷いのよ。シャツにキスマークまで付けて！ 私だって浮気してやるんだから！」

「どーすんのよ？ この人」

「いや、新一の体借りてるし、お母さんの浮気くらいは止めてあげなきゃ……」

初対面がこの感じで漫画とは違って新一をほとんど知らない哀はちよつと引いてる。

あたしは割と彼女と性格が似てるから話は分からなくもないけど、こうなると頑固になっちゃったりするのよね。

「とにかく、しばらくこっちに住むわ。アリスちゃんも哀ちゃんも、お隣さんになるけどよろしくね」

「は、はい。でも、優作さんが心配して迎えに来るんじゃない？」

あたしの知ってる優作は愛妻家のイメージだし、慌ててこっちに迎えに来そうなものだけだな。

有希子はかなりご立腹みたいだけど……。新一がいない間に夫婦仲が悪くなったらどうしよう……。――

「迎えに来るわけないもん。優作は私が居ないほうが気楽で良いとか思ってるはずだわ」

「そうですかね？」

「そうよ。あつ！ そうだ、アリスちゃん。明日からの連休、ちよつと一緒に遠出しな？ 哀ちゃんも一緒にどう？」

「……………」

そんな話をしていると、突然有希子は遠出しようとしてきた。

別に特に用事があるわけじゃないから構わないけど……。

「こうやって女だけで出かけるなんて久しぶり！ 新ちゃんも可愛かったけど、女の子も欲しかったのよね！」

有希子は女3人で出かけることが楽しいと上機嫌そうだった。

もしかして、こうやって一緒に出かけることであたしのことを知ってくれようとしているのかもしれない。

「それで、どこに向かっているのですか？」

「群馬県に住んでる幼馴染のところよ」

「あー、そういえば有希子さんって小学校の頃まで群馬に居たんでしたね」

新一の記憶から彼女が群馬県に住んでいたことを思い出して納得するあたし。

着替えを用意するように言われたけど、どこかに泊まるつもりなのかな……。

「その幼馴染になんの用事があるの？」

「うん。調べて欲しいことがあるって言われたから、アリスちゃんの推理力を借りたくてね。結構、探偵として有名になってるって聞いたわよ」

ロサンゼルスに住んでいるのにあたしのことを気にしてくれてたんだ。

探偵としてちよつと名前が売れたのは新一の知識のおかげだけど、頑張った甲斐はある。

「あはは、新一くんほどじゃないですけどね」

「またまた、謙遜しちゃって。さあて、飛ばすわよ〜！」

高速道路に乗って、車はとんでもない加速を見せた。

すごい！ どんどん車を追い抜いていく。そういえば、彼女は運転の技術が高かったんだっけ……。

「——っ!? この前の佐藤刑事の運転も凄かったけど——負けなくらいのスピード感ね」

「どうでもいいけど、早く止めなさい。日本の高速には制限速度ってものがあるのよ……」

哀があたしに有希子の暴走を止めるように促す。確かにこれは免許になってもおかしくないかもしれないわ……。

「有希ちゃん。来てくれたんだ。忙しいのに、ありがとう」

「幼馴染の広美のためなら地球の裏側からだって飛んで来るわよ」

有希子は幼馴染の藪内広美との再会を喜んでいた。

彼女の話だと昔はよくこの藪内家に遊びに行っていたらしい。こうやって同い年の人と並ぶと有希子って若いわ。37歳って嘘でしよってくらい……。

「あら、優作さんと新一くんは？」

「二人とも忙しいから。でも、この子たちを連れて来たわ。私の従兄妹の娘のアリスちゃんと哀ちゃんよ」

有希子はあたたかさを従兄妹の娘だと紹介する。

まあ、彼女とあたたかしはそっくりだし親戚といえど誰も信じるだろう。

「あっ！ この子って女子高生探偵の藤峰愛梨寿ちゃんでしょ？」

やっぱり有希ちゃんの親戚だったんだ。顔がそっくりだから、間違いないって思ってたわ」

「ど、どうも」

「なんで、私がアリスの妹に……」

広美はあたしのことを知っていた。しかも有希子を知る彼女は親友の旧姓と同じことから親戚だと思ってたらしい。

哀はどうやらあたしの妹にされて不満みたいね……。

「それで、私に調べてほしいことって？」

「えっと……」

「広美さん、お客人かね？」

有希子が調べてほしいことを尋ねたとき、お爺さんと背の高い外国人の男が現れた。

「よ、義房よしふさ叔父様。幼馴染の有希子さんです。ほら昔、よくこの家に遊びに来てた」

「お久しぶりです」

「はて。とんと思い出せんの。なんせブラジル生活が長くてな」

「あら、そうですか。うふふ」

「どうやらこの義房は広美の叔父で有希子とも面識があつたみたいだ。」

「彼は有希子のことを忘れてるみたいだったけど……。へえ、あの人がブラジルに住んでたんだ。」

「まあ、ゆつくりして行きなされ。ゆくぞ、カルロス」

「……………」

「か、カルロスさん……?」

「どうやら、あの外国人はカルロスという名前みたい。」

「ひと言も発さないところを見ると日本語が不得意なのかしら……。」

「義房叔父様がブラジルから連れてきた友人だと言っていたけど……………」

「……。」

「ねえ、義房叔父様どうだった? 昔と感じが変わってなかった?」

「そうねえ、義房おじさんにはよく遊んでもらったけど……………、私たちが小学校に行く前にブラジルに行ってしまったから……………。——えつと、調べてほしいことって、そのこと?」

「ええ。3日前にブラジルから帰ってきたんだけど、何か前と雰囲気が違うかなって……………」

「広美は義房が偽物ではないかと疑っているらしい。」

「しかし、有希子からすると彼と会ったのは三十年前の話だ。顔を覚えてるほうが難しい。」

「最近ブラジルから帰ってきたと言ってるがなんで本物かどうか調べたいんだろう?」

「だったら、あなたのお父様に会わせればいいじゃない。実の弟なんだから」

「それが、父の義親よしちかは先月癌で死んでしまったから……………無理なのよ。母も15年前に亡くなつて、義房叔父様の友人も運悪く皆んな既に……………。だから何度も彼と会っているのは私とあなたくらいなのよ」

「あら、そうなの? でも、なんでそんなに義房おじさんのこと——」「遺産ですよ。みんな疑っているのです。あの老人はお義父様の遺産を騙し取ろうとしているのでは?」

「日本で義房と関わりのある人間がほとんど他界してるらしく、有希

子と広美くらいしかいないらしい。

そこまで聞いたとき、中年の男が義房が本物かどうか気にしてる理由は広美の父親である義親の遺産が関係しているとあたしたちに教えてくれた。

「あなた……」

「お義父様はこの辺り一面の大地主で。その遺産は結構なものになる。弁護士によるとお義父様は生前に遺言状を残しておられて。それが発表されるときにその場にいない者には1円たりとも相続させんということらしい」

後から聞いたが、この中年の男は広美の夫で婿養子ある藪内秀和。彼は義親の遺産がかなり大きいことと、彼の遺言が近々聞かされるということを話した。

あー、なるほど。だから、義親の弟である義房は急遽日本に帰ってきたわけか。

遺産は遺言状の発表のときにその場にいた人にしか渡さないとか義親が言っていたから……。

「それで、その発表はいつなの？」

「親父の喪が明ける明日の夜10時だよ。つまり、それまでにあのジジイの化けの皮をはがさねーと——」

「私たちの取り分が減っちゃうってわけ」

「遺言状によっては、減るだけじゃ済まないかもしれないよ。無いも同然になるかも……」

「それまでに何とかしねーとな」

広美の弟である藪内義行とその妻である敬子。さらに義親の後妻で、広美と義行の義母にあたる真知子が現れた。

へえ、こんなに遺産が絡んでる人がいるんだ。こりゃ、義房を快く思っていない人も居そうね。

「あら、中々ドロドロしてて面白い話じゃない」

「もう、哀ちゃんったら」

哀はこの人間関係と遺産問題に若干の興味を持ち始めたらしい。

こういうのって、ドラマとかではよく聞くけど、生じやなかなか見

れないもんね〜。

「ったく、写真くらい残ってねーのかよ」

「叔父様、ブラジルに行く前に全部処分しちゃったみたいで」

何か義房についての手がかりがないものか、藪内家の蔵をみんなで探すことになった。

この写真……。あたしは野球をしてる大人たちの中に子供が二人写っている写真を見つけた。

「あれ？ この写真違いますか？ 幼い有希子さんが写ってるように見えますが……」

「ああ、間違いない。この真ん中の人が義房叔父様よ」

あたしが見つけた写真には若い頃の義房が写っていた。でも、この写真では――。

「でも、若すぎて参考にならないな」

「それに帽子も被ってるし」

そう、これだけじゃ何も分からなそう。すごく昔の写真だし顔も隠れてるから――。

「懐かしい。ねえ、有希ちゃん。覚えてる？ この町内野球大会で義房叔父様、足を怪我して何針も縫うことになったの」

「あー、そうだったわね」

「なら、その時の怪我の跡でも残ってるかもしれないよ？」

義房が野球大会で大怪我をした話を聞いたあたしは、傷跡が残っている可能性が高いと呟いた。

それでも分からなかったら、これを使ってみましょうか……。

「傷じゃと？ ああ、この傷か？ 三十年前、一塁ベースに伸ばした足

をランナーが思いっきりスパイクしおったんじゃ」

「じゃ、じゃあ本物？」

足の傷と聞いて義房は右足にある大きな傷跡を見せてきた。

あらあら、これは彼が本物の可能性がかなり高まったわね……。

「やはり、疑っておったか。兄が言つてたとおりの家中はろくでもないやつばかりじゃわい。カルロスを連れてきて正解だったか」

「どういうことですか……?」

「カルロスはわしがブラジルで雇ったボディガードじゃ。こんな手紙が届いたからのう」

カルロスの正体は義房が雇ったボディガードらしい。彼を雇った理由として義房は一枚の手紙をあたしたちに見せた。

それには「お前にやる遺産はない。命が惜しくば帰ってくるな」
って書いてあった。

なるほど、だから警戒してるってことね……。この人間たちを――

「ふーん。脅迫状が届いてたからボディガードを……」

「自衛するのは当然ね。金目当てで殺されるほど馬鹿らしい事はないもの」

義房によると、一ヶ月前に差出人不明で脅迫状が届いたらしい。

これは、一気に何か起こりそうな感じになってきたわね……。

「兄の遺産なんぞには興味はないが、わしを殺そうとしたものの顔くらいは見てやろうと思つての。こんな手紙を寄越した――たわけ者共の顔をのう！」

義房は殺そうとした人間の顔を見に来たと宣言する。へえ、「たわけ者共」ってことは彼を疎んじてる人が複数いるって思つてるのかしら……? ボディガードを雇つたとはいえ、乗り込んで来るなんて豪胆な人だわ……。

「ちよつと哀ちゃんお願いがあるだけど――」

「――最近、そういうの多くない?」

「ダメかしら?」

「……仕方ないわね」

あたしはこの義房が本物かどうかはつきりさせたくて、哀にあるお願いをした。

彼女は露骨に嫌な表情をしたが、義房の元にペンと紙を持って近づ

く——。

「ねえ、おじいさくん。謹賀新年ってかける？ お姉ちゃんに聞いても書けないっていうの〜」

「ん？ 謹賀新年じゃと？ ほれ……」

「ひ、左利き？」

「ありがとう！ おじいさん！」

哀が子供のフリをして、漢字の書き方を質問すると、義房は左手でペンを持って文字を書いた。

なるほど、彼女のおかげで分かったわ。彼の利き手、そして——。

「サンキユ、哀ちゃん」

「こんなワトソンにはなりたくなかったわ」

情報収集能力にかけて、コナンに劣るのはこういうときだ。

だから哀と一緒にいて助かっている。

「叔父様が左利きだったなんて覚えてる？」

「全然。でも、足に傷もあつたし、義房おじさんで間違いないんじゃない」

「そんなのたまたま足に傷があつてそう言い張ってるだけかもしれない——」

有希子や広美は義房の利き手を覚えてなかったし、足の傷だけで本物と決められないという意見もあつたが、あたしは彼についてある程度の答えが定まっていた。

「ううん。あの人は義房さんで間違いないと思いますよ。写真のファーストミットは右手に付けてましたし。——あと、あのとき写真と一緒に見つけたんです。彼の送った年賀状を。哀ちゃんが彼に書かせたものと筆跡を見比べてみてください」

「お、同じ字だ……」

「じゃあ、君はそれを確かめるために妹を使って——」

あたしは写真と一緒に年賀状も見つけていた。

さすがに筆跡まで一致すれば彼が本物であることは疑いようがないだろう。わざわざ調べて良かった……。

「さすが、話題の女子高生探偵ね！」

「女子高生探偵……？」

「そういえば……、テレビで見たことあるような」

「やるじゃない、アリスちゃん。やっぱり、色んな事件を解いて探偵として成長してるのね」

筆跡をヒントに義房が本物であることを見抜いたあたしは有希子に褒めてもらった。ここに来た意味が出来てよかったわ……。

「えへへ。そ、そうですか？」

「子供使わないと筆跡も確かめられないけどね」

「うん。哀ちゃんが居てくれたおかげだよ」

「そっか。二人とも……仲がとても良いのね」

あたしと哀が仲良さそうにしていると、有希子は複雑そうな顔をしてこちらを見ている。どうしてだろう……？

哀とはバスジャック以降さらに距離が近くなった気がして最近は特に楽しい。

「あら、まだあったの？ あの古井戸……」

「ええ……」

「あんな事件があったのに……」

ふと有希子は裏木戸の傍らにある古井戸を指差して、井戸が存在することに対して疑問を呈した。何か事件があったみたいだけど……。

「事件って何があったんですか？」

「それは——」

あたしが事件について尋ねると、広美が説明してくれた。

彼女によると、15年前の大雪の日に藪内家の井戸の中で彼女の母で義親の前妻である女性が死亡している事件があったらしい。

井戸のそばにある姫椿を取りに行った際に、井戸の縁に乗り、足を滑らせて井戸に落ちたとされており、彼女は姫椿を握って亡くなっていったとのことだ。

さらに話が荒れたのは彼女の兄が誰かが妹を突き落とすと葬式

の席で騒ぎ立てたことだ。

事件は事故だと処理されても最後まで納得しなかったらしい。

なんか、後妻である真知子は、遺言状に誰に相続させるか書いてあるのか分からない以上は、その兄つて人もここに現れるかもとか言い出してるし……。だとしたら、面倒ごとが起きそうね……。

「もつとも、前の奥様が亡くなられたとき、まだこの家の家族では無かった私には関係のない話ですけどね——。私、これから友人の結婚式の二次会に行ってきます。あとはよろしくお願いしますよ、広美さん」

「は、はい。お義母様……」

「——っ!? アリス! 向こう!」

「えっ!? どしたの? 哀ちゃん」

真知子が出かけると広美に告げたその時、哀が大きな声を上げながら裏木戸を指差した。

何かあったのかしら……。

「居たのよ、裏木戸の隙間から覗いている怪しい人影が……」

「うーん。誰も居ないわね。どこかに隠れたのかしら?」

どうやら彼女は怪しい人影を見たらしいけど、裏木戸の外には誰も見当たらない。

警戒心の強い哀に限って見間違いはないだろうし……。

「さつき言ってた、前の奥さんのお兄さんだったりして」

「おいおい、お嬢ちゃん。怖いこと言わねーでくれよ」

哀がさつき話しに出てた義親の前の奥さんの兄の話をだすと、義行は気味が悪いというような表情をする。

誰だかわかんないけど、気をつけなきゃいけないわね……。

「悪いわね〜。泊めてもらおう上にご馳走になっちゃって」

「良いのよ。心強い名探偵さんも連れてきてくれたんだから」

「いやー、名探偵だなんて。照れます」

あたしたちは藪内家に一泊することになった。あー、この鍋物美味しいそう♡

有希子が着替えを用意しておけつて言った意味が分かったわ……。

「私の記憶が正しければ、着替えを持ってくるように言ってたけど……。元々泊まる気だった——」

「あら、哀ちゃんだったら。お腹空いたの？ もうちよつと待ってましようね。よしよし」

「えっ……？ ちよ、ちよつと……うむっ」

哀が有希子のちゃっかりした感じにツツコミを入れようとすると、彼女はニコニコしながら哀を胸に押しつけて黙らせる。

「あの哀ちゃんがいつも簡単に……。あれ？ 電話……？」

「こんな時間に誰かしら？ あら、お義母様？」

電話の先の相手は結婚式の二次会とやらに行ってる真知子からだった。

「どうやら新しい薪を買っておいたから、お風呂の準備をしてほしいという話だったらしい。」

薪のお風呂かー。古いお家だもんね。

「ほう、今夜は鍋物かこれはいい。カルロスに毒味をさせないで済むわい」

「叔父様……」

義房はかなり警戒心が強いみたいね。あのカルロスに毒味までさせてるんだ。

「なんか、お鍋つてもつと和気あいあいとして食べるもんだと思ったけど、無理そうね……。」

「へえ、五右衛門風呂なんですね」

「アリスちゃんと哀ちゃんと一緒に入ろうと思っただけど無理そうね」

藪内家のお風呂は古風な五右衛門風呂。浴槽は小さいので大人二人で入るとなると窮屈で仕方ないだろう。

「ていうか、有希子はあたしたちと入る気満々だったみたいだ……。」

「あはは、それはまた次の機会に。哀ちゃんはお姉ちゃんと一緒に入

ろうねー」

「……一人で入るに決まってるでしょ」

哀にお姉ちゃんアピールをしてみたけど、彼女はそっけない態度を取る。今日は色々と疲れてるのかしら……。

「ねえ、叔父様に風呂が沸いたって伝えてきてくれる？」

「そういえば、義房おじさん、風呂好きだったわね。いつも決まって一番風呂だったし」

「へえ、義房さんってカルロスさんと一緒に入ったりするのかしら？」

義房にお風呂の準備が出来たことを伝えるように言われたあたしたちだけど、ふとカルロスと一緒に彼が風呂に入っているのか気になってしまった。

「ボディガードなら当然そうするんじゃない？ 私が暗殺者なら間違はなく丸腰になる入浴時を狙うわ」

「あ、哀ちゃんって、面白いこと言うのね〜」

哀が当然のように義房を殺すなら入浴時を狙うとか言い出すと、有希子は啞然とした表情をする。

ちなみに彼女は哀が新一が飲まされた薬と同じ薬を飲んだことで小さくなったことと、彼女がその薬の開発者だということを知っている。あたしの秘密を知っているなら、彼女のことを知っても同じだと哀から話したのだ。

息子をあたしにしてしまった薬を作ったという事に対して責任を感じてるから話したのかもしれないが……。

「義房叔父様は毎日一人で入浴されてたわよ。カルロスはいつも部屋で待っていたけど……」

「それは変ね。わざわざボディガード連れてきてるのに——」

哀の言うように一番スキが出来やすい風呂場で一人になるのは妙だと思った。

一緒に入らないまでも近くに待機させるなりしそうなんだけだな。

「逆にああやって、ボディガードに他の人を監視させてるんじゃない

の？ 怪しい動きをしそうな人を先に止められるように」

「うーん。そうかなー？ ま、それくらいしか考えられないか」

無言で威圧感を出しているカルロスを見て、あたしも哀の意見に一応納得する。

ま、こっぴどやって全員の動きを把握してれば確かに安全は守れるかもしれないけど。

「カルロス、後は頼んだぞ——」

こっぴどして、義房が一番風呂へと向かって行つた。本当に一人で行くんだ……。

「およつ？ また電話だ……」

義房が風呂に向かつて間もなく、またもや真知子から電話がかかってきた。彼女は11時くらいに帰るとのことだ。

風呂の準備の確認みたいね……。薪を炊かなきゃいけないから……。広美が色々大変そう……。

義房が風呂を出てから、次々と家の人たちが風呂に入りに行く。

うーん。家族が多いと順番待ちが凄いわね……。

「やつぱ、一緒に入らない？ 最後の方に」

「そうね。真知子さんが帰るまでに済ましておきたいし」

あたしと哀は自分たちが入る時間が相当遅くなることを見越して二人でお風呂に入ることにした。

「じゃあ、二人とも先に入る？」

「いえ、有希子さんは運転とかさかれて疲れてると思いますのでお先にどうぞ」

そんなあたしたちの言葉を聞いて有希子は入る順番を譲ろうとしたけど、彼女には先に入ってもらおうことにした。

彼女は、昨日、海外から帰ってきたばかりだし、今日も運転とかで神経使っているから……。

それからしばらく経って有希子が風呂から上がったきた。

「湯加減どうだった？」

「ちよつと、冷めちゃってたかな」

「じゃあ、炊き直してくる。名探偵さんが風邪引くといけないし」

どうやらお風呂の温度が下がっていたみたいで、広美は炊き直しをしてくると立ち上がる。

なんか、悪いことしてる気になるなあ……。

「あつ！ お構いなく！」

「いいのよ。どっちみちお義母様も入るのだし……」

あたしが大丈夫だと告げても彼女はどのみち真知子が入るのだからと部屋から出ていった。

そのあと、数秒もしなかつたと思う。彼女の叫び声が聞こえたのは――。

「きゃあああああ!!」

「どうしました!?!」

「あ、あそこにサングラスをかけた人が裏木戸から外に……!」

広美に何があつたのかと尋ねると、裏木戸の外に怪しい人が居たと答える。

やつぱり哀の見た人影は見間違いないじゃなかつたんだ……。んっ？

ちよつと待つて……。

「あれ？ 誰も使っていない古井戸の桶がなんで上がってるの!?!」

「――っ!?!」

あたしはさつきまで見えなかつた古井戸の桶が上がっていることに違和感を感じる。

これはどういうことだろう……。猛烈に嫌な予感がする……。

「結構重いぞ……」

「とにかく引き上げてみよう!」

井戸の縄を不審に思っ手繰ってみると、何か重いものが結ばれているみたいだ。

そして、その正体はすぐにわかつた――。

「——っ!？」

「お、お義母様……」

引き上げられたのはなんと真知子の遺体だった。

「こ、これはいつも以上に衝撃的な光景ね……。外出するといつもこれだ……」。

「まさか、井戸に身を投げして自殺を——」

「いいえ、胸を刃物で刺されています。死因はそれです」

あたしは真知子の遺体の胸の部分の傷を確認して、刃物で刺されて殺されたと皆に告げる。

しかし、変ね……。真知子は電話で言ったことを考えると——。

「じゃ、じゃあまさか……。この中の誰かが……」

「ねえ、真知子さんから電話がかかってきたのって9時頃よね?」

「そのぐらいだったかしら」

この家の人の誰かが真知子を殺したのかと秀和が呟くと、有希子が状況を整理し始めた。

そう、真知子は電話をかけた9時頃までは健在だったはずだ。

「私が風呂に入ったのが10時前——。そのとき部屋を出た人は?」

「居なかったと思うけど」

「じゃあ、家の中に居た人に犯行は無理ね。駅前のホテルからここまでどう車を飛ばしても一時間はかかるもの。私の入浴中に誰かが忍び込んで、真知子さんを殺したと考えるのが自然。そうよね? アリスちゃん」

真知子が電話をしてきたホテルからここまで1時間かかるので、電話をし終わってからこつちに戻ってきてても10時は過ぎる。

有希子が風呂を上がって、遺体が発見されるまで誰も部屋を出てないなら、みんなには犯行は不可能だ。

「ええ、そうですね……。この家の中で犯行が出来るとしたら有希子さんだけです、真知子さんとは初対面ですもんね。動機がなさ過ぎる」

「そういうこと」

唯一、犯行が可能なのは有希子だが、ロサンゼルス帰りの彼女と、こ

の家の後妻である真知子には接点がなさ過ぎるし、彼女をここに呼んだのは広美だ。彼女を疑う意味はない。

「じゃあ、一体誰が？」

「姉さんの見た怪しい奴じゃ……」

「あつ、ポケットの中に何か入ってる。こ、これは姫椿……」

「じゃあ、まさか私が見た人って……、15年前の——」

あたしは真知子のポケットから姫椿を見つける。

そこから皆は嫌でも連想してしまった——15年前にこの家の人間を恨んで騒ぎを起こした男を——。

しかし、本当にその人なのかしら……。どうもしっくりこないような気がするわ……。

とにかく警察を呼びましよ。そういえば群馬県ではまだ事件に遭遇したことなかったわね……。群馬県警ってどんな刑事さんがいたっけ……？

遺産相続殺人事件 後編

「あ、あのう刑事さん……？　どうかしましたか……？」

「す、すいません。現場の様子を想像すると寒気がしちやつたもので……。とすると、犯人はあなたの方の中にいるってことになりますよね」

群馬県警から来て現場を取り仕切っている山村刑事は、井戸から死体が上がってきた話をするとき青ざめたような表情で身震いする。

あれ？　なんか、この人ってやばい人だったような……。

「いえ、それはおそらく無いかと。真知子さんは9時までは生きていて、駅前のホテルから電話をかけてました。そこからここまで、車で一時間以上かかります。10時以降……遺体を発見するまでこの家の方はみんな部屋にいましたから。唯一、部屋を出たのはお風呂に行った、こちらの有希子さんだけです……」

「えっ？　じゃあこの人が犯人？」

あたしは簡単に真知子が殺された時間帯には有希子を除いて全員が一緒に居たことを説明した。

すると、彼は平然と有希子を指差して犯人だと口にする。いやいや、そんな簡単な話なわけないでしょ……。

「ち、違います。真知子さんとは今日あつたばかりで……。ねえ？

アリスちゃん」

「ええ、彼女はずっとロサンゼルスに住んでいて昨日帰国したばかり……。それにこちらの広美さんに呼ばれて偶然こちらに——あのく、刑事さん？　話を聞いてらっしゃいますか？」

あたしが有希子が犯人じゃない理由を話していたが、山村刑事はポーツとした表情で有希子を凝視する。どーしたんだろう……。

「あ、あ、あなたはひよつとして！　女優の藤峰有希子さんじゃないですか!？」

「は、はい」

「うわあつ！　毎週見てましたよ！　あなたが主演されてた危ない婦警物語！　僕はあなたに憧れて刑事になったんですから！」

「あら、そうなんですか？」

「どうやら有希子の女優時代を知ってる人みたいだ。危ない婦警物語ねえ……。」

「——いや、となると益々怪しい……。」

「はあ？」

「だって、手慣れてたじゃないですか。拳銃やナイフの扱いに……。」

「あれはドラマの中だけです！」

「ダメだ、この人……。そして、思い出したわ……。山村刑事って……すつごいへっぽこ刑事だってことを……。群馬県が心配になるくらいの……。」

「今までにいないタイプの刑事さんね。弁護士の仕事が捗りそう」

「哀ちゃん、嫌味を言わないであげて。——ねえ、広美さん。2回目の電話は確かにホテルからだったのですか？ 別の場所ってことは」

「哀もどうやら山村のヤバさを察知したのか遠慮なく毒舌ぶりを発揮する。」

「あたしは有希子の他にこの中で犯行が可能な人がいないか確かめるためにもう一度、2度目の電話はホテルの会場内からだったか確かめた。」

「会場からで間違いないと思うわ。中の音も聞こえてたし」

「じゃあ、やっぱり。犯行が可能なのはあなただけじゃないですか」

「ね、ねえ、アリスちゃん。助けてよ」

「有希子は割と本気で疑われていることに気付いてあたしにSOSの視線を送ってきた。」

「いやー、それだけで逮捕とかさすがにしないとと思うけど……。」

「そ、そういうえば、さつきから気になっちゃってたんですが、あなた、もしかして女子高生探偵の藤峰愛梨寿ちゃんじゃないですか……？」

「あ、はい……。」

「そして、彼はあたしの正体にも気が付いた。あたしは有希子と違ってアリバイは完璧だけど、何かとてつもなく嫌な予感がした。」

「藤峰有希子さんと似てるって思ってたんですよ！ 一緒にいるってことはやっぱり親子だったんだ！ そうでしょ!?!」

「いえ、有希子さんとは親戚で」

「群馬県警でもファンは多いんですよ。僕も警察やめて探偵になっちゃったりしようかなーって思っちゃったり」

「はあ……そうですかあ」

「なんだろう……、この会話。まあ犯人って疑われた有希子よりはマシかー。」

「いや待てよ……探偵ってことは、あなたも怪しいな。ほら、遠隔操作とかそういうトリックを使って、部屋に居ながら人殺しとか出来そうじゃないですか」

「ええーっ！ 探偵は超能力じゃありませんよ！ それにあたしだって初めて会ったんですよ。真知子さんと……。なんでまた、知らない人を殺すなんてことを」

「凄くふわふわした理由で疑ってくるじゃん。」

「遠隔操作で真知子を殺して井戸にポイってするトリックって何なのよ……。」

「探偵をしてるうちに自分でもやってみたくなくて殺したとか……」
「怖いです！ そんな発想したことありません！」

「しかも動機も酷い……。サイコパスじゃん、そんなの……。」

「有希子さんも、アリスちゃんも違いますよ！ きつと犯人はここを覗いていた怪しい人です！」

「あ、怪しい人？」

「サングラスとマフラーで顔を隠している人がこの近くをうろついていたんですよ」

「そいつは多分、おふくろの兄ってやつだ。おふくろはその井戸から落ちて死んじゃったんだけどよ。そいつはオレたちの中の誰かが突き落としたって最後まで疑ってたんだ」

「見兼ねた広美と義行がサングラスの男について彼に説明をする。」

「良かった。この家の人がまともで……。」

「で、でもその人だって決まったわけじゃ……」

「可能性は十分にあります。真知子さんのポケットの中から出てきたんですよ。この姫椿が！」

「うひゃああつ！ あ、あ、あ〜〜つ！ うわあああつ！」

あたしは15年前の事件と関連がある理由として姫椿が被害者のポケットに入っていたと、遺体のポケットを山村に見せながら説明をする。

すると、山村は腰を抜かして大声を上げた――。

「何ビビってんだよ？ あんた、殺人課の刑事だろ？」

「い、いや、課で風邪が流行ってて、動けるのが僕しかいなくて……現場初めてなんです。だから、死体はちよつと……」

「ま、死体に慣れてるあたしの方がどーかしてるか」

死体にビビりまくっている山村に半分呆れてはいたけど、よく考えたら慣れてる方が普通じゃないのかもしれない。

「血なまぐさい出来事が日常になってるんだもの、あなたが興味本位で自分の手を汚したくなるって彼が推理してもおかしくないかもね」

「勘弁してよ。あたし殺人なんかしたいって――」

哀は事件に巻き込まれまくっているあたしに対して、変なことを言ってくる。

「思うはずないでしょう、そんなこと知ってるからさつきと自分の無罪を主張しなさい。あなたの近くで殺人を犯すなんて……犯人に愚行だったと教えてあげればいいだけでしょ？」

「うん。そうだね、哀ちゃん。必ず犯人を見つけてみせるよ」

哀はあたしなら事件が解決できるって信じてくれてるみたいだ。

そうだね。今までだって、なんとか犯人を見つけたんだもん。頑張ってるよ――。

「アリスちゃん、エンジンはこちらとかかるわよ」

「ガソリンも十分にありますね……」

真知子が乗って帰ってきた車はなぜか敷地内ではなく近くの林の中に停めてあった。

エンストでもないみたいだし……。なんでこんなところに停めた

んだろう。

「気になるのはこの空のカセットテープのケースね。中身は一体……」

「この林の中に車を停めたのは真知子さんで間違いないと思いますから……、その理由に繋がると思うのですが……」

有希子と共に車の中を観察すると空のカセットテープのケースを発見する。

真知子の不可解な行動の謎を解き明かすことがこの事件の真相に近付くために必要なことのような気がするわ……。

「ねえ、アリスちゃん、事件解決出来そう?」

「しなければ、あたしか有希子さんが犯人にされちゃうかもしれないね」

「あーん。まさか、あんなへっぽこ刑事が捜査に来るなんて〜」

「大丈夫です。真実は一つですから。わかっている情報を丁寧に繋ぎ合わせれば、ちゃんとパズルは完成するんです。とにかくもっと情報を集めましょう」

この事件には不可解なことが多すぎる。だけど、今までだってどんなことにも必ず理由があった。

じつくりとパズルのピースを一つずつ丁寧に埋めて行けばいつかは真実にたどり着くということをあたしは知っている。

「そうね。まだ分からない謎が多すぎるもの。でも、事件になると見違えるくらいしつかりするのね。ちよつと驚いたわ」

「あはは、何度も事件に巻き込まれてますからね。慣れちゃってて」

「アリス、あの蔵の扉開いてた?」

「ううん。多分、閉じてたと思うけど……」

有希子に探偵らしくなったと言われて少し誇らしく思ったとき、哀が蔵の扉が開いていることに気が付いた。中に誰が入ったのだろうか……。

「うーん。何もないかな……」

「ねえ、アリスちゃん。あまりこっそり動くあの刑事さんが……」

「……そうですね。戻りましょう」

蔵の中には誰も居なかった。有希子が山村刑事を警戒していたみたいなので、あたしはこの中の探索を諦める。

今夜は警察の監視下の中でみんなで一箇所に集まって寝ることになった。そして、翌日――。

「凶器と思われる包丁とそれを包んでいた雨ガツパ……、なんで雨ガツパなんかが？」

「真知子さんが着ていたわけでも無さそうよね」

「そうねえ。着ていたなら、何か目的があるはずだけど……」

井戸の中から見つかったのは凶器の包丁と雨ガツパ。

包丁はともかく雨ガツパがなんで……？ 順調に謎が増えていくわね……。

そんな折、藪内家の弁護士を名乗る男が現れた――。

「私はこの家の弁護士だ！ 遺言状の発表に来た！」

「あー、そういや、そんな話だったわね」

「こんな事件があったのよ。延期にしないのかしら？」

「ううん。山村刑事は延期にしたらって、言ってたわよ」

有希子によると、山村刑事は事件を理由に遺言状の発表を延期するように口出ししたらしい。

あー、だから義行たちが山村に突っかかっているのか……。

「じゃあ、あつちで揉めてるのって。それが原因？」

「延期なんてしてられるか！」

「あんたにそんな権利ないでしょ！」

「ふん、欲深き者たちが騒ぎおるわい」

「んだと！ ジジイ、失礼なこと言ってるんじゃないぞ！ どうせ偽者なんだろうが！ ああんっ！」

山村に抗議してる義行と敬子を強欲だと断じた義房。

義行はそれに対して激怒し、義房の胸倉を掴んで怒鳴り散らす。うわあ……、山村刑事……、ドン引きしないで警察なら止めなさいよ

……。

「——痛い目をみんとわからんか？」

「——っ!？」

「ぐわあああつ！　いてええええつ！」

なんか、気付いたら義房が義行を組伏せてた……。

すつごうい。ええーつと、あの技つて確か——。

「あ、あれは……、ブラジリアン柔術……」

「かなりの使い手ね。組織でも暗殺者が出来るくらい」

「じゃあ、あのカルロスはもつと強い——いや十分でしょう。あんなに強いなら……。なんで、ボディガードなんか雇ってるのよ……」

なんと義房はブラジリアン柔術の達人みたい……。

カルロスがもつと強いのもかもしれないけど、あんなに護身術に長けた人がわざわざボディガードを雇うのは違和感があるわ……。

結局、山村刑事の提案により警察の立ち会いのもとで遺産相続についての遺言状の発表を予定通りすることとなった。

そして、夜の10時が近付きあたしたちは、部屋に集まった——。

「それでは、藪内義親氏の遺言の発表を致します」

弁護士がカセットレコーダーを用意して遺言の発表の準備をしている。
「……」

んっ……？　さつきからずつと“カチカチ”って音がしてるけど何かしら……。

あたしは異音に気付いたがそれが何なのか分からずにいた。

「生前、義親さんはテープに遺言状の内容を録音していましたので、こちらを再生します」

「……」

「はて、何も聞こえませんか……」

「それ、録音ボタンじゃないですか？」

弁護士がテープの再生をしたはずなのに、何も聞こえない…….
思っていた矢先、広美が録音ボタンを押していると指摘する。

いや、そりゃ絶対にやつちやいけない間違えでしょ……。

「あつ！ 間違えた……！」

「早く止めんと……！ ああつ！」

焦って録音を止めようとした義房が目の前のお茶を溢したとき、あたしは何かが作動した音を察知した。

「——っ!? 伏せて！」

「なんだ!？」

「……こ、これは？」

咄嗟に放ったひと言で義房は何かを躲す。そして、その何かは襖を突き破って隣の部屋に行ってしまった。

「た、タンスよ！ 後ろの茶箆筒から矢が！」

「……こ、これは……、ボウガン……!？」

「時間が経てば自動的に矢が発射されるようになってたつて、わけね」「い、一体誰が……」

隣の部屋の畳には矢が刺さっている。そして、敬子の指摘によって義行が茶箆筒を開けると中にはボウガンに時限装置のようなものが仕掛けられていた。

なるほど、何者かがこれを使って——。

「狙われたのは義房さんみたいですよ」

「あら、どうしてそれがわかったのかしら？」

「こつちの部屋に何度も仕掛けを実験した跡が残ってました。義房さんが座るのは当然、上座ですから……犯人は彼を狙ったと考えるのが自然ですよ」

隣の部屋にあつたのはボウガンを試し撃ちした形跡。

ならば意図的にあの場所を狙っていたことは容易に読み取れる。となると、上座に座ることが予測できる義房を狙ったとしか考えられない。

「やはりわしの命を狙った不届き者がまだおったか。くわばら、くわばら……」

「……でも、こうは考えられませんか？ 自分を狙うようにわざと叔父さん本人が矢を仕掛けたとか」

「それはないわ。アリスの声で義房さんはギリギリ矢を躲してたし。

自作自演をするならもつと的を外して仕掛けるでしょ」

「まあ、哀ちゃんったら賢いのね」

「……………」

秀和は義房の自演を疑ったが哀の言うとおりあのギリギリの回避からそれは考えられない。

リスクが高いし、第一そんな事をやる意味もない。

哀は有希子に頭を撫でられて複雑そうな表情をしていた。

「じゃあ、やっぱりあのサングラスの人が……………」

「それは分かりませんが……………」

「あおう。お話中すみません。いいんですか？ あの録音…………、止めなくても……………」

「——っ!? いかん、録音しっぱなしだった!」

そんなやり取りをしていると、山村刑事は遠慮がちに録音を止めなくても良いのかどうか口を挟む。

えっと、弁護士さんはずっとそのまま録音し続けてたの…………?

「おい！ 親父の遺言消しちゃったんじゃないのか?」

「い、いえ…………! 間違つてB面を入れていたみたいでして、録音は無事です! 今、巻き戻します!」

うっかり弁護士さんが間違つてB面を入れていたおかげで遺言は無事だった。

なんか、録音した音声を聞くだけで面倒な感じになってるわね…………。

「山村刑事！ 風呂の釜戸の側から不審なカセットテープを発見しました!」

トラブルが一段落ついたころ、警官が現れてカセットテープが見つかったと告げる。

山村は自分が戻るまで大人しくするように指示して釜戸へと向かった。

「変ね。広美がお風呂の準備をしているときにはそんなことひと言も……………」

「となると、このテープはその後に置かれたのかしら？」

有希子は広美が風呂を炊いてるときにはこんなテープの存在は口にしてなかったと首をひねる。

ならば、その後にこれは置かれていたということになるわね……。

「山村刑事、それと凶器の包丁がちよつと妙でして……、凶器からは被害者の指紋と血痕しか検出出来なかったのですが——その指紋から推測しますと……凶器の包丁は被害者が順手で持っていたみたいなんです」

「確かにおかしいですね。思わず被害者が握ってしまったにしても、自殺に見せかけて持たせるにしても逆手が自然なはず……。他に鑑識は何か？」

また、妙なことになってきたわね。それじゃ、真知子が何かを突刺そうとして包丁を構えていたみたいになるじゃない……。

「いいえ、鑑識からは特に他には……。あと、ホテルに電話を試してみたのですが——」

「あ、あの。アリスちゃん。僕が刑事なの。君が現場をあまり仕切ると僕の立つ瀬が……」

「す、すいませ〜くん。つい、うつかり♡」

警官と普通に会話していたら、彼も真剣に話をしてくれるものだから、山村刑事は自分の仕事が取られたみたいにして思っただけ複雑そうな表情をしていた。

あたしも普段はここまで出しやばらないんだけど……。

「山村刑事、藪内真知子さんは確かにホテルには来ていましたが、何時に帰ったのかは分からないみたいです」

「そういえば、広美は11時に真知子が帰って来るって思ってたみたいよ。でも、実際は10時頃に帰宅していたから不思議がっていたわ……」

んっ？　ちよつと待って……、この扉からなら風呂から釜戸にはすぐ出られる。それにこの釜戸は遺体が隠されていた古井戸の近く……。ということはあのテープは——。

「どうしたの？ 有希子さん。それ、吸殻？」

「う、うん。ゴミを拾つところと思つてね♪」

「そう……」

裏木戸の側で有希子がタバコの吸殻を拾つてる様子を哀が眺めていた。

「ところで哀ちゃん。サングラスの怪しい人つてここから覗いて居たんでしょ？」

「ええ。あまりに怪しすぎて笑えるくらい不審だったわ」

「ふふつ、そつかそつかあ。……じゃあ、テープの音を聞きに行きましよう。哀ちゃん、アリスちゃん」

「何なの？ あのテンション。あなたを何倍か奔放にした感じよね」

それから有希子はニンマリと笑つて上機嫌になりあたしたちの手を引いてみんなが待つている部屋へと向かった。哀はそんな有希子の行動が理解できないみたいだ。

「やっぱりそういうことか……。大体わかつてきたわよ……。色んなことが……」

「思ったとおり、ホテルの会場内の音が入っていたのね」

発見されたカセットテープには真知子が出席したホテルの会場内の音声が録音されていた。

「やっぱり、そうだったか……。これを使えば色んな前提が覆るわ……。……」

「予想してたの？ てことは、もしかして……」

「うん。わかったわよ。誰が真知子さんを殺したのかと、ボウガンを使掛けたのか……。それに関してはね」

謎がすべて解けたわけではないけれど、真知子を殺した件やボウガンを仕掛けた件が誰の仕業なのかはわかった。

「含みがある言い方をするじゃない。まだ、足りない情報があるの？」
「分からないことはあるけど、それは後回しで良いかな。とりあえず、みんなを安心させるほうが先だし……」

「じゃあ、アリスちゃんの推理が聞けるのね！ 楽しみ〜！」

あたしが真知子を殺した人がわかったと口になると、有希子が大きな声でそれをみんなに伝えた。

周囲の視線がこちらに集まる――。

「えっ？ アリスちゃん、わかったのかい？ 誰が犯人なのか!？」

「そうですね。今回の事件はかなり複雑なので、順を追って説明しましょう。まずは茶箆筒に仕掛けたボウガンで義房さんを狙った事件ですが――」

「おいおい、あれはサングラスの男が犯人だろ？」

「いいえ、あの子変なことを口走った人が犯人です。録音が残ってますよね？ そちらのカセットのB面に……」

あたしはまずボウガンの事件の話を切り出した。

あの子の様子を弁護士が間違って録音をしていたので、それを再生してもらおう。

『早く止めんと……! ああっ!』

『――っ!? 伏せて!』

『なんだ!?!』

『……こ、これは?』

『た、ダンスよ! 後ろの茶箆筒から矢が!』

『……こ、これは……、ボウガン……!?!』

『はいストップ。わかりませんか?』

『いや、特に変なところは……』

カセットから流れたのは先程の騒動の様子だ。

この録音にはある人が妙なこと口走った証拠が残ってる。

「もー、思い出してください。あの矢は一瞬で襖を貫いて隣の部屋にいったんですよ。あたしたちは何がどうなったかなんてわからなかったはずです。なのに……、どうやってボウガンを見つけた前になれが矢だって気付いたんですか？ ねえ、教えてもらえませんか？」

藪内敬子さん♪」

「ま、まさか、敬子……お前……」

「そうです。理由は簡単ですよ。敬子さんがボウガンに矢を仕掛けた張本人だからです」

あんな一瞬で茶箆筒から矢が放たれたことを言い当てる事が出来るのは、その仕掛けを施した本人しかない。

だから、ボウガンを使つて義房を狙つた犯人は敬子ということになる。

「いや、それだけで敬子の犯行だつて決めつけ——」

「私がやったの！ で、でも、殺す気は無かつたわ。ちよつと脅かそうと思つて——」

敬子は観念して犯行を告白した。彼女は夫に黙つて作つた借金があり、遺産で精算しようとしたけど義房が現れて自分の取り分が減ることを恐れてブラジルに帰るよう促すために脅しをかけたそうなのだ。

はあ……、お金つて人をダメにすることが多いわね……。

「じゃあ、義母さんを殺したのも……、君なのか……？」

「ち、違う。あれは私じゃない！」

「ええ、真知子さんを殺したのは敬子さんではありません」

しかし、敬子は人を殺してはいない。真知子を殺した人物は別にいる。

「じゃあ、誰が……？ あのサングラスの男か？」

「いいえ。真知子さんを殺したのは……、この中にいます！」

「変なことを言うわね。広美さんが言つてたでしょう。駅前のホテルからここまで一時間はかかると……。9時くらいにホテルにいた彼女が戻ってきたのは10時過ぎ。10時以降にこの部屋にいたこの家の住人には犯行は無理じゃない？」

あたしが真知子を殺した人物がこの部屋の中にいると告げると哀はそれはおかしいと反論する。

まあ、彼女のことだから状況の確認を兼ねてあたしにそう言つてくれてるんだろうけど……。

「うん。だからあたしも犯行は10時以降だつて思い込んでいたの。でも、実際は違うのよ。昨夜、真知子さんは最初の電話をしてすぐはこちらに戻つてきたの。そして、林の中に車を停めてカセットに録音した会場内の音声を流しながら電話をした。あたかもまだホテルの

中に自分があると錯覚させるように……」

あのテープは真知子が自分のいる場所をまだホテルの会場だと錯覚させるために用意したものだ。

つまり、彼女は2回目の電話のときには既にこの家の近くに居たのである。

「ちよつと待つてください。な、なんで被害者の真知子さんがそんなアリバイ工作みたいなことを……?」

「事実が逆になってしまったということですよ。真知子さんはある人物を殺そうと考えていたんです。そのアリバイトリックを使つて……。そして、逆に殺されてしまった——。つまり、皮肉にもアリバイトリックは自分を殺した人間のアリバイを証明する結果になつちやつたんです」

山村刑事の疑問にあたしは答える。そう、真知子はアリバイトリックを用意して殺人をしようとしていた。

そして、返り討ちにされてしまったのだ。

「井戸で見つかった雨ガッパは返り血を浴びてもすぐに風呂で洗い流せるように真知子さんが着ていたもの。そして、あの姫椿は15年前の事件に関連付けようとして彼女自身がポケットに入れていたものでしょうね。釜戸の近くに落ちていたカセットテープは犯行に行く途中に落としたものか、殺されたあとに井戸に運ばれている途中に落としたものか分かりませんが……どちらにせよ、真知子さんは犯行後に薪と一緒に燃やしてしまうつもりだったのでしょう」

見つかった様々な物が真知子が殺人の準備をしていたことを物語っていた。

こんなに準備をしたのに、殺された上にそのアリバイトリックを利用されるのは本当に皮肉としか言いようがない。

「で、誰なんだよ? 探偵の嬢ちゃん。あの女を殺した奴つてのは」「真知子さんが狙ったのは、毎日決まって一番風呂に入るほどの風呂好き——つまり風呂に入る順番が唯一決まっていた人物……藪内義房さん、あなたですね……」

真知子を返り討ちにして殺めてしまったのは、藪内義房だ。

彼だけがいつお風呂に入るのか決まっているのだから――。

「叔父様が……?!? まさか……」

「ブラジリアン柔術には刃物で襲ってきた相手の腕をひねって逆に相手に刺す技があったはずです。あなたは襲われたときに、咄嗟にそれを使ってしまった――。真知子さんが彼を殺そうとした動機は恐らく遺産の取り分の関係でしょう……」

真知子は包丁で義房を刺そうとしたが、彼のブラジリアン柔術の技によって自らの胸を刺して絶命した。

このおじいさんが強いなんて思っても見なかったんでしょね……。カルロス引き連れていたんだし……。

「しかし、それでは叔父は正当防衛だ。黙っている理由がない」

「2通あったんですよ。脅迫状が……。ボウガンで襲われたときに義房さんは言っていましたよね? 『不屈き者がまだ居たのか』……と。どう考えてもアレは一回誰かに襲われた経験がある人の反応ですもの」

「……………」

あたしは自分の推理を披露したが、義房はひと言も声を発しない。

やはり言えないことがあるのね……。それがあたしにずっとまわりついていた違和感の正体……。

「はあ……、ここまで言っても何も話さないところを見ると……。やっぱりあなたは守ってるんですね。大切な人を……。いやカルロスさんを」

「――っ!?!」

正当防衛なのに義房がなぜ口を割らないのか……。それはカルロスが関係するのではないのかと、あたしは推測した。

「叔父様がカルロスを守ってるってどういうこと? アリスちゃん」
「ここからは、憶測になっちゃうんですけど、義房さんはカルロスさんをボディガードと言いながら、本人は強いですし、風呂は一人で入っています。カルロスさんをみんなの目に付く場所に置いて……。それに――あのボウガンを避けるとき……。カルロスさんを庇って避けていた。だから思ったんですよ。義房さんがカルロスさんに守られて

るんじやなくて、逆に守ってるって」

刃物で襲われても自衛出来るほどの義房にはボディガードは不要。それでもカルロスから入浴時以外は離れずについて、ボウガンが飛んできたときも彼を庇いながら避けていた。

何故だか分からないけど、義房がカルロスを守っているようにしか思えない。そして、その理由こそ彼が未だに沈黙している理由なので——とあたしは思っている。

悔しいけど降参するしかないみたいね……。あたしはひと呼吸置いて、障子の外に向かって声をかけた——。

「はあ……。ですから、聞きたいんです。あの蔵の中にはその答えはありましたか？ 工藤優作さん？」

「えっ？」

「驚いたな。私が居たことを知っていたのかい？」

あたしが声をかけると障子が開いて外からサングラスとマフラーで顔を隠している男が入ってきた。

声は思いきり優作の声だったが……。

「さ、サングラスの男！」

「やっぱり、優作さんじゃないですか。怪しい格好なんかしてるから……。ちよつと戸惑っちゃいましたよ」

「はっはっは、悪かったね。ちよつと姿を現すのが気まずくて……。ほら、だって……」

「むう〜」

優作はサングラスとマフラーを取って笑顔を見せ、有希子はムツとした表情で彼を睨む。

ああ、気まずいからあんな怪しい格好でこつちを探っていたんだ……。……。

「コホン、とにかく全ての答えは遺言状のテープの中にあります。かけてみてください」

弁護士は優作に促されて遺言状のテープを再生させる。テープを再生したら遺産の相続人に予想外の名前が出てきた。

「真知子、広美、秀和、義行、敬子、そしてカルロス——」

そう、義房がボディーガードとして連れてきたはずのカルロスの名前が入っていたのである。逆に、本来入っているはずの義房の名前が入っていないかった――。

「か、カルロスの名前がなぜ……？ それに叔父様の名前が無いなんて……」

そこから優作は説明した。義房だと思われた人物の本名は「ヒクソン田中」。義房本人ではなく、彼に成り済ました日系二世のブラジル人である。義房の息子であるカルロスを守るために同行したブラジリアン柔術の達人だったのだ。

本物の義房とは同じ農場の友人であり、竜巻で左腕を失った義房の代筆をしていたので、彼の筆跡が年賀状と同じであたしは彼が偽者だと判別できなかったってわけ。いやいや、何その偶然……。

蔵の中に隠し部屋があつて、そこにあつた手紙に書いてあつたみたいだけど……。

彼は半年前に死んだ義房のふりをする事で脅迫者の矛先をカルロスから自分に向けるようにしてみたみたいだ。

そして脅迫者を捕まえるつもりだったが、真知子に殺害されそうになり、返り討ちにした。

彼は困った。正当防衛とはいえ警察に連行されてしまうからだ。

脅迫者はもう1人おり、それが誰か分からないうちにカルロスの下を離れると彼が危険な目に遭う可能性がある。

そう考えた彼は井戸に死体を隠した。

理由はあたしの言ったような見せしめのためではなく、やって来る刑事が話せる男かどうか見極めるためだった。

しかし、山村刑事があまりにも頼りなかったため、仕方なく遺言発表まで沈黙を守っていたのだった。

田中はすべてを見抜いた優作を信頼して、最後には彼が呼んだ目暮警部に連行されていった。

「やっぱり、あの蔵の中に答えがあつたんですね。ちゃんと探しておけばよかった」

全てが終わって、あたしはあの蔵の中を徹底的に探さなかったことを後悔した。

まあ、負け惜しみも良いところなんだけど……。

「そういえば、アリスちゃん。どーして、あの人が蔵に居たのがわかったの？」

「タバコの残り香ですよ。2回目蔵に入ったとき——タバコの匂いが仄かにしたんです。それが前に優作さんと会ったときに吸ってたタバコの銘柄の香りに似ていた気がして……。確信したのは、有希子さんが吸殻を拾って嬉しそうな顔をしたとき——やっぱりサンダラスの男は優作さんで、蔵の中に何かあると探っているんだろうなって推測したんです」

変だと思ったのは哀が蔵が開いていると指摘してその中に入ったときだ。

新一の記憶にも刻まれている香りが人よりもちよつとばかり敏感なあたしの嗅覚を刺激して、そこから優作が愛する妻を追ってここまで来たのではないのかと疑ったのだ。

「見事な観察力だ。ツメの甘い部分はあるけど、探偵として頑張って経験を積んでみたいだね」

「でも、蔵を探ったってことは、最初から疑っていたんですよね？ 義房さんが偽者だって」

優作はあたしを褒めてくれたけど、腑に落ちないのは彼が最初から義房を偽者だと疑っていたような感じがしたことだ。

じゃないと蔵の中の隠し部屋なんて見つけられないと思うし。

「それは簡単なことだよ。考えてみたまえ、左利きのファーストが足を伸ばすのは左足だ。つまり右足を怪我していた彼は偽者ってことだよ」

「あー、そっかー。蘭ちゃんと話すためにサッカーはよく見てるんだけど、野球はあんまり見てないですね」

割と簡単なことを見落としていて、あたしは愕然とした。

もしかしたら、年賀状を下手に見つけてなかった方が気が付いたかもしれない。筆跡が同じなら同一人物だと決めてかかったのは浅は

かだった。

「タバコの残り香に気付いて、そういう初步的なことにうっかり気付かないのはあなたらしいわね。本当に甘いんだから」

「哀ちゃんだって、気付かなかったじゃん」

「しかし、それでもカルロスを守ろうとしている田中さんの行動に気が付いたんだ。もっとその観察眼を磨けば、いい探偵になれるさ」

優作にはいい観察眼をしてるって言ってもらえたけど、惜しいじゃダメなんだよね。

今回は命の危険は無かったけど、こういう見落としには気をつけないと……。

「ふうんだ。何がいい探偵になれるさ、よ。変な格好してアリスちゃんの捜査の邪魔しちやったりして。結局、正体もバレてるし。格好悪いんだ〜」

「有希子さん。わざわざ迎えに来てくれたんですから、許してあげたらどうですか？ 吸殻を見つけたとき、すつごく嬉しそうにしてたじゃないですか」

旦那がロサンゼルスから群馬まで駆けつけて来たのにまだ拗ねている有希子。

あたしは何とか仲裁しようと思口を出した。

「そんなに嬉しそうにしてたのかい？」

「それはもう満面の笑みで、王子様を見つけたお姫様みたいでしたよ」
「結局、口でなんと言おうと待ってたってこういうことでしょう」

哀もいい加減この夫婦喧嘩が終わってほしいと思ってるのか、あたしと一緒に援護射撃してくれた。

「あー！ アリスちゃんも哀ちゃんも敵に回るつもりく!? ——っ!?」

「帰るぞ。有希子」

あたしと哀が有希子を諭したので、それにも文句を言おうとした彼女だが、優作は彼女の両肩をポンと抱いてひと言告げると助手席のドアを開けた。

「も、もう。しょうがないわね……」

彼女は少しだけ頬を桃色に染めながら、彼のエスコートに従って車の中に入る。

素直にロサンゼルスに帰ってくれそうね……。

「女って意外と単純ね」

「それをあたしらが言うのはどーかな？ でも、新一が気付いたときに両親が離婚しちゃった、ていうのは避けられて良かった」

まあ、何というか……、色々と疲れた――。

あたしの力不足がわかったから、もつと経験を積んで名探偵を目指さなきゃ――。

容疑者・毛利小五郎 前編

「ビーチにメロンにさくらんぼ！ やっぱ、夏はフルーツ！ 食べ頃つすな！ おおっ！ こいつは今日最大級のフルーツ！ ——ぬわあああつ！」

「やっくん。先生つたら、えっちい♡」

軽井沢のホテルに行かないかと小五郎に誘われてあたしは蘭と共に彼に同行して遊びに行った。もちろん、ホテル代はあたしも出してるんだけど……。

そんな小五郎だけど、お目当てはプールで女の子を眺めることだったみたい。あたしもひと泳ぎしてただけど、蘭はちよつとお怒りモードで彼の聞いているMDの音量を最大に上げちゃってた。あれは耳に響くわね……。

「んなんてことすんだあつ!!」

「アリスちゃんをやらしい目で見ないでもらえる?」

「何が軽井沢のホテルに避暑に行かないか……よっ！ こっそり海パン用意して」

「アリスだって泳いでるじゃねーか！」

「そういえば、何でアリスちゃん水着持ってきたの?」

小五郎は確かにあたしたちにはプールのあることは言っていない。

でも、あたしは彼がプール付きのホテルに行くこと確信していた。

「えっ? 先生が流れるプールのCM見て、これだって眩いてたから。プール付きのホテルにしたのかなって」

「んもう。無駄に推理力を使わないでよ。とにかく、もう行くよ。MDもお母さんに買ってもらったものなんだから、エロオヤジには貸しません」

ということで、早々とプールからは退散となった。もうちよつと泳ぎたかったけど、仕方ないわね……。

「仕方ねーだろ? 毎日、毎日、事件続きでストレス溜まってんだから」

「お母さんに悪いと思わないの?」

小五郎はストレス解消がしたいと口を尖らせたが、蘭は英里のことを持ち出して悪いと思わないのかと言及する。

彼女からすると早く復縁してほしいんだろうな……。だから、女性にうつつを抜かしている小五郎が許せないんだろう。

「わかんねーぞ。あいつだって今ごろ、若い男と——」

「ネクタイ選んでますね。英里さん……。割とイケメンの男性と……」

なんてことを話していると、目の前で男の人にネクタイを選んでいる英里と遭遇した。

なんて、偶然だし、なんてシーンでばったり出会ってるのよ……。

「お、お、お母さん!」

「嘘っ!? あなたたち、どうしたの?」

英里は気まずそうな顔をしてこちらを見ていた……。いや、何がどうなってるのかな……。

「だから、言ったでしょ。弁護士仲間で軽井沢に旅行に来てたって」

「じゃあ、あのネクタイって誰かへのプレゼントなんですか? 随分と真剣に選んでましたけど」

「そ、そうよ。知り合いへのプレゼントを探すのを手伝ってもらったの」

英里は弁護士仲間と一緒に旅行に来ていて、誰かさんへのプレゼントを選んでたみたい。

なるほど、そういうことか……。

「へえ、それはてっきり僕へのプレゼントかと思ってましたよ」

「ちよつと、佐久くん!」

英里とネクタイを選んだのは佐久さくのりふみ法史。刑事事件を専門的に扱う弁護士みたい。

彼は英里をからかっているようだ。

「けっ、ガキじゃあるめーし。一人で選べねーのかよ」

「あら、悪かったわね」

「まあまあ、先生も英里さんも空気が悪くなりますから。落ち着いてくださいな」

小五郎と英里は一触即発って感じでバチバチと火花を飛ばしている。いやー、いつつこの二人って一緒になるとこんな感じよね……。

「なるほど、No. 1の女王様もダンナがからむとただの庶民に戻っちゃうんですね!」

「女王様?」

「知らないの? いかなる者も寄せつけない法廷での凜とした態度!

裁判長をも圧倒する弁論術ついた字が法曹界のクイーン」

英里のことを持ち上げるのは碓氷律子うすいりつこという名前の弁護士で、他の弁護士によると現在話題となっている工場の汚水問題の裁判を二審で逆転し、最高裁まで持ち込んだやり手らしい。

彼女は英里の足元にも及ばないと皆の前では謙遜していたが……。

佐久、碓氷に続いて姿を現したのは塩沢憲造しおざわけんぞうと三笠裕司みかさゆうじ——二人とも英里の弁護士仲間だ。

「しかし別居中とはいえうらやましいですな。無敗の女弁護士に迷宮なしの名探偵カップルとは」

「いやあ、高慢ちきで高飛車な女王陛下を妻に持っただのしがない男ですよ」

「そうね、だったら私は人のアラを探す事に長けている、姑息で不潔で女に見境のない名探偵さんを人生の伴侶に選んでしまったバカな女ってところかしら?」

二人とも、お互いの悪口を言うときはなんでこんなにウキウキになるんだろう。

小五郎なんて、こんなに切れ味の鋭いセリフ滅多に言わないのに。

「ったく、無理しちゃって。毛利さんが解決した事件記事を一つ残らずスクラップしてるじゃないですか」

「じゃあ、お父さんと同じだ。お母さんの担当した裁判の記事を夜中にこっそり見てるもん」

「へえ〜。いがみ合っているように見えていい夫婦してるんだね。」

やっぱりお互い意地張ってるだけじゃないですか！」

「そうよね。アリスちゃんの言うとおりの意地なんて張らないで、ちよつとは歩み寄ってよ」

とはいえ、この夫婦は割とお互いのことを想い合ってる。

度を超えて意地つ張りなだけで、いつ寄りを戻してもおかしくないのだ。蘭もそれがわかってるからこんなに一生懸命なんだよね……。彼女たちもこう言ってることですし、ここ軽井沢では一時休戦しませんか？」

「英里が嫌じゃねーなら、おれは別に……」

「私は別に嫌じゃないけど……」

あら、上手く行きそうじゃない。これは思いもよらず復縁なんてあり得るかもしれないわ。

なんて、考えてるあたしや蘭は甘かった――。

「で、すっかり出来上がっちゃったと……」

「律子しえんしえーい、きやわいい！ 何もかもボクちんのタイプでしゅー！ にやははははっ！」

「……………帰るわ」

「ちよつと！ お母さん！」

「あらあ、こりや先生が悪いわ……」

悪酔いして、碓氷弁護士に絡みまくる小五郎。

あたしも蘭もこの人に酒を飲ませたことをしこたま後悔した。

英里はムツとした表情を浮かべて退席する。

「お母さん！ お父さんがお酒を飲むとああなるのは知ってるでしょ？ それに、お母さんだつて仲良く男の人とネクタイなんか……」

「英里さんが先生にイラツとするのは分かりますけど……、そのネクタイ、渡すの止めたりしませんよね？」

「えっ？ アリスちゃん、それはどういう？」

「やだ、蘭ちゃん。明日が何の日か忘れたの？」

昼間に英里が佐久とネクタイを選んでいたことを不快に思っていた蘭を見兼ねて、あたしは英里が誰のためにネクタイを選んでいたのか口にする。

ホントは英里の口から言ったほうが良いんだけど……。

「まったく、あの人と違って鋭いんだから。アリスさんの言うとおり、これは明日の私たちの結婚記念日に渡そうと思つてたのよ。蘭も可哀想だし……、そろそろ許してあげようと思つてね……」

「お母さん……」

「でも、ダメにして正解だったわ。変な気を起こしたのが間違いよ」

「じゃあ、私がお父さんに渡してくる！ 行こつ、アリスちゃん」

英里の話を聞いた蘭は彼女からネクタイを奪い取り、小五郎に渡そうと彼のもとに向かおうとする。しかし――。

「――ちよつと、待ちなさい！ ――や、やっぱり自分で渡すわ……」
「もー！」

「あらあら、これは盛り上がって来たわね」

頬を赤らめて英里は自分でネクタイを渡すとあたしたちに告げた。なんか、ホントに仲直り出来そうじゃない……。

――だけど、どこを探しても小五郎は居なかった……。

「妃さん、どうしたのですか？」

「夜遅くにごめんなさいね。もしかして、うちの人が来てないかと思ひまして」

「……来てないですけど。何かあつたんですか？」

最後に訪れたのは碓氷の部屋だ。小五郎が彼女にやたらと絡んでいたからもしやと思つて――。まあ、居たら居たで大問題だけど……。

「父が居ないんです。私たちの部屋にも他の方の部屋にも」

「そうなんですか……」

「……………外をぶらついているだけかも知れないわね。あの人、風に当たるの好きだから……。――あつ、ごめんなさい。外を探してみる

わ

小五郎がホテル内に居ないなら外に居るだろうと英里は思い直して、外を探すことにした。

なーんか、変な感じがするわね……。

「あの確氷って人、ちよつと怪しいのよね。何か隠してるような気がする……。部屋の中に強引に入ってみたほうが良かったかしら」

「ここら、探偵が何の証拠も無しにそんなことしたらダメでしょ」

「冗談ですよ。でも、英里さん……、あの人には気を付けたほうが良いですよ。彼女からは敵愾心みたいなモノを感じましたから……。法曹界のクイーン……って言葉を発したときに、嫌な感じがしたんです」

確氷って人が何か引つかかって、それを口にするると英里に咎められてしまった。

でもね。相手を過剰に持ち上げるのって、劣等感の裏返しだったりするのよ。あたしだって、あまり人を悪く言うのは好きじゃないけど……。

「珍しいね。アリスちゃんが人の悪口みたいなことを言うなんて」

「蘭ちゃんのお母さんだからね。嫌な目に遭って欲しくないじゃん」

「忠告は聞いておくわ。でもね、弁護士っていうのはやっぱり人を信じる仕事だから。疑うのはダメ探偵に任せておくことにしてるの」

「これは失礼しました。じゃ、ダメ探偵、じゃなかった、先生を探しに行きましよう♪」

英里は弁護士とは信じるのが大事だと伝えた。

それはとても尊いことだと思う。まあ、彼女がそう言うならあたしも小五郎を探すことに集中しましょう。

「午前2時……、さすがに遅すぎるわね」

「まだ、見つからないんですか？ 毛利さん」

「ええ、外も探したのに、どこにも……」

結局、外を探しても小五郎は見つからない。どこに彼は消えてし

まったのか……。

再び、英里の弁護士仲間も含めて全員があたしたちは碓氷の部屋の前に集まる。あれ？ これって……。

「蘭ちゃん、こんな札さつきはなかったよね？」

「うん。無かったと思うけど……。まさか……」

あたしが「起こさないで」という札がドアノブのところに引っ掛けてあることに気付くと、蘭は顔を曇らせた。

いやいや、さすがに小五郎も不貞行為を働くなんてことないと思うんだけどな。

「それはないと思うよ。あの二人が……。——妃さん？」

塩沢が蘭が想像してるようなことはあり得ないと呟いたとき、英里が電話をかける。

おそらく、小五郎の携帯に電話したのだろう。

「……ちよつとお母さん。何を——」

「しっ……、静かに……」

聞き慣れた電子音が部屋の中からする。これはタイミング的にも間違いなく——。

「これは先生の着信音……。碓氷さんの部屋から……」

「あなたの勘を信じてあげれば良かったわね……。三笠くん、フロントに言つてマスターキーを」

「あ、はいー」

英里は三笠にマスターキーを取りに行くように頼み、まもなくホテルのボーイがマスターキーを持ってやってきた。

修羅場の気配がするけど……。嫌だなあ、殺伐とするのは……。

「どうぞで……」

「——っ!? う、碓氷さん？」

「どうかしましたか？ ——あっ！」

部屋の扉を開けた瞬間、英里と佐久の顔が引きつる。まさか……、嘘でしょ……。

なんで、碓氷が倒れてるの……？ だって中には小五郎の携帯が

……。

「……こ、これは。——すみません。チェーンカッターをすぐに……！」

「そんなもの待ってられるか！ おらあつ！」

「うえつ!? そんなに簡単にチェーンつて千切れたつけ——?」

あたしがボーイにチェーンカッターを持ってくるようにお願いした刹那、佐久が物凄い勢いで体当たりして、チェーンを千切りながら中に入った。凄いパワーね……。

「脈がない。もう死んでるわ……」

「首を何かで絞めたあとがある……。つまり絞殺……」

確氷は既に亡くなっていた。首を絞めた跡があることから、紐状の何かで絞殺されたと容易にわかる。

あたしがそう判断したとき、もそもそと布団が動いた——。

「うくん、うっせえなあ。さつきから……」

「えつ?」

「せ、せんせい?」

最悪だ……。ベッドの中から小五郎が大あくびしながら出てきた。

ええーつと、マジで何してんのよ……。

「ふあくく? なんだあ? 今なにが起こって……」

「あつ、先生、そこ踏んじやダメですよ。その電話のコードが多分凶器ですから」

「凶器?」

「はい。その確氷さん、首を紐状のモノで絞められた跡があるんです。だから、多分それでギューツとされて……」

あたしは小五郎が床に落ちてる電話のコードを踏もうとしたのでそれを止める。

状況から考えて凶器はそれだろう。

「おい、殺害って? 誰がやったんだ?」

「あなたしかいないじゃないですか!」

「待ってください! きつと何かの間違いです! 父が人を殺したな

んて……、そうよね？ お母さん」

当たり前だけど、状況が状況なので小五郎は殺人犯扱いされてる。蘭は当然、自分の父親が人殺しなんてするわけないと彼を庇ってるけれど。

「刑法第199条、人を殺害したものは無期または3年以上の有期刑、もしくは……死刑！」

「はい……？」

「いやいや、あり得ないでしょ……。こんなところで寝てるのも含めてだけど……」

英里は無情な宣告を小五郎に告げる。彼が殺したとは思ってないけど、女の部屋に酔ってるとはいえ何で入り込んでいるのよ……。

そういう所は何とかして欲しいんだけどな……。

そして、程なくして警察が現場に到着した――。

「ふうん、じゃこういう事ですね？ あなたの主人が行方不明で、この部屋が怪しいと踏んでドアの前で電話をかけた。すると案の定ご主人の携帯が部屋の中から聞こえ、マスターキーで鍵を開けて入ろうとしたら、チェーンロックがかかっている、ドアの隙間からこの女性が横たわっているのが見えた。そしてドアを破って中に入ったら、女性はずでに息絶えていて、その時ご主人がこのベッドで寝ておられた、と」

「ええ……」

うわっ……、小五郎ってツイてないわね。よりによって、山村刑事が来るなんて……。

これは警察に任せておくと彼は犯罪者にされてしまうわ……。

「じゃあ残念ですが、犯人はご主人つてことになっちゃいますよ。あれ？ あなた、ひよつとして毛利小五郎さん？ ラッキーです。名探偵であるあなたがいれば百人力。聞かせてくださいよ、この事件に対するあなたの見解を」

「そうね、犯行当時の事をじーっくり話してあげれば？ ここのベッ

ドで高いびきをかいてた名探偵さん」

山村が小五郎が居て頼もしいと声をかけると、英里は嫌味たつぷりに彼のことを話す。

あはは、彼女……、思った以上に怒ってる……？

「え？ ご主人？ 毛利さんが？ ——だってそれじゃあ、あなたが犯人？ そんなあ、どうすんですか？ ズバリの小五郎の推理ショーは」

「知るかあ〜!!」

まあ、状況的に仮に目暮警部でも小五郎が犯人扱いされるのは仕方ないだろう。

こりゃ、あたしが何とか彼の冤罪を晴らすしかないんだろうなあ。

「山村刑事、とりあえず毛利さんに重要参考人として署まで来てもらいましうか？」

「ええ、毛利さんがよろしければ」

「ふん！」

「あーあ、推理ショー見たかったなあ」

小五郎も自分の置かれた立場は理解してる。だから連行されることに素直に応じていた。

何か可哀相になってきたわ……。

「じゃあ起訴前弁護は英里さんだね」

「起訴前弁護って……？」

「警察に不当な取り調べを受けないように、弁護人が付く制度さ」

「悪いけど私パス。最初からクロだとわかってる人間の弁護なんて御免だわ。私の無敗の経歴に傷をつけたくないし」

当然、あたしも起訴前弁護は英里が付くかと思ったけど、彼女は拒否した。

無敗の経歴に傷がつくとか言っているけど、どうなのかしら……。
「ふん！ こっちもハナから願い下げだよ！ 下手に警察に顔出しやがったら承知しねえぞ！」

小五郎も売り言葉に買い言葉という感じで英里に自分のところに顔を出すなと忠告する。

ということ、佐久が小五郎の起訴前弁護に立候補してくれて、この場は収まった。

蘭はずっと不安な顔をしている。無理もないわね……。

「お父さん……、お母さん……。ねえ、アリスちゃん、お父さんを助けてあげて！ きつと何かの間違いで——」

「当たり前だよ、蘭ちゃん。先生に濡れ衣着せた奴がいるのは間違いない。大丈夫、あたしたちがきつと犯人を見つけてあげるから」

あたしは蘭の両肩を抱いて大丈夫だと伝える。なんせ、今日は自分だけじゃなくて強い味方がいるからだ。

「……あたしたち？」

「うん♪だって、ほら——」

「手袋を貸してもらえる？」

「えっ？ か、構いませんが……」

英里が山村から手袋を貸してもらって現場の検証を開始する。

どうやら彼女もこの殺人現場に残された違和感に気付いてるみたいね……。

「腑に落ちないのは次の三点。1つ目は凶器に使われた電話コード。衝動的に殺害したのなら、コードを引きちぎって使うはず。でも電話はずれていないし、コードの両端も無理やり抜いた跡は残っていない。2つ目はあの人の携帯電話。わざわざ音が外に漏れるようにドア口に置かれていたのは、作弄的なものを感じるわ。3つ目は——」

「先生の両手ですね。最後にあたしたちが彼女に会ってから遺体を発見するまで40分くらい。コードで殺害したのならコードの跡が残ってるはずです。革製の手袋でもしていたのなら別ですけど、見当たりませんか？ 英里さん」

あたしも手袋をつけて現場をもう一度観察してみることにした。

幸いなことに小五郎への濡れ衣の着せ方はかなり雑と言っても良かった。よく見れば、現場は彼が犯人じゃないことを示している。

「ええ、そのとおりよ。あなたなら、気付くわよね」

「なるほど、言われてみれば」

「じゃあ、もしかしてお母さんがお父さんと行かずにここに残った

のって……」

「バカね、あたしはあなたの倍もあの人と付き合ってるのよ。そりゃ最初はカツとなっちゃったけど、あの人を殺せる人間かどうかくらいはわかるわよ」

そう。英里は最初から小五郎が殺したとは思っていない。

どっちかと言うと碓氷の部屋で眠っていることに怒っていたのだ。その気持ちはよく分かる。

「ねっ、言ったでしょ？ 何だかんだ言たって愛してるのよ。先生のこと」

「勝手なこと言わないで。自分の夫が殺人犯にされるなんてどんなに冷めてても嫌に決まってるでしょ？」

「はいはい。そういうことにおきましよう。女王陛下がそう仰るのでしたら。——あたしも先生を殺人犯にしようとした奴を許すつもりはありません。一緒に頑張りましょう」

今回の事件は無敗の弁護士とタッグを組んで捜査が出来るのでこれほど心強いことはない。

彼女と事件に挑めば、きっと真犯人を見つけられることが出来るはずだ。

「って、あなたはアリスちゃん。どうしてここに？」

「あたしは毛利先生の助手ですから、旅行に連れてきてもらってたんですよ。あれ？ 軽井沢って長野県ですよ？ なんて、山村刑事が？」

「ここは群馬県との県境だから、群馬県警の管轄なんだよ。この前の君の推理凄かったな。生で聞けたって自慢できたよ」

そっか、軽井沢って群馬県警の管轄になったりするんだ。何かこの地区の人は損した気分になりそうな話だな……。そこを何とか長野県警の管轄にしてもらえないだろうか……。

「あなた、こちらの刑事さんと知り合いなの？」

「ええ、前に有希子さんと群馬に行ったときに事件に巻き込まれちゃって」

英里に前に有希子と事件に巻き込まれて山村と面識があると答え

るあたし。

あのときは苦い経験もしたから山村刑事のポンコツぶりもよく覚えてる。

「有希子と？ ふーん。あら？ このメモ用紙、千切れてるわね……」
「多分、これですよ。何ですかね？」 ハヤシ 2 “ って書いてありますけど……。心当たりありますか？」

英里がメモ用紙が千切れていると口にしたので、あたしはゴミ箱から発見した紙を彼女に見せる。

これは……、何を意味してるのかしら……。

「これは、確かに確氷さんの字……。もしかしたら、今度彼女と組むことになっていた林弁護士のことじゃないかしら？ まだ、林さんのことは彼女には伝えてないけど……」

「あー、じゃあ林さんって人から電話とかあったんじゃないですか？」
なるほど、林さんと関わる予定があるならそれで確定っぽいわね。
なんでそのメモがゴミ箱に捨てられてたのか分からないけど……。

「でも、林さんにはこのホテルに泊まることは教えてなかつたはず――」

「塩沢様に聞いたと仰ってましたけど……」

「えっ？」

「すみません、林様からのお電話をこちらにお繋ぎしたのは私なんです」

急にホテルのボーイが話しかけてきて、林からの電話をこの部屋に繋いだと教えてくれた。

じゃあ、やつぱりこのメモはそういう意味で間違いないわね。

「あなた、何ですか？ 勝手に」

「ちよ、ちよつと気になることがございまして、刑事さんにお伝えしたほうがよろしいかと思ひまして……」

ボーイは何か伝えておきたいことがあるみたいだ。

これは何か大きなヒントになる予感がするわね……。

「気になること？」

「実は林様からのお電話は二度あったんです。一度目はきちんと繋

がったのですが——二度目は繋がらず、こちらの部屋の様子を見に来たんです。2回ばかり……」

「2回も?」

「このボーイ、2回も確氷の部屋に様子を見に来たらしい。」

「これはちよつと普通じゃないわね……。」

「ええ、林様が『風呂に入ってるだけかもしれないから、もう一度見に行つてほしい』って仰るものですから——そしたら、二度目に部屋を訪れたとき、『起こさないでください』という札と一緒に紙が貼られていたんです。——その紙には『すみません、お金はちゃんと払います』と書いてありました」

「それは、林さんには伝えたのですかね?」

「はい、でも林様は『2時の待ち合わせを4時に変えて欲しい』と——」

うーん。何だこれ? 張り紙の意味が全然分からないわ。

確氷が残したメモの意味はわかったけど……。

「ゴミ箱のメモは林さんと2時に待ち合わせをしていたという意味でしょうけど」

「ドアのメモは2回目の電話が通じなくなっていたとき、既に確氷さんが殺されていたならば——犯人が札と一緒に残したってことになりますよね? でも、それじゃ先生が犯人じゃないって言ってるようなものなんですけど」

「そうね。泥酔してたあの人がメモなんて書いて残せるわけはないもの。しかもこのメモと林さんの用件は全く噛み合っていない」

そう、犯人の行動が理解出来ないのだ。わざわざ頓珍漢なメモを貼った犯人の意図が……。

こんなことをしたら、泥酔した後に被害者を絞殺したという犯人の思い描いたストーリーが崩れるというのに……。

「なぜ、こんな行動を犯人が取ったのか……その辺りから探ってみますか」

「あ、あの……、僕が刑事なんだけど……。まっいいか……」

山村刑事はグイグイ捜査を進めていくあたしと英里を見て諦めた

ような表情をする。

この人には悪いけど、今回は彼に気を遣う余裕なんて無いのよ。小五郎を殺人犯にするわけにはいかないのだから――。

容疑者・毛利小五郎 後編

「英里さん、その林さんって方と碓氷さんは面識がないというのは確かなんですか？」

「ええ、会ったことが無いのは間違いないはずよ。だって、私は林さんのことすら彼女に伝えてなかったのだから」

英里は林と碓氷の面識がないとはつきりと断言する。

「じゃあ、やっぱりボーイさんの言ってた張り紙は意味不明になるわね……」

「ということは、お金のやり取りなんてするはずないですよね。『ハヤシ 2』のメモの方は2時に二人が待ち合せたという意味でまず間違いないと思えますが……」

「そうね。それしか考えられないわね」

捨てられていたメモの方は意味が単純で解りやすかったから良かった。

でも、最初に見たときは何のことやらさっぱりだったな……。英里やボーイが居なければ林って人の名前なのか解ったかどうかも怪しい……。

「奥さん、それにアリスちゃん。残念ですが、犯人はやはり毛利さんのようです」

「はあ？」

「コードから毛利さんの指紋が検出されました。——さらに、碓氷さんに彼が言い寄っている姿も目撃されています」

「いやいや、ちょっと待ってよ。山村刑事……」

犯人が冤罪ふっかけようとしたんだから、そりゃあ眠っている小五郎の手を利用して指紋くらい付けるに決まってるでしょ。

「言い寄っていたくらいで犯行の動機にするのもどうかしてるわよ。それに、そもそも手にはコードの跡がなかったってあたし言ったよね？」

「そう思ったあたしはそれをそのまま彼に伝える。すると——」

「名探偵というのはいわば殺しのプロ。跡を付けずに締め殺すことく

らい出来ますよ。言い寄ったのは口実で……彼は長らく殺しを見てきた経験から……、自分でも人を殺したくなっただけでしょう」

この前、哀が言ったとおり群馬は弁護士が忙しくなりそうね……。冤罪で溢れかえって……。

この人、前にもあたしに向かつて似たようなことを言ってた気がする。ええーい、こうなったら――。

「あたし、ドアの前で変な糸を見つけたんです。ええーつと、どこにあっただけ?」

「ああ、あの糸ならもう鑑識さんに渡したわよ。側に落ちてたひしやげたチエーンロックの鎖の欠片と一緒にね」

さすがは英里だ。あたしがこの密室トリックを解いたキーアイテムを既に鑑識に回しておいてくれたらしい。

今回は楽だなー。いつも小五郎のフォローばかりしてるから、スムーズに事が進むのが気持ち良くて仕方ない。

「そうなんですか? でしたら密室のトリックは……」

「ええ、それは大体解けたんだけど……」

「後は証拠……ですよね?」

「そうなの。犯人の目星も付いてるから、あと一歩なのよ」

英里も密室トリックと犯人は大体解ってるみたいだ。

しかし、証拠がない。犯人は実に巧みに犯行を行っているからだ。

キーになりそうなのはお金のやり取りを示唆するあの張り紙だけだ……。

「蘭、MD貸してくれる? 音楽を聞いて考えをまとめたいの……」

「音楽かー。それもいいなあ。あたしは何か食べたいけど……」

あたしは気分転換にルームサービスのメニューを眺めていた。

色々あるわね。カレーとかパスタとか……。

「アリスちゃん。まさかここで何か食べるつもり?」

「さ、さすがに人が殺された部屋でご飯は食べたくないかな……。――

っ!? ああっ! お腹鳴っちゃった」

あたしはルームサービスのメニューを見てついついお腹を鳴らしてしまった。

もう深夜というか早朝近い。ずっと起きてたから空腹だ。

ちよつと待つて……。そういえば、あたしは「ハヤシ 2」のメモの意味がさっぱり分からなかったけど、犯人も最初はそうだったんじゃないかしら……。

そして、犯人はメモの隣にあったルームサービスのメニューを見て――。

全ての点が一本の線に繋がった。ならば、犯人はおそらく――。

「じゃあ、後で何か食べ物頼もつか？」

「――うーん、やっぱり今すぐ頼もうかな？ とりあえず、2人前ほどこのメニューを」

「そんなにお腹空いてるの？」

「ふふつ、そうじゃないわ。犯人に教えてあげるのよ。自分が犯した致命的なミスをね」

よし、ルームサービスを頼もう。あたしもお腹空いてるし、犯人に確固たる証拠も突きつけられるし、一石二鳥よ。

「あら、面白いことを言うじゃない。アリスさん。ルームサービスを頼んで何をするつもりなの？」

「ええーっと、英里さんや山村刑事にも協力して欲しいんですけどお――」

あたしは英里と山村刑事にこれからして欲しいことを説明する。

犯人が思ったとおりの行動を取ってくれたらあたしたちの勝ちだ――。



「あら、佐久さん。どうされましたか？」

「君は確か毛利さんの助手のアリスちゃん。一人なのかい？ 妃さんがこの部屋で話があるからって」

「なーんだ。てつきり、あたしを口説きに来たのかと思いました♡」

部屋に訪れたのは佐久であった。あたしは彼に笑顔を向ける。

まあ、営業スマイルってやつだ。

「はは、悪い子だね。大人をからかうなんて。ところで、君はどうなんだい？ 毛利さんの無実を信じてるのかい？」

「ええ、そうですね。ドアの前に落ちていた糸……そして鎖の欠片……。あの糸を使えば、ドアの外からでも密室を作れるので……。あるいは先生の無実を証明できるかも知れませんか」

彼はあたしを試すようか口調で捜査の進捗を尋ねてきたので、彼のリクエストに応えることにした。

密室トリックは実に単純な仕掛けだったのである。

「おいおい、俺はすっかりチェーンロックがかかっていたから、ドアをぶち破って中に入ったんだぜ？ そんな短い糸でどうやって？」

「またまた、惚けちゃって悪い子ですね。佐久さんは……。——最初から、鎖が千切れていたら……。どうですか？」

「えっ？」

あたしがトリックの核心を突くと彼の顔色が少しだけ変わる。

そう、確氷の遺体をドア越しに見つけたときチェーンロックの鎖は既に千切れていたのだ。

「だから、その千切れた鎖の両端が糸で結ばれていて、その結び目と予め外しておいた鎖の置く場所を——ドアを開けたとき死角になる位置にしていたとしたら……。どうかしら？ 佐久さん♡」

「……………」

「そして、その後——ドアを体当たりで強引に破れば……。内側からしっかりとかけられていたように映る。そうじゃなくて？ 佐久くん」

あたしと英里は彼が行ったであろう所業を彼に伝える。

佐久はあたしと彼女に挟まれて額から汗を流していた。

「……ま、参ったな。アリスちゃんも、妃さんも怖い顔をして……。そんな糸なんて仕掛けたら中で寝ていた毛利さんにバレバレになるじゃないですか。鎖が切られる前に」

「はい。ですから、その為に電話コードを凶器に使って電話を鳴らなくしましたよね。変な電話がかかってきて先生が起きないように——」

「さらに主人の携帯電話をベッドから離してドアの前に置き、札をかけて呼び鈴を鳴らないようにさせたんでしょ？ だから主人は殺人の騒ぎが起きるまでずつと眠りに付いていたままだった」

佐久は小五郎が起きたら直ぐにチェーンロックの違和感に気が付くはずだと主張するが、あたしたちはそれを起こさせないために様々な策を弄していることを指摘する。

「ふっ、さすがは今をときめく女子高生探偵と法曹界の女王クイーン。よく筋が通ったストーリーに聞こえます。だけど、この事件……毛利さんの弁護に立って起訴しない方が懸命ですよ。僕がやったという証拠はないし。妃さんの不敗神話に傷を付けたくありませんしね」

それでも彼は犯行を認めようとしなかった。証拠が無いなら裁判で絶対に負けることはないと自信を持って伝えてきたのだ。

確かに証拠が無いなら彼を犯人扱い出来ないけれど……。

「ふっ……バカね。私の不敗神話はフロックが続いてるだけのこと。——だけど、残念ながら神話は続きそうよ。だって、あなたは自白してるんだもの。この部屋に入った時点で自ら犯人だとね」

「そりゃあ、分かりますよ。部屋の前にハヤシライスが……あつ!？」

実は、この部屋の前にルームサービスのハヤシライスを2つほど、置かせてもらっていた。

佐久はそれを見て、この部屋を確氷の部屋だと断定したらしいが——

「おそらく、あなたがチェーンロックの仕掛けを施している最中に、呼び鈴が鳴り——覗き穴から見るとボーイが立っていた。慌てて机の上を見ると、ハヤシ 2” というメモを発見した。あなたは怒ってメモを捨てたんでしょ？ ”こんなときにハヤシライスなんて頼むなよ” って……」

「いやー、ゴミ箱に捨てたのは軽率でしたね。その後、あなたはハヤシライスは下げて欲しいという旨を示したメモを書いて、あの札に貼ってドアノブにかけたんです。そうじゃないと、ハヤシライスなんて言葉が出るわけありません」

佐久は「ハヤシ 2” のメモを見て、ハヤシライス2人前を注文し

たんだな、と考えた。

お金を払いますとか書いたメモはそのハヤシライスに向けられたメッセージだったのである。

「いや、だからね。アリスちゃん。偶然見たんだよ、ハヤシライスを持って困った顔をしていたボーイを彼女の部屋の前で」

「ふえっ？ 本当ですかあ？」

「ああ、本当さ。悪かったね。最初に話さなくて」

彼はハヤシライスを2個持って困っているボーイが居たという話を
をする。

ダメね……。この人は一回墓穴を掘ると、続けてそれを繰り返すタイプだわ……。

「残念だけど、佐久くん。あの“ハヤシ”って書いてあったメモ。本当は“林さんと2時に待ち合わせ”っていう意味なのよ」

「えっ？」

「それをあなたはメモの側にあったルームサービスのメニュー表を見て勝手に“ハヤシライス”と勘違いしたってわけ」

英里がここで初めて彼がメモを間違って解釈していたと告げると、みるみる彼の顔色が悪くなる。

これは言い逃れできないわよ……。

「あ、あれ？ ハヤシライスなんて言いました？ 僕はルームナンバーを覚えてこの部屋に——」

「ああ、そうなんですかあ♪なーんだ。あたしが夜食として頼んで自分の部屋の前に置いてもらったハヤシライスを見て来たわけじゃないんですね」

「はあ？」

まだ言い逃れしようとしたことに若干驚きながらも、あたしは彼にこの部屋があたしの部屋だと彼に伝える。ハヤシライスって思いきり言っただじゃない……。

「……、あたしの泊まってる部屋ですよ。だから、佐久さんが夜這いに来たんじゃないかって怖かったの♡チエーンロックくらい確認すれば良かったのに」

「あつ……」

「そう、ここはアリスさんの部屋。本当の彼女の部屋はこの2つ先。つまりあなたがこの部屋に足を踏み入れる理由は皆無。あなたが犯人である以外はね」

あたしの部屋を碓氷の部屋と間違った理由は置いてあつたハヤシライスを見たから。

ハヤシライスで碓氷の部屋だと勘違いした理由はあのメモを見たから——つまり、彼が犯人であることを物語っているというわけである。

「はあくく。お手上げです。不敗神話を持つ弁護士に、迷宮無しの名探偵の助手……こんな恐ろしい人を二人も敵に回した時点で僕の負けは決まったという事ですか」

「この作戦は全部この子のアイデアだけどね」

「あはは、粗探しとか、他人のミスに難癖を付けるのが探偵の仕事ですから。それを速やかに遂行しました」

佐久はようやく自分の誤りを認めて両手を上げる。

今回、自分の部屋にルームサービスを呼んで彼を罠に嵌めようとするアイデアはあたしが思いついたものだ。我ながら性格が悪いと思う。

「あら、私があの人に言ったセリフを根に持っているのかしら？ —

—で、殺害の動機は彼女が担当していた裁判かしら？」

「ええ。あの公害で被害に遭っているのは僕の故郷でして——」

そこから、彼は動機を語る。碓氷が担当している汚水問題の裁判で、被害を受けていた村は実は彼の故郷であつた。

それで原告となった村を勝たせたかっただけというのが今回の犯行のきっかけにあたるが、それだけで彼女を殺そうとまでは考えなかつたみたいだ。

彼が碓氷に殺意を抱くようになったのは、彼女が弁護を引き受けた理由を知った時——彼女はただ名声を得るためだけに、非がある被告の弁護に立ち勝訴しようとしていたのである。

そんな理由のために村の住民を苦しめていると知った彼は彼女を

殺害することに決めたのだった。

最初の計画では、碓氷を眠らせた後で部屋を密室にして自殺に見せかける予定だったが、部屋で小五郎が寝ているのを見つけると、彼女を絞殺して彼に罪を被せる方法に変更する。

小五郎に罪を被つてもらった理由は、村の人間が訴訟に勝つために弁護士を殺したと知られると、裁判官の心証を悪くする恐れがあったからだ。

碓氷の代役として被告の弁護を行い、早々に和解に持ち込んだ後で自首をするつもりだったらしい。

「でも、自首してもあなたが殺したという証拠は——」

「鎖に付いていたちよつと歪なペンチの跡——ですよね。あの跡に合うペンチはこの世に一つだけですから。それを証拠に警察に行くつもりだったんでしょ？」

彼は律儀に証拠を用意していた。自分が犯人という証拠を……。

後から自首するつもり of 犯人なんて初めてね……。

「毛利さんが平気な顔をして警察に来たのはこういうことか。名探偵の助手もまた、名探偵だったとは——どこにでもいる女子高生にしか見えなかったんだけどな」

「同感よ。主人には勿体ない助手なんだから。娘と同じ歳の女の子にここまで翻弄されるなんて、思わなかった」

「いやいや、英里さんと一緒に捜査したからですよ。色々勉強させてもらいました」

あの妃英里にここまで言ってもらえて探偵冥利に尽きるのか……。
だけど、あたしはまだまだ甘い。もつと早くルームサーブスのことを思いつくことが出来たのに、それが出来なかったのだから……。



「アリスちゃん。ありがとう！ お父さんを助けてくれて！」

「先生が殺人なんてするはずないからね。英里さんと力を合わせればこれくらい何でもなかったよ……」

日がすっかり登って朝になった。真犯人の佐久が犯行を認めて捕まったので、小五郎は当然釈放された。

蘭はそれを喜んであたしに飛びついて喜びを伝える……。この喜びよう……。彼女はやっぱり彼のことをとても心配していたのね……。

「でも、早朝にハヤシライスをいきなり食べようって言われたときはびっくりしたよ」

「いやー、山村刑事に奢ってもらっちゃって。やっぱりタダで食べる」と美味しいよね〜♪」

ちなみにあのハヤシライスはあたしと蘭が美味しく頂いた。

蘭の頭の中にはハテナマークが浮かんでいただろうけど、またこのハヤシライスが絶品で最高に美味しかった。

「んもう。ちやつかりしてるんだから。——っ!? あ、待って。ちよつといい感じみたいだから」

ホテルの外に出るとちようど小五郎が英里の近くに歩いて行って、何かを彼女に伝えるところだった。

多分、お礼を言うのだろう。それくらいはすると思う……。

「——悪かったな英理、信じてたよ。お前なら俺の無実を晴らしてくれるって。そ、そういや蘭の料理にもそろそろ飽きてきてな、お前の一風変わった味が懐かしいっっちゃうか、その……。そろそろ戻ってきてくれねーか? 限界なんだよ……。あ、ほら、今日は俺たちの結婚記念日だしちようどいいかな……。なんて……」

「……………」

「——おい! 聞いてんのか!?!」

「えっ? なに?」

何か小五郎が真剣に話していて、英里はイヤホンを耳につけてるから聞こえてないみたいなのやり取りをしていることが遠目からわかった。

蘭はウキウキしながら近付いてるけど、あまりいい雰囲気は期待しないほうがいいかもしれない。

「あ、いや……」

「お父さ〜ん！ お母さ〜ん！ なになに？ 何を話してたの？」

「いやな、弁護士のお嬢様のくせに最愛の夫の無実を晴らすのにちんたらしてたなあって」

「あら、最愛の夫の間違いでなくて？」

小五郎は照れ隠しなのか可愛くないことを言っつて、英里に言い返される。

ていうか、ちんたらしてたのつてあたしにも矛先が向いてるんだけど。

「なに？」

「これに懲りたら、お酒は控えるのね。セクハラヒゲオヤジさん？」

「なんだとお!!」

「お父さん！」

完全に英里に言い負かされて、怒り出す小五郎。

それを見て蘭は仲直りしてくれないことを悟って残念そうな顔をする。

「あ、そうだ。蘭、このディスク借りるわよ。この曲気に入っちゃったから」

「えっ？ それは別にいいけど」

「フン！ 二度と面見せんな！」

「もお〜！ お父さんのバカバカバカア！」

最悪の別れ方をしているような二人だったが、あたしは英里が変な仕草をしていたことを見逃さなかった……。

「弁護士の女王様にもなると、録音ボタンを押しても曲が聴けるんですね……♪」

「油断ならない子ね。あの人には内緒よ……」

「はいはい。——でも、いつか蘭ちゃんのところに戻ってあげて欲しいです。お節介かもしれないですが……」

「ふう……、考えとくわ……」

英里は小五郎が真剣になって彼女にお礼を言っつていたシーンをちゃんと録音までしていた。

それを持ち帰ろうとしていた英里に声をかけると、彼女は人差し指

を唇に当ててこのことは内緒にして欲しいと言われる。しようがない人だな……。

でも、いつか元に戻ってというあたしの言葉を聞いた彼女の返事はちよつぴり明るくて……、蘭の悩みももう少しで解決できるかもしれないとあたしは思ったのだ――。

黒の組織との接触 交渉編

「離れていると人の心も夢も変わっちゃう……。もし人生に待ったがあるなら板倉と同じ夢を見ていたあの頃に戻りたい……」

ゲームメーカー3社からボードゲームの制作依頼を受けて失踪した板倉卓という男を探す依頼を受けた小五郎は彼を何とか見つける。しかし、板倉は殺されてしまっていた。

あたしたちの捜査の結果犯人は相馬竜介という男だということが判明し、証拠を突きつけ彼は観念して犯行を認める。

どうやら、昔から相馬は板倉と凄惨な将棋ゲームを作る約束をしており、借金までして彼に投資していたが彼にやる気がないことを知って殺してしまつたらしい。

それはともかくとして、この板倉という男——かつてあたしが関わったゲーム会社の事件で遭遇した黒の組織の一員であるテキーラという男と面識があるみたいだった。

彼は不運にも爆死してしまつたが、この男と接触した板倉の日記を見れば黒の組織について何か分かるかもしれない。

そう思ったあたしはパソコンに疎い目暮警部のスキを見計らつて板倉の日記が記録されているフロッピーディスクのコピーに成功したのである。

さて、後は博士の家でゆっくりと解析をしよう——。

あたしは阿笠博士の家に帰ろうと足を向けたが、蘭が新一の家の様子を見たいと言つたので一緒に帰路につくことになった。

「ねえ、アリスちゃん。離れてると人の心って変わってしまうのかな？ 結構、辛いんだよね。待つてるのって」

相馬の言葉が突き刺さつた蘭は新一の不在が心の負担になつていゝるみたいだ。

離れたら冷めちゃうって人もいるんだらうけど……。とりあえず新一は離れてはいないからな——。

「……そういう奴もいるかもしれないね。でも、あいつは違うと思うわよ。蘭ちゃんの思ってるとおりでと——。あれ？ 蘭ちゃん？」

彼女に言葉をかけ終える前に蘭はあたしをギュツと抱きしめる。

珍しいな。彼女がこんなに弱みを見せるなんて……。

「えつと……、ごめん。アリスちゃんが、新一なら良かったって思っちゃった」

「あはっ、面白いこと言うね。そんなこと言われたら……、蘭ちゃんのこと新一から奪いたくなっちゃうじゃん♡」

「……んっ」

あたしは彼女のおでこに自分の額をくつつけて忠告する。

可愛いこと言うじゃない。ちよつと本気になっちゃいそうだったわ……。

「ダメだよ。ガードが緩いとつけ込まれるんだからね」

「脅かさないでよ。ちよつとドキッとしたんだから。目が本気っぽいから」

「ふふっ……、元気出たでしょ？」

「うん。ありがとう。アリスちゃん……」

お互いにドキドキしたところで、手を繋いで新一の家の前まで歩く。

彼女の日常を盗ってしまったって申し訳ないと思いつつ——この時間を幸せだと感じていた。

「ただいま。ちよつと遅くなっちゃった」

「また事件じゃったのか？」

「うん、まあね」

帰宅すると博士と哀が出迎えてくれた。あたしはさっそくフロツピーディスクの中身を確認しようとカバンからそれを出した。

「毎日退屈しないわね。それで、そのフロツピーディスクは何なの？」

「えへへ、お土産よ。お土産。もしかしたら、あいつらの情報が入ってるかもしれない」

「へえ……」

「さつそくパソコンで見してみるつもりかおう？」

「そうね。晩ごはんが後でもいいなら」

あたしと哀と博士はフロッピーディスクの中身を確認するためにパソコンを起動させる。

頼むわよ。いい情報がちよつとでも多く見つかるといいんだけど……。

「ええつと、2年前……、2年前……、あつた！ これね……。どれどれ……」

あたしはパソコンに表示された文章を読む。ふむふむ……。

〃3月7日、関西弁の男が突然訪ねて来た。どうやら開発中のシステムソフトが目当てだったらしいが、私が目を悪くして開発を断念したと知るとあつさり帰って行った。上から下まで真つ黒な男。二度と会いたくはない〃

「ええーっ、たったこれだけ？」

「その後の日記にも、その大男の事は書かれていないようじやのう」
「渾身のドヤ顔をしてた割には残念な感じね……」

30秒もあれば読み切れる内容しか黒ずくめ男たちの情報は書いてなかった。

哀ちゃん……、嫌味なんて言わないでよ……。

「もー、せっかく必死になって頑張つて手に入れた日記だったのに……。わかつたことは、板倉さんが何かのソフトを開発していて、それを奴らが欲しがっていったつてことだけなんて……」

「でも、その板倉さんつて人。相当いい加減な性格だったようね。ほら、日記と日記の間隔がバラバラよ。私つてこういうのは統一しないと気になつて仕方がないんだけど」

——あれ？ そういえばさつき的事件で机の書類が10センチ動いたみたいない理由で板倉さんが怒つてたとか、そんなこと言われてたわね。

「哀ちゃん、違うわ。これはいい加減に間隔をあけてるんじゃないの。このスペースにカーソルを合わせて、ドラッグして反転させると

……」

「こ、これはー!」

「〃疲れた。このままではいつか私は殺されてしまうかも……」……
「やっぱり——」

隠された文章が出てきてくれたので、あたしはホッと胸を撫で降ろす。

これはかなりの量の情報が期待出来そうね……。

「なるほど、あぶり出しということだったのね。インターネットのホームページなんかで、伏せたい文章をのせたいときによく使われている」

「じゃが、板倉さんはなぜ自分の日記にこんなことを」

「たぶん、この日記を誰かに盗み見された時のためにカムフラージュしたのよ」

「まさかアリスくん、その誰かって……!」

「ええ、おそらく組織の連中よ! どうやらあぶり出しは、大男が来た10日後から使われてるみたいね……」

板倉は用心深い男だ。黒ずくめの男たちを警戒しながら日記を残していたなんて……。

続けてあぶり出しされた文章をあたしたちは読み進める。

〃3月17日、また机の上のペンが5cm移動している……。やはり誰かが事務所に忍び込んでいるようだ〃

〃4月15日、今度は自宅に誰かが。警察は取り合ってくれない。侵入した痕跡も取られたものもないので仕方がないか〃

〃6月11日、鍵を取り換え、隠しカメラを設置したが無駄だったようだ〃

〃7月6日、誰なんだ、姿を現せ〃

〃12月19日、疲れた。このままではいつか私は殺されてしまうかも〃

〃1月6日、この恐怖から逃れるために、机の中に侵入者に向けてのメッセージを入れた。『要求を飲む』と〃

〃1月8日、意外にもすぐ返事がきた。私が入れたメッセージの代

わりに、侵入者のメモが入っていたのだ。赤く書かれたOKの文字と共に、怪しげな電話番号が。赤い文字はおそらく血でかかれたもの。他言すると命はない、という意味だろうか”

”1月23日、しばらく迷ったが、警察に通報せずに電話することにした。電話に出たのはなんと女だった。女王のようなしゃべり方をする高飛車な女。女の要求は、例の開発中のシステムソフトを、1年で完成させたら高額で買い取りたい、ということだった。どうやら前に来た大男の仲間のようだ”

”2月13日、彼らとの連絡方法は電子メールに変わった。私は報酬を前金で口座に振り込むことと、これ以上私の周りをうろつかないことを条件に、引き受けることにした”

”12月22日、ダメだ。やはり私には出来ない。なぜならあのソフトは、私が目を患ったからだけでなく、我々人間のために断念したのだから”

「に、人間のためじゃと!?!」

「……………」

あのソフトって何…………? 組織の奴らは板倉にどんなソフトを作ろうとさせていたの…………。

哀の表情が一瞬曇った気がした。何か知っているのかしら――。

”2月9日、いよいよ期日が迫ってきた。私は未完成のソフトに、彼らからの報酬分の小切手を添えて別荘のパソコンのそばに隠し、海外に姿をくらすことにする。彼らから、ソフト受け渡しの時間と場所を指定するメールが届くのは、5日後の午前0時。それまでに、なんとか海外に…………”

この日記の日付が4日前ってことは、メールが届くのは今から3時間後の午前0時か。どうやら板倉は、そのメールを見る前に外国へ逃げの気だったみたいね。

「ねえ、最後の日記のあとにもあぶり出しがあるみたいよ」

「えっ?」

あたしは最後の日記のあぶり出しを読んでみることにする。

これは、一体どういふこと…………?!

“2月10日、しかし彼らはあのソフトで一体何をしようとしているんだ？ 最初に電話に出たあの女の奇妙な言葉が耳から離れない。そう、あまりにも高圧的な女の口調に耐えかねて、何様のつもりだ！——となじったら、女は笑いながら英語でこう返した。We can be both of God and the Devil. Since we're trying to raise the dead against the stream of the time”

「な、なんじゃと!?!」

「我々は神であり悪魔でもある。なぜなら……」

「時の流れに逆らって、死者を蘇らせようとしているのだから……」

組織の研究って、死者蘇生とかそういう類の話なの……？ 哀を幼児化させたり新一を性転換させたりしたのもその研究の派生から生み出された結果とかそういうこと……？

「哀ちゃん……、もしかして哀ちゃんたちがやっていた研究って……？」

「それについては想像にお任せするわ。今はどうするか決めるときじゃない？ 私の意見は分かるでしょ？」

哀は研究について語ろうとはしない。彼女は板倉の別荘に行こうとしているあたしを止めたいみたいね。

「うん。危険だから深入りするなって言いたいんでしょ？ でも、あたしの返答も見当がついてるんじゃない？」

「虎穴に入らずんば——。バカね……、今度は虎に本当に食われるかもしれないのよ」

「でも、あたしなんか食べたらしきとお腹を壊すんだから。タダで済ますつもりはないわ」

もちろん、組織にあたしは負けるつもりはない。少なくともあいつらに痛い目を見させるまでは——。

「じゃあ向かうんじゃない。その別荘とやらに」

「ええ、もちろんよ。例のソフトも手に入れて、奴らのメールも見てやりましょう」

こうしてあたしたちは群馬県にある板倉の別荘に向かうことになる。

さあ、何が分かるのかしら……。とにかく油断はしないようにしなきゃ。

「およ、哀ちゃんも付いてくるんだ。危ないよ？」

「あなたと博士だけで行かせるほうが危険なの。無茶しないように見張らせてもらおうわ」

博士の車に哀も乗り込んだのは意外だった。彼女は別荘に行くことに反対していたから……。

でも、一緒に来てくれたら頼もしい。

「ところでよくわかったのう。板倉さんの別荘とやらが」

「ええ。ラッキーなんだけど、先生に板倉さんの捜索をお願いした人が教えてくれたのよ。彼の行きそうな場所として、別荘とか知り合いの住所を」

「なるほどね。でも大丈夫なの？ 組織の人間が待ち伏せしてる可能性も考えられるけど」

さすがに哀の警戒心は強いわね。たしかに待ち伏せなんてされたら最悪だけど……。

あたしは大丈夫だと思っている。だって――。

「そこは心配無用よ。板倉さんは周りを彷徨かないように約束させてるし、机が5cm動くだけで気にするような彼を相手にそんな下手は打たないわ」

もし連中が下手を打つと板倉の気が変わってソフトが手に入らない可能性すらある。

あの連中がそんな愚行を犯すとは思えなかった。

「後は板倉さんが殺された事が報道されてるかどうにか」

「うん。それもラジオでチェックしてるわ。幸いなことに、今ニュースは逃走中の宝石強盗犯のことで持ちきりだから。何とかかなりそう

よ」

板倉が死んだことが奴らにバレたら全てが台無しになる。

でも、今は宝石強盗犯の報道ばかりやっているのだから、彼の死はまだまだバレそうになさそうだった。

——そして、あたしたちは板倉の別荘に到着した。

「ふう、やっとついたか。後はどうやって入るかじやが」

「鍵あったわよ」

「サンキュ♪さっすが哀ちゃん」

あたしは哀が見つ付けてくれた鍵を受け取り、彼女にお礼を言った。
やっぱり彼女の助けがあると楽が出来るわ。

「おいおい、どこでその鍵を？」

「階段の裏にあったわよ」

「博士、日記に書いてあったでしょ。5年も会ってない友人が私の別荘から電話してきたって」

「だったら、知人ならいつでも入れるように別荘の鍵を隠してあるって考えるのが自然でしょ？」

あたしと哀は玄関の近くに鍵が隠されていると気付いた理由を博士に説明する。

とりあえず、簡単に中に入れてよかったわ……。

「な、なるほど。アリスくんと哀くんは日増しに呼吸が合うようになってきてるのう」

「でも、不用心ね。こんな防犯も何もないようなところにソフトを残すなんて」

「だからこそよ。誰だかってこんなところに大事なソフトを置きっぱなしするはずがないって思うでしょ？ 組織の連中が送ってくるメールを受け取らなかつたら、連中は不審に思っ板倉さんを探してこっちに来る。そしたら、このソフトと小切手を見つければ、板倉さんは連中と会わずに縁が切れるというわけ」

板倉は余程黒ずくめの男たちと関わりたくなかったのだろう。

彼がこういう方法を取ってくれたおかげでこうしてソフトが彼らに渡る前に掠め取ることが出来た。

「アリスくん。そろそろ時間じゃぞ」

「さあて、尻尾を掴んでやるわよ。黒ずくめの男たちの……！」

「そう上手くいくかしら……？」

「えっ？　ば、パスワード……！」

あたしがメールを受信してさあ開こうとしたとき、いきなりパスワードの入力画面が出てきて頭が真っ白になる。

あと10秒……？　ば、パスワードって何よ……。

「あら、消されちゃったみたいね。メール」

「迂闊だったわ。早く開かなきゃ消される設定になつたのね」

この前のコンピュータウイルスのときに何を学んだのよ……。あたしは……。

あいつらが素直にメールを送らないってことくらい予測出来たのに……。

「それどころか、このパソコンでメールを開こうとしたことも、そして開けなかったこともバレたわよ。早く逃げるべきだわ。奴らが来る前に……！」

「電話が鳴ってる……、多分奴らから……」

あたしらがこの状況にテンパっていると、電話機から着信音が鳴り響いた――。

早いわね……。電話の主はおそらく――。

『ただいま留守にしております。ピーという発信音の後でお名前とご用件をお話ください。……ピー』

『よう、どうした――？　そこにいるんだろ？』

「この声は……、ウオツカ」

「ここでメールを開き損ねたことがバレたんじゃ……！」

やはり、電話の主は黒の組織の人間だった。それにしてもウオツカか……。ジンも近くにいるのかしら……。

「もしくはどこかで板倉さんにも気付かれないように見張っていたか

……」

「なんじゃと!?!」

「こんな不用心な別荘でメールを受け取るなんて奴らも考えないって踏んでただけだな。そうだとすると……、まいったな……」

「ええ。見張られているなら、状況は最悪。逃げる事も出来ずに仲良く墓場まで案内されるわね」

哀の言うとおり外から見られているならかなり状況は不利だと言える。

逃走すれば捕まるし、連中は容赦なく殺しにかかってくる。なんとかしないと――。

『おい、返事をしろ! その別荘にいることはわかってんだよ』

「アリスくん……」

『さっさと返事をしねーか。板倉さんよお。おい! どうした!?!』

ウオツカの苛ついた声を聞きながらあたしはこの状況をどうにか出来ないものかと脳みそをフル稼働させる。

こんなところで終わらせてなるものか……。よく考えるのよ……。絶対に何か手はあるから――。

黒の組織との接触 追跡編

「——すまない。この暗がりの中で電話を探すのに手間取ってねえ」

『はんつ、そんな山奥の別荘を受け渡し場所にするからだよ』

あたしはウオツカからの電話に出る。もちろん、変声機で声を板倉のものに変えて……。

よかったわ……。バレてないみたいね。

「停電のせいでパソコンからメールを受け取り損ねてしまった」

『ふーん。いや、ちよつと待て！　なんで、停電なのにこの留守電が作動してんだよ？』

「……あ、ああ、そのことか。この辺りはちよつと吹雪いたら停電になるから、バッテリーを内蔵してる電話を設置したんだ。それより、よく私がここにいてるって、わかったね？　まさか、どこかで監視してるんじゃない……」

ふむふむ、停電でのツツコミはパソコンじゃなくて電話機に来たか。

じゃあ、パソコンが動くってことは知らないみたいね。

『してねーよ。心配すんなって。んっ？　今の音はなんだ!？』

「……風が窓を叩く音だよ」

『ああ、そういや、そっちも結構吹雪いてんのか』

「そういうわけで、改めて受け渡し場所を直接教えてほしい」

ウオツカは停電のことを信じてるみたいね、あたしは筆談で博士と哀に明かりをつけるようお願いした。

そのついでにウオツカには受け渡し場所を電話で話すように頼む。

『ちっ、しょうがねーな。一度しか言わねーから、よく聞けよ。工事中の賢橋って駅、知ってるよな？　今度東都地下鉄に加わる洒落た駅だ。その地下のコインロッカー……、0032番に明朝午前0時にその前に来い。もちろんそのソフトを忘れるなよ』

「明日は無理だ——」

そこから、あたしはうだうだと理由をつけてウオツカを受け渡し時間を早めるように誘導する。

明日になると板倉の死がバレてしまうから……。

『じゃあ、4時間後……賢橋駅の地下にある0032番のコインロッカーに……遅れるなよ?』

「あ、ああ……」

というところで、彼らとの待ち合わせ場所と時間が決まった。

午前4時に賢橋駅の地下にある0032番のコインロッカーの前ってことね。承知したわ……。

「おいおい、奴らの言いなりになってソフトを届けるつもりじゃあるまいな?」

「アリスは言いなりになってないわよ。この子、怖がるフリして会話を誘導してたもの。早朝にソフトの受け渡しを行わせるように……。じゃないと板倉さんのこと……ニュースで流れてしまうから」

「えへへ。哀ちゃんにはバレちゃったか。まあ、相手がウオツカだったのはラッキーね。パソコンでメールが受け取れても取引の時間は早めるつもりだったわ。——幸いまだどの局も板倉さんのことを報じてないから。早くここに来た痕跡を消して急ぎましょう」

鈍いウオツカはあたしが話を誘導することに気付かなかった。

そう、彼が待ち合わせ時間を決めたんじゃない。あたしが決めさせただ。

「じゃが出ようにもビートルを出せば見張っている連中にワシらの顔が……」

「大丈夫、大丈夫。見張りなんていたら、パソコンの回線が繋がらなかつたなんて嘘はすぐにバレちゃうでしょ?」

「——そういうことか。じゃから電気を付けろと」

少なくとも、この別荘の照明のオンオフが分かる位置に連中が居ないということにはわかった。

だから、安全に車に乗ることができてる。

「うん。後は博士の車の中にあるノート。パソコンでこのソフトの解析をして、犯罪に利用されるような情報があれば——」

「警察に通報して、見張ってもらい……ノコノコやってきた組織の者を逮捕出来るという訳じゃな」

「そゆこと」

さて、哀もいることだしそつちの作業に明るい彼女に解析は任せるとしようかしら……。

「ダメね。さっきのメールで予想は出来てたけど、板倉さんと組織の間でパスワードが設定されてるわ。おまけに複製防止のガードもバッチリと……」

「あちゃー、これじゃ警察を動かせないわね」

「どうやら、パスワードが設定してあるらしくって中身が見れないみたい。」

うーん。困ったなー。コピーも出来ないのか……。

「じゃが、奴らは拳銃を所持しとるじゃろ？ 銃の取引とか言えば2、3人くらいは——」

「足りないのよ。それじゃ……、奴らの数によっては返り討ちに遇うでしょ？」

「組織の恐ろしさを伝えられるような証拠でも押さえて、大人数を動かせば良いけど……連中はそんな痕跡を残すようなマネはしない」「もどかしいのう。来ることがわかつとるのに、手が出せんとは」

少数の警察じゃ、あの連中をどうにかできるとは思えない。

だからこそ、ソフトの解析をしたかったんだけどそれも出来ないとなると……アレしかないわね……。

「しゃーない。ちつと、キケンだけどあの手しかないか」

「まさか、組織と直接やり合うつもり？ そんなの——。——っ？ な、なにつ!？」

あたしがある決意をしたとき、タイヤから異音が聞こえてグラグラと車が揺れる。これって……、まさか……。

「あれま。パンクしてるわね」

「こんな時に……ツイてないのう……」

「この時間にこの山奥じゃタイヤの付け替えには時間がかかる。今回は諦めましょう。危ないマネしようとしてたんだし。丁度いいわ」

博士のビートルがパンクした。哀の言うとおおり、タイヤの付け替えなんか間に合うはずがない。

ここにきて時間切れかー。悔しいな……。

そう思っていると対向車線からライトの光が見えたので、あたしは大きく手を振った。

「——っ!? 向こうから車が……! おーい!」

「どうかしたんすか?」

「いやー、この車がパンクを……」

「あたしたち、どーしても東京に早く帰らないといけないんですう。何とか乗せてもらおうことってできないでしょうかあ」

ヒッチハイクの真似事をしてみたら、意外なことに車が停まってくれた。

ダメ元だけど、何とか交渉してみましよう……。

「うーん。——じいさん、この辺りの道知ってるか?」

「まあ、一応は……」

「よし、じゃあ、じいさんは助手席に……姉ちゃんとお嬢ちゃんは後ろに乗んな」

「——ごめんなさい。お姉さん、お休みになっていたのに……」

「いいのよ。ちよつとウトウトしてただけだから」

車の持ち主らしき男は親切にもあたしたちを送ってくれろと言ってくれた。ラッキー。天はまだあたしを見放してなかったわね……。

あたしと哀は後部座席に……、博士は助手席に乗り込んだ。

「うわあ! すごいです! これって外車ですよね♪これは、お兄さんの車なんですかあ?」

「おうよ。もう乗り飽きて買い替えようって思ってる車さ」

「景気が良いのね。こんな高級車を簡単に手放して買い替えようなんて」

「彼、こう見えて大会社の跡取りなのよ」

「ふえーっ、お金持ちなんですねー」

ヒッチハイクした車は高級外車で左ハンドルだった。

どうやら運転手の男はかなり金持ちらしい。服装にはそんなにお金かけてなさそうだけど……。

まあいいわ。金持ちでも何でも、無事に東京まで帰れるなら……。

そう思っていた矢先、対向車線のトラックがクラクションを鳴らす――。

「――っ!? ちょっと、センターに寄ってるわよ」
「きゃっ!」

哀が男の運転に文句をつけると彼は慌ててハンドルを切った。

ま、マジで危ないじゃない。乗せてもらって言いたくないけど、運転はちゃんとしてほしい。

「あ、あつぶねー! やっぱ怖えな。雪道は――」

「まあまあ、焦らず安全運転で行きましょう」

「……あれえ? 今、変な音しませんでしたあ?」

ハンドルを急に切られてその重力でバランスを崩したとき、後ろから異音がしたことにあたしは気付く。何の音だろう……。

「ん? 多分、トランクに乗ってる荷物だろう」

「ちよつと! タバコ吸わないでよ! 私がタバコが嫌いなこと忘れたの?」

「ああ、そうだったな」

男の人は返事と共にタバコを吸おうとしたが、隣にいる女が怒りながら止めていた。

うわー、タバコくらい良いじゃん。この人の車なんだから……。

「東京へは、そこを左じゃよ」

「おっと、雪も止んだし3時前には着くと思うぜ」

「ん……?」

男は左にハンドルを切る直前に何故かワイパーを起動させる。いや、そこはウインカーを出すべきでしょ……。

「でも、なんで群馬に? お孫さんたちを連れてスキーつすか?」

「あ、ああ。まあ、そんなところじゃ」

「きゃっ！」

「また、センターに寄ってる……」

世間話もそこそこに再びセンターライン付近を走ってクラクションを鳴らされるこの車……。

なんか、この短時間にこういうこと多くない？ 大丈夫なのかしら

……。ていうか、この人は本当に――。

「ちよつと！ しつかり運転してよ！」

「ああ、悪い……。やっぱ雪道なんて運転するんじゃないかなかったぜ」

うーん。雪のせいだとは思えないんだけどね。この運転の怪しさは……。

ちよつとカマかけてみようかしら……。

「でも、あれですねえ。車検前に事故したら、費用とか上がりますしマジで気をつけた方が良いでしょうよ」

「じゃ、車検？」

「あ、はい。今月なんですよね？ この車の車検……。もしかして、終わらせたんですか？」

あたしは車検の話振ってみた。何気ない会話を演出しながら……。

男の人はいきなり車検の話が出てきてちよつと驚いてるみたいだ。

「いや、ただだけど。なんで？」

「そのこのシールに書いてましたから、今年の色で大きく『2』って」

「あ、ああ。そっか。そーいや、ハガキが届いてたの思い出したぜ」

男はようやく思い出したような口調で車検のハガキが届いたと口にする。

そっか。ハガキが届いたんだー。なるほどね。

「でも、よく見えたわね。雪がかかって私には何も見えないわよ」

「うん。さつき、トラックが横切るとき光が当たって見えたのよ。ほら……『2』って書いてあるでしょ」

「バカね。あれだと前から見ると『5』じゃない。車検は今月じゃないよ。5月よ」

哀が何で車検が2月だというシールが見えたのかと疑問を呈する

ので、あたしはライトに照らされた時に数字を見たと言明をする。

しかし、彼女はバカにしながらあたしが数字を裏返しに読んでいることを指摘してきた。

「ふえっ？　だっってお兄さん、ハガキが来た………なんていい加減なこと言わないでくださいよお。やっぱ、お金持ちだとその辺がルーズになっちゃうんですかあ？」

「お、おう。そーなんだよ。全部人任せにしちまって」

哀のツツコミに呼応して、あたしは男がいい加減な感じで話を合わせたのかと質問すると、彼は焦りながら肯定した。

あらあら、あたしたちはもしかして面倒に巻き込まれたんじゃないかしら……。

「ところで大きいお姉ちゃんの方は何を聞いているの？」

「あつ、すみません。ちよつと遊び過ぎちゃって、今日のニュースを聞いているんですよ。テレビも全然見てないんで」

隣の女の人があたしのイヤホンについて質問してきたので、正直にニュースを聞いてると答えた。

うん。板倉の死については報道されてないわね……。

「へえ、何か面白いニュースでもあった？」

「そーですね。今、賑わせているのはアレですね。群馬県の方に逃走中の宝石強盗犯です。気を付けてくださいよお。思わず出くわすなんて偶然ありますからね」

「——っ!？」

彼女がニュースについて聞いてくるものだから、宝石強盗犯のニュースが賑わせてると告げると二人はハツとした表情をする。

やっぱり、そういうことなのね……。

「ほう。捕まるんかのう。あれは」

「大丈夫だと思わよ。だってほら、検問を至るところで張りまくってるみたいだし」

そこまで話したとき、ちよつと群馬県警の検問に遭遇した。

あの人は確か——山村刑事じゃない……？

「免許証を拝見しても良いですか？」

「ん？ あ、ああ」

「今日はどんな用件でこちらに？」

「いや、ええーっと、その……」

「あれ？ 山村刑事じゃないですか。例の宝石強盗犯を張ってるんですか？」

あたしは山村刑事に話しかけた。この検問は現在逃走中の宝石強盗犯を捕まえるためのものだろう……。

「き、君はアリスちゃん。そうなんだよ。三人組の強盗犯でね。群馬県の宝石店を襲ったあとに逃走車を乗り捨てて逃げているんだ。一人が左の太ももを怪我してるからそんなに遠くまで逃げてないと思うけど」

「へえ、一人が怪我してるんですね」

「そう。あのと僕は宝石店の近くでちょうど聞き込みをしていてね。逃げる強盗犯に向かって言ったんだ——」

なんか、山村刑事は威嚇射撃したつもりが強盗犯の一人に当たってしまったらしい。

それって下手すれば大惨事じゃない？ ということで強盗犯の一人は大怪我をしてるみたいだ。この人、なんでこんなに誇らしげなのよ……。

で、その強盗犯はどうやら予め用意していた2台目の車か、偶然通りかかった車を盗んで逃げてるみたい。

「そんな車を見なかったかい？」

「うーん。他人の車に乗ってる人でしょ？ 見たわよ……」

「えっ？」

「あたしたちよ。博士の車がパンクしちゃって。偶然通りかかった、親切なこの方たちが乗せてくれたの」

あたしは山村刑事に自分たちがこの車に乗った経緯を話した。

「へえ〜、阿笠博士も一緒なんだ。じゃあ博士の車はどうしたんですか？」

「ディーラーに電話したら、明日、取りに行ってくれると言われたからキーを挿しっぱなしにして停めているんじゃないよ」

「じゃあ、じいさんの車、危ねーかもな」

「そ、そうね。その強盗犯に狙われてるかも」

博士の車はディーラーが取りに来る手筈になっていると山村に伝えると男と女は口々に彼の車が危ないと煽ってきた。

「その可能性はありますね。おや？ あなたたちの声……、どこかで聞いたことがあるような……」

「気のせいでしょ」

「も、もう行つて良いだろう？」

「じゃあ、あなたが足にかけているジャケットを取つていただけませんか？」

山村は二人の声に聞き覚えがあると口にして、女が膝にかけていたジャケットを取るように促す。

多分、怪我を隠してると考えたんだらう……。

「わ、私たちが疑つてるの？ ほら、足なんて怪我してないわよ！」

「ほ、ホントですね。じゃあ、お氣をつけて！」

という流れであたしたちは検問場所を通過して東京へと向かった。待ち合わせ時間には間に合いそうね……。

「もう少しで着くぜ。お目当ての賢橋駅に」

「ちよつと、タバコ！ 何回言わせるのよ！」

「おお、悪いな……」

都内に入ってから、男はタバコに火を付けると女は怒つてそれを咎めた。

男は仕方なしに窓をあけてそれを捨てようとする。

「これ、ポイ捨てはいかんぞ！ ちゃんと灰皿を使わんか！ ん？」

小銭？ おいおい、いくら金持ちだからって、こんな罰当たりなことを……」

博士が車に備え付けられてる灰皿を開けると、中に吸い殻と灰まみれの小銭が入っていた。

博士はこの状況が理解できないみたいね……。

「まあまあ、博士。仕方ないわよ。この二人……宝石強盗犯なんだから」

「——っ!?!」

「な、なんじゃと?!? どういうことじゃ、アリスくん」

あたしはようやくくずつと言いたかったことが言えた。

そう、この二人は群馬県の宝石店を襲った強盗である。

「この車はそのお兄さんの車じゃないのよ。たぶん山の中で逃走用の車を取り捨てた後、通りがかった人から奪った車。この車の本当の持ち主は煙草を吸わない人で、料金所とかですぐ払えるように、灰皿を小銭入れとして使ってたの。それに気づかず吸い殻を入れてしまったから、小銭に気付いた後も灰皿として使ってしまったって訳。あたしたちを乗せるまではね」

「あ、あの小銭は煙草嫌いの私がやっていたはずで……」

あたしは博士に吸い殻みれになっっている小銭の理由を話した。

この事実だけでもこの車が彼のものではないという理由になるが――。

「この車があのお兄さんのじゃないって証拠なら、他にもあるわよ。左ハンドルに慣れていないからつい、いつもの運転席から見える位置を走ってたんでしょ。だから車がセンターライン寄りになって、対向車から注意されていたのよ。あんなにクラクション鳴らされたら、運転に慣れてないって言ってるようなものだわ」

「哀ちゃんの言うとおり、お兄さんの運転は下手とかそんな次元じゃなかったの。バックするとき思わず、後ろが見えにくい左側を振り返っていたし、右手でのシフトチェンジに苦労してたのもそのせいよね。それにカーブを曲がる時、ウィンカーを出さずにワイパーを動かしてたでしょ? 左ハンドルの車は日本車と違って、レバーが左右逆になっているのを忘れてたのか、知らなかったのかわかんないけど」

「う、うう……」

哀とあたしは男の運転があまりにも酷かったと告げる。

明らかに彼は外車に今日初めて乗る人の動きをしていた。買い替えるくらい乗っていたと豪語していたのに……。

「まだあるわよ？ 最初にこの車に乗った時、変だと思ったの。左側のドアを開ければすぐに乗せられるのに、なんで道路側から乗せたんだろうって。検問に引つかかった時、山村刑事の話を聞いてわかったわ。お姉さんが座って隠しているその座席には、足を撃たれてさつきまでそこに座っていた、もう一人の仲間の血がついてるってことが。そのもう一人の仲間は、おそらくトランクの中。検問を抜けるために、そこに身を潜めてるのよ」

もう一人の仲間は後ろのトランクの中に居るだろうし、物音も聞こえた。

その上、女が座っている席の下にはもう一人の仲間の血も付いていると思われる。

つまり、ちよつと調べればあたしの言ったことは証明できるのだ……。

「じゃが、どうしてわしらを車に……」

「その原因は私でしょうね。理由は検問を抜けるため。私みたいな小さな子どもと老人を連れていたら、家族旅行だと警察に思わせて油断させられるでしょ？ だからアリスは気付いたのよ、この二人の正体に。人の車を奪ったうえでそんなことをするのは、逃走中の宝石強盗犯しかないってね」

あたしと博士だけならあるいは警戒して車を止めなかったかもしれない。

小さな哀が居たからこそ逃走中の強盗犯にとって絶好のカモフラージュとなると考えて、あたしたちを車に乗せたのだろう。

「……へく、随分と賢いお嬢さんたちじゃない。でもあんまり賢すぎるのも、考え物ね！」

「あ、哀くん！ アリスくん！」

宝石強盗犯の女はあたしと哀に銃を突きつけて勝ち誇った顔をしていた。

やっぱり、真相を言ったらこう来るわよね……。

「へっ！ バレちまったんなら、しゃあねえな。じいさんたちにはもう少し俺たちに付き合ってもらおうぜ。さあて、問題はこのジジイと女

共をどこで始末するか……」

「そうね、この三人が行きたがってた工事中の賢橋駅っていうのはどう？ あそこならだれもないし、工事の作業員は夜が明けないと来ないしね。それよりあなた、どうして検問で私たちの事警察に言わなかったの？ あの時はもうわかってたんでしょ？ 私たちが宝石強盗犯だって」

「時間をロスしたくなかったのよ。あそこであなたたちを警察に引き渡せば、同乗してたあたしたちも事情聴取されて、大事な約束に遅れちゃうし、あなたたちならいつでも捕まえられるもん」

あたしは検問していたのが山村で幸運だと思っていた。彼ならこの人たちをきつと見逃すと思ったから……。

事情聴取なんてされたら遅刻は確定だし、この人たちに賢橋の近くまで連れてきてもらったあとで捕まえようと考えたのだ。

「へえ……、強気ね。好きよそういうの」

「へっ！ 生意気な口が叩けるのも今のうちだ！ 助けてくって泣いても、許してやらねえからな……ふああつ……」

とりあえず腕力がありそうな男には眠ってもらうことにする。

まあ、運転手が眠ったら危ないんだけど……。

「えっ!? ちよ、ちよつとー!」

「当分起きないわよ、麻酔針を打ち込んだから」

「麻酔針……!?!」

「何かに、掴まって!!」

そして、あたしは思いきりサイドブレーキを引くと、車はドリフトして停車した。

よかったー。ちゃんと停まってくれて……。

「こ、この女！ 何てことを!」

「やめておきなさい。そんなしよぼいモデルガンじゃ、宝石店はだましても私の目は誤魔化せないわよ。本物の銃なんて見飽きてるんだから」

「最後の発言は問題だけど、そういうことらしいわよ。お姉さん♪」
銃をこれみよがしに見せつける女に冷静な顔をして哀はモデルガ

ンだと指摘する。

いろいろな意味でお粗末な強盗犯だったわね。ここまで送つてくれて言うのもアレだけど……。

「な、なんなの!? なんなのよ、あんたたち!」

「藤峰愛梨寿……探偵よ。知らないかしら? 結構有名なんだけど」
♪

「あ、あの女子高生探偵の……」

「哀ちゃん、ちよつと外に出ててね」

哀を外に出したあたしはボール射出プレスレットを使ってサツカーボールを巨大化させる。

出力を最大にするとアドバルーンくらいの大きさになるこのボールの圧力に負けて女の宝石強盗犯は呼吸が困難になり気絶してしまった。

「じゃあ、博士! 警察を呼んでおいてもらえるかしら? 哀ちゃんもここに残ってなさい!」

「アリスくん! 君は!」

「あたしはもちろん、駅に行くのよ。賢橋駅に……。あ、あと博士……行く前にこれをお願い」

「ああ、これならすぐに……」

強盗犯を博士と哀に任せてあたしは賢橋駅に向かった。

このときあたしはまだ知らなかった。今までにないピンチが襲ってくることを――。

黒の組織との接触 決死編

「ちっ、板倉の野郎。まだ来てねーじゃねえか」

あたしが待ち合わせ場所に着いてしばらくすると……、ウオツカがコインロッカーの近くに現れた。

ここまで来るのは大変だったわ。酔っ払いに成りすますためにコンビニで酒を買い込んで、服や髪をそれで濡らして臭いまで付けたんだから。うへえ……、ひどい匂い……。

「ん？ 小切手……？」

ウオツカは煙草に火をつけると、あたしがロッカーに挟んだ小切手とロッカーの中に入れたソフトを見つけたみたいだ。

よしよし、ここまででは順調ね……。

「こいつは板倉にくれてやった額と同じじゃねえか……。で、これは板倉に作らせた例のシステムソフト……。バカなやつだ。金を手放した上にビビってブツだけ置いて行くとはよお。プツ……！」

煙草をプツと口から飛ばすウオツカ。やはり迂闊な奴ね。あれは後で回収しよう。

唾液から彼の情報がわかるからね……。

あたしがテープでガチガチに固定したソフトを取りながら彼は電話を始めた。

「ああ、オレだ。板倉の野郎がまだこの近くをうろついているはずだ。とっ捕まえてここに引きずってこい。何!? 駅の構内に入ったのは、酔っ払いだけだど!? そんなはずはねえ! 探せ! ——っ!」

やっぱり見張りが居たか……。板倉を殺すつもりだったのね……。で、あたしが入ったのもバレてると……。板倉がいらないことに驚いてるみたいだけど——そう思った刹那、ウオツカは頭に銃を突きつけられた。

「……何の真似だ?」

「あ、兄貴……」

マジか……。ジンが来ちゃった……。一気に嫌な予感がしてきたわ。

ジンつたら、たまにはウオツカ一人に仕事を任せなさいよ。前もあたしが仕掛けた発信器を見つけたし、苦い思い出しかないのよね……。そもそも薬飲ませたのコイツだし。

「取引は明日0時のはずだぞ」

「や、やつが明日はまずいってごねたんで、この時間に変えたんでさあ」

「ほう？ 奴とメールを交わしていいように扱われたというわけか」

やばいなー。根掘り葉掘りウオツカを質問攻めにするじゃない。

一応、指紋を消したり手袋をつけてなるべく作業したりしたけど……。バレないわよね……。

「い、いえ、時間を決めたのはこっちですぜ。あいつ、例の別荘でメールを受け取りやがって、雪で停電したってほざきやがるから電話でじかに……。——や、やつはバラし損ねましたけど、ちゃんと目当てのソフトは手に入れやしたぜ。奴の心臓はかなり悪い。へへっ！ ほつといてもどうせそのうちおっちゃん死まうと……」

「おい。これがどうしてテープで固定されていたと思う？ お前の指紋を取るためだ。手袋のままじゃテープははがせねえからな。そして、待ち合わせ相手が見当たらなければ、お前は苛ついて煙草に火をつける。こいつの唾液を調べればわかるだろうな、お前の血液型も」

「あ、兄貴……」

げっ……、やつぱり見抜かれてしまった。ウオツカの吸い殻も回収するし、テープに指紋が残ることも見抜くかー。こりゃあ一気にピンチになるかも……。

「おつと。オレたちの根城まで嗅ぎつける気だ。見ろ。ケースの内側に発信機だ。こいつはとんだキツネだぜ」

「い、板倉の野郎ー」

あーあ、発信器がまたバレちゃった。この人、なんでも疑ってかかるし出し抜くにはかなり苦労させられそうね。

とりあえず、こいつらが居なくなつて十分に時間が経つてから外に出ることにしましょう。

最悪明るくなつて工事の人が来るまで待ったほうが良いかもしれ

ないわ……。

「いいや、板倉じゃねえ。温度差が激しいと交感神経が刺激され心臓に負担がかかる。心臓を病んでる男がわざわざ吹雪の中山奥の別荘になんて行きはしねえよ」

「じゃ、オレが話した男は一体……」

嘘でしょ、この仕掛けが板倉じゃないことまでわかつちやったの……。ウオツカが電話をかけたとき、近くにジンが居たら終わってたじゃない。

板倉の死が報道される前だから大丈夫だと思ってたんだけど……。

「恐らく奴が雇った切れ者の誰かだろうが、一つだけドジを踏みやがった。このケース、一応指紋はふき取ったようだが、まだ生暖かい……。まだこの近辺に身を潜めているという事だ……！」

やばっ！ この瞬間あたしは色々と思いつ出した。このシチュエーションって、ジンが無言でロッカーを調べたりする話だっけ？ んで、ロッカーに大の大人が隠れるわけないって当たり前のこと言って調べるのを止めたシユールな話だ。

コナンはロッカーに入って助かったけど……。あたしって大の大人じゃくくん。よく考えなくても大の大人がロッカーになんて隠れられないよ……！

そんなこと言ってるうちに足音はどんどん近付いてくる……。ええーっと、どうしよう。くっ……！ こうなったら……。

「へへ……、残るはそこだけ。ずる賢いキツネも袋のネズミってわけか」

「つまらねえこと言ってるじゃねえ——」

あたしは賭けに出ることにした。哀ちゃんごめん……。後は頼んだわよ——。



《灰原視点》

アリスが賢橋に向かって行ってしばらくすると目暮警部が通報を

受けて宝石強盗犯を逮捕した。

あるとき私はなんで彼女を止めなかったんだろう……。いつもあの子はそうだ。私の言うことを聞いてくれない。

そのとき、私が持っていた追跡メガネが彼女からの通信を受信した。このタイミングで通信……。何か良くないことが起こったのかもしれない……。

「哀くん。どうしたんじや？ 予備の追跡メガネなどいじって……」
「通信機が作動したのよ。向こうのスピーカーはオフになってるけど……。音声は聞こえるわ」

私は博士にも聞こえるようにアリスからの通信の音量を上げた――。

『へへ……。残るはそこだけ。ずる賢いキツネも袋のネズミってわけか』

『つまりねえこと言ってるんじやねえ――』

「こ、これは……。ウォツカ……。それにジン……」

「おいおい、もしかしてアリスくんが、追い込まれるんじや……」
嫌な予感は的中した。アリスはきつと連中に隠れていることバレたのね。

それで、追い詰められているという最悪の状況。

「博士！ 目暮警部にお願いして！ 銃の取引とか何でもいいから理由を付けて、賢橋駅の地下コインロッカー辺りに人員を送るように！」

早く！ アリスが殺されるわ！

「こりやいかん！ わ、わかった！」

もうダメかもしれない。アリス、あなたにもしもの事があつたら私は――。

『女!? なんでこんなところで倒れてやがんだ？ ——まさか、こいつが板倉が雇ったキツネですかい？ 早くバラさねえと』

『いや、こいつはただの酔っ払いだ。板倉の送り込んだキツネに囚役に選ばれた憐れな女だがな』

『そういや、酔っ払いが中に入って来たって見張りが言っていましたぜ。確かに酒臭え……。囚役つてのは、どういう意味でさあ？』

『見ろ。この女、手袋を付けて寝てやがる。明らかに怪しい』

『それなら、板倉の雇ったヤツつてのがこの女で狸寝入りを決め込んでやがるんじゃない?』

『本当に寝てるかどうかなんて、瞳孔を見れば一目瞭然。バカみたいに熟睡してやがるよ、この女はな。板倉の手下が思った以上にな……』

『思った以上? どういうことですかい?』

『ヤツはここで寝てる女を見つけ、手袋を付けて静かに立ち去った。オレたちがこの場でヤツを探すのも計算に入れてたんだろう。ヤツを探そうと物音を立てれば、こいつは目を覚まして起き上がる。そして、オレたちに見つかり……キツネとして処分されるって算段だ』
『だがよ、アニキ。それじゃあオレの指紋や吸い殻を取りになんか……』

『だから、この女の後ろに忍ばせていたのさ。見ろ……、盗聴器だ……! 例のロッカーから離れた場所に盗聴器を設置しておき、外からヤツはこつちの様子を確認してたんだよ。オレたちがこの中を探してる様子もほくそ笑みながら聞いてたんだろうぜ。おそらく盗聴器を仕掛けるときに偶然この女を見つけて保険をかけておいたんだろう。もしもの時に少しでも時間を稼げるように——』

通信はここで途切れた。おそらくジンが通信器を破壊したのだから。
う。

アリス……。あなたは無事なの……? それとも——。



「ふわあああつ……。あーよく寝た。哀ちゃん、おはよ」

ロッカーにもたれて寝てたあたしが目を覚ましたとき、目の前に哀が居た。

どーやら、警察を連れてきてくれたのね……。組織の連中は退散した後だったのか、何か争った形跡もないから良かったわ。

「よく寝た……。じゃないわよ。あんな通信いきなり送ってきて」

「いやー、ウオツカは騙せそうだったんだけど、ジンが来ちゃってさ。逃げ場が無くなって困っちゃったんだよね」

ジンはやっぱり侮れない男だ。今回はマジで死ぬかと思った。

ロツカーの話、何でギリギリまで忘れてたんだろう……。前世の記憶がポンコツ過ぎる……。

「その様子は通信機で聞いてたわ。どうやって切り抜けたの？」

「博士に補充してもらった麻醉銃を撃つたのよ。自分に」

あたしの苦肉の策は自分を強制的に眠らせることだった。

ジンとウオツカがこちらに近づく瞬間に自らを麻醉銃で撃つことで。

「はあ？　じゃあ酔っ払って寝てる女って……」

「そ、あたし。臭いするでしょ？」

「アルコール飲んだの？」

「酔っ払いのフリして入ったから、酒を服や髪に振りまいて臭いをつけてたのよ。んで、寝る直前にお酒を口に含んで……口臭も変化させといた」

身体から酒の匂いを発してるだけじゃ足りないと思って口も酒を含ませて泥酔した後に寝てしまった感じを演出した。

生き残るための仕掛けはこれだけではないが……。

「……………だけど、危険な賭けをしたわね。下手したら問答無用で殺されてたわよ」

「でも、まあ信じてたからさ。ジンは見逃さないって。あたしが残したヒントを」

「ヒント？」

あたしが生き残れたのはジンの洞察力が鋭かったおかげだ。

彼が上手くこの状況を読んでくれたから殺されずに済んだのである。

「あのとき、あたしは敢えて手袋を付けた状態で眠りについた。背中通信機を隠してね」

「そんなことをしたら怪しまれるんじゃないの？」

「ううん。逆だよ、哀ちゃん。考えてみてよ。寝てる酔っ払いがそん

な状態だったら、何かあるって疑うでしょ？ ジンはあたしの思ったとおり勝手な敵を想像してくれた。誰かが酔っ払いの女を身代わりにして探りを入れてるってね」

疑い深いジンはあの状況できっと誰かがあたしを囮にしようと考えたと推理しただろう。

ロッカールームで騒ぐことであたしが起きて、射殺されるように何者かが手袋を付けて立ち去ったと想像しながら……。

雑に体の後ろに隠されていた通信器を見たとき、彼は確信したはずだ。外から中の様子を盗聴することで窺っている敵の姿を。

「そういうこと。確かに組織は人を殺すことに躊躇いはないけど、無駄な殺しはやらないものね。痕跡を出来るだけ残さないことを前提条件としてやってるから」

「……まあ、寝るのは死ぬほど怖かったけどね」

「当たり前よ。大胆にも程があるわ。ヒットマン二人を相手にして、堂々と寝顔を見せるバカがいるなんて思わないっていう心理をつこうとしたのはわかるけど、本当にそれを実行する頭のイカれ具合は理解不能よ」

哀の言うとおり、十中八九上手くいくと考えても怖い賭けだった。敵の前で無防備に眠ることは。

しかし、確実な死と天秤にかけると生き残るために勇気を振り絞るしかなかった。

「ご、ごめん……、心配かけちゃって……」

「今回は結果オーライなんだから……、これに懲りたら今度からもっと慎重になりなさい。無茶はやめて……」

「うん。ありがとう」

哀はまっすぐにあたしの目を見て無茶をするなど声をかける。その声の優しさは今までに発せられたどんな言葉よりも心に響いて……彼女をホントに不安にさせたのだと罪悪感を感じてしまった。もっと慎重にならなきゃ……。死ぬわけにはいかないんだから……。

「アリスくん！ 未成年の君がこれほど酒を帯びてるのはどういうこ

とだね！」

「ふえっ？　め、目暮警部!!　いや、これは違うんですって!!」

「——ちよつとは怒られて反省なさい。バカにはいい薬よ……」

哀はニコツと笑って立ち去って行った——。

このあと目暮警部からこっぴどく叱られてしまう。

カモフラージュするにも程があると……。髪まで酒まみれにしたのはやりすぎだったかしら——。



以下本編とは関係ない次回予告——

特報!!

「好きだからだよ。　蘭ちゃんのが、好きだからだよ。　この地球上の、誰よりも——」

あたしの名前は藤峰アリス、自分で言うのもなんだけど結構有名な女子高生探偵よ！　その正体は平成のホームズって呼ばれてた高校生探偵の工藤新一なの！

それを知っているのは一緒に住んでいる阿笠博士と灰原哀……西の高校生探偵の服部平次、さらに工藤新一の両親である優作と有希子だけ。こうやって考えると結構いるっちゃ、いるわね……。

バカっぽいつてよく言われるけど、迷宮なしの名探偵なんだから！　どんな事件だって解いてみせるわ！

——ある日警察関係者が次々と狙われる事件が発生した。あたし

と小五郎が捜査しようとする。白鳥警部が「Need not to know」という警察関係者のみが知る隠語を使つて、捜査を拒否されちやつた……。なんでよく!? ケチク!!

そんな中——佐藤刑事が襲われ、その場にいた蘭が犯人の顔を目撃したんだけど……ショックが大きかったからなのか記憶を失つてしまつて、もう大変! 蘭の記憶も取り戻さなきゃだし、もちろん彼女をこんな目に遭わせた犯人を捕まえてみせるわ!

n 劇場版名探偵アリスく瞳の中の暗殺者く Coming Soon

瞳の中の暗殺者 その1

「蘭ちゃん、ほら喉乾いたでしょ？ 好きな方選びなよ」

「ありがと。アリスちゃん」

あたしと蘭は二人でトロピカルランドに遊びに来ている。

夏休みに新一が居なくて寂しそうな蘭をあたしが誘ったのである。あたしの中にある新一の記憶の中で、この場所での記憶は1番鮮明だ。

新一があたしになる寸前だったからかもしれない。まるで自分自身の経験のように色濃く脳裏に焼き付いているのだ。

「園子ちゃんが風邪引いて、今日は二人きりのデートだし。蘭ちゃん独り占めしちゃうんだから」

「もー、変なこと言わないでよ〜」

あたしは蘭にコーラを手渡しながら二人きりのデートを堪能すると嘯くと、蘭は恥ずかしそうに頬を染める。いつも照れる彼女は可愛らしい。

「次はジェットコースター乗る？ それとも——」

「あっ！ もうこんな時間……！ アリスちゃん、こっち来て！」

「ふえっ？ う、うん！」

次にどこに行こうか尋ねると蘭は時計を見て慌てながらあたしの手を引いて走り出す。

そんなに急いで、どこに行くつもり何だろう……。

「この広場って……」

「間に合った……、十……、九……」

トロピカルランドのこの広場はともに見覚えがある。来たのは初めてなんだけど……。

蘭は時計を見ながらカウントダウンを始める。

「二……、一……」

「わああああっ！ 噴水が！」

突如勢いよく吹き出す噴水。あー、やっぱりこれってあするとき新一

が魔法みたいな感じで蘭に見せていた噴水だ。

よく覚えてるわ。彼が蘭を楽しませようと色々と考えていたことも。

「ここ、2時間おきに噴水が出るの。前に新一が——」

「素敵な魔法をありがとね。見せてくれて嬉しいよ。蘭ちゃん」

「う、うん。そんなに喜ぶとは思わなかったけど……」

あたしは水の壁に囲まれながら、蘭を抱きしめてお礼を言った。

彼女に大事にしてもらえてると思っただけ嬉しかったのだ。

「見て蘭ちゃん！ 虹よ！」

「ホントだ。あのときと一緒……」

「じゃ、乾杯しよっか？ あ、でも気を付けて開けないと前みたいに炭酸が吹き出るから気を付けないと……」

「えっ……っ？」

綺麗な虹も見れたことだし、あたしが蘭にジュースの缶を開けようと提案すると彼女は首を傾げながらこちらを見ている。どうしたんだろうか……。

「どしたの？ 蘭ちゃん。開けてあげようか？」

「ううん。大丈夫だよ。新一から聞いたのかな……？」

蘭とあたしはこの日、目一杯二人きりのデートを楽しんだ。

ていうか、外出して事件に巻き込まれないのって何日ぶりだろう

……。最高の一日だったわ……。



『——でね、新一が連れて行ってくれないから、アリスちゃんとトロピカルランドに行ったのよ』

「わ、わりー。事件が立て込んでてよお」

『そういうえば、新一ってアリスちゃんに私とトロピカルランドに行つたこと話した？』

「えっ？ どーだったかな。覚えてねーけど、どうしたんだ？」

いつものように蘭に公衆電話からあたしは新一の声で電話をかけ

る。

彼女は何故かあたしに新一に自分と彼がトロピカルランドに行ったことを話したか質問してた。なんか変なこと言っちゃったけ……。

『ううん。何でもない』

「あー、アリスさんだー」

『新一、なんか声が聞こえたけど誰かいるの？ アリスって聞こえた気がするけど……』

電話ボックスの後ろで哀のクラスメイトの歩美があたしに気付いて声をかけてきた。

結構、大きな声で蘭にもちよつと聞こえちゃったみたいね……。

「うええつ!? アイス落としたって子供が言ってたぞ。ちよつと事件で忙しいからよー。また電話するわ!」

『えっ? 新一? ちよつと、新一!』

何か変な雰囲気になったのであたしはさっさと電話を切っちゃった。

まあ、蘭に正体はバレるはずがないとは思ってるけど……。

「ふひい〜、危なかったー」

「何が危なかったんですか? アリスさん。まさか事件では?」

「うおつと、少年少女諸君。これから遊びに行くのかね?」

電話ボックスの外では雨で傘をさしている、歩美、光彦、元太が立っていた。

夏休みだし、これから何処かに遊びに行くところなのかしら……。

「なんだその変な口調? そんな言葉遣いでも頭良さそうには見えねーぞ」

「うぐつ……」

元太にさっそくへこまされるあたし。

な、何よ……。これでも現役JK探偵として明晰な頭脳の持ち主って報道されたりしてるのよ。

「そうだ。アリスさんに推理クイズを出してもいいですか?」

「クイズ? いいわよ」

そんな会話をしてると、歩美があたしにクイズを出したいと言って

きたので、あたしはそれに乗った。よし、賢いところを見せてやるわよ。

「灰原さんに『アリスさんってどんな人』って

聞いたら、彼女は月を見ながら『夏じゃない』って答えました。灰原さんはアリスさんを褒めたでしょうか？ それとも貶した？」

「月……、夏じゃない……。あー、そっか。哀ちゃんもあたしのことを貶したのね」

「えーっ、どうしてですか？」

「夏の月は6月、7月、8月……でしょ？ で、続けて読むと『ロクナヤツ』じゃない。だから、貶したが正解よ」

あたしは自分の解答を3人に示した。何だろう……。小学生の出す問題に真剣に答えてドヤ顔ってよく考えたら恥ずいかも……。

「やっぱ、探偵は探偵なんだな」

「今度、少年探偵団の顧問をやって欲しいですよね」

「こんなにも早く解かれると思わなかったね」

「でも、凄いわよ。こんなクイズ、あたしが小さいときには作れなかったもん」

てか、この子たちって小学一年生よね。コナンとか哀は大人だからいいとして、子供にしては優秀すぎない？ あたしの小1のときなんかかけ算も出来なかったのに……。

「やった。アリスさんに褒めてもらえましたよ」

「じゃあ、アリスさん。またクイズ出来たらやってみてください！」

「——これ、渡つちやいかん。青の点滅は黄色と同じなんだよ。次の信号まで待ちなさい」

あたしらが点滅する青信号で横断歩道を渡ろうとしたら、おじさんに怒られた。

率先して走ろうとしたあたしはなんとも気まずい。

「はーい」

「……あはは、怒られちゃったね。いつもパーツと走つちやってるからなー。さすが刑事さん、外でもしっかり子供に注意できるなんて」「えっ？ あの人、刑事さんなんですか？」

「なんで、んなことわかるんだよ？」

「あー、分かりました。事件で知り合ったんですね！」

電話ボックスで電話してる男を刑事だと口にするると子供たちはどうして分かったのか不思議そうにする。

あー、そこ気になっちゃうか。さすが少年探偵団。

「ううん。刑事さんってメモを取るとき、あーやって警察手帳を縦に開いて横書きして使うんだよ」

「へえー、知らなかった」

「やつぱり、刑事と一緒に事件を解決してる人は違いますね」

「おっ！ 青になった。渡ろうぜ！」

刑事についての知識を披露していると、信号が青に変わったのであたしたちは横断歩道を渡る。

しばらくして、あたしが何気なくさっきの刑事さんを見ようと振り返ると――。

「――っ!? んっ? う、撃たれた……!?!」

何者かがサイレンサー付きのピストルでその刑事を撃った。

刑事はその場で倒れて、犯人は逃走する。あたしは電話ボックスまで走ろうとするも――。

「アリスさん！ 危ない！」

「ちっ！ 歩道橋から行くしか！」

既に信号は赤になっており車が行く手を阻む。こうなったら、歩道橋を走っていくしかない。

あたしは全力疾走で犯人を追跡しようとするも、歩道橋を渡りきったとき、既に犯人の姿は消えていた。

「こんな白昼堂々になんて大胆な……! それでも見失うなんて！」

犯人はもういい。それよりも被害者の刑事だ。

あたしは彼の元に駆け寄ると。刑事は血まみれでもう助かりそうになかった。

「しっかりして！ 誰に撃たれたの!?!」

「ううっ……、ああっ……」

刑事は既に何かを言葉にすることも出来ず……。何かを指し示すように左胸を押さえて絶命した。

なんてこった。みすみす犯人を目の前で逃して何も出来ないなんて……。何が探偵よ……。



「何度もすまないが、我々にも説明してくれるかな？ 犯人の特徴を」

目撃者として事情聴取に行ったあたしたち。刑事が撃たれた事件だと小五郎に告げると、彼もあたしの下に蘭と一緒に駆けつけてくれた。

目暮警部が子供たちの証言を集めてるけど――。

「若い男でした」

「若い姉ちゃんだったぞ」

「中年のおじさんだったよ」

見事に3人ともバラバラね。高木刑事が、犯人の傘について尋ねても、光彦が黒い傘、元太は緑、歩美は青と全く違う意見を答えているし……。

多分、見たのがほとんど一瞬でよく分かってないからバラバラの答えになってるんだわ。

「おい、アリス。本当にこのガキたちと一緒に居たのか？」

「うん。あたしは犯人の性別はわからなかったですね。レインコートと傘は灰色に見えたから子供たちの意見とは食い違いますし……。でも、犯人は右手で傘を持ってましたから。拳銃は――」

「左手で持っていた。つまり左利きってことね」

あたしもレインコートや傘の色はほんの一瞬しか見てないので自信がない。

ただ、犯人の利き手――これだけは確実だと言える。

「すみません。現場に居たのに大したヒントも得られずに……。あと、奈良沢さんが左胸を押さえてた件って――」

「ああ、あれは警察手帳を示しているのではと、我々は見解を出してい

る。手帳に記されていることを徹底的にあたってるよ」

と、こんな感じで事情聴取は終わった。

現場に落ちていた葉莢から犯人の使った拳銃が女性でも扱える9ミリ口径のオートマチックであることなどが判明したらしく、それらを基に徹底的に捜査が進められるみたいだ。

「でも、良かったよ。アリスちゃんや子供たちに怪我がなくて」

「まー、そうなんだけどさ。赤信号じゃなかったら捕まえられたって思うと悔しくて」

あたしは目の前で犯人に逃げられたことが悔しかった。

蘭の言うとおりの子供たちに何も無かったのは良かったんだけど……。

「ダメだよ。銃を持つてる殺人犯なんだよ？ 向かっていくなんて女の子のすることじゃ——」

「でも、新一ならきつと追いかける。だから、あたしだって負けてらんない」

銃を持つ犯人に向かっていくのは無謀かもしれない。

でも、工藤新一ならヤツを逃さなかったかもしれないと思うと胸に熱いものがこみ上げてくる。

「別に新一と張り合わなくても良いんじゃない？ アリスちゃんだって沢山事件を解決してるんだし」

「そうだね。蘭ちゃんの言うことはわかるよ。でも意地を張っちゃうんだ。工藤新一なら出来たことが出来ないのは嫌だってね」

確かにそれなりに多くの事件を解決して、自信みたいなものを持っているようにはなった。

だけど、それだからこそ余計なプライドみたいなものが芽生えたのかもしれない。

「どうしてそんなに新一にこだわるの？ アリスちゃんがライバル視してるのは知ってるけど」

「約束したんだ。あいつが居ない間はあたしが全部解決するって。新一が解くはずだった事件を全部……」

「約束……？」

あたしは新一から記憶と体を借り受けている。だからこそ、彼が本来なら解くはずだった事件を解決していかねばならないと思ってる。

「んで、あいつの代わりに蘭ちゃんを守るってね」

「わ、私を……？」

「あはは、でもあたしなんかより蘭ちゃんの方がずうーっと強いもんね。守るのはちよつと無理か」

さらに蘭を守りたいとも思ってるけど、空手の達人である彼女を守ろうだなんておこがましいと思っちゃった。

これには、見守る的な意味合いも含んでるけどね。

「ううん。アリスちゃんのこと頼りにしてるよ。何かあったら真つ先に相談したいと思うくらい」

「じゃあ、困ったらあたしに何でも言っちゃね。必ず何とかするから」

蘭には言えないけど、あたしは新一でもあるから……。彼のやるはずだったことは全部やつときたいんだ。

でもあなたを守りたいと思うのは——新一の代わりじゃなくて……。

今回の事件はこれで終わりじゃなかった。同じ8月22日の深夜未明のこと、今度は緑台にあるメゾンパークマンションの地下駐車場で芝陽一郎という名前の刑事が射殺されているのが発見されたのだ。

「過激派の犯行か？」 「暴力団による報復？」 「深まる謎」 「個人的怨みか？」

「警察への挑戦！」

——それを新聞が大々的に報じ、あたしも目の前で犯人を逃した手前、責任を感じていた。

そしてその記事を見た小五郎も気になったのか、事件の事を詳しく聞こうと目暮警部に電話をする——。

「警部殿、昨夜の事件について詳しく聞かせて——」

『今は忙しい、またにしてくれ』

「先生、目暮警部はなんて……?」

「忙しいんだってよ。何かいつもと違う感じに聞こえたが……」

「違う感じ……」

小五郎が警部に電話しても返ってきたのは素っ気ない返事だけだったみたいだ。

それは変ね。どんなに忙しくてもそんな感じになるなんて。

「あんな事件があったんだから忙しいのは当然でしょ」

「でも、割と目暮警部って困ってたらあたしや先生に相談するから……」

「それだ。名探偵・毛利小五郎の力を借りようとしなのは変だな」

「何か隠したいことがあるなら別ですけどね」

「隠したいこと……か」

目暮警部が事件に行き詰まってるなら、なおさらあたしたちに相談してくると思う。

それをしないのは、恐らくこの事件で何か言えない部分が出てきたからに違いない。

あたしは彼の態度からそう推測した――。



「きっかけ、白鳥の妹もあれだな。こんなときに結婚披露パーティーなんてしなくてもいいのに」

「仕方ないでしょう。パーティーが決まったのは一ヶ月も前なんだから」

「それに披露パーティーじゃなくて、祝う会ですよ。先生。主催者も友人みたいですし」

次の日、あたしは小五郎と蘭それに園子と一緒に米花サンプラザホテルに行った。その日……15階の鳳凰の間では白鳥警部の妹である白鳥沙羅と画家である晴月光太郎の結婚を祝う会が催されることになったのである。

「ねえ、新郎の晴月さんってどんな人なの?」

「えーつと、画家さんだっけ？」

「頭に『売れない』がつくけどな」

「売れない画家かー。こりゃ、友人関係の男は期待出来ないわね」

「ここら京極さん、泣いちゃうわよ……」

園子は相変わらず男の人を探しに来る目的があるみたいね。

京極さんというボーイフレンドがいるのに遅しいというか何というか……。

エレベーターを降りて会場に辿り着いたので、小五郎は受付で記帳をしている。そんな彼にきれいな女性が近付いてきた――。

「相変わらずぶつきらぼうな字ね……」

「お母さん！」

「お前も来てたのか……」

「ええ、沙羅さんが弁護士のお卵だからその関係で……」

小五郎に声をかけたのは、妃英里――つまり彼の奥さんだ。まあ、絶賛別居中なんだけど……。

そっか、白鳥の妹の沙羅は司法修習生か何かなのか……。

「うわあ、おばさま達筆……！」

英里の書く名前を見て園子がそんな感想を漏らす。

「……。というか、夫婦なのに別々に記帳って……。相変わらずだなあ……。」

「お願いします」

蘭は荷物を預かってもらってるみたいね。あれ？ 晴れの日なのに傘立てに傘があるわ。忘れ物かしら……。

「……。こうして、あたしたちは会場の中へと入っていった――。」

「うわあ。いっぱい来てる」

「目暮警部も来てるな」

「警察の人はすぐにわかるわ。目つきが鋭いし、重苦しい雰囲気だわ」
英里の言うとおりに、会場の至るところにいる警察の人たちの雰囲気は重たかった。

「刑事が二人も同じ日に殺されたのだ。面目丸つぶれなのだろう。無理もない。例の事件でそれどころじゃないんだろう」

「でも、佐藤刑事はいつもと同じで明るいわよ」

「ホントだ。何話してるんだろう、高木刑事と……」

会場には高木刑事と佐藤刑事も来ていた。佐藤刑事は高木刑事に服装のことで何か言っているみたいね……。

「おつ、小田切警視長だ。ちよつと挨拶してくる」

「誰？ あの人……」

「小田切警視長——あのへボ探偵が現役の刑事だった頃の刑事課長よ。今は刑事部の部長だったかしら」

「へえー、お偉いさんなんですわ〜」

小五郎は元上司で刑事部部长の小田切警視長に挨拶に行っていた。

こういう所はしっかりしてるのよね。

英里つたら、まだ小五郎をへボ探偵と言うかく。当たってるけど……。

「それでは新郎新婦の入場です！」

司会の人言葉で新郎新婦が入場して、祝の会とやらはスタートした。

スタートしたのに早々ここを立ち去ろうとする男の人がいるわね……。トイレかしら……。

「よお、白鳥。おめでとさん」

「ありがとうございます。毛利さん、紹介します。僕の主治医で米花薬師野病院、心療科の風戸京介さんです」

「風戸です。よろしく……」

小五郎が白鳥警部に声をかけると、彼は隣に居た男を主治医だと紹介した。

へえ、主治医ねえ。心療科ということは精神的に何か……。

「毛利です。——妻の英里に、娘の蘭……そして、助手のアリスです」

「あの、白鳥さん。心療科にかかっているんですか？」

「いやね。管理職っていうのは、結構心労がかかってね。毛利さんも事件ばかりで心に負担はかかってませんか？」

「んあつ？ 余計なお世話だよ……。——っ!? 警部殿！ 捜査の方

は？」

白鳥に心療科を勧められても、必要はないと答える小五郎——ちようど日暮警部が彼の横を通り過ぎたので、彼は警部に捜査状況を尋ねた。

「悪いがその話はナシだ」

「け、警部殿……？」

しかし、警部の言葉は暗く相変わらず素っ気ないものだった。

やはり、何か隠したいことがあるのね。間違いない。

そこであたしは後ろを歩いてた高木刑事を捕まえる。

「ねえ、高木さあん。こっっそり教えてくれないかしら？ 何か言えな

い秘密……あるんですよね？」

「——そこまで、察してて何で聞いてくるのかな？」

高木刑事はあからさまに困った顔をした。

秘密があるってもうバラしてるわ……。じゃあ、あの手でいきましよう。

「……あれれ？ 教えてくれないの？ じゃあ仕方ないか。佐藤刑事に高木さんの気持ちを伝えて来よっかな〜」

「ちよつと、待ってアリスちゃん。ここだけの話……芝刑事も警察手帳を握りしめて亡くなってたんだ……」

「なんだとー！」

「えっ？ マジで……？ ということは——」

あたしがちよつとだけ脅すとあっさり高木は大事な情報を吐いた。

二人の刑事が警察手帳を握りしめるってその意味は恐らく——。

「アリスさん、いけない子ですね。それ以上の詮索は許しません」

「し、白鳥警部……」

白鳥警部に肩を掴まれたあたしはかなり強めの注意を受ける。

彼のこの感じであたしの予感確信へとシフトした。

「おい、白鳥！ どういうこつた？」

「知る必要のないこと Need not to know——こう言えばわかるでしょう？」

「——っ!？」

Need not to know……知る必要のないこと。確か、警察内で使われてる隠語で……。警察の内部犯である可能性を示してる……。思ったとおりだわ——だから話せないんだ……。いや、もしかして警察の上層部。ううん……。最悪警察全体が関わってるかもしれないってことね……。しかし、あたしたちはまだ知らない。これがまだ序章に過ぎないことを——。

そして、身内がそれに巻き込まれてしまうことを——。

瞳の中の暗殺者 その2

「えー！　じゃあ、プロポーズの言葉はなかったんですか？」

「彼、そういうの苦手だから」

新婦である白鳥沙羅は新郎の晴月光太郎からのプロポーズの言葉は特になかったと告白する。

何となくお互いにそろそろって感じか。そういうのも良いかもしれないわね。

「男はそれくらいでちょうど良いのよ。齒の浮くようなセリフをいう男にロクな男は居ないんだから」

「ねえ、前から気になってたんだけど、お父さんのプロポーズの言葉は何だったの？」

英里が光太郎のことを肯定すると、蘭が彼女に小五郎のプロポーズの言葉はどんなのだったか尋ねる。

ああー、それはあたしも興味があるわー。どんな感じだったんだろう……。

「……だから、その齒の浮くようなくだららない言葉よ」

「先生！　今後の参考にぜひ教えて下さい！」

「確かにあの英里さんがオツケーを出したセリフは気になりますね」

あたしと沙羅は英里に詰め寄ってそのセリフを聞き出そうとする。

これは聞いとかなきゃ、損するわね。

「アリスさんまで……、残念だけでもう忘れたわ」

「またまた、そんなはずないじゃないですか！」

「焦らさないで教えてよ。お母さん……」

英里は恥ずかしそうな顔して誤魔化すけど、彼女ほどの人がそんな重要なこと忘れるはずがない。早く白状しちゃってよ……。

「え、ええーつと、お、お前の事が好きなんだよ——地球上の誰よりも

……だったかな……」

「……うそお」

「先生は意外とロマンチストなところがあるんだよ。園子ちゃん」

園子は思いっきり意外そうな顔してるけど、あたしは小五郎がああ

見えて新一にも負けないくらいロマンチストなことを知ってる。

「素敵じゃない……。うわあ——」

「蘭、お前のことが……。好きなんだよ。この地球上の誰よりも——」
「ひゃあつ……。——」

「つて、考えてたのかなつて。新一がそんなこと言うシーンを」

あたしが蘭の耳元でさっきのセリフを言ってみると、びっくりするくらい顔を赤くして彼女は跳ねる。やっぱ妄想してたか……。

「べ、べ、別にしてないわよ。そんなこと」

「蘭つてわかりやすいから」

「だらしない顔してたのに、それはないわよ」

「もー！ ふ、二人とも！ してないっていつてるのに！」

蘭をあたしと園子が冷やかすと彼女はムキになって反論する。

無駄なのよ。バレバレなんだから……。

「と、敏也、なぜお前がここに!?!」

あたしたちが談笑していると、突如……。小田切警視長が声を荒げていたのでその方向を見ると派手な髪色をして煙草を吸う若い男がいた。誰だろ？ あの人……。

「ここはお前のような奴が来る所じゃない。このパーティーにも招待されてはいないはずだ！」

「うっせーな！ 仕事で偶々、このホテルに來ただけだよ！」

「警視長のご子息の敏也くん。確かロツクシンガーをしていた」

「なんで、あんな雰囲気なんだろ？ 警視長ブチ切れじゃん」

「アリスちゃん、声大きいよ」

小五郎によると、派手な髪の男は敏也という名前で小田切警視長の息子らしい。祝いの席なのにすっごく、空気悪いんだけど……。

そんな2人の険悪な空気を焦った顔をした白鳥が仲裁に入っていた。

「まあまあ良いじゃないですか、警視長。……。敏也くん、ゆっくりして」

「出て行け！ 野良犬が餌を漁るような真似をやめてな」

「んだとお！」

すごいわね、野良犬つて。なんか実の息子に対して結構言うじやない……。

白鳥の仲裁も効果はなくて、小田切の対応は変わらない。

敏也もイラツとして彼に掴み掛かりそうな勢いだった。

「敏也さん！」

「ちっ！」

佐藤が止めに入ったおかげで、彼は不服そうにしながらも、ギターを持って会場から出て行った。

そんな彼を扉の近くから女性が見送り、佐藤刑事を一瞥した後、歩いて出て行く。なんだろう。意味深な感じね……。

「あの人もどつかで見えたことあるんだが……、どこだったかな……」

小五郎は彼女に見覚えがあるみたいだ。依頼人とかかしら……。

あれ？ 佐藤刑事、目暮警部と何を話してんだろう。よくわからないけど、一人で大丈夫かみたいなこと話してるのかな……。例の事件

絡みで……。

「アリスちゃん、園子、ちよつとお手洗いに行ってくる」

「あ、うん。わかった」

佐藤が会場の外に行くのとほぼ同時に蘭がトイレに向かっていた。

うーん。この空気は新郎新婦には気の毒な感じよね……。

——それからしばらくして、だ。会場のある15階が停電して照明が切れて真っ暗になったのは……。

「て、停電……！……！ ま、まさか！」

「お、おい！……これはどういうことだ!？」

突然の停電。会場内は軽いパニックになる。何かの設備の不具合？ それとも……。

「ねえ、アリス。何があったの?」

「わからないけど、誰かしらがこの停電を意図的に引き起こしたのなら——。悪い予感がする……。まさか、刑事の誰かが……!」

「ちよつと！ どこ行くのよ！」

園子が不安そうな声を上げたが、あたしはそれ以上に嫌な予感がした。

そういえば、佐藤刑事は会場の外に出ている。多分、トイレだと思うけど……。あつ！ 蘭もトイレだ——。

あたしは会場を飛び出して女子トイレに向かった。

嫌な予感が的中する。蘭の叫び声が聞こえたのだ——。

「蘭ちゃんの声……！ それに水の音……！ 先生！ 高木刑事！ 女子トイレです！」

「蘭！」

「佐藤さん！」

トイレの中で惨劇が起きていた。血まみれの佐藤刑事と、蘭が倒れていたのだ。

あたしは血の気が引いて手足が震えていたが、ここで冷静さを失うわけには行かないので、携帯電話を取り出す。救急車を呼ばなきや……。

「蘭！ 大丈夫か！」

「蘭ちゃんは怪我してないみたいだから大丈夫。でも、佐藤刑事は——。救急車を呼びます！」

よく見れば、撃たれて重症なのは佐藤刑事だけ。蘭は恐らく目の前で彼女が撃たれたショックで気を失ってるだけだ。119番を押しながら小五郎に状況を伝える。

「佐藤さん！ ひ、酷い怪我だ！ 佐藤さん！」

「目暮！ 救急車だ！」

「あつ！ 今、あたしが呼びました！ それよりも出入口の封鎖を！ 犯人を逃さないために！」

「君は毛利のところの……。白鳥！ 出入口の封鎖をしろ！」

「はっ！」

小田切警視長と目暮警部、それに白鳥警部も駆けつけて来たのであたしはホテルを封鎖するようお願いする。

そして、あたしは現場を観察した。凶器は9ミリ口径のオートマチック——これって例の犯人と同じよね……。ん？　なんで、懐中電灯が……？　現場には謎が多く残されている。

その後、ホテルに居た人たちは警察によって外に出ることを止められていたが、あたしは新郎新婦が入場するとき会場から出ていった男と佐藤刑事を見つめていた女が居なくなっていることに気付いた――。

この中の人から硝煙反応でも検出出来れば犯人逮捕は楽なんだけど……。



二人はすぐに米花薬師野病院へと搬送され、小五郎と英里と園子とともにあたしたちは病院に向かう。さらに白鳥警部と高木刑事も病院に駆けつけてくれた。

先に来ていた目暮警部の話によれば佐藤刑事の方は弾の一つが心臓近くで止まっており、助かるかどうかは五分五分という非常に危険な状態らしい……。

蘭の方も外傷はないものの意識が戻らない状態みたい。蘭は命に別状はなさそうね……。英里と園子は蘭の病室へと向かって行った。

千葉刑事の報告によると、指紋もホテルにいた人たちから硝煙反応も出なかったみたいね。それは何となく予測してたけど……。となると、ホテルから消えた二人が怪しいわね……。

停電については、爆弾が携帯電話からの着信で起動する仕組みになってそれによって電気の供給が絶たれたらしい。

「目暮警部、現場の懐中電灯ですが……佐藤さんが持っていたのでしょうか？」

「違うわよ。化粧台の下の物入れが開いてましたよね？　多分、そこに入ってたんですよ。点けっぱなしの状態で」

「——っ!？」

あたしは懐中電灯は点灯した状態で設置されていたと推理した。

犯人は停電を起こして、15階の全体を暗くする。すると暗くなったトイレで懐中電灯の光はその存在を主張することになる。それを手にしたところをズドンというわけだ。

「何だ?!? じゃ、じゃあ犯人が……!」

「なるほど、それなら明るい状態だと誰も気付かない……。となると、やはりあの事件が……」

「あの事件って何ですか?」

「そ、それは……」

目暮警部と白鳥警部は顔を見合わせて、何かの事件が関わっているとの見解を示した。

小五郎がそれについて尋ねると目暮警部は言い淀む。

「どうして教えてくれないんですか?!? 一步間違えれば、蘭も撃たれたかもしれないですよ! 警部殿!」

「た、大変です! 蘭が……!」

目暮警部に食ってかかる小五郎だったが、そこに血相を変えた園子が駆け寄ってくる。

蘭は大丈夫だと思ってたけど……、何かあったのかしら……。

「蘭ちゃんがどうしたの?」

「意識は戻ったんだけど……。どこか様子がおかしいのよ!」

「何?!?」

あたしたちは蘭の病室へと向かった。様子が変わって……どういうこと?」

病室に入ると彼女は既に意識を取り戻して起き上がっていた。

「蘭ちゃん! 大丈夫!」

「あなた……誰?」

蘭の一言にあたしは愕然として崩れ落ちそうになってしまった。あ、あたしが誰だかわからないって……。

「——っ!? ま、まさか……」

「お、おい……」

「蘭は私たちのことばかりか……、自分の名前さえ思い出せないの……」

「んな、バカな！ お前の父親の毛利小五郎だ！ そして、母親の妃英里ー！」

「……何も思い出せない」

蘭は記憶喪失になってしまった。嘘でしょ……。えっと、漫画やアニメにそんなエピソードあったっけ？ もしかして、映画？ 全然思い出せない……。

「記憶喪失……？ 蘭ちゃんが……」

「アリス……、どうしよう？ 蘭が、蘭が……」

「お、落ち着きましよう。し、白鳥さんが、か、風戸先生を呼んでくれたから……。き、きつと、だ、大丈夫よ」

「声震えてるじゃない……」

園子に指摘されたとおり、あたしも動揺しまくっていて、頭の中が真っ白になりそうだった。

蘭がこんな目に遭うなんて……あの時、一緒にトイレにあたしも行っておけば……。

その後、風戸が蘭を診断してくれて……おそらく佐藤刑事が自分をかばって撃たれたことに対して自責の念から記憶を封じ込めてしまったのだろうと口にした。

確かに彼女は計算も出来るし、シャーペンの芯も出せる。日常生活に必要な知識は残ったままでエピソード記憶だけが抜け落ちているのだ。しかし、本当にそれだけなの？ ショックなのは分かるし、彼女は優しい子だから……。

でも、何かもつと酷いことがあったような……そんな気がするわ……。

そう思っていたら千葉刑事がその答えを声に出した。

「懐中電灯からは蘭さんからの指紋しか検出されませんでした……」

そうか。だから、蘭は自分のせいで佐藤刑事が撃たれたって……。

なんてことだ……。彼女にはあまりにも重い……。

「目暮警部、話してください。私は退席しても構いませんので、蘭ちゃんのご両親である先生と英里さんは聞く権利があるはずですよ」

あたしはせめて小五郎と英里だけでも事件について知る権利があると目暮警部に訴える。

蘭の肉親なんだから、秘密にすべきことでも彼らには教えるべきだと思う。

「アリスさん、この事件は我々警察が必ず——」

「いや、話そう。アリスくんの言うとおり……巻き込んでしまった以上、毛利くんたちには聞く権利がある。君も蘭くんの友人で毛利くんの助手だ。一緒に聞きなさい」

そして、目暮警部は語った。事の発端は今年の夏、東都大学付属病院の医師・仁野保の遺体が自宅マンションから発見されたことらしい。

その事件を担当することになったのが目暮の先輩で捜査一課の友成警部と射殺された奈良沢修、芝陽一郎の両刑事、それに佐藤刑事だった。

神野医師はかなり酒に酔った上自分の手術用のメスで右の頸動脈を切っていて死因は失血死。亡くなる数日前に手術ミスを患者の家族に訴えられていて、現場にあったワープロにも手術ミスを謝罪する遺書が残っていたことから、当初は自殺の線が高いと考えられていたみたいだ。

ところが第一発見者となった隣町に住む神野医師の妹でルポライターの仁野環は、自分の兄は元々患者のことなどまったく考えない最低の医者だったと自殺説を真っ向から否定。

環は小五郎に何かを依頼しようとして事務所に来たことがあるみたい。彼は肝心の依頼内容を忘れてらしいけど……。

彼女によれば、一週間ほど前にある倉庫の前で紫色の髪をした若い男と神野医師が口論をしているのを目撃したらしい。それを聞いた友成警部は念のため奈良沢、芝、佐藤刑事を連れてその倉庫に張り込みをかけることにした。

しかしここで二つ目の悲劇が発生してしまう。気温が35度を超える猛暑の中張り込みをしていた友成警部が心臓病の発作で急に苦しみ出したのだ。

佐藤刑事たちはすぐに救急車を呼ぼうとするが、友成警部は警戒中であることを理由にそれを拒否。

自分でタクシーを捕まえて病院まで行くと言い現場を後にしたもののその途中で力尽き、心配して様子を見に行つた佐藤刑事によつて車で病院に搬送されたが、結局手術中に息を引き取つてしまう。

友成の死後、自殺として処理された仁野事件だが、しかし父を急な病で亡くした友成の息子・誠は葬儀の席で激昂したらしい。

焼香に訪れた奈良沢らを罵倒し、一生許さない、と言い放つたんだつて。

その後まもなく奈良沢と芝が所轄署へ移動……。

それからしばらくしてから、佐藤が何かを調べている事に白鳥が気付いたみたい。

彼女は奈良沢に頼まれて芝と三人、一年前の事件を調べ直していた。そしてその矢先に今回の連続殺人事件が発生したというのである。

で、目暮達は一年前の事件に関係していると考え誠と敏也を調べていたんだけど、敏也からは硝煙反応は出ず、誠は現在行方不明……。

佐藤にも警護をつけようとしていた矢先の襲撃だったとのこと。だから、あのとき警部は――。

「とりあえず、犯人は左利きということだけはわかっているんですから――。その誠さんって方はどうなんですか？」

「ひ、左利きだ！ 至急友成誠を指名手配するんだ！」

「は、はい」

目暮は友成誠が左利きだとして、彼を見つけ出そうと指名手配の指示を白鳥に出す。

しかし、彼が犯人だとするとわからないこともある……。

「警部さん、その神野って人はどうやって頸動脈を切っていたんですか？」

「えっ？ 右側を上から斜め下に向かつてまっすぐだよ」

「なるほど。それなら、神野さんがもしも他殺ならその犯人も左利きってことになりますよ」

神野医師が亡くなった事件——これが他殺かもしれないと佐藤刑事たちは調べていた。

その矢先でこの事件が発生したなら犯人は神野を殺した犯人と同一である可能性もある。

「なんでんなこと分かるんだよ!?!」

「それは——」

「返り血を浴びないため……。そうするには左手じゃないと、右の頸動脈は切れない——でしょ? アリスさん」

英里の言うとおり、もしも神野の事件が他殺なら……犯人は返り血を浴びない為、後ろから腕で首を押さえ込んで左手で切った。つまり犯人は左利きってことだ。

「しかし、友成誠と神野医師は接点がない」

「小田切敏也さんは左利きですよね? マツチを左手で擦ってたし」

「もう一人いるわ。その父親の小田切警視長。彼も左利きよ」

「ば、バカな! あの人が犯人なわけ……。——っ!? 警部殿……。まさか」

「……………」

小田切親子もこの事件の関係者で左利き。それに目暮警部の表情から必ずしも小田切警視長が犯人ではないと言い切れないようだ……。

とにかく、刑事たちを殺して佐藤刑事や蘭を酷い目に遭わせた犯人を捕まえなきゃ……。



「でね、こっちが哀ちゃん。あたしの妹みたいなものよ」

「ただの親戚だから」

「ごめん……。アリスさん。全く覚えていないの」

入院中の蘭に阿笠博士と哀を会わせてみた。まあ、哀とはあまり接点がないから思い出せないのは無理ないか……。

「なら、ワシのことは覚えておるか? 君の幼馴染の工藤新一の隣の

家に住んでおる天才発明家の阿笠博士^{ひろし}じゃよ！」

「工藤新一……う？」

蘭は新一という言葉に反応する。もしかして彼女は彼のことを――

「新一のことは覚えとるのか？」

「ううん……、でも少しその名前を聞いたら心が暖かくなるような……そんな気がしたから」

そっか。蘭はそんなに新一のことを想っているんだね。

記憶を失つても……。何かを感じ取ることが出来るくらい……。それなら、あたしは――。

「……ああ、蘭ちゃん。だから忘れてるのね？ オレが――工藤新一

だったってことを――」

「ちよつと！」

「アリスくん！」

「アリスさんが……新一……？」

今だけは工藤新一として彼女の近くに居ようと思う。そうやって彼女に接することで、何かを思い出せるかもしれないから――。

蘭の記憶が戻ることが何よりも大事。だからこそ、あたしは彼女に真実を告げた――。